

ISSN 0910-7282

大阪府立図書館紀要  
第41号  
2012年3月

Bulletin of Osaka Prefectural Library No. 41

大阪府立中之島図書館  
大阪府立中央図書館

## 目 次

大阪府域市町村図書館における「ビジネス支援サービス」に関する アンケート調査報告 ～大阪府域市町村立図書館の現状と府立図書館の 取り組みについて	藤原 紀恵	p 1
図書館資料としての旅行案内書 (二)	門上 光夫	p 32
趙陶斎の随筆『息心筆記』翻刻(その二)	大北 智子 坂本 弥生	p 51
加藤景範著『暇日筆記』翻刻	佐藤 敏江	p 56
翻刻『浪華之記行』『大坂城御番所勤方文書』『御支配所勘定 太田直次郎様御宿一件』	日置 将之 北川 敬子 小笠原 弘之 八木 美恵 苗村 昌世 山田 瑞穂 佐藤 敏江	p 73
大阪府立中之島図書館所蔵 『萬色一瞶』目録稿 一坤之部一	小林 孔 岸本 悠子	一頁
編集後記		

# 大阪府城市町村立図書館における「ビジネス支援サービス」に関するアンケート調査報告 ～大阪府城市町村立図書館の現状と府立図書館の取り組みについて

藤原 紀恵（大阪府立中之島図書館）

## 1. はじめに

大阪府立中之島図書館では、2004（平成 16）年 4 月に迎えた開館 100 周年を機に地域の特性・利用の実態に合わせるべく、「ビジネス支援課」を開設し、営業や企画のためのデータを探している人、これから事業を始めようとする人、キャリアアップしようとする人、いわゆるビジネスパーソンに対して、必要な資料・情報を提供することを目的に、「ビジネス支援サービス」を開始し、今年で 8 年目を迎える。

サービス開始以来、試行と模索を繰り返しながら「ビジネス資料室」「デジタル情報室」「新聞室」<sup>(1)</sup>等を整備し、資料提供・レファレンスサービス・ビジネスセミナー等の開催など、実績を積み重ねてきている。<sup>(2)</sup>また、様々なビジネス関連機関と協力事業・共催事業等を行い、連携を図っている。<sup>(3)</sup>

「ビジネス支援サービス」が全国的に広がってきたのは 2000（平成 12）年以降であり、サービス実施図書館数は最近 5 年間くらいで激増している。ビジネス支援図書館推進協議会<sup>注(1)</sup>が行った「ビジネス支援サービス全国アンケート報告」<sup>(4)(5)</sup>によると、サービス実施館は 2006（平成 18）年に 121 館（うち 96 館が市町村立図書館）だったのが、2008（平成 20）年に 192 館（うち 164 館が市町村立図書館）に、2011（平成 23）年には 208 館に増加している。新たに「ビジネス支援サービス」を実施しているのは市町村立図書館である。

今回、大阪府城市町村立図書館での「ビジネス支援サービス」の現状を把握し、市町村立図書館との今後の連携と大阪府立図書館としての中之島図書館がどのような施策を行っていくべきかを探るために、アンケート調査を行った。本稿は、アンケート調査結果及び当館での取り組みについて報告を行うものである。

## 2. 調査概要

調査の概要は以下のとおりである。

- ・ 調査目的： 大阪府域図書館の「ビジネス支援サービス」の実態や各図書館からの要望を把握し、今後の連携を計るため
- ・ 調査対象： 大阪府域市町村立図書館・図書室（以下、「市町村立図書館」という）
- ・ 実施時期： 2011（平成23）年7月22日～8月12日  
（当初の締め切りは8月12日としていたが、アンケートの精度をあげるため、9月上旬までに延期した）
- ・ 送付方法： 7月22日にメーリングリストで電子媒体の調査票を送付した。
- ・ 回収方法： メール・FAXでの返送
- ・ 配布数： 43（43自治体）
- ・ 回収数： 66（43自治体+大阪市立図書館分館23館） 回収率 100%  
当初は各自治体中央図書館1館より回答いただくようお願いしていたが、「ビジネス支援サービス」を実施している図書館より直接回答される場合もあった。また、大阪市立中央図書館より、分館23館の回答をいただいた。ビジネス支援課で協議の結果、これらの回答は業務上参考になると考えられるため、今回の回収結果に含めることとした。

### 3. 調査の質問と回答結果

アンケートの集計結果については別紙「アンケート集計表」を参照のこと。「アンケート集計表」は「合計(全体の合計)」「合計(大阪市分館を除いた)」「大阪市分館のみの合計」をそれぞれ集計し、一覧表とした。以下質問について、回答結果と分析を記す。

#### 【質問 1】 「ビジネス支援資料」について (所蔵していますか?)

「所蔵している (ビジネス関連資料を集めて別置している)」と回答したのは 30 館 (うち大阪市立図書館分館 (以下、「大阪市分館」という) は 23 館) で、これらの図書館は、現在ビジネス支援サービスを実施しているサービス先行館と推測される。「所蔵しており、一般書の分類の中で配架している」と回答したのは 32 館。「所蔵していない」と回答した 4 館はすべて町立の図書室・図書館であった。

#### 【質問 2】 「ビジネス支援資料」をどのくらいお持ちかをご教示ください。

ビジネス関連資料を集めて別置している図書館は資料数を把握しているが、一般書の分類の中で配架している場合、資料数の把握は困難であった。サービス先行館では約 3000～6000 冊位所蔵している。また、大阪市分館では 23 館それぞれの図書館が地域の状況に合わせて「しごと支援コーナー」を設置し、資料を 50～200 冊位コーナー配架し利用に供している。

#### 【質問 3】 「ビジネス支援資料」の収集について

「収集の努力をしている」と回答したのは 34 館 (うち 23 館が大阪市分館) で、「積極的な収集をしていない」と回答したのは、25 館で、「その他」と回答した 3 館は「ビジネス支援資料の収集も他の分野と同じように収集している」とコメントしている。

#### 【質問 3-1】 ※【質問 3】 でア。「収集の努力をしている」と回答した方にお尋ねします。具体的な収集方針 (資料の収集範囲・サービス対象等) をご教示ください。

「近辺の事業所に勤務するビジネスマンを想定して、その業務上必要になる資料や個人のスキルアップ等に役立つ資料を収集している」(吹田市立江坂図書館)、「見計らいにおいて、起業、中小企業関係など受入」(門真市立図書館)、「就職、起業、資格取得、プレゼン、

交渉等、ビジネスの様々な場面で役立つ実用書を中心に、専門書、参考図書も含め幅広く収集」（堺市立東図書館）などのように、それぞれの図書館でのサービス対象者や地域事情により収集方針を立てている。大阪市立中央図書館では「ビジネス書コーナーは[ビジネス・サプリ]をコンセプトに、文庫や新書のビジネス書、実用書をメインに収集し、[法令][CSR]注(2)[社史]の各コーナーを設置。さらに、[就労支援ミニコーナー]として、資格取得のため資料、履歴書・エントリーシートの書き方などの資料も提供」している。前述のように、大阪市分館 23 館では、就労支援・自立支援・生活再建も含めた資料について、基本的に幅広い年齢層を対象に「しごと支援コーナー」を設置している。それぞれの地域（区）の事情に合わせた形で、対象者や対象年齢等を細やかに設定して収集方針を定めている図書館もあり、「地域に中小の製造工業が多いので、中小企業向けの総務・経理関係などの資料と、製造工業向けの技術書などを収集し、ビジネス講座や相談窓口、類縁機関等のチラシ・パンフレット類、しごと支援につながるチラシ・パンフレット類を収集・配布している」（大阪市立東成図書館）という取り組みを行っている図書館もある。

**【質問 4】 どのような「ビジネス支援資料」を提供していますか？（複数回答可）**

多くの図書館がいわゆるビジネス書（図書）や参考図書類や電話帳・地図類、行政資料、ビジネス関係の雑誌、就職活動関係資料の提供をしている。求人情報誌や資格試験のための参考書や問題集を提供している図書館は少なかった。その他として「求人広告をファイルして提供」（茨木市立中央図書館）、「CSR 報告書」注(2)（豊中市立千里図書館）、「就労支援関係の団体・施設のリーフレット、関連事業のチラシ等」（大阪市立都島図書館）とお金をかけないで資料を集め、工夫して提供している図書館もあった。

**【質問 4-1】 「ビジネス支援資料」に関して重点的に収集している資料があれば、ご教示ください。**

無回答の図書館が多かった。回答のあった図書館は【質問 3-1】の収集方針に基づき重点的に収集している。「実務に役立つものを中心に収集しているが、今後はもう少し専門性の高いものを収集する予定」（豊中市立千里図書館）、「就職支援に関する資料やパソコンやプレゼンに関する資料」（堺市立東図書館）、「なるには BOOKS シリーズ」注(3)（和泉市立和泉図書館）、「就職・資格に関連する本」（熊取町立熊取図書館）、「全国の電話帳を揃えている」（大阪市立島之内図書館）などの回答があり、それぞれの図書館が地域の事情や利用

者からの求めに応じた資料を収集していることが推測される。

**【質問 4-2】 ※【質問 4】**で、ア.「参考図書類」と回答した方にお尋ねします。回答欄の参考図書で貴館が所蔵している資料はありますか？（複数回答可）

中之島図書館ビジネス資料室で主に使用している参考図書類の所蔵状況を伺った。「会社四季報(東洋経済新報社)」を所蔵している図書館が最も多く、57館(うち23館が大阪市分館)が所蔵している。以下「帝国データバンク会社年鑑(帝国データバンク)」を28館(うち14館が大阪市分館)、「日経市場占有率(日本経済新聞出版社)」を15館(うち2館が大阪市分館)、「会社職員録(ダイヤモンド社)」を14館(うち2館が大阪市分館)という順の所蔵状況であった。

**【質問 4-3】 ※【質問 4】**で、ウ.「ビジネス情報を収載した雑誌」と回答した方にお尋ねします。回答欄の雑誌で貴館が所蔵している資料はありますか？（複数回答可）

25館(うち3館が大阪市分館)が「週刊ダイヤモンド(ダイヤモンド社)」を、23館(うち2館が大阪市分館)が「週刊エコノミスト(毎日新聞社)」を、23館(うち4館が大阪市分館)が「週刊東洋経済(東洋経済新報社)」を、23館(うち5館が大阪市分館)が「日経ビジネス(日経BP社)」を所蔵・提供している。これらの雑誌はビジネス支援に限定されることなく、広く利用されていることがうかがえる。

**【質問 4-4】 ※【質問 4】**で、シ.「データベース・CD-ROM」と回答した方にお尋ねします。回答欄に貴館がビジネス支援用に所蔵・購読している資料はありますか？（複数回答可）

ビジネス支援サービスを行う上で有用であるデータベース・CD-ROM類の所蔵・購入状況を伺ったが、大阪市立図書館以外の図書館にはほとんど導入されていなかった。「日経テレコン21」注(4)は31館(うち23館が大阪市分館)が購入しており、大阪市立図書館以外では7館が購入。「その他」として「レクシスネクシスJP」注(5)を購入している図書館が1館(豊中市立千里図書館)ある。大阪市立中央図書館は「28種類のデータベース・CD-ROM資料を、ビジネス支援に限定せず提供」している。

**【質問 5】** 「ビジネス支援資料」収集のための資料費は、どのようになっていますか？

(複数回答可)

61 館 (うち 23 館が大阪市分館) が「図書館費内の一般的な資料費に含まれている」と回答した。2 館が「図書館費内でビジネス支援費を別枠で計上している」(大阪市立中央図書館、堺市立東図書館)、24 館(豊中市立千里図書館と大阪市分館 23 館)が一般的な資料費とは別に「住民生活に光をそそぐ交付金注(6)でビジネス支援費を計上している。」と回答。

**【質問 5-1】 「ビジネス支援資料」収集のための資料費は、どのくらいですか？**

無回答あるいは不明と回答された館が多かった。「特に額を決めておらず、また実際に使われている額も調査していない」ということであると推測される。

**【質問 6】 「ビジネス支援」の担当者を配置していますか？**

34 館が「担当者を配置していない」と回答、27 館 (うち 22 館が大阪市分館) が「兼任の担当者を配置」し、大阪市分館のうち 1 館(大阪市立阿倍野図書館)が「専任の担当者を配置」し、サービスを行っている。

**【質問 6-1】 ※【質問 6】で、アまたはイとお答えの方、配置人員構成及び人数をご教示ください。**

大体、各図書館で 1 人～2 人の職員が担当としてサービスにあたっており、配置人員にパートタイムスタッフが配置されているケースもある。

**【質問 7】 「ビジネス支援資料」について常設スペースで提供していますか？**

35 館 (うち 23 館が大阪市分館) が「提供している」、26 館が「提供していない」と回答。提供例としては、東大阪市立花園図書館では「[起業サポート情報ステーション]の名称で、ビジネス関連資料をおいた展示コーナーを設置」している。その他の 1 館(泉南市立図書館)は「職業紹介、業種紹介本のみ常設スペースで別置き提供」している。

**【質問 8】 資料装備について伺います。「ビジネス支援資料」と他の資料と区別するために、何か工夫をされていますか？**

「特に区別はしていない」と回答したのが 31 館で最も多く「背に区別できるよう、シールを貼付している」図書館が 4 館であった。実例として「ビジネス固有の区分をあたえて

いる」(豊中市立千里図書館、堺市立東図書館)、「請求記号(ラベル)に別置記号を付与」(和泉市立和泉図書館、熊取町立熊取図書館)、という工夫をしており、大阪市分館 23 館では「請求記号ラベルに[しごと支援]の表示」をしている。

**【質問 9】 「ビジネス支援資料」について、定期的に資料展示等を行ったことがありますか？**

定期的に資料展示等を「行ったことはない」のが 55 館（うち 21 館が大阪市分館）で大半の図書館が定期的に資料展示等を行ったことはない。(このうち展示コーナーを常設していると回答した図書館(東大阪市立花園図書館)あり) 定期的に資料展示を「行ったことがある」と回答したのは 6 館（うち 2 館が大阪市分館）で、大阪市立中央図書館では「ビジネス書コーナーに新刊棚を設置しているほか、ビジネス講座と連動して不定期に展示」を行っている。

**【質問 9-1】 ※【質問 9】で、ア.「行ったことがある」と回答した方にお尋ねします。資料展示の期間・テーマなど具体的な内容をご教示ください。**

「月ごとに展示を変更「がんばれ！中小企業」など」(豊中市立千里図書館)、「特設コーナーで偶数月をビジネス関係の展示を行い、テーマは、マーケティング・広告・経済を読む・チームワーク・発想法・手帳術など」(吹田市立江坂図書館)、「キャリアに役立つ資格の本展(期間：約 1 週間) ビジネスの本展(期間：約 1 週間)等」(寝屋川市立中央図書館)、「『ビジネス誌の書評に載った本展』と題して日経ビジネスに取り上げられた本を集めて展示・貸出(期間：約 2 カ月)」(大阪市立島之内図書館)、「単発で、就労支援を重視した形で、ハローワークの方などの協力も得ての季節コーナーを設置」(岸和田市立図書館)など、展示を行っている図書館は、それぞれ利用対象に対してユニークな切り口での展示を行っている。

**【質問 10】 「ビジネス支援」について利用案内・パンフレットを作成していますか？**

多くの図書館 (38 館) で利用案内・パンフレットの作成を行っていない。「作成した「利用案内・パンフレット」がある」のは 1 館のみ (大阪市立中央図書館) で、「その他」と回答した大阪市分館 23 館は「作成を予定」している。

**【質問 10-1】 ※【質問 10】で、ア.「作成した「利用案内・パンフレット」がある」と回答した方にお尋ねします。どのように公開していますか？(複数回答可)**

回答のあった大阪市立中央図書館では、印刷して図書館等で配布・ホームページで公開のほか、「区役所にて区内に転入された方へ渡す配布物の中に、図書館の利用案内とともに組み込んでもらっている」ことにより、新規利用者の開拓も行っている。

**【質問 11】 「ビジネス支援」についてパスファインダー注(7)・資料リスト等を作成していますか？**

パスファインダー・資料リスト等を作成しているのは27館(うち22館が大阪市分館)で、大阪市分館では大阪市立中央図書館作成の資料を配布しており、多く(33館)の図書館ではパスファインダー・資料リスト等を作成していない。「(大阪)府立図書館の案内やビジネス関係資料をファイルして提供」を行っている図書館(富田林市立金剛図書館)もあった。

**【質問 11-1】 ※【質問 11】で、ア.作成した「パスファインダー・資料リスト等」があると回答した方にお尋ねします。どのように公開していますか？(複数回答可)**

公開方法は「印刷して図書館等で配付」と「ホームページで公開」であるが、回答した図書館のほとんどが両方とも行っている。ホームページの公開については「コーナー開設時、ホームページで関連リストの公開」をしている図書館(熊取町立熊取図書館)があった。

**【質問 11-2】 ※【質問 11】で、ア.作成した「パスファインダー・資料リスト等」があると回答した方にお尋ねします。何種類くらいありますか？数を教えてください。**

作成は「1種類」(堺市立東図書館)(熊取町立熊取図書館)、「2種類以上(随時更新追加予定)」(八尾市立図書館)、「パスファインダー17項目」(泉佐野市立中央図書館)、「(ビジネスに特化したものではない)28種類のパスファインダー・資料リストを作成している」(大阪市立図書館)であり、大阪市立中央図書館では「ビジネス関連のトピックをとりあげた[B・News]を不定期に発行。[B・News]の特別号として、テーマごとのリストや、年間ベストセラーなどの紹介号を発行」している。

**【質問 12】 ビジネスについてのレファレンスサービスの過程で大学図書館や類縁機関等へレファレンスを依頼したことはありますか？(中之島図書館も含む)**

行ったことがあるのは4館のみで、ほとんどの図書館（62館うち23館が大阪市分館）では大学図書館や類縁機関等へレファレンスを依頼したことはなかった。

**【質問 12-1】 ※【質問 12】で、ア.「行っていたことがある」と回答した方にお尋ねします。行ったレファレンスの事例をご教示ください。**

「市の伝統産業の一つであるすだれの企業から、資料館創設の際にすだれに関する歴史などの資料の調査依頼があった」（河内長野市立図書館）、「福祉関係の最低賃金の昭和35年からの変動について」「国際航空運送に関するワルソー条約の英文がみたい」（堺市立東図書館）、「中国での起業」（熊取町立熊取図書館）、「プログラムソフトの中小企業向けの購入支援制度についての問い合わせに対して、調査の過程で大阪産業創造館注(8)に確認し、国の支援制度の紹介を行った。」（大阪市立中央図書館）などの事例の回答があった。

**【質問 13】 専門的なビジネス相談等については、別途専門機関の紹介等は行ったことがありますか？**

行ったことがあるのは7館（うち1館が大阪市分館）で、多くの（59館うち22館が大阪市分館）図書館では行っていない。

**【質問 13-1】 ※【質問 13】で、ア.「行ったことがある」と回答した方にお尋ねします。行った紹介等の事例の具体的な内容をご教示ください。**

「中国でのセンサ市場についての調査（大手メーカーの名前、市場占有率、売り上げ順位などまた近年のセンサ普及の推移などの統計）」（大阪市立北図書館）、「企業のPR誌と社内報を閲覧できる機関を教えてほしい」（大阪市立中央図書館）、「国内外の規格注(9)の閲覧」（茨木市立中央図書館）などの依頼に対して、JETRO(ジェトロ)ビジネス・ライブラリー注(10)、エル・ライブラリー注(11)、日本規格協会関西支部注(9)への紹介を行った事例の回答があった。インターネットを使って「検索できる範囲の、業界団体（広報機関含む）の連絡先等を案内した」図書館（岸和田市立図書館）もあった。

**【質問 14】 「ビジネス支援」に関して、セミナー、交流会、相談会、講習会等の催しを企画・開催したことがありますか？**

多くの（44館うち13館が大阪市分館）図書館は「興味がなく、行う予定はない」と回

答した。「興味があるが、今は行っていない」と回答したのが19館（うち9館が大阪市分館）で、行っていると回答したのが2館（大阪市立中央図書館と大阪市立東成図書館）で、「その他」の1館（河内長野市立図書館）は「毎年開催している「生活に役立つ図書館講座」のテーマとして「特許のはなし」を予定している」と回答している。

**【質問 14-1】 ※【質問 14】で、ア.「企画・開催したことがある」と回答した方にお尋ねします。どのような催しを企画・開催されたのかをご教示ください。**

大阪市立中央図書館では「ビジネス講座」を開催している。また、大阪市立東成図書館では「データベースで調べる情報収集入門講座・データベース提供会社による、データベースの使い方講座（データベースの使い方講演及び実習）」を開催した。

**【質問 15】 地元の企業や大学等と連携（産学官連携）や類縁機関（商工会議所、商工会、中小企業診断士等）と連携して催し等を行っていますか？**

連携して催し等を行っている図書館は6館で、「興味があるが、今は行っていない」が一番多く（41館うち17館が大阪市分館）、取り組みへの関心は高い。「興味がなく、行う予定はない」と回答した15館を含めて他機関との連携を行っていないと回答した図書館が17館あり、行っていない理由として「催しの場所の確保・連携する相手が居ない」と回答した図書館もあった。その他として「催しまでは無理と考えるが、地元の企業や団体の資料や配布用チラシは収集・配布につとめている」（大阪市立住之江図書館）との回答があり、図書館でできることから少しずつ取り組んでいる姿がうかがえる。また、「商工会議所からの要請で、パネルディスカッションのパネラーとして出席」する取り組みを行っている図書館（高槻市立中央図書館）もある。

**【質問 15-1】 ※【質問 15】で、ア.「行っている」と回答した方にお尋ねします。行っている連携の具体的な内容をご教示ください。**

事例として「観光協会等と組んでの観光コーナー（展示）の設置や、漁協の協力を得ての子供向け行事の開催など、少しやり始めた」（岸和田市立図書館）との回答があり、これから連携を目指す図書館にとって参考になるかと思われる。大阪市立中央図書館では他類縁機関（NPO 法人同志社大学産官学連携支援ネットワーク士業研究会）との共催で「ビジネス講座」を開催している。

**【質問 16】 「ビジネス支援」に関して所属している自治体の他部局との連携は行っていますか？**

行っていると回答した図書館は少なく（5館）、「興味があるが、今は行っていない」と回答した図書館が多く（42館うち19館が大阪市分館）、所属している自治体の他部局との連携は、図書館にとってこれからの課題のひとつとして認識されている。「その他」と回答した図書館の意見として「特別な連携はおこなっていないが、必要があれば案内あるいは問い合わせる」（四條畷市立四條畷図書館）、「チラシ等を置いている」（東大阪市立花園図書館）、「職員のつてを辿って行っている」（岸和田市立図書館）があがった。「興味がなく、行う予定はない」と回答した図書館を含めて連携を行っていないと回答した図書館が15館であった。

**【質問 16-1】 ※ア. 「行っている」と回答した方にお尋ねします。行っている連携の具体的な内容をご教示ください。**

事例として「光の交付金(住民生活に光をそそぐ交付金)を機に、地域経済課に選書の参考となる情報をもらっている」（豊中市立千里図書館）、「役場関連部局からハローワーク情報や就労関連のチラシ・パンフレットを提供してもらい、コーナーに設置」（熊取町立熊取図書館）、「地域振興の関係機関を紹介してもらったり、発行されたチラシやパンフレット類を図書館で配布」（泉南市立図書館）との回答があり、連携に関心のある図書館には参考となる取り組みが行われている。大阪市立中央図書館では大阪市他部局(大阪産業創造館)と共催し、「ビジネス講座」を開催している。

**【質問 17】 「ビジネス支援サービス」をはじめ、医療情報サービスや法情報サービスなど、特徴的なサービスを行っていますか？**

いわゆる「課題解決型サービス」注(12)の実施状況について伺った。行っていると回答したのは31館（うち23館が大阪市分館）、「興味があるが、今は行っていない」と回答した図書館が多かった（27館）。「興味がなく、行う予定はない」と回答した6館を含めて特徴的なサービスを行っていないと回答した図書館が7館であった。

**【質問 17-1】 ※【質問 17】で、ア. 行っている と回答した方にお尋ねします。行**

っている特徴的なサービスを記入してください。

分館があり、図書館サービス網が整っている自治体（豊中市・堺市）では地域の実情にあわせて分館ごとに特徴のあるサービスを行っている。また、法情報・医療健康情報等、利用者の要望等に特化した図書館サービスを行っている自治体（池田市・高槻市・大阪狭山市・大東市・熊取町）もある。大阪市立図書館では全館で「商用データベース<sup>注(13)</sup>によるビジネス・医療・法情報等の提供」を行っている。

**【質問 18】** （「ビジネス支援」に限定しないで）利用者に対して、機器・無線 LAN 回線・電源の提供をしていますか？（オンラインデータベースを除く）（複数回答可）

「インターネット端末を提供している」が 23 館、「持込パソコンの電源貸出を提供している」15 館（うち 8 館が大阪市分館）、「無線 LAN を提供しているの」のが 3 館というようにそれぞれ対応している。「その他」として回答した 37 館（うち 23 館が大阪市分館）のなかで、大阪市立中央図書館では「LAN ケーブルを使用して、図書館のネットワークに接続できる情報コンセント<sup>注(14)</sup>を設置。限定した Web サイトへのアクセスのみ可能」という提供を行っており、大阪市分館では「自己電源での持込パソコンの使用可。OPAC で有用サイト閲覧可能」という提供を行っている。また、その他と回答した 37 館うちの 7 館は「提供を行っていない」、1 館が「環境整備が出来ていない」と回答、5 館が無回答であったが提供は行っていないと推測され、回答を選択せず「提供していない」とコメントした図書館が 1 館あったため、合計の 14 館が「機器・無線 LAN 回線・電源等の提供を行っていない」と推測される。

**【質問 19】** （「ビジネス支援」に限定しないで）利用者に対して、機器・無線 LAN 回線・電源の提供等に関してルールを定めていますか？（オンラインデータベースを除く）

「ルールを定めている」と回答した図書館が 45 館（うち 22 館が大阪市分館）で、「ルールは定めていない」と回答した図書館が 17 館（うち 1 館が大阪市分館）だが、このうちの 14 館は前問の回答より「機器・無線 LAN 回線・電源等の提供を行っていない」を行っていない図書館であると推測されるため、「ルールを定めていない」に該当する図書館は 3 館となり、機器・無線 LAN 回線・電源の提供を行っている図書館のほとんどがルールを定めて運用していると推定される。

**【質問 19-1】 ※【質問 19】**で、ア.「ルールを定めている」と回答した方にお尋ねします。どのようなルールなのか具体的にご教示ください。

1 度の利用時間を 30 分以内と設定し指定している図書館が 12 館あった。待ちがなければ延長等できるが、1 日の利用回数を制限している図書館もある。インターネットに関して、ほとんどの図書館が「有害サイト閲覧・メール・チャット・ダウンロード・プリントアウト」を不可としている。ただし「行政情報のプリントアウト」や「市政への意見投稿のためのメール」は可としている図書館もあり、図書館が市民の市政への参加をバックアップしている現状がうかがえる。過去にトラブルがあり持込 PC を不可の図書館も 1 館あった。大阪市立図書館では（分館も含めて）「原則自己電源使用」として運用している。

**【質問 20】** スキルアップのため貴館職員は、「ビジネス支援」に関する研修等に参加したことがありますか？

「参加したことがある」と回答したのが 39 館（うち 23 館が大阪市分館）で、「参加したことはない」と回答したのは 27 館であった。

**【質問 20-1】 ※【質問 20】**で、ア.「参加したことがある」と回答した方にお尋ねします。どのような研修に参加してきましたか？具体的な内容をご教示ください。

15 館（うち 3 館が大阪市分館）が「大阪公共図書館協会（OLA）<sup>注(15)</sup>より受託して当館が行っている参考業務<sup>注(16)</sup>（ビジネス）研修」に参加している。「ビジネス支援図書館推進協議会によるデジタルライブラリアン講習会」で研鑽をつんでいる図書館（堺市立東図書館）もある。大阪市立図書館では（分館も含めて）「館内で商用データベース研修」を行っている。

**【質問 20-2】 ※【質問 20】**で、イ.「参加したことがない」と回答した方にお尋ねします。何故参加していないのですか？（複数回答可）

「研修参加の費用がない」と回答したのが 4 館（うち 1 館が大阪市分館）で、もっとも回答が多かったのが「研修に参加する時間がない、参加のために図書館を空けることができない」の回答で 21 館（うち 5 館が大阪市分館）あった。これらの回答は昨今の予算・人員削減の影響である推測される。「ビジネス支援に関する利用者の需要が見込めないため」と回答したが 9 館であった。その他の記述では「(図書館で) ビジネス支援サービスを行う

方針がない（サービスを行う必要性がない）」と回答した図書館が3館であった。

**【質問 21】** 中之島図書館では所蔵している新聞資料に関して新聞目録（解題付）<sup>注(17)</sup>発行しています。こちらを利用したことがありますか？（複数回答可）

「知っているが、利用したことはない」との回答が29館（うち8館が大阪市分館）ありもっとも多く、利用したことがあると回答したのは、Web版が15館（うち6館が大阪市分館）、プリント版が19館（うち11館が大阪市分館）であった。「利用したことがない（存在を知らなかった）」と回答したのが10館（うち3館が大阪市分館）であった。

**【質問 22】** 中之島図書館では図書館での調査に役立つ図書・雑誌、Web情報や、図書館を活用した調査のヒントをテーマごとにご紹介した「調査ガイド」<sup>注(18)</sup>を作成しています。こちらを利用したことがありますか？（複数回答可）

「知っているが、利用したことはない」との回答が31館（うち13館が大阪市分館）でもっとも多く、利用したことがあると回答したのは、Web版が19館（うち7館が大阪市分館）、プリント版が10館（うち3館が大阪市分館）であった。「利用したことがない（存在を知らなかった）」と回答したのが11館（うち2館が大阪市分館）であった。

**【質問 23】** 中之島図書館ではビジネス関連情報を掲載した「中之島図書館メールマガジン」<sup>注(19)</sup>を発行していますが、購読していますか？

「購読している」との回答が31館（うち22館が大阪市分館）ありもっとも多く、「知っているが、購読していない。」と回答したのが22館（うち1館が大阪市分館）であった。「購読していない（存在を知らなかった）」と回答したのが13館であった。

**【質問 24】** 中之島図書館（大阪府立図書館）がビジネス支援に関して、レファレンス・データベース等のセミナー・講座を企画・開催した場合、貴図書館は研修への参加を希望しますか？

「セミナー・講座に関心があるが、参加できるかどうか分からない」との回答が最も多く36館（うち18館が大阪市分館）であった。「参加を希望する」との回答が12館（うち3館が大阪市分館）で「出前セミナー・講座等、研修の形態により参加を希望する」との回答が6館あった。「セミナー・講座には関心はなく、参加しない」との回答が11館（う

ち2館が大阪市分館)であった。

**【質問 24-1】 ※【質問 24】**で、ア・イ・ウ と回答した方にお尋ねします。セミナー・講座についてうかがいます。どのような研修を希望されますか？希望する研修内容を具体的に上げてください。

多くの図書館より研修への希望についてご記入いただいた。各館の事情により希望する研修内容は様々であるが、具体的なレファレンスや実際の業務での事例紹介等、また連携のための企画・立案についてなど、実務に直結した研修への要望が強い。それぞれの研修内容の実現については検討を要するが、大阪府立図書館は市町村立図書館員のスキルアップの為、可能な限りのサポートを行っていかなければならない。

(以下回答転記)

- ・ビジネス参考資料の紹介や使い方、収集の方法
- ・具体的事例に基づいた、検索実習のかたちの研修を希望します。
- ・役立つ資料やサイトの紹介。その他、次のような研修があったらいいと思います。
  - ビジネス支援が具体的に役立った事例の紹介
  - 企業への営業・PRの仕方自治体内の他部署や商工会議所などとの連携のあり方  
(具体例などありましたら)
- ・待っていないで利用者に積極的に働きかけるには？
- ・具体的なレファレンス内容及び、どのようなツールを使用し、回答に導かれたのかを知りたいので、実務研修があれば受講してみたい。
- ・実際に利用が多いレファレンス事例に基づいて、どういったツールで回答するのか教えてもらいたいです。
- ・レファレンス事例紹介(詳しく)など
- ・ビジネス支援サービスを始める際の入門編の研修。他の図書館の取り組みについて
- ・基本的な講座だけでなく、それらを受講した者を対象に、少し発展的な内容のもの
- ・そもそもどのような必要があるのか、それを知りたい。ビジネス支援という言葉だけが独り歩きして、具体的に何をすべきなのかがわかりにくい。
- ・選書について、PR方法について、地域との連携について (まずどこに話を持ってい

けばいいのか等、最初の一步について伺いたい)

- ・ビジネス支援の利用体験を、利用された企業・団体から忌憚なく伺いたい。有名な事例紹介は知らない。また、地元商店街や零細企業に対して考えられるサービスにどのようなものがあるか。その他、行政の他部門（経済局など市長部局の担当セクションや図書館のサービス地域にある市区役所）との協働、折衝の仕方や、サービスの対外アピールの方法など、それらを知り、考えることができるセミナー・講座を開いてほしい。
- ・企画・立案のノウハウ、連携先開拓のノウハウ（実際の異業種交流会等でもよい）
- ・（大阪）府立図書館でしか扱っていないデータベースの使い方講座
- ・過去の調査例からどのような支援をされているのか。どう役立てることができるか示唆が得られるようなもの
- ・先進的な事例の紹介（テーマ：レファレンス、類縁施設との連携などについて）
- ・データベースのかしこい使い方について（こういう検索すると良いといったような具体的なものを教えていただけたらありがたいです）
- ・具体的な希望はないが、どちらかといえばデータベースよりレファレンスについてがよい。
- ・レファレンス・データベースの活用の仕方
- ・起業支援の研修、小さな会社の作り方など
- ・需要が無かったため、具体例は思い浮かびませんが、将来必要になるかもしれないので、関心はあります。
- ・中之島図書館所蔵の資料を使ったレファレンス研修
- ・地域に合ったビジネス支援の進め方、資料の収集方法
- ・コストをかけない効果的な手法などを具体的な実践例を交えて紹介してくれる研修など
- ・ビジネス関係オンラインデータベースの利用方法
- ・ビジネス業界のトレンドや、それに関連したレファレンス事例及び回答方法などの講座
- ・人・お金がない中でも出来る工夫や、頼りになる情報源の提示など、新しくビジネス支援を始めていけるような土台作りの講座
- ・先進館の実例など
- ・自治体の規模や立地等で、求められる情報が違ってくるので、より地元に着したサービスができるような研修を希望
- ・予算及び職員数が少ない館で、兼務でもはじめられるようなビジネス支援のイロハについての研修

**【質問 25】 「ビジネス支援」に関して、中之島図書館からどのような協力・支援を望みますか？具体的にご教示下さい。**

各図書館から希望として上がっているのは、所蔵資料の提供、ビジネス支援サービスを行うにあたっての実務上のノウハウの提供や業務上参考となる資料リスト・パスファインダーの提供、レファレンス支援、類縁機関や専門機関との仲介、ビジネス支援情報の収集及び発信等、また規模や地域によって違う図書館ごとの企画・立案等についてのアドバイス等、様々である。

ビジネス支援サービス先行館として、また大阪府域の図書館をまとめていく府立図書館としての当館に対して(当館による)市町村立図書館への協力・支援に対する期待が大きいと感じられる。

(以下回答を転記)

- ・府の発行している資料など、ビジネス支援に役立つものがあれば知らせていただきたい。
- ・府のビジネス支援施設等に、府内の図書館でビジネス支援に力を入れているところを伝えていただきたい。(チラシ等の送付を促すなど)
- ・大阪市域ばかりではなく、大阪府内全域(各市町村)についての情報を収集していただければ幸いです。
- ・当館資料で対応できないときの協力支援(資料収集の支援)
- ・レファレンス時に紹介してもよい類縁機関・専門機関のリスト作成
- ・今後、ビジネスについてのレファレンスがあった場合、e-レファレンスによる協力・支援を望みます。
- ・ビジネスの講座等を企画したいが、予算等の都合もあり、講師の紹介をお願いしたい。
- ・門真市に関する情報の共有
- ・今のところ市民利用者からの要望があまりなく、人員・予算の関係上積極的なビジネス支援サービスは行っていないが、今後は増加するであろうニーズがあると考えているのでいろいろ教えていただきたいと思っております。
- ・有用なデータベースの紹介、連携機関の紹介や仲介など
- ・市町村立が助けを求めた時に単に答を返すだけでなく、市町村立でもこれだけのこと

ができるという指導（ツールやノウハウの伝授など）も合わせて、バックアップしていただきたい。

- Web で提供されている情報のよりいっそうの充実
- 府内の横断的な連携のノード的な支援
- 他府県の図書館が行っている特徴的なビジネス支援の事例をまとめて、情報提供していただきたい。
- 中之島図書館ホームページ「ビジネス支援サービス」コンテンツのさらなる充実
- 府下の情報を交換できる場になってほしい
- レファレンス事例集、またはレファレンスまで行かないインフォメーション事例を見れるようにしてほしい。
- 自館でのビジネス支援サービスを構築するのに参考になる資料リスト・パスファインダーの提供など
- 様々なビジネス専門分野の資料の貸出
- インターネットでのレファレンス受付 相互貸出資料の範囲拡大
- これまでもしていただいておりますが、引き続き研修や情報提供をお願いします。
- ビジネス支援を始めるにあたり、何から始めたらよいかを知りたい。
- ビジネス支援で必須もしくはあると良い資料のおすすめブックリストのようなものがあれば参考にさせてもらいたい。
- 講座等行う場合の講師の紹介・HP上でのパスファインダーの追加
- ブックリストなど資料情報の支援
- 大小様々な図書館の現況を見知る機会が多いかと思うので、こんなことが出来るのでは？という具体的なアドバイスや提案を、図書館ごと（規模別など）の実情に沿わせた形で発信いただけたら嬉しく思います。
- 有料DB等での調査を要するレファレンスを受けた場合のバックアップ（電話で申込みでき、内容にもよりますが、速やかに回答いただけると有難いです。）
- レファレンスサービスなど

#### 4. まとめ ～調査結果と当館の取り組み

今回のアンケート調査の結果、市町村立図書館での「ビジネス支援サービス」の現状について様々なことが確認できた。

多くの市町村立図書館で「ビジネス支援サービス」を行うために必要な資料の所蔵が十分であるとは言えない。特に高度なレファレンスを行うための参考図書類の所蔵は少なく、専門的なデータベース・CD-ROM 等は、一部のサービス先行館を除いて、ほとんど導入されていなかった。担当者が配置されている図書館は少なく、所蔵しているビジネス関連資料の展示等や利用案内・資料リスト等の作成・配布も一部のサービス先行館を除いて、ほとんど行われていなかった。類縁機関や専門機関との連携のもとで行うレフェラル・サービス<sup>注(20)</sup>に関しても多くの図書館で行われていない。また、大阪府域全体の1/4強(14館)の市町村立の図書館で「機器・無線 LAN 回線・電源等の提供」が行われていないと推測される。

とはいえ、一部のサービス先行館を除いて、「ビジネス支援サービス」が行われていないということではない。回答からは、市町村立図書館が地域の身近な情報拠点として、それぞれの地域での要望をくみ取り、工夫して出来ることからサービスを行っている現状が読み取れ、「ビジネス支援サービス」が「課題解決型サービス」の一つとして市町村立図書館で根付きつつある姿がうかがえる。また、レフェラル・サービス等を行っていない図書館の多くは、他機関等との連携への強い関心を持っている。

このような状況の中で大阪府立図書館は、来館者への直接サービス実施により、「ビジネス支援サービス」未実施地域及び、専門的な資料が未所蔵のため市町村立図書館での回答が困難な調査要求に答えていくことにより、大阪府域における「ビジネス支援サービス」をカバーしていくことと、市町村立図書館それぞれが「ビジネス支援サービス」を行っていく、もしくは立ち上げていくためのきめ細かな支援を行っていく必要がある。

直接サービスについては、来館・非来館に関わらずこれまで以上にサービスを展開し、利用者と利用者の求める情報を結びつけるための先進的な事業を行うことにより、「ビジネス支援サービス」を充実させ、利用者の要求に応じて行きたい。

市町村立図書館への具体的な支援となる施策として、継続して行っているのが研修である。【質問 24-1】の回答にもあるように参考業務（レファレンス・サービス）に関する研修の希望が多かった。当館は、「参考業務実務（ビジネス）研修」を大阪公共図書館協会

(OLA) より受託・実施しているが、2012(平成 24)年 2 月に開催した「参考業務実務 (ビジネス) 研修」の際、研修担当者が受講希望者に研修内容について事前に確認したところ、大きく 2 つの希望 (初心者向け及び中級者向け) があった。「ビジネス支援サービス」自体が新しいため、現場で何年も働いているベテラン職員が初めて業務を担当することもあり、研修では「初心者向け」を希望するケースが多いが、一方でサービス実施館職員からの「中級者向け」のニーズも高まってきており、この研修では 2 種類の研修内容を設定した。今後も研修内容については、対象者の実状に合わせた工夫を行っていくことが必要である。

連携や催しについての企画・立案のノウハウ等を学びたいという希望も多かった。そのため、2012 (平成 24)年 3 月に、参加各図書館での運営に役立てていただくことを目的とし、費用・予算をかけずに他機関と連携して独自のサービスを実践している市町村立図書館の現状報告を中心とした研修「中之島図書館 図書館職員スキルアップセミナー 連携しよう！」を企画・開催した。注(21)

研修に関しては、【質問 24】での「出前セミナー・講座等、研修の形態により参加を希望する」の回答館 (6 館) だけでなく、【質問 20-2】の質問での「研修参加の費用がない(4 館うち 1 館が大阪市分館)」、「研修に参加する時間がない、参加のために図書館を空けることができない(21 館うち 5 館が大阪市分館)」との回答に対しても、当館で行っているビジネス関連の「セミナー・講座」等の催しについて、市町村立図書館へ職員を講師として派遣して研修を行う「出前(出張)セミナー・講座注(22)」のような形態での研修を提案していきたいと考えている。「セミナー・講座」の内容は、それぞれの図書館と協議して、図書館の状況、地域の事情に合わせた形で作成するのが望ましいであろう。

また、研修等催しの開催だけでなく、当館での取り組みにより集積した情報や成果は、市町村立図書館の「ビジネス支援サービス」をサポートするためにも、広く活用できるよう適切な情報伝達を行うとともに、情報の共有化を進めていきたい。

## 5. おわりに

市町村立図書館の多くはすべての分野を担う総合図書館であり、ある分野に特化した専門的な図書館は非常に少ない。所蔵する資料からも総合図書館が実施する「ビジネス支援サービス」は専門的な図書館が行うサービスとは明らかに違っている。

中之島図書館において実践してきた「ビジネス支援サービス」が立地上から市場調査や企業調査、また利用者であるビジネスパーソンのキャリアアップ等に重きをおいた「ビジネス支援サービス」であり、必ずしも市町村立図書館での「ビジネス支援サービス」のニーズとは必ずしもマッチせず、モデルケースにはならないという部分があるかもしれない。けれども、今回のアンケートの回答からは、サービス先行館としての経験とビジネス関連情報の集積・提供に対する期待が強く感じられる。

商都といわれる大阪では、今後もビジネスに関する資料や情報を必要とする人は少なからず存在するであろうし、求められるサービス内容も多岐にわたっていくと推測される。それに対して、今まで以上に府立図書館・市町村立図書館間でお互いが補完しあうような連携・協力が重要であり、その上で新たな価値を生み出すような施策の立案が必要になってくるであろう。

今回の調査結果から、市町村立図書館での「ビジネス支援サービス」についての現状の把握と改善・向上に資する様々な情報を得ることができた。今後はこの調査結果を踏まえた上で、大阪府域での「ビジネス支援サービス」の向上と市町村立図書館とのさらなる連携をめざしていきたい。

## 注

---

### 注(1) ビジネス支援図書館推進協議会

ビジネス支援図書館推進協議会は図書館の持つ情報蓄積をベースに、Web やデータベース等を装備して IT 化を図り、これを運用する司書を養成して、図書館に創業とビジネスを支援する機能を付加した「ビジネス支援図書館」が全国に生まれることを支援するために、2000(平成 12)年 12 月に設立された。

【ビジネス支援図書館推進協議会ホームページ】 (Last access 2012. 02. 29)

<http://www.business-library.jp/index.html>

### 注(2) CSR、CSR 報告書

CSR とは=Corporate Social Responsibility の略で、[企業の社会的責任]と訳される。

CSR 報告書とは企業が、環境や社会問題等に関して倫理的な責任を果たすべきとする CSR の考え方に基づいて行う、社会的な取り組みをまとめた報告書。

【リサーチ・ナビ CSR 報告書 (国立国会図書館)】 (Last access 2012. 02. 29)

[http://webcache.googleusercontent.com/search?hl=ja&gbv=2&gs\\_sm=c&gs\\_upl=145111451101312011111010101312131213-11110&q=cache:oMqPEba\\_kZIJ:http://rnavi.ndl.go.jp/research\\_guide/entry/theme-honbun-102598.php+csr%E5%A0%B1%E5%91%8A%E6%9B%B8%E3%81%A8%E3%81%AF&ct=c1nk](http://webcache.googleusercontent.com/search?hl=ja&gbv=2&gs_sm=c&gs_upl=145111451101312011111010101312131213-11110&q=cache:oMqPEba_kZIJ:http://rnavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/theme-honbun-102598.php+csr%E5%A0%B1%E5%91%8A%E6%9B%B8%E3%81%A8%E3%81%AF&ct=c1nk)

### 注(3) なるには BOOKS シリーズ

現代社会の多くの職種をカバーする青少年向け最大の職業ガイドシリーズ。発行はペリかん社。

【なるには BOOKS ホームページ (ペリかん社)】 (Last access 2012. 02. 29)

<http://www.perikansha.co.jp/Search.cgi?mode=NARU&key=0&word=なるには Books>

### 注(4) 日経テレコン 21

日本最大級の会員制ビジネスデータベースサービス。過去 30 年分の新聞・雑誌記事から国内外の企業データベース、人物プロフィールなど、幅広いビジネス情報を収録している。

【日経テレコン 21 ホームページ (日本経済新聞デジタルメディア)】 (Last access 2012. 02. 29)

<http://t21.nikkei.co.jp/public/guide/about/index.html>

### 注(5) レクシスネクシス(Lexis Nexis) J P

判例法令、行政審決、法律雑誌など多種多様な法律情報を収録した日本最大級の日本法総合データベース。

【レクシスネクシスホームページ（レクシスネクシス・ジャパン）】（Last access 2012.02.29）

<http://www.lexisnexis.jp/ja-jp/Products/lexisnexis-jp.page>

#### 注(6)住民生活に光をそそぐ交付金

「円高・デフレ対応のための緊急総合経済対策～新成長戦略実現に向けたステップ2～」(2010(平成22)年10月8日閣議決定)において、「新たな交付金を創設し、これまで住民生活にとって大事な分野でありながら、光が十分に当てられてこなかった分野(地方消費者行政、DV対策・自殺予防等の弱者対策・自立支援、知の地域づくり)に対する地方の取組を支援する」とされたことを踏まえ、平成22年度補正予算において、地域活性化交付金(住民生活に光をそそぐ交付金)が創設された。

【片山総務大臣閣議後記者会見の概要(2010(平成22)年10月26日 総務省)】

(Last access 2012.02.29)

[http://www.soumu.go.jp/menu\\_news/kaiken/36590.html](http://www.soumu.go.jp/menu_news/kaiken/36590.html)

【地方財政白書 平成23年版 第3部 2 (2) エ (イ)住民生活に光をそそぐ交付金】

(Last access 2012.02.29)

[http://www.soumu.go.jp/menu\\_seisaku/hakusyo/chihou/23data/23czb3-2.html](http://www.soumu.go.jp/menu_seisaku/hakusyo/chihou/23data/23czb3-2.html)

#### 注(7)パスファインダー

特定のテーマに関する文献、情報の探し方・調べ方の案内。提供方法としてはリーフレット形式(紙媒体資料)やWeb上での公開などがある。

【リサーチ・ナビ 公共図書館パスファインダー集(国立国会図書館)】(Last access 2012.02.29)

[http://rnavi.ndl.go.jp/research\\_guide/pubpath.php](http://rnavi.ndl.go.jp/research_guide/pubpath.php)

#### 注(8)大阪産業創造館

大阪市経済局の中小・ベンチャー企業支援拠点として2001(平成13)年開業、(財)大阪都市型産業振興センターが運営し、経営相談・セミナー・ビジネススクール・商談会・交流会など多種多様なサービスで中小企業をサポートしている。

【大阪産業創造館ホームページ】(Last access 2012.02.29)

<http://www.sansokan.jp/>

注(9)規格、(財)日本規格協会

規格とは、主に産業や技術の分野において、製品・材料、または工程等に関して定義された基準のことである。(財)日本規格協会は、工業標準化及び規格統一に関する普及ならびに啓発等を図り、技術の向上、生産の効率化に貢献することを目的にしている。大阪市にある関西支部では国内外の規格の閲覧が可能。

【(財)日本規格協会ホームページ】 (Last access 2012.02.29)

<http://www.jsa.or.jp/>

注(10)JETRO(ジェトロ)ビジネス・ライブラリー

日本貿易振興機構(ジェトロ)の海外事務所を通じて収集した世界各国の統計、会社・団体名簿、貿易・投資制度などの基礎的資料、関税率表などの実務に直結する資料等を所蔵している国際ビジネス専門図書館。東京と大阪に設置されており、各種データベースも利用可能。

【ジェトロ・ビジネスライブラリーホームページ】 (Last access 2012.02.29)

<http://www.jetro.go.jp/library/>

注(11)エル・ライブラリー(大阪産業労働資料館)

大阪の産業、労働運動、労務、経営に関する歴史的資料を多数所蔵し、最新の労務管理情報・賃金データなども収集している専門図書館。社員研修用ビデオも利用できる。

【エル・ライブラリーホームページ】 (Last access 2012.02.29)

<http://shaunkyo.jp/>

注(12)「課題解決型サービス」

「図書館をハブとしたネットワークの在り方に関する研究会」より、昨今の環境の変化などに起因する地域や個人の課題を解決していくため、公立図書館を地域の情報拠点と位置づけた(ハブとした)地域公共ネットワークの在り方と新しい「課題解決型のサービス」の提供についての提言が行われた。

【地域の情報ハブとしての図書館(課題解決型の図書館を目指して)(文部科学省ホームページ)】

(Last access 2012.02.29)

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shougai/tosho/houkoku/05091401.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/houkoku/05091401.htm)

注(13)商用データベース

企業等が、特定の分野に関して集めた情報を、営利を目的として有償で利用者にデータベースを提供する

サービス。主にインターネットを経由してパソコンで利用される。

【中之島図書館のオンラインデータベースの使い方】(Last access 2012.02.29)

[http://www.library.pref.osaka.jp/nakato/guide/oldb\\_use.html](http://www.library.pref.osaka.jp/nakato/guide/oldb_use.html)

#### 注(14)情報コンセント

建物内部に配線システム(LANなど)を付設し、PCなどの端末をコンピューターネットワークに簡単に接続できるように、壁などに設けられた接続口(ソケット)のこと。

#### 注(15)大阪公共図書館協会(OLA)

大阪公共図書館協議会は、大阪府域における図書館事業の振興及び相互間の協力をはかることを目的に、域内の公共図書館により構成されている。

#### 注(16)参考業務(レファレンスサービス)

利用者が研究・調査等のために必要な情報・資料を求めた際に、図書館員が情報そのものかそのために必要とされる資料を検索・提供・回答することによってこれを助ける業務。調査相談(業務)とも称される。

【調査相談(レファレンス)サービス(大阪府立中央図書館)】(Last access 2012.02.29)

<http://www.library.pref.osaka.jp/reference.html>

#### 注(17)(中之島図書館)新聞目録

中之島図書館ではビジネスパーソンをサポートするため、様々な「業界」を網羅した各種業界新聞を400誌以上所蔵している。これら業界新聞のほとんどが、各新聞社様からのご厚意により寄贈いただいたものである。新聞目録にはそれぞれの新聞の内容を解説する解題を添付している。

【(大阪府立中之島図書館)新聞室所蔵業界新聞業種別一覧】(Last access 2012.02.29)

[http://www.library.pref.osaka.jp/nakato/busi/p\\_gyokai.html](http://www.library.pref.osaka.jp/nakato/busi/p_gyokai.html)

【(大阪府立中之島図書館)新聞室所蔵新聞一覧】(Last access 2012.02.29)

[http://www.library.pref.osaka.jp/nakato/busi/p\\_list.html](http://www.library.pref.osaka.jp/nakato/busi/p_list.html)

#### 注(18)(中之島図書館)調査ガイド

利用者が図書館での調査する時に役立つ、図書・雑誌、Web情報や、図書館を活用した調査のヒントをテーマごとにご紹介してまとめたもの。中之島図書館では「ビジネス支援関連」「大阪資料・古典籍関連」

についての調査ガイドを作成(2012.03 現在 30 種)、館内での配布とともに、当館のホームページにて公開している。

【(大阪府立中之島図書館) 図書館調査ガイド】(Last access 2012.03.30)

<http://www.library.pref.osaka.jp/nakato/guide.html>

注(19)中之島図書館メールマガジン

月2回テキスト形式で発行している中之島図書館発行のメールマガジン。当館のお知らせやセミナーや展示会等の開催・申込案内、新着図書紹介、その他ビジネス支援に関するトピックを無料で配信している。

【中之島図書館メールマガジン】(Last access 2012.02.29)

[http://www.library.pref.osaka.jp/nakato/m\\_index.html](http://www.library.pref.osaka.jp/nakato/m_index.html)

注(20)レフェラル・サービス

利用者が求める情報や資料に対して、その分野の適切な専門機関等に照会して情報を入手・提供するサービス、また利用者を適切な専門機関等へ紹介・仲介するサービス。

注(21)「中之島図書館 図書館職員スキルアップセミナー 連携しよう！」

大阪府域の市町村立図書館と他機関等の連携におけるサービス実践報告により、参加各館での企画・運営に役立てることを目的に企画された研修。下記 URL にて発表事例の説明用資料及び参加者アンケート結果を PDF ファイルで公開している。

【大阪府立中之島図書館 図書館職員スキルアップ研修 連携しよう！】(Last access 2012.03.30)

<http://www.library.pref.osaka.jp/nakato/event/skillup2011.html>

注(22)出前講座

大阪府立中央図書館では 2011(平成 23)年度より大阪府域市町村図書館に対して「情報検索出前講習会」を実施している。

## 参考文献

---

- (1) 藤井兼芳・前野貞子「ビジネス支援開始から5年 業界新聞を中心とした新聞室の現状」  
43頁-61頁、『大阪府立図書館紀要』38 2009年 (Last access 2012.02.29)  
[http://www.library.pref.osaka.jp/lib/kiyo\\_pdf/kiyo3802.pdf](http://www.library.pref.osaka.jp/lib/kiyo_pdf/kiyo3802.pdf)
- (2) 藤井兼芳「中之島図書館ビジネス支援サービス経過など(年表)」 23頁-34頁、  
『大阪府立図書館紀要』37 2008年 (Last access 2012.02.29)  
[http://www.library.pref.osaka.jp/lib/kiyo\\_pdf/kiyo3702.pdf](http://www.library.pref.osaka.jp/lib/kiyo_pdf/kiyo3702.pdf)
- (3) 大阪府立中之島図書館要覧 2011 ビジネス支援サービス  
(Last access 2012.02.29)  
<http://www.library.pref.osaka.jp/nakato/yoran/2011/yoranN11-0910.html>  
  
(中之島図書館) 過去の催し物  
[http://www.library.pref.osaka.jp/nakato/k\\_moyosi.html](http://www.library.pref.osaka.jp/nakato/k_moyosi.html)
- (4) 「ビジネス支援図書館サービス 全国アンケート報告」(ビジネス支援図書館推進  
協議会) (Last access 2012.02.29)  
<http://www.business-library.jp/activity/info.html#chosa>
- (5) 田村俊作「ビジネス支援図書館サービス全国アンケート中間集計結果」『ビジネス  
支援図書館推進協議会・メールマガジン』13号 2011年10月15日発行  
(Last access 2012.02.29)  
<http://archive.mag2.com/0001054500/index.html>  
  
具体的な集計結果のデータ等  
<http://www.business-library.jp/pdf/111006BL-13M.pdf>

「ビジネス支援サービス」に関するアンケート集計表

質問	回答	合計	合計(大阪市分館を除く)	合計(大阪市分館のみ)
【質問 1】 「ビジネス支援資料」について(所蔵していますか?)	ア. 所蔵している。(ビジネス関連資料を集めて別置している )	30	7	23
	イ. 所蔵しており、一般書の分類の中で配架している。	32	32	0
	ウ. 所蔵していない→【質問 12】へ	4	4	0
【質問 2】 「ビジネス支援資料」をどのくらいお持ちかをご教示ください。				
【質問 3】 「ビジネス支援資料」の収集について	ア. 収集の努力をしている。	34	11	23
	イ. 積極的な収集をしていない。	25	25	0
	ウ. その他	3	3	0
【質問 3-1】 ※【質問3】でア.「収集の努力をしている」と回答した方にお尋ねします。 具体的な収集方針(資料の収集範囲・サービス対象等)をご教示ください。				
【質問 4】 どのような「ビジネス支援資料」を提供していますか? (複数回答可)	ア. 参考図書類	53	31	22
	イ. いわゆるビジネス書(図書)	62	39	23
	ウ. ビジネス情報を掲載した雑誌	42	33	9
	エ. 社史類 (地元企業等)	16	16	0
	オ. 新聞資料(地方版、地方新聞、業界紙、チラシ等)	21	19	2
	カ. 行政資料	44	21	23
	キ. 電話帳・地図類	50	31	19
	ク. 就職活動関係	36	22	14
	ケ. 資格試験のための参考書・問題集	9	4	5
	コ. 求人情報誌(フリーペーパーを含む)	5	5	0
	サ. ビジネス関連の漫画本	10	10	0
	シ. データベース・CD-ROM等	29	7	22
	ス. その他	4	2	2
【質問 4-1】 「ビジネス支援資料」に関して重点的に収集している資料があれば、ご教示ください。				
【質問 4-2】 ※【質問 4】で、ア.「参考図書類」と回答した方にお尋ねします。 回答欄の参考図書で貴館が所蔵している資料はありますか? (複数回答可)	1. 帝国データバンク会社年鑑(帝国データバンク)	28	14	14
	2. 東商信用録(東京商工リサーチ)	8	5	3
	3. 会社四季報(東洋経済新報社)	57	34	23
	4. 日経会社情報(日本経済新聞社)	6	6	0
	5. 日本金融名鑑(日本金融通信社)	1	1	0
	6. 会社職員録(ダイヤモンド社)	14	12	2
	7. 業種別審査事典(金融財政事情研究会)	8	8	0
	8. 業種別業界情報(経営情報出版社)	10	8	2
	9. TDB業界動向(帝国データバンク)	3	3	0
	10. 日経市場占有率(日本経済新聞出版社)	15	13	2
	11. 日本マーケットシェア事典(矢野経済研究所)	3	3	0
	12. 日経MJトレンド情報源(日本経済新聞出版社)	8	8	0
	13. 工場ガイド(データフォーラム)	1	1	0
	14. 海外進出企業総覧(東洋経済新報社)	6	6	0
	15. 外資系企業総覧(東洋経済新報社)	5	5	0
	16. 日経経営指標(日本経済新聞出版社)	5	5	0
【質問 4-3】 ※【質問 4】で、ウ.「ビジネス情報を掲載した雑誌」と回答した方にお尋ねします。 回答欄の雑誌で貴館が所蔵している資料はありますか? (複数回答可)	1. 日経ビジネス(日経BP社)	23	18	5
	2. 週刊ダイヤモンド(ダイヤモンド社)	25	22	3
	3. 週刊東洋経済(東洋経済新報社)	23	19	4
	4. 週刊エコノミスト(毎日新聞社)	23	21	2

「ビジネス支援サービス」に関するアンケート集計表

質問	回答	合計	合計(大阪市分館を除く)	合計(大阪市分館のみ)
【質問 4-4】 ※【質問 4】で、シ「データベース・CD-ROM」と回答した方にお尋ねします。 回答欄に貴館がビジネス支援用に所蔵・購読している資料はありますか？ (複数回答可)	1. 日経テレコン	31	8	23
	2. 日経BP記事索引サービス	24	1	23
	3. TKC経営指標(CD-ROM)	0	0	0
	4. TSR企業情報ファイル(CD-ROM)	0	0	0
	5. CD-Eyes50(CD-ROM)	0	0	0
	6. その他	3	3	0
【質問 5】 「ビジネス支援資料」収集のための資料費は、どのようになっていますか？ (複数回答可)	ア. 図書館費内の一般的な資料費に含まれている。	61	38	23
	イ. 図書館費内でビジネス支援費を別枠で計上している。	2	2	0
	ウ. 住民生活に光をそそぐ交付金でビジネス支援費を計上している。	24	1	23
	エ. その他	0	0	0
【質問 5-1】 「ビジネス支援資料」収集のための資料費は、どのくらいですか？				
【質問 6】 「ビジネス支援」の担当者を配置していますか？	ア. 専任の担当者を配置	1	0	1
	イ. 兼任の担当者を配置	27	5	22
	ウ. 担当者を配置していない。	34	34	0
【質問 6-1】 ※【質問 6】で、アまたはイとお答えの方、配置人員構成及び人数をご教示ください。				
【質問 7】 「ビジネス支援資料」について常設スペースで提供していますか？	ア. 提供している。	35	12	23
	イ. 提供していない。	26	26	0
	ウ. その他	1	1	0
【質問 8】 資料装備について伺います。「ビジネス支援資料」と他の資料と区別するために、何か工夫をされていますか？	ア. 背に区別できるよう、シールを貼付している。	4	4	0
	イ. 特に区別はしていない。	31	31	0
	ウ. その他（下記欄に記入をお願いします。）	27	4	23
【質問 9】 「ビジネス支援資料」について、定期的に資料展示等を行ったことがありますか？	ア. 行ったことがある。	6	4	2
	イ. 行ったことはない。	55	34	21
	ウ. その他	1	1	0
【質問 9-1】 ※【質問 9】で、ア「行ったことがある」と回答した方にお尋ねします。 資料展示の期間・テーマなど具体的な内容をご教示ください。				
【質問 10】 「ビジネス支援」について利用案内・パンフレットを作成していますか？	ア. 作成した「利用案内・パンフレット」がある。	1	1	0
	イ. 「利用案内・パンフレット」は作成していない。	38	38	0
	ウ. その他	23	0	23
【質問 10-1】 ※【質問 10】で、ア「作成した「利用案内・パンフレット」がある」と回答した方にお尋ねします。 どのように公開していますか？(複数回答可)	ア. 印刷して図書館等で配布している。	1	1	0
	イ. ホームページで公開している。	1	1	0
	ウ. その他（下記欄に記入をお願いします。）	24	1	23
【質問 11】 「ビジネス支援」についてパスファインダー・資料リスト等を作成していますか？	ア. 作成した「パスファインダー・利用案内」がある。	27	5	22
	イ. 「パスファインダー・資料リスト」は作成していない。	33	33	0
	ウ. その他	2	1	1
【質問 11-1】 ※【質問 11】でア「作成した「パスファインダー・資料リスト等」がある」と回答した方にお尋ねします。 どのように公開していますか？ (複数回答可)	ア. 印刷して図書館等で配布している。	27	4	23
	イ. ホームページで公開している。	28	5	23
	ウ. その他	1	1	0
【質問 11-2】 ※【質問 11】でア「作成した「パスファインダー・資料リスト等」がある」と回答した方にお尋ねします。 何種類くらいありますか？ 数を教えてください				

「ビジネス支援サービス」に関するアンケート集計表

質問	回答	合計	合計(大阪市分館を除く)	合計(大阪市分館のみ)
【質問 12】 ビジネスについてのレファレンスサービスの過程で大学図書館や類縁機関等へレファレンスを依頼したことはありますか？ (中之島図書館も含む)	ア. 行ったことがある。	4	4	0
	イ. 行ったことがない。	62	39	23
【質問 12-1】 ※【質問 12】で、ア.「行っていたことがある」と回答した方にお尋ねします。 行ったレファレンスの事例をご教示ください。				
【質問 13】 専門的なビジネス相談等については、別途専門機関の紹介等は行ったことがありますか？	ア. 行ったことがある。	7	6	1
	イ. 行ったことがない。	59	37	22
	ウ. その他	0	0	0
【質問 13-1】 ※【質問 13】で、ア.「行ったことがある」と回答した方にお尋ねします。 行った紹介等の事例の具体的な内容をご教示ください。				
【質問 14】 ビジネス支援に関して、セミナー、交流会、相談会、講習会等の催しを企画・開催したことがありますか？	ア. 行っている。	2	1	1
	イ. 興味があるが、今は行っていない。	19	10	9
	ウ. 興味がなく、行う予定はない。	44	31	13
	エ. その他	1	1	0
【質問 14-1】 ※【質問 14】で、ア.「企画・開催したことがある」と回答した方にお尋ねします。 どのような催しを企画・開催されたのかをご教示ください。				
【質問 15】 地元の企業や大学等と連携(産学官連携)や類縁機関(商工会議所、商工会、中小企業診断士等)と連携して催し等を行っていますか？	ア. 行っている。	6	6	0
	イ. 興味があるが、今は行っていない。	41	24	17
	ウ. 興味がなく、行う予定はない。	15	11	4
	エ. その他(下記欄に記入をお願いします。)	4	2	2
【質問 15-1】 ※【質問 15】で、ア.「行っている」と回答した方にお尋ねします。 行っている連携の具体的な内容をご教示ください。				
【質問 16】 「ビジネス支援」に関して所属している自治体の他部局との連携は行っていますか？	ア. 行っている。	5	5	0
	イ. 興味があるが、今は行っていない。	42	23	19
	ウ. 興味がなく、行う予定はない。	13	9	4
	エ. その他	6	6	0
【質問 16-1】 ※【質問 16】でア.「行っている」と回答した方にお尋ねします。 行っている連携の具体的な内容をご教示ください。				
【質問 17】 「ビジネス支援サービス」をはじめ、医療情報サービスや法情報サービスなど、特徴的なサービスを行っていますか？	ア. 行っている。	31	8	23
	イ. 興味があるが、今は行っていない。	27	27	0
	ウ. 興味がなく、行う予定はない。	6	6	0
	エ. その他	1	1	0
【質問 17-1】 ※【質問 17】で、ア. 行っていると回答した方にお尋ねします。 行っている特徴的なサービスを記入してください。				

「ビジネス支援サービス」に関するアンケート集計表

質問	回答	合計	合計(大阪市分館を除く)	合計(大阪市分館のみ)
【質問 18】 (ビジネス支援に限定しないで)利用者に対して、機器・無線LAN回線・電源の提供をしていますか？(オンラインデータベースを除く) (複数回答可)	ア. インターネット端末	23	23	0
	イ. 無線LAN	3	3	0
	ウ. 持込パソコンの電源貸出	15	7	8
	エ. その他	37	14	23
【質問 19】 (ビジネス支援に限定しないで)利用者に対して、機器・無線LAN回線・電源の提供等に関してルールを定めていますか？ (オンラインデータベースを除く)	ア. ルールを定めている。	45	23	22
	イ. ルールは定めていない。	17	16	1
【質問 19-1】 ※【質問 19】で、ア.「ルールを定めている」と回答した方にお尋ねします。 どのようなルールなのか具体的に教えてください。				
【質問 20】 スキルアップのため貴館職員は、「ビジネス支援」に関する研修等に参加したことがありますか？	ア. 参加したことがある。	39	16	23
	イ. 参加したことはない。	27	27	0
【質問 20-1】 ※【質問 20】で、ア.「参加したことがある」と回答した方にお尋ねします。 どのような研修に参加してきましたか？具体的な内容をご教えてください。				
【質問 20-2】 ※【質問 20】で、イ.「参加したことがない」と回答した方にお尋ねします。 何故参加していないのですか？ (複数回答可)	ア. 研修参加の費用がない。	4	3	1
	イ. 研修に参加する時間がない、参加のために図書館を空けることができない。	21	16	5
	ウ. ビジネス支援に関する利用者の需要が見込めないため	9	9	0
	エ. その他(下記欄に記入をお願いします。)	4	4	0
【質問 21】 中之島図書館では所蔵している新聞資料に関して新聞目録(解題付)発行しています。こちらを利用したことがありますか？ (複数回答可)	ア. 利用したことがある。(Web版)	15	9	6
	イ. 利用したことがある。(プリント版)	19	8	11
	ウ. 知っているが、利用したことはない。	29	21	8
	エ. 利用したことがない。(存在を知らなかった)	10	7	3
【質問 22】 中之島図書館では図書館での調査に役立つ図書・雑誌、Web情報や、図書館を活用した調査のヒントをテーマごとにご紹介した「調査ガイド」を作成しています。こちらを利用したことがありますか？ (複数回答可)	ア. 利用したことがある。(Web版)	19	12	7
	イ. 利用したことがある。(プリント版)	10	7	3
	ウ. 知っているが、利用したことはない。	31	18	13
	エ. 利用したことがない。(存在を知らなかった)	11	9	2
【質問 23】 中之島図書館ではビジネス関連情報を掲載した「中之島図書館メールマガジン」を発行していますが、購読していますか？	ア. 購読している。	31	9	22
	イ. 知っているが、購読していない。	22	21	1
	ウ. 購読していない。(存在を知らなかった)	13	13	0
【質問 24】 中之島図書館(府立図書館)がビジネス支援に関して、レファレンス・データベース等のセミナー・講座を企画・開催した場合、貴図書館は研修への参加を希望しますか？	ア. 参加を希望する。	12	9	3
	イ. 出前セミナー・講座等、研修の形態により参加を希望する。	6	6	0
	ウ. セミナー・講座に関心があるが、参加できるかどうか分からない。	36	18	18
	エ. セミナー・講座には関心はなく、参加しない。	11	9	2
オ. その他	1	1	0	
【質問 24-1】 ※【質問 24】で、ア・イ・ウ と回答した方にお尋ねします。 セミナー・講座についてうかがいます。どのような研修を希望されますか？希望する研修内容を具体的に上げてください。				
【質問 25】 「ビジネス支援」に関して、中之島図書館からどのような協力・支援を望みますか？具体的に教えてください。				

## 図書館資料としての旅行案内書（二）

門上 光夫（中央図書館）

### 第四節 旅行案内書の〈カタチ〉

「図書館資料としての旅行案内書（一）」において、第一節では、図書館にとって旅行案内書が重要な資料であることを指摘し、第二節と第三節で、旅行案内書からさまざまなことが読み取れることを紹介した。しかし、「旅行案内書」とは何か、について明確にしてこなかった。というよりも、そもそも旅行案内書を定義付けるのは非常に困難である。

旅行案内書は「旅行に際して必要な情報が掲載された資料」と説明することができるかもしれない。だが、このような簡単な説明では、あらゆる資料が旅行案内書になってしまう。

個人的な経験ではあるが、先年、鳥羽の神島を訪れた時、島への観光客のほとんどが小さな本を手にしていて、それはどうやら三島由紀夫の『潮騒』の文庫本らしかった。神島は『潮騒』の舞台である歌島のモデルとなった島であり、三島が筆にした光景をそこかしこに見ることができた (1)。

また、山本光正は「旅行案内書の成立と展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 155 集 (2010 年 3 月) で、「一時期和辻哲郎の『古寺巡礼』を片手に奈良の古寺を歩く旅行者が多くいた」と書いている (112 頁)。

『潮騒』も『古寺巡礼』のいずれもがその土地を旅行する者にとっては、重要な情報を載せた資料といえる。このように「旅行をする立場からみれば、旅行のための案内書とは（中略）旅行のために出版されたものとは限らない。紀行文・名所図会、時には随筆や小説等も旅行の案内書となりうるものである」（山本 前掲 112 頁）と言える。しかし、小説や随筆は「旅行の案内書」と成り得ても、これを旅行案内書と呼ぶことはできないであろう。

大塚幸男は「フランスの旅行案内書」『学燈』第 55 巻第 4 号 (丸善 1958 年 4 月) で『ヌーヴェル・リテレール』1956 年 6 月 21 日号に掲載された旅と読書との関係を論じたミシェル・デオンの一文を挙げ、小説や随筆と旅行案内書をきっぱりと区別している。

「われわれは旅に書物を携えて行つて、実地と照らし合わせてみたいとの望みを抱きがちである。（中略）スタンダールの『散歩』をローマで、（中略）しかし、これはかなり危険な誘惑である。どんな美しいテキストも現地ではその生命を失う恐れがある。それぞれの著者

がわれわれに押しつける影像は、目庇（まびざし）付きの帽子をかぶったガイドの、のべつ幕なしのおしやべりとほとんど同様にわれわれをいらいらさせる。それよりも、旅人にとって必要かつ有益な唯一の本は旅行案内書である。旅行案内書の無味乾燥な、いや、客観的な淡々たる記事は、想像をほしいままにする余地をわれわれに残しておいてくれるからだ」（45頁）。

旅行案内書がどのようなものかについては、観光学関係の辞典でも明確に定まっていない。

岩田晋典は「渡航自由化以降に出版された海外旅行ガイドブックに関する基礎的研究」『立教大学観光学部紀要』第12号（2010年3月）で、観光学等の辞典に「旅行案内書」の項目はあっても、「有名なガイドブック・シリーズの創始者や『旅行用心集』などの個別事例しか紹介されていない」という（6頁）。また、金子直樹も「国内観光とガイドブックの変遷」（神田孝治編著『観光の空間 視点とアプローチ』（ナカニシヤ出版 2009年10月）所収）で刊行された数が膨大で、その体系的な把握が困難なために書誌学的な検討は充分なされてこなかったと指摘する（125頁）（2）。

例えば、『現代交通観光辞典』（広岡治哉/監修 創成社 2004年5月）53-54頁の古賀学が執筆した「観光ガイドブック」の項目では、旅行案内書の事例の説明にはなっているが、何ををもって旅行案内書とするかの説明はなされていない。

「観光情報を専門に提供している媒体が、観光ガイドブックである。民間の旅行関連出版社が出しているのが主流であるが、地域の観光協会等においても、観光宣伝媒体として作成しているところもある。以前は、情報が固定的で全集的に網羅したガイドブックが主流であったが、利用者の志向の移り変わりが激しく、それに合わせて地域情報も大きく変わっていくため、新たな情報がタイミングよく提供できる雑誌的情報誌（ムック版）などが観光ガイドブックの主流となってきた。それに伴い情報の内容も、観光資源・施設の内容が最小限となり、宿泊施設や飲食店、土産品、交通機関などの民間企業に関する情報が主流となってきた。また、露天風呂、ペットと行く旅など、テーマを絞ったガイドブックも多くなっている。ミシュランなどの自動車向け観光ガイドブックに掲載されたホテル・レストランの星の数による評価はよく知られており、簡便なガイドブックが主流の中、わが国においても、このような利用者にとって選択の目安になるような信頼性の高いガイドブックの作成も必要とされている」。

『現代観光学キーワード事典』（前田勇/編著 学文社 1998年4月）は15頁に「旅行案内書（Guide Book）」という項目を有している。橋本俊哉による執筆で、「旅行関連情報を提供することを目的とした出版物のことで、通常、自然・歴史・文化など旅行目的地を理解するために必

要とされる情報に加え、交通・宿泊・飲食・土産品・観光ルートなど、観光を行う際に必要とされる情報が掲載される」と書かれ、以下、ヨーロッパにおける旅行案内書の誕生と発展を概観する。

しかし、18頁の「旅行案内書（江戸期の）（Guide Books in Edo Era）」の項では橋本は、江戸時代の旅行案内書の個別事例とその流れを記述している。「わが国の旅行案内書の嚆矢」を明暦元（1655）年に刊行された東海道の案内書である『明暦板道中記』と、ほぼ同じ時期に出版されたという中仙道の案内書『きそ通名所尽』とし、「これらはともに携帯しやすい小冊子であった」とするが、その後に「机上で楽しむ」ことを目的とした中川喜雲『京童』（1658）と浅井了意『東海道名所記』（1659）を紹介する。

また、旅行案内書の白眉として名高い『東海道巡覧記』（1745）を挙げ、「一般的な旅行についての注意や迷信的記述の一切ない実用本意のもの」、「江戸時代も後期になり、庶民の旅がより一般的なものとなると、旅行時の注意書きが詳細にまとめられた『旅行用心集』（1810）などが刊行された」とする。しかし続けて、名所図会や、『道中膝栗毛』シリーズのような滑稽本を例に挙げて「各地の名所や風物に関する情報が、さまざまな媒体を通して庶民層に浸透してゆく」と書く。

橋本によるこの項は、先の「旅行案内書（Guide Book）」に挙げた「旅行関連情報を提供することを目的とした出版物」と、滑稽本なども含む「実際に旅に出なくても読めば旅をした気分させられる本」が混同している。旅行案内書と小説や随筆が区別されていない。

もっとも判りやすいものが細野光一の執筆した『観光事典』（日本観光協会 1995年3月）の「ガイドブック guidebook」であろう。細野は「わが国でガイドブックといえば旅行関連のものを指すほど観光ガイドブックは旅行にとって欠かせないものとなっている」とし、「各地の観光資源・施設を軸に、宿泊施設や飲食店、土産品、特産品など、また、交通関係の情報などから構成されている。地域別に編集されたものが主流であるが、スキーや温泉といった活動別に的を絞ったものも多数みられるようになってきている。

わが国の市販のものでは、JTBのポケットガイドや新日本ガイド、実業之日本社のブルーガイドなどが歴史を有する」と書く。

「観光ガイドブックは旅行にとって欠かせないもの」といった目的に加えて、「各地の観光資源・施設を軸に、宿泊施設や飲食店、土産品、特産品など、また、交通関係の情報などから構成されている」といった旅行案内書の〈カタチ〉を明示した上で具体的な旅行案内書を挙げている。

このように、旅行案内書がどういうものかについては、「旅行に使われる資料」といった目的観点からだけではなく、その<カタチ>＝記載方法や体裁、内容構成にも着目する必要がある。

岩田は前掲の論文で、『現代観光学キーワード事典』における橋本の「旅行案内書」の定義を出発点に紀行文や旅行記と比較して旅行案内書の特徴を以下のようにまとめている。

#### ①形式

紀行は著者の旅行のプロセスに沿って記述が進み、体験談、印象、思索が物語られる。

一方、ガイドブックは、当該国への移動、入国方法、地域の概要、見どころ、宿泊施設など対象とする分野の関連情報を記事として多数の項目にまとめ、体系順に整然と配列したもので、『図書館情報学用語辞典』（日本図書館情報学会用語辞典編集委員会/編 2007年）の記述を用い、特定の項目を容易に調べることができるようにしたレファレンスブックであるとする。

#### ②内容

紀行は、特定の地域を取り上げても、記述は作者の関心のある特殊・限定的なもので、「著者の専門の事物が中心的に取り上げられる」（13頁）。

一方、ガイドブックは、「汎用的な情報を包括的に提示することが目指され」、事実の解説や案内の指示の正確さが求められる「実用的」なものである。

#### ③著者

紀行は著名な作家によるものが多いが(3)、ガイドブックは無名的である。「ガイドブックの場合、有名な人が作ったガイドブックを挙げることの方が困難」（14頁）である。

#### ④書籍の類型

紀行は、一度のみの単独で出版される単行物が目立つが、ガイドブックはシリーズ物が多い。速報性・多様性・雑多性・広告志向のある雑誌とも分けることができる。

#### ⑤図書館での扱われ方

ガイドブックは「基本的に図書館に保存されない」「“使い捨て”の出版物」である。

そこで岩田のまとめに従って旅行案内書を「実際に旅行するために当事者にとって必要とされる情報を不特定多数の人々に対して包括的・汎用的に提供するレファレンス的書籍」で「シリーズ的なものが多いという特徴や、有名な人物が著者になることが少ない傾向、さら

には、図書館に保存されることが少ないという傾向をもつ」（14頁）書籍と定義する。

そして、以下において近世以来「旅行案内書」と称されてきた書籍を射程に加えて、改めて、〈カタチ〉から旅行案内書とはどのようなものかについて考察しておきたい。

前掲の山本の論文によれば、「旅の時代（近世から明治中期までの徒歩による移動が中心の時代—引用者註）における旅行案内書の中心は道中記である」とする（113頁）。徒歩による移動では、旅人が全行程中のどの辺りにいて、次の宿までどのくらいか知る必要があった。そのために「街道全域を案内する旅行案内書＝道中記」が不可欠だったからである。

そして今井金吾の研究（『道中記集成』全47巻（大空社 1996年6月—1998年7月））に依拠して、道中記がいつ頃から出版されたのかは定かではないが、刊記のある最古の道中記を『明暦板道中記』とする（4）。

『明暦板道中記』の刊記には「明暦元乙未仲秋吉日 小嶋弥兵衛開板」とあるから、1655年の刊行となる。4丁表、日本橋より始まって三条大橋までが記述される。26丁。タテ13.8センチ×ヨコ9.8センチで携帯が可能な道中記である（『道中記集成』第一巻所収 三井文庫所蔵本 高陽2039）。

また、『明暦板道中記』よりも前に出版されたと考えられているものとして『日本道中名所尽』（『きそ通名所尽』）がある。改丁後1丁表に「江戸よりきそ通京大坂西国方々江道名所尽」とあって、19丁裏までが中仙道の記述で、後に西国方面への里程が記されている。タテ13.5センチ×ヨコ9.5センチの道中記である（『道中記集成』第一巻所収 個人所蔵本）。

『日本道中名所尽』『明暦板道中記』共、実際に旅行する当事者にとって必要な情報を掲載し、道順に短いながらも名所（観光資源）を記載する携帯が可能なレファレンスの書籍である。山本は、『明暦板道中記』に主な橋の長さが記載されていることに注目し、旅の主要な見物対象が建造物であり、橋もそうした見物対象としての要求に応じて記述されたであろうと推測している（114頁）。

道中記の基本は、明暦期（1655-58年）に成立し、延宝期（1673-81年）に完成したとする（115頁）。しかし、識字率の低さや価格、旅が大衆化していない時期であり、道中記は武家やある程度の教養を持った富裕層に利用が限られていたと考えられるという（120頁）。

近世の旅行案内書といわれるものには名所記もある。

万治3（1660）年の浅井了意『東海道名所記』は東洋文庫（平凡社）の朝倉治彦の解題によると、大本6冊で、朝倉の見たものでは東京都立中央図書館加賀文庫本のタテ27.1センチ

×ヨコ 17.8 センチが最大で、東海道各所の名所を和歌や俳句を添えて記述している。この名所記は地域ごとに名所（観光資源）を記述した書籍ではあるが、楽阿弥という僧と大坂の手代である男の二人が旅する物語として記述されている。

道中記の完成した延宝期に入って、大坂で最初の名所記が刊行される。

延宝 3（1675）年の『蘆分船』は一無軒道治による名所記で、全 7 冊であり、名所が地域別に記されている。巻一 28 丁に難波京、堀江、今宮夷、逢坂清水、一心寺、安居天神など、巻二 15 丁に住吉、津守、飛田など、巻三 23 丁に難波御坊、津守御坊、座摩、道頓堀など、巻四 20 丁に玉造稻荷、生玉、高津など、巻五 13 丁に難波嶋、茨住吉、野田など、巻六 22 丁に曾根崎、堂嶋、天満宮など、附録 10 丁で構成される。タテ 25.5 センチ×ヨコ 18.7 センチの書籍である（大阪府立中之島図書館所蔵本 甲和 206）。

また、延宝 8（1680）年『難波鑑』も一無軒道治によるもので、巻三が 19 丁、巻四が 15 丁。タテ 27.4 センチ×ヨコ 19.0 センチであり、大坂各地の名所や祭事の解説が記述され、『蘆分船』共に、物語として語られてはいない（大阪府立中之島図書館所蔵本 甲和 994）。上杉和央は「17 世紀の名所案内記にみえる大坂の名所観」『地理学評論』第 77 巻第 9 号（日本地理学会 2004 年 8 月）で、『蘆分船』と『難波鑑』を比較し、『難波鑑』には過去の出来事に由来する名所が『蘆分船』より少なく、「祭事の子細や繁華な様子といった『現在』の状況に重点を置いた記述が圧倒的に多い」と指摘する（601 頁）。

また、商工諸職案内といったジャンルの書物も延宝期に刊行されている。

『難波雀』は刊記「延宝七年己未歳三月吉日 小嶋屋長右衛門 古本屋清左衛門」で 86 丁。タテ 8.0 センチ×ヨコ 19.3 センチ（大阪府立中之島図書館所蔵本 甲和 391）。『難波鶴』は刊記「延宝七年己未歳七月吉日 京はん木屋 伊右衛門板」で 129 丁。タテ 8.5 センチ×ヨコ 19.3 センチである（『古版大阪案内記集成』／定本は慶応義塾大学図書館所蔵本）。

共に観光資源である名所を案内したというよりも、大阪城代、諸大名御屋敷（場所、留守居役の名前、名代）、諸国船印、公儀橋、商店（問屋、風呂屋）、医者など都市の生活に必要な事項が記載されている。

上杉は延宝期における大坂の名所記や商工諸職案内刊行の背景に、出版文化の定着と近世的都市の確立があったとしている（595-597 頁）。

その後、1750 年代から 60 年代にかけて集中的に優れた道中記が出版されるようになった。その理由は旅の大衆化と安価で手軽な道中記が求められるようになったことにあるという（山本 前掲 123 頁）。

延享 3 (1746) 年の盧橘堂適志による『東海道巡覧記』は凡例に「旅行の袖に携て益有やうに輯録す」とあって、実際に旅行の際に携帯した旅行案内書として刊行されたことを明記する。75 丁でタテ 11.2 センチ×ヨコ 16.6 センチ。61 丁表まで京都から江戸の名所、神社、仏閣、古戦場を記した道中記である（『道中記集成』第八巻所収 今井金吾所蔵本）。

寛延 4 (1751) 年の『伊勢道中行程記』は今井によれば、旅に携帯できる実用的道中絵図の最初で、タテ 17.0 センチ×ヨコ 8.9 センチの折本である（『道中記集成』第九巻所収 今井金吾所蔵本）。

続いて大本の名所記も充実し、いわゆる名所図会が誕生する。安永 9 (1780) 年には秋里籬島による『都名所図会』が刊行され、『大和名所図会』『摂津名所図会』と続いていく。

これら、名所図会はしばしば近世のガイドブックとして紹介されている (5)。たしかに「各地の観光資源」の情報は掲載されているが、前述のとおり大本、複数冊で旅行の際に携帯するのは困難な名所図会が旅行する当事者にとって実用的な書籍だったかどうか疑問がある。

西野由紀「先達はあらまほしきー『名所図会』と旅人ー」『国文学論叢』第 52 輯（龍谷大学国文学会 2007 年 2 月）では、清河八郎の日記より、京都に同行した清河の母親が『都名所図会』を購入し、祇園祭や西本願寺についてこの本を参照したと記している。「八郎たちが『都名所図会』そのものを携帯して名所巡りをしていたのかどうかについては不明である。しかし、少なくとも名所に関する情報源としてこれを活用し、且つ、日記で省略した情報を補完するものとして利用していた」（87 頁）という。

また、徳川家茂の警備員として二条城に配備された萩原貞宅は、非番の日に京都市中や近郊に遊び、その名所に関する日記の記述が『都名所図会』と近似の上、雨の日にこの本を広げて、次はどこに行こうか検討していたらしい。

西野は、「土地に不慣れな場合、まず『名所図会』によって土地の情報を得、その予備知識をもとにして現実の京都に遊ぶ。その際の留意点などを『名所図会』の本文の記述や挿図から心得として学び、旅を実践していたのである。こうして旅人は土地に関する情報を獲得、実践しながら、いわば、旅を演出する道具として『名所図会』を利用していたのだといえよう」という (88 頁)。これまでの地誌類との決定的な違いが名所図会の実景としての「風景画の妙」にあったとして、人々の旅への欲望を駆り立て、実践的に旅の情報を得ることができた『名所図会』は単なる地誌、名所案内書を超えた、より実践的な旅の行為を導く手引書として活用されうる本だったのである」と結論づけている (89 頁)。

名所図会は実際に携帯できなかつたとしても十分に旅行案内書としての機能を果たしてい

たと考えられる。

大阪府立図書館の所蔵する近世の「旅行案内書」を見る限り、天保期（1830-44 年）に入ると、道中記だけでなく、土地の名所記の「軽量化」が見られる（6）。これは、山本が 1800 年代に入って道中記の出版が増加し、その要因を特定できないとしながらも識字率向上、旅行者の増加、講の成立と講中による道中記の出版に求めたことと相応すると思われる。以下の資料はいずれも大阪府立中之島図書館所蔵本である。

大坂・伏見の船宿のリストと淀川の両岸の案内図を載せた『増補登船独案内』（松川半山画 天保 8（1837）年）。タテ 7.0 センチ×ヨコ 16.2 センチ。

大坂を訪れた遠方の人が案内人なく見物できるように作成された『難波巡覧記』（天保 8（1837）年）。タテ 7.0 センチ×ヨコ 16.0 センチ。

大坂から江戸までの道中絵図と江戸・京都・大坂の名所名物を記した『道中細見定宿帳』（嘉永 4（1851）年）。タテ 7.1 センチ×ヨコ 15.3 センチなどである。

明治にはいっても、初期は近世のスタイルを踏襲しており、1879（明治 12）年刊行の品川・横浜間に汽車の絵が入っている 1 枚刷の『大坂改正浪花講』がある。

近世においても、道中記、名所記、名所図会にみられるように「実際に旅行するために当事者にとって必要とされる情報を不特定多数の人々に対して包括的、汎用的に提供するレファレンス的書籍」は刊行されていた。しかし、無名的な書籍であったとは言い難いところがある。

やがて、装丁が和装から洋装へ変わるが、その中で、1899（明治 32）年の宇田川文海『南海鉄道案内』や 1910（明治 43）年の田山花袋『新撰名勝地誌』が刊行されている。このように明治期まで、著者は必ずしも「無名的」ではない。これは第三節「『中之島』イメージの変遷」で紹介した旅行案内書でも同じような傾向を見ることができる。

しかし、大正期頃よりシリーズ化された無名的な旅行案内書が登場する。

無名的な旅行案内書は主に鉄道院→鉄道省やジャパン・ツーリスト・ビューロー→JTB 及び自治体によって作成され始めており、その内、全国的な組織を持つ鉄道院→鉄道省やジャパン・ツーリスト・ビューロー→JTB がシリーズ化した旅行案内書を刊行している。

鉄道院→鉄道省は、大正期を通じて『鉄道旅行案内』を刊行している。「鉄道に頼って旅行せられむとする大方に向って其探勝遊覧の葉に供せんが為に発行した」もので（出版年不明、大阪府立図書館の受入印は大正三年七月九日）、日本全国の鉄道沿線の名勝地を 1 冊に記述し、他に銀行、会社や都市における各種娯楽施設、主要な物産、名物を掲載している。

1929（昭和 4）年からは『日本案内記』が刊行される。東北篇より始まって、毎年、関東篇、中部篇と地方ごとに 1 冊ずつ、全 8 冊が出された。各地方の名勝地だけでなく、概説、年中行事、方言、歴史や建築物の構造の解説もあり、鉄道旅行案内の頂点であるとされる。

一方、ジャパン・ツーリスト・ビューロー→JTB は、前掲の金子論文が「戦前からの系譜」として簡潔にまとめているのでそれに拠る。

『旅程と費用概算』は 1919（大正 8）年から毎年一巻ずつ刊行されたもので、モデルコースの提示と所要時間、値段、名所・旧蹟が記載される。1940（昭和 15）年に休止となったが、1952（昭和 27）年に『旅程と費用』で復刊し、1970-79 年には『全国旅行案内』として刊行されていた。

『ツーリスト案内叢書』は 1935（昭和 10）年から数十頁程度の携帯可能な旅行案内書として出されたもので、縦書きで地図・写真は最小限に抑えられ、地誌的内容も記述するヨーロッパ起源のガイドブックの系統という。1941（昭和 16）年に『東亜旅行叢書』となるが、戦時下の影響で簡略化される。『旅行叢書』『新旅行案内』として 1976（昭和 51）年まで刊行されたシリーズである。

1962（昭和 37）年に出た国内版『ガイド・シリーズ』は「従来のガイドブックの概念を変える画期的な商品」で、本文を横組みとし、地図、イラストを多用した視覚要素を重視したレイアウトであった（『日本交通公社七十年史』1982 年 377 頁）。これは後の『ポケット・ガイド』シリーズにつながっている。『東京（ポケット・ガイド 11）』（日本交通公社 1970 年 11 月）は全 119 頁で広告が続く。各地域別に分けられ、その内が「食事」「喫茶」「ショッピング」「散歩道」で見所の紹介がされる。しかし、例えば皇居の記述は少なく、皇居前広場は「正式には皇居外苑という。昔は諸大名の屋敷のあった所だが、今は修学旅行生や観光客で賑わっている。アベックの多いことでも有名」としか書かれていない。

以上みてきたことを先述した定義に当てはめてみると次のように言えるだろう。

旅行案内書とは、実際に旅行する当事者が必要とする各地の観光資源、観光施設、宿泊施設、飲食店、土産物、特産物、交通等の情報について指示・解説が客観的に記述され、かつ体系順に配列された実用書である。それゆえに新しさや正確さが強く求められている。

確認できるわが国最初の旅行案内書は明暦元（1655）年に刊行された『明暦板道中記』である。庶民に旅が浸透していく中で、寛延 4（1751）年には絵図の入った『伊勢道中行程記』という道中記が出される。

また、近世的な都市や街道の成立により実用的な名所記が延宝期頃より発生し、安永 9 (1780) 年には鳥瞰図を多用した名所図会が誕生した。これらの名所記や名所図会の類は大本で複数冊から構成されるため、携帯に適しておらず、これらを実際に手にして旅がなされたかは不明だが、旅行案内書として使用されていたことが伺える記述が近世の人々の日記から確認することができる。

明治に入って以降のしばらくは、近世的な旅行案内書のスタイルが継承されていたが、鉄道省（鉄道院）やジャパン・ツーリスト・ビューロー（JTB）など旅行案内書を発行する全国的規模を持つ組織が成立し始めた大正期頃より日本全国を対象とした『鉄道旅行案内』『日本案内記』『旅程と費用概算』といったシリーズものが生まれた。

戦後期には旅行案内書はシリーズものが中心となり、ある特定の著者が旅行案内書を執筆する傾向は極めて少なくなる。

## 第五節 観光パンフレットについて

旅行案内書に類するものの一つに逐次刊行物（旅行雑誌／地域情報誌）がある。逐次刊行物については、図書館学の教科書において、図書館が収集、整理、保存して提供する基本的な資料として位置づけられており、その重要性については多言を要しないであろう。

旅行雑誌について、森正人は『昭和旅行誌 雑誌『旅』を読む』（中央公論新社 2010 年 12 月）で、1924（大正 13）年から 2004（平成 16）年まで JTB から発行されていた旅行雑誌『旅』を読み解くことで、昭和における日本人の旅行と旅行観を考察している。

森によれば、『旅』は創刊号から旅行を通じて日本人を「啓蒙」する目的を掲げ、「茶代問題」「日本を代表する景勝地」「旅行者のモラル向上」、戦後には「さまざまな旅行のスタイルの提案」や「旅行で見るべきものなど」を「紹介してきた」という。しかし、情報が断片化し、カタログ化するなかで、「事物や情報の価値を決定する『大きな物語』の失効とでも呼ぶうる事態」が「啓蒙」を掲げていた『旅』の社会的役割を失わせたと述べている（269-273 頁）(7)。

旅行案内書に類するもののもう一つに観光パンフレットがある。観光パンフレットは、実際に旅行する当事者に必要な情報を載せたもので、観光案内所や交通機関等で多種多様に頒布され、小冊子もしくははらしや畳物などの 1 枚物も多い印刷物である (8)。

内容は、各地の観光資源や宿泊施設、飲食店、土産物、交通機関の情報などを記載するが、

旅行案内書と比べて、掲載するスペースに限りがあるので、地域やテーマが限定された情報が載せられている。また、形式的には旅行案内書のようなレファレンス的な体系には配列されず、地図や図版、写真を大きく配して、一目で内容や地域の全貌がわかるように工夫されているものがある。書誌事項（書名・出版者・出版年）が明記されていないものも多い。

このような観光パンフレットは、その形態から、網羅的な収集が難しく、旅行案内書以上に「捨てられる運命」にある資料といえる。

しかし、観光協会や交通機関などアピールする主体が作成することが多く、そのアピール度は、第三者である編集者が介在する旅行案内書より大きいといえ、それと「なまざし」の交差点を読み解くことのできる重要な資料でもある。例えば、第一節で紹介した観光艇「水都」のアナウンスも「水都」を運行していた大阪市が発行した観光パンフレットに掲載されていたものである。

以下、観光パンフレットをテキストに用いた、又はテキストに用いる意義を説いた研究成果を挙げて、観光パンフレットも資料的価値をもつ重要な図書館資料であることを指摘していきたい。

浅川雅美・岡野雅雄の「与那国島の観光パンフレットの訴求内容分析」『湘南フォーラム 文教大学湘南総合研究所紀要』No. 12（文教大学 2008年3月）は、観光パンフレットが旅行目的地の魅力をどう訴求しているかを、与那国島をモデルケースとして検討した論文である。

『与那国島-Dr. コトー診療所ロケ地マップ』（与那国町役場・与那国町観光協会発行）という観光パンフレットを対象に、テキスト・マイニングの手法を用いて、パンフレットに使用された語（訴求内容）の頻度を分析している（9）。旅行案内書に記述された語を分析する点において、第二節で見た小長谷論文や今野らの論文と基本的に同じものである。

さらに浅川らは「離島の観光パンフレットに対する反応の分析-与那国島の場合-」『島嶼研究』第9号（日本島嶼学会 2009年9月）で、このパンフレットを見た消費者の受容内容の分析を行い、どのようなパンフレットにすれば観光活性化の効果が高かまるかという実証的な分析を試みている。

訴求分析では、パンフレットに使用された名詞を「自然資源」「文化資源」「ドラマ関連」「地名」「その他」に分類したところ、「島」「海」「自然」「日本最西端」といった「自然資源」に関する記述が多く、次いで「コトー先生」「シーン」といったドラマに関する記述が多かったという。逆に「文化資源」に関する記述は「墓」の1つで4回使われただけであった。

ここから浅川らは旅行目的地として「ロケ地」が「その土地の魅力を高める要因として無視できない」新しい「文化資源」として立ち現れていることを指摘している。

また形容詞から、与那国島が沖縄本島とは違った独自性を持った島で、目的地で期待する経験では「冒険的・刺激的」という面を訴求していると分析している（144-145頁）。

対して、受容分析においては125名の与那国島を訪れたことのない学生に当該パンフレットを配布して、600字以内の感想を記述してもらい、上記同様にテキスト・マイニングの手法を用いて分析を行っている（10）。

結果的には、与那国島が独自性を持った刺激的な観光地という「パンフレットで訴求しているこの2特性が消費者に伝わっていることが確認できた」という（26頁）。

その一方で、推察の域を出ないとしながらも、「南国」に対するイメージの影響のためか、「リラックス」を求める結果も得ており、もし与那国島に対する消費者の志向が「刺激的」より「リラックス」な場合には、『刺激的』を訴求するよりも『リラックス』イメージに結びつくことを強く訴求する方が、効果は高いであろう」とする（29頁）。

浅川らは「与那国島の観光パンフレットの訴求内容分析」のはじめにおいて、公共事業の見直し・削減とそれに伴う人口流出の歯止めの一つに観光の活性化を挙げて、訴求の重要性を説いている。そして後者の論文において、より効果的なパンフレットとはどのようなものを体系的に明らかにできれば、今後は、観光パンフレットだけでなくインターネット広告にも応用できるという。さらに受容内容の分析についても「ホームページ・電子掲示板・ブログなどの評判分析などとともに、重要性が増してくるものと考え」と結んでいる（29頁）。

鈴木涼太郎の「観光研究における方法論的認識に関する一考察 旅行パンフレットを対象としたイメージ研究をめぐる」『立教観光学研究紀要』第6号（立教大学大学院観光学研究科 2004年3月）は、観光研究が学際的であると言われながらも既存の学問領域からの概念や方法をほとんど修正せずに適用してきたことへの反省から、「ツーリストの行動やイメージ形成において影響を与えるものとして頻繁に対象化されている」観光パンフレットを取り上げて、「パンフレットとそのイメージに関する研究が、研究対象をいかなるものとしてとらえて来たのか、その認識を整理し、そのような方法論的検討から、観光研究における新たな研究の可能性について考察すること」を目的とした論文である（51頁）。

観光パンフレットが「潜在的なツーリストが、ツーリストとなるプロセスにおいて非常に重要な意味を持つメディア」（51頁）であり、また「観光地のイメージを生み出すためのメディア」（52頁）でもあることを踏まえ、その認識整理において観光パンフレットを使った

先行研究に数多く言及している。そしてこれらの観光パンフレットが研究において重要な位置にあり、度々取り上げられてきた理由を「どこにでも存在し誰もが手にすることができる、あるいは誰もが一度は手にするメディア」であるからだとしている（53頁）。

トロントに事務所を構える21の政府観光局からパンフレットを収集し、そこに掲載された写真を景観や文化に類型化し、それぞれの国ごとにどの種類の写真が多く使われたかを分析、それぞれに優勢なイメージが存在することを示した研究や、イギリスで発行された11のパンフレットの全1470頁、5172点の写真を分析して、ツーリストと現地の人々との出会いは、パンフレットの中で既にある種の制約を受けており、観光パンフレットがツーリストの行動に強い影響を与えるメディアであるとする研究が紹介される。

また、イギリスの6つの旅行会社が1983年に発行したパンフレットから、表層的なレベルにおいては旅行商品を売るための媒体にすぎないパンフレットが、消費者によって日常の現実から逃避するためのイメージを創り出しているとする研究、イギリスの4つの旅行会社が発行したものに加えて、見本市会場で収集した東南アジア方面のパンフレットの写真と言語メッセージから、パンフレットのイメージを消費すること自体が自己目的化しているとする研究も紹介している。

これらから鈴木は、「パンフレットが、観光地・旅行会社とツーリストを結び付ける媒体であると同時に、観光地のイメージや現代消費社会の『神話』を創り出す媒体でもある」と指摘する（53頁）。

なお、鈴木はこれまでの観光パンフレットを用いた観光研究が、パンフレットというメディアが表象する観光地のイメージは観光地の現実に即したのではなく、ある種のステレオタイプが存在を明らかにする視点や、観光地を表象する行為それ自体が持つ権力性、政治性を指摘する論議に傾いていることを批判する。

そして、観光パンフレットのメディアとしての働きにおける新しい視座として、メディアとしてのパンフレットの持つ独自性を考察する研究の必要性、パンフレットがどのような存在として生み出され、消費されているか、を強調する。

それは、観光パンフレットを、それを取り巻く社会的・文化的な文脈から切り離さないことが重要であり、潜在的なツーリストの手にとられ、読まれ、消費されていくプロセスへの問いである。さらにパンフレットに掲載されたすべてのメッセージを全体的に対象化する必要性。例えば写真だけを取り上げるのではなく、旅行条件の説明や料金一覧などパンフレットの内容との関係の中からいかにして写真が存在しているかの問いがあるとする。

これらの研究を通じて「既存の研究の蓄積を整理し、ツーリストのイメージをより立体的なものとして描き出すための基礎となると考えられるのである」と述べている（57頁）。

高嶋竜平は「車窓の魅力に関する研究—大正・昭和初期の観光パンフレットを手がかりとして—」『日本観光研究学会第17回全国大会論文集』（日本観光研究学会 2002年12月）で、箱根登山鉄道と駿豆鉄道（現、伊豆箱根鉄道）の発行した観光パンフレットを用いて、両社の箱根への観光客誘致の方法について考察している。

箱根登山鉄道発行の『本邦唯一の山岳鉄道箱根登山電車』という観光パンフレットから、同鉄道では「利便性」が売りであり、小田原から「早く箱根の観光対象に到達できること」が強調されていることを読み取っている（214頁）。

一方、箱根の観光開発で遅れをとった駿豆鉄道発行の観光パンフレットは、自社資本の開発した自動車専用道路を走るバスを売り込むために「車窓」という「新しい風景体験」を打ち出している。熱海からのバス路線図を立体的に描き、「意図的にコースを山の裏側に消失させるような描き方をすることで、高い山の尾根を超えながら箱根を目指す同社コースの魅力を強調している」という（216頁）。

高嶋はさらに一步進めて、「観光パンフレットの史料としての価値に関する考察」『立教観光学研究紀要』第10号（立教大学大学院観光学研究科 2008年3月）で、観光パンフレットが歴史史料として重要なものであることを論じている。

歴史学において公的文書中心では十分に反映できなかった庶民の生活や文化が史料の多様化（庶民の生活を描いた図像の分析）の中で積極的に議論されていることを指摘し、「観光という庶民が多く参加した活動の歴史整理を行う際も」、観光パンフレットが大いに参考になるという（30頁）。

観光史における図像史料には、記念写真、絵葉書、ガイドブックの挿絵があるが、とりわけ観光パンフレットは「図像が大量に印刷され、ある観光地に対する庶民の共通理解を形成するのに強い影響力を持っていたと考えられるので、大正・昭和初期の「観光パンフレットの史料としての特性を整理する必要がある」という（30頁）。

発行目的が「観光者に対して自社沿線の観光の魅力をアピールすること」にあり、内容は観光者の具体的な行動、興味関心に即したものであるため、「開発者と観光者の心理のやりとりが成立」し、観光者の心理（＝感性、嗜好）を読み取ることが可能である（30頁）。

しかし、これまでは、博物館における展示での扱いから、文献史料で明らかになった史実を補足する史料という位置づけであり、一次史料としての分析方法について十分に議論でき

ていないとする。しかし、先に挙げた高嶋自身の論文（「車窓の魅力に関する研究」）から、「図像、テキストなど観光パンフレットが複合的なメディアであるということに注目しながらそこに記録された情報を抽出し、必要に応じて文献史料にもあたるなど、観光史研究における多様な史料の1つとして位置づけることに、観光パンフレットの史料としての価値がある」とし、「ケーススタディを重ねることによってその有効性を証明していくことが必要である」と結論づけている（32頁）。

以上、5本の観光パンフレットをテキストに用いた論文を紹介した。観光パンフレットにおいても、旅行案内書と同様に、ある地域が持つイメージの形成を探るツールとなりうるということが明らかになったと思う。そしてそれは、観光パンフレットが「観光という庶民が多く参加した活動」（高嶋）において、「どこにでも存在し誰もが手にすることのできる」（鈴木）もの故に、研究材料として重要なのである。

さらに高嶋は、観光パンフレットの発行目的を自社沿線の魅力をアピールすることと言い、大量に印刷されたことが資料として重要であるとする。旅行案内書の場合は大手の出版者が刊行するものも多くあり、これが必ずしも「自ら」の沿線もしくは観光地をアピールするために刊行されたものでない点で両者を区分する大きな要素といえるかもしれない。

浅川ら、そして鈴木論文では、観光パンフレットに記載された記述や写真が観光研究において基本的な分析対象であった。特に浅川らの1つのパンフレットをめぐる「訴求内容」と「受容内容」の分析は「アピール」と「なまざし」の交差点のマッチングをテーマに据えた論文である。

なお、鈴木も高嶋も共にのべているように、観光パンフレットを用いた研究においては、今後のより深化した展開が必要であるとする点には注目しなければならない。

鈴木は、観光パンフレットとは何かということが十分に検討されないまま研究の分析対象となってきたことを指摘している（51頁）。高嶋も、観光パンフレットが図像とテキストからなる複合メディアであることを認識し、「多様な史料の1つとして位置づける」必要性を説いている（32頁）。

このことは、第四節で指摘した、観光学の辞典においてもその明確な定義がなされていない旅行案内書についても同じ指摘ができると思う。

研究のさらなる展開のためには旅行案内書や観光パンフレットを自明のものとしてせず、これらの資料がどのようなメディアであるかについて追求していかなければならない。

## おわりに

最後に、筆者が図書館資料としての旅行案内書に着目した理由を二点述べて本論を締めくくりたい。

一つは、「観光」が現在重要な産業として注目されている点にある。

製造業と違って観光業は「生産・雇用が国内で行われるため、『空洞化』とは無縁の産業」で、「旅館・ホテル業だけでなく、運輸、飲食、娯楽・レジャー産業まで含む裾野の広さを持っているため、経済に対する波及効果大きい」と期待されている。さらに外国人旅行者が日本を観光することは「海外の人々の自国（日本—引用者註）に対する理解を深めるといふ効果も持っているため、広義の安全保障の面からも注目を集めている」という（山崎治「観光立国に向けて」『レファレンス』第54巻第10号 通巻645号（国立国会図書館 2004年10月）81頁）。

グローバル化と高齢化社会が急速に進む中、経済力の低下が現実化している日本において、観光はその回復の起爆剤として期待されている。もっとも、低迷する国内経済の打開策として観光が注目されるのは、今が初めてのことはない。第二次世界大戦後の日本再建策の一つとして輸出の増大が叫ばれた際、外国人旅行者を誘致し、外貨を得る「風光の輸出」が議論されたこともあった。そして、その背景には円の暴落の中で外国人旅行者が急増し、観光が「外貨獲得第四位」を占めた恐慌後の1934（昭和9）年から1936（昭和11）年の実績があったという（『旅行ノススメ 昭和が生んだ庶民の「新文化」』（白幡洋三郎/著 中央公論社 1996年6月）92-93頁）。

人が旅行先を選ぶのに欠かせないものが観光地イメージである。『大阪ブランド戦略活動記録（2004年9月-2007年3月）』（大阪ブランドコミッティ [2007]）は、外国における大阪のイメージ調査において、6カ国の旅行案内書に記載された大阪イメージを分析している（62-76頁）。

本論では、浅川らの与那国島の旅行案内書（観光パンフレット）を用いた訴求内容と受容内容を分析している論文を紹介した。また、観光地イメージの歴史的な変遷については、小長谷論文による函館の例と今野らの論文による日光の例を挙げた。

その土地のイメージをどのように形成するか、また、「アピール」と「まなざし」をいかにマッチングさせるかを知る手がかりとしても旅行案内書を利用することができるのである。

もう一点は、「弊履のように捨てられる資料」という旅行案内書に対する見方への打開を試みた点にある。この点は、第一節でも触れたところであるが、もう少しそのバックボーンについて考察していきたい。

図書館資料（書籍）は、「発信者のメッセージ」と、紙という「モノ」とが結び付いたものである。この図書館資料からは、三つの情報が発信される。

一つは、資料を構成する一つである発信者のメッセージである。いわば書籍の内容で、書かれたもの、著者なり編者が自らの頭の中に描いたメッセージを文字という記号に置き換えて情報発信したものである。読み手はこのメッセージを読書という行為を通して受信する。

しかし、このメッセージは発信者の一方的な意思に拘束されるわけではない。あくまで受信者の意図に委ねられるものである。ロジェ・シャルチエは『書物から読書へ』（みすず書房 1992年5月）の序言で「読み手はそれぞれ、個人的ないし社会的な、また歴史的ないし実存的な、みずからに固有な参照体系をもとに、程度の差はあるが、独特であったり、ありきたりであったりする一つの意味をテキストに付与し、それをもってテキストをみずからのものにする」と述べる（4頁）。

何より新しい情報が求められる旅行案内書の場合、発信者は最新の旅行の情報を伝えようとするが（アピール）、それはさまざまな読み（まなざし）にさらされる。そして、そのさまざまな読みはさらにさまざまな読みにさらされることで、時を経て内容が現状に即さない陳腐なものになっても、本論で紹介したようにジェンダー表現、民族的マイノリティ、植民地朝鮮等を分析する有効なテキストとして存在することができるのである。

図書館の資料が発信する二つ目は、資料を構成するモノが発する情報である。紙の原料や活字、本の大きさや状態など書かれたもの以外が情報となる。

三点目は、その資料が存在する、ということによって生じる情報である。いつ発行されたのか、発行された際の類書の刊行点数はどのくらいか、どこに所蔵されているのかということと自体が情報となる。

1964（昭和39）年から2008（平成20）年までに刊行された海外旅行案内書を分析した岩田の論文は、一点一点のテキストの内容ではなく、いつ頃からどの地域の旅行案内書が刊行されたのかを追った、メタレベルでの研究である。

こうした三つの情報を組み合わせることで、「あらゆる出版物はその時代なり社会なりの切り口を見せてくれるものであって、出版物を通してそれが出版された時代の人々の、報道・教育・評論・娯楽などに対する社会的ニーズを探る（『なにわ出版事情』（大阪市立博物館

1989年) 序) ことが可能となる。

「アピール」と「まなざし」が交差する旅行案内書も然りであり、観光地イメージの分析はもちろんのこと、今後もさまざまなく読み>が試みられることを期待したい。

また、それに応えるためにも図書館は旅行案内書を重要な資料と位置づけ、収集、整理、保存して後世にまで提供していく責務を負っているのである。

### 【註】

- (1) 「眺めのもっとも美しいもう一つの場所は、島の東山の頂きに近い燈台である。▽燈台の立っている断崖の下には、伊良湖水道の海流の響きが絶えなかった。伊勢海と太平洋をつなぐこの狭窄な海門は、風のある日には、いくつもの渦を巻いた。水道を隔てて、渥美半島の端が迫っており、その石の多い荒涼とした波打際に、伊良湖崎の小さな無人の燈台が立っていた」(三島由紀夫『潮騒』新潮社 6頁) という描写は50年を過ぎた時点でもそのままであった。
- (2) 金子は「戦後のガイドブックが、戦前のそれと比較して」と前置きしているが、刊行された数が膨大なために書誌学的検討が充分になされなかったのは、戦前戦後を通じて言えるのではないかと考える。
- (3) 岩田は、旅行案内書には「著者個人の名が奥付に記されていない」ものが一般的と書く(114頁)。ここに、「無名でも著者が明記されているもの」という文言を加えておきたい。
- (4) 現在のところ三井文庫所蔵のものが知られているだけであり、冒頭の数丁が欠けているために、三井文庫では『明暦板道中記』とし、今井は『道中記』とする(山本 前掲書 114頁)。ここでは、刊行年がわかるということで『明暦板道中記』とする。
- (5) 例えば、「企画展 お江戸のガイドブック 江戸名所図会でたどるすみだの名所」2003年9月20日-11月9日 すみだ郷土文化資料館。「所蔵資料展 名所が語る江戸・東京の歴史」2003年10月6日-10日 東京都文書館。「江戸時代の観光ガイドブック展」2009年10月14日-11月23日 市立枚方宿鍵屋資料館。
- (6) 山近博義は「近世名所案内記類の特性に関する覚書-『京都もの』を中心に-」『地理学報』第34号(大阪教育大学地理学教室 1999年)で「小型案内記」は18世紀初頭より表われるとしている。
- (7) 『旅』は現在、古本屋をとおしても手に入れにくい状況にある。また、公立図書館は一定年数が経過した雑誌類を廃棄することが少なくない、と述べている(274頁)。
- (8) ユネスコでは、パンフレットを「表紙を除いて、4ページから48ページの非定期刊行の印刷物」と定義し、1枚ものの印刷物をリーフレットと呼ぶが(図書館問題研究会図書館用語委員会/編『図書館

用語辞典』（角川書店 1982年10月）、旅行のためのこうした小冊子および1枚物をここではまとめて「観光パンフレット」と呼ぶこととする。

- (9) 「Dr. コトー診療所」は2003年7月から9月、2006年10月から12月までCXで放送されたテレビドラマ。2004年の1月と11月にも特別編が放送されている。
- (10) 浅川らのこの論文では、配布した観光パンフレットが『凜として佇む日本最西端の島、与那国島-Dr. コトー診療所ロケ地マップ』とある。出版者については記載されていない。

#### [参考文献]

- ・今井金吾『道中記集成』全47巻（大空社 1996年6月-1998年7月）
- ・岩田晋典「渡航自由化以降に出版された海外旅行ガイドブックに関する基礎的研究」『立教大学観光学部紀要』第12号（立教大学観光学部 2010年3月）
- ・上杉和央「17世紀の名所案内記にみえる大坂の名所観」『地理学評論』第77巻第9号（日本地理学会 2004年8月）
- ・大阪市立博物館『なにわ出版事情』（1989）
- ・大阪ブランドコミッティ『大阪ブランド戦略活動記録（2004年9月-2007年3月）』（[2007]）
- ・金子直樹「国内観光とガイドブックの変遷」神田孝治編著『観光の空間 視点とアプローチ』（ナカニシヤ出版 2009年10月）
- ・白幡洋三郎『旅行ノススメ 昭和が生んだ庶民の「新文化」』（中央公論社 1996年6月）
- ・西野由紀「先達はあらまほしき-『名所図会』と旅人-」『国文学論叢』第52輯（龍谷大学国文学会 2007年2月）
- ・日本交通公社『日本交通公社七十年史』（1982年）
- ・古崎康成編『テレビドラマ原作事典』（日外アソシエーツ 2010年1月）
- ・三島由紀夫『潮騒』（新潮社 2007年10月）
- ・森正人『昭和旅行誌 雑誌『旅』を読む』（中央公論新社 2010年12月）
- ・山崎治「観光立国に向けて」『レファレンス』第54巻第10号 通巻645号（国立国会図書館 2004年10月）
- ・山近博義「近世名所案内記類の特性に関する覚書-『京都もの』を中心に-」『地理学報』第34号（大阪教育大学地理学教室 1999年）
- ・山本光正「旅行案内書の成立と展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第155集（2010年3月）
- ・ロジェ・シャルチエ編『書物から読書へ』（みすず書房 1992年5月）

## 三才丸

此薬を服するとき、こころにおもふことには、脩身齐家、正心誠意、孝弟忠信、仁義礼智、勸善懲惡、衆善奉行、此十六字を一心不乱に念誦すべし。奉公人忠義第一、人の子としてハ孝順、少者ハ長者をうやもふ。農工商のいとなみ、その品をわすれてこゝろにおごりあれば、二三代にして家おとろふ。商人などハ、かいてを大客人として、丁寧をつくし、よろづいんぎんにして無礼なきを長人の基とす。小あき人、小職人などの、無礼にして、よろづふつゝかなるハ殃多し。人の信心といふハ、こゝろにまことあるをいふなり。人のにくむものにハ、神ほとけの擁護なし。いかほどのるといふとも、災ますのみにして、福祥なし。おそるべし。

## 士徳後室へ申きく

寒ハさむし、暑ハあつし、年々としのつもるを見れば、眼横鼻直なくがわるふが、さしたる不思議もなしとすべし。正心誠意ハ不老不死。脩身齐家ハ子孫繁昌。なむあみだぶつハ無量壽尊。片時もゆたかに、こゝろしづかに、よを長く、まつりをいとなみたまへ。

もろこしの風ハ、天のこと、地のこと、人のことを詳に記伝し、一朝一朝ハいふに及ばず、三皇五帝ころより今のよまで、各々その史ありて、その君、其臣、その治、その乱、その聖、その賢、その愚、その悪、千百年の間、あらゆる吉事凶事の考ふべきにいたるまで、是を詳に記載し、その外、朝廷仕進の文徳あるもの、其人其家の集めて、是を千歳につどふ。よろづの事、学士大夫の史書に、詳に逸民遺老の筆記に及ぶまで、是をその朝にえらびもとめたもふといふほどの事にきこへ侍る。婦人女子の瑣々たる事まで、人道に益あることの、人の教となるべきを、ものしたもふことなしといふ。此方にもかくあることにや、昔のものがたり物などをたづねもとめて、一々よむべし。みな聖世の人の善道を専要とし侍る事なり。みな勸善懲惡の道理、衆善奉行の事にして、民の父母たるの御慈念なれば、なにとなく風調雨順、民安樂をのみ、戸ざゝぬ御代といふ。御誓願被為成御事にきこゆ。民もまた、其御洪恩を忘るべからずといふ。つゝしみおもふべきことなり。

人ハ忙しきをよしとす。ひまなるハよろしからず。小人間居して不善をなすとあり。百丈禪師、馬祖大師なども此事をいへり。一日なさずバ一日食ふべからずとあり。富にして貧なる人も多く、貧にして富なる人もすくなからず。いづれにしても、読書写字、てすきあらバ、是をこのむことなり。文学のこのみありて、昔のことをきゝ、もじ見をし、師を扱ひ、友をもとめて、人の人たる道理を詳にする事なり。人のいのちハ、高貴卑賤を差別して、長短あるものにあらず。まことに少水の魚のごとし。あしたゆうべのすこしの間に灰となり、土となる。せハしきものゝゆだんならざる命なり。太平のよに生ること難しと、仏ハとき給へり。今ハ太平の御代、是を聖代ともいふべし。実に戸ざゝぬみよといふ、是なり。人々その業をたのしみて、一日々々を安樂におしうつり侍りなり。はなハだゆたか

なり。

身没して家さかゆるもあり、身ありて家おとるもあり、身も家も同じくおとるへ、身も家も同じくほろびはてぬるもすくなからず。天下の大より末々のものに至る迄、この盛衰、この興亡、むかしより数もかぎりもなきことにして、その小ハさたに及ばず、その大ハみなその記伝あり。天下の人々みなこれをよむなり。是を詳にしるなり。その善悪を後のよの人々、其記をよみて勸善懲惡の道理をしるか、こりつゝしむと、善道をすゝめしとふと、よき師を、よき友をたづねもとめて、その事をよみもし、きゝもし、ならいもして、誠意正心、脩身齊家、よろづの事、人心をうしない侍らず。ゆたかに日月を拝み奉り、たゞ子孫の光榮をいのり奉るこゝろのみならば、さのみあしきことハあるまじきに、自由なれば人とハならず、人となるハ自由ならずと、もろこし人のつねにこれを子共に教へ侍る。女などの、よろづ己がかしこくて、一も二もくハぬといふ自まんつらなるハ、かならず家をほろぼす。男をそまつにおもふこゝろあれば、みやうがをうしない侍るなり。

人間世、毀譽の二つなり。そしるほめるのふたつ、彼我ともに是なり。あちでもこちでも、たゞこの二字なり。毀ばかりもなく、譽ばかりもなし。人をしるもなし、しらぬもなし。我が分際ハどうじや、よむか、かくか、人の道理をしるか、我ばかりよきか、人ハどうじや、位ハどうじや、全体の人柄ハ、なんとすべての脩行などハどうじや。孝弟忠信ハいハずと人の自然なるに、千にひとつも不届もの、誠意正心ハ学びていでくるものにハあらず。是も人の自然にして、よきによきを教へ侍るハ、錦上に花を鋪く道理、あしきもよきに交りて、よき事をきゝ、もじ見もしするときハ、ふとよきにうつるもあり、又もとよりにあしくなるもあり、へんくつものをきろふなり。たゞ我のみをよしと定めて、人をバそしる。我が定木のいがみたるを直なりとこゝろへ、人の直なるをいがみたりとおもふハ、いかにかねもちの愚人より、貧乏人の智者ハいかん。それも、ゆだんハならぬものなり。よからぬことを工夫して、かねほしがるハどうじや。それを山師とはいハぬかな。世に山とハいゝしぞ。

もろこしの風、山林草野の才徳兼備の士の逸したるを詳に迅問し、或ハ、ところかくの刺史県令、その人を問いもとめて是を朝に奏し奉る。一々えらびたゞして、挙任及第、直に一職補任、一族光榮、たとへ牛ひき柴になふ夫といふとも、是をもらし、すてさせ給ふことなし。此事にすこしもおこたりあれば、はやそのことをなげきて、中原に麟鳳の祥瑞なきに志もあらざれども、皇家あみをむすぶのあらゝしくて、皆もれいで侍るなどいふことを調咏し、この詩句いつとなく、皇家の御きゝに達し、是を御一代のはちとし給ふことなれば、操行高潔の学識ある、あらハれずといふことなし。この陳公ハ、選挙のことを録せず。たゞ郡守嚴譔がこゝろみに逢い侍るも、遺憾とすべきか。小妾蓮花よもすがら左右し侍るに、ついにこれを納めず。是非なく詩を獻じて辞し侍る。不便といふべし。蓮花のきよきすがた、尚書、是を珍重し、陳公に納るべきこゝろありて来り侍るに、処士巫峽の夢をなし給はず。むなしく陽台を下り侍るが、などの愁も恨もなにとなくふくみ侍る。是、処士まことにふかく、文君がなさを無にし侍る。深愧といふべき所なり。ゆへに、

操行高潔、央をてらし侍るなり。人の慎とすべき所なり。

五代盧文紀 後唐廢帝扞相、悉書清望官名、納琉璃瓶内、祝天以筋策之。前得盧文紀、次姚顥帝、素奇其才同升相位。

もろこしの諺に将相無種、いづれといふわかちもなく人才を扞る。清望人柄のすぐれたると官名とを書いて、琉璃の瓶にこれをいれ、天に祈誓し、其人其官に応じ、朝廷の輔佐万国請治人民安堵すべきの天意にかないたるをといふの誠意、はしを入れてその名札をはさみとり上げ侍る。かねて叡聞に達し、もとよりその才を慕ひ給ふに、すなはちその二人是を得給ふ。是天也といふべし。

人の世に処する無我無心などいふことを、称義するやうにきこへ侍る。是は禅僧などの迷悟のさたより、いゝいでしことにして、毒にも薬もならで、たゞ朝夕のつとめを正直に、そのすがたを殊勝なりなどいゝもてはやし、一人の饑寒をたやすく、犬馬の齢をたちへ侍るのみのことにして、よにも人にも緞芥の利益なく、一生を無我無心、臨濟ハこれらを繁驢橛などいふものにとへ侍る。馬をつなぎ侍る杭をいふなり。馬をつなぐばかりの用にして、くち侍るなり。又、担板漢などハ、大板をせをいて、一生これをはなちやることをしらず、しやはりかへるをいふ。又、焜酒逆漢などハ、一生酒のかすにくらひ酔たるものゝ、醇酒のあぢをしらず、すみはて侍るをいふ。臨濟和尚の時、すでにかゝる僧行なれば、其後のことを、さつしおもふべし。

下の者の、みだりに寺院を建立せしなどハ、金銀あるにまかせて、驕慢のこゝろより、是を結構し侍る。多ハ家をほろし、子孫をたち侍る。達磨大師の無功德といゝしが、梁武もほどなくよをうつし侍るなり。つゝしむべし。又しかたもあるべき事なり。

天地陰陽の正をみな転倒し侍るゆへの事なり。おそるべし。つゝしむべし。人の道理の正明なるハ、こゝろさハやかにして、口しづかなり。一黙雷のごとしなどいふ所ありて、よろづいハねども、人々おそれつゝしむ所あり。こゝろくもりて口のさハがしき、よろづかまひすぐて、後にハなきハめく。人々もてあつかふ様になりゆき侍る。いきながら鬼になり侍るぞなど、ゆきかふ人々のうハさに、たゞこの女のことをはづかしきことなり。家もほろぼし、児孫もたつべし。神ほとけも見はなちたもふゆへの事なり。ふかくつゝしみあるべし。

害もまた多きものなり。その人を弁じ、わかつこと、なか／＼常流のたやすく是を得べき事にあらず。我が正心誠意より自然と分明不思議のことあるものなり。慎独のみやうがなり。よきを見しりて、しとふこゝろあれば、是非にあしきは益なしといふことを、詳にしるなり。

(原本に脱あり)

なり。そのこゝろあれば、ふとして五もじ、なゝもじ、はなのいろハうつりにけりな、といふまじきものにもあらず。鳥のこへして函谷関をいつかハリ侍るとも、此逢坂の関ハ

なかく、ひらくまじきといふ。女のつゝしみ、たしなみ、すこしの事なり。大事なり。男ハ百行、女ハ一貞といふ所をしるべし。おもしろき事なり。

八つのまつりごと、食よりはじむといふ。又、いかをハかりて、いつ、此に給すとあり。これを経済ともいふが、此事にこゝろなきものハ、はなハだ危し。学もんハ、たゞこのことを大事とするなり。脩身齊家といふも外なし。学者などの世事人事にうとしなどいふは、無学におとりたるものとすべし。孝弟仁義の道理をいふに、世事人事をはなるべきや。正心誠意、脩身齊家ハ、みな人事なり。みな世事なり。僧などの世事人事にくはしからざるを、道人などいふもあやまり侍るなり。むかしの知識達、各々数学にも達し侍り。臨海徳山の法道、その清規、作法の次第、一々是をかきあらハし、其職位を定めて、金銀米錢諸道具にいたるまで是を詳に上帳して、諸堂より小部屋くゝにいたるまで、是を見廻り、脩理の事、改作の事、両序の執事をあつめて是を其主に申て、評議正く、その上にてそのことをとり行ふ。有力の檀那ありて、その檀那へ是を申て、その事をなすとげ侍るもあり。寺領あり、又、祠堂金などあるは、其内にてその事を取斗ふ。みだりにすゝめことなどをよき事にして、信施を費し侍るを禁じ侍るなり。故に経済のこゝろなく、よろづしどけなく経をよみ、座禅をすればすみ侍るなど、一決、人の道理をしらで、破家散財の外道をいむなり。ゆへに、才を量て職を補ふなどいふ文字をこゝろとし、其人其職の相応してよろづつまづきなき様に、二時の粥飯、三時の座禅、朝暮の読経、天下太平の御祈祷、国恩仏恩を至心に奉謝し侍ることなり。みな、正心誠意、脩身齊家を離るにはあらず。よき寺の住持して、あたゝかに衣服し、むまく飲食して、元來を失脚し侍る僧の為に、古徳の示しあるを見るに、檀那の水をのむことを得ざれ。水をのむハ血をのむがごとし。阿蘭若に住することを得ざれ。住所は墓を守がごとし。たゞ何ごゝろなく住持し侍るものハ、つかを守りて血をのむものぞといふ。畏るべき事なり。中遊山玩水ハ身分相応す。もの見といふハ、見物の事なり。人のするやうに、これをたのしみ侍るがよし。よきをうらやむこゝろあれば、おごりをかさね侍るなり。人数ほどのわり子をたづさへ、こゝろしづかに、山のすがた流のきよきを、花鳥風月の自然と、こゝろをよるこばしむる趣を感じ入るほどのこゝろあれば、何となく、やさしきこゝろ生じ侍る。

唐 盧儲舉進士投卷謁尚書李翱。翱置文卷几案間、長女及笄閱其卷、謂小青衣曰、此人必為狀元。翱乃招為婿、明年果首唱。成婚之夕、儲作催粧詩曰、昔年曾向玉京遊、第一人許狀頭、今日已成秦晉約、早教鸞鳳下粧樓。

李翱の長女、盧儲の詩及文を見て、其侍婢にいふ。此人かならず狀元たらん。其言を父の李翱、是をきゝ其意を得し、すなハち招きて、むことし侍る。明年はたして壯元の首唱いちふてなり。此女もよく人才を見届侍る。小青衣ハ、日本腰もとなどいふ侍女なり。文才を一として、容陣を次にす。学才を一とし、身代を二とす。女子といふ共、このことを詳にす。是が文国の風儀なり。卓王孫の女、文君司馬相如が学才にめでゝ、しばらく貧

苦を堪へ侍るもこれなり。

文武といふときに、文ハ文ばかり、武ハ武ばかりと、人に決したることにハあらず。文武ハ鳥の両翼のごとしといふ。その一片、かくべきにあらず。むかしの名高き名将勇士の詩あり、文あり。みな今に伝ハりて千百年のち人々是をしる。実に不朽の盛事なり。

一年三百六十日の日数ハ、多きやうなれ共、瞬息の間にしてはや明年となり侍る。しからバ、五十年百年とまつほどもなく、人々その寿をたち得べきことに、百歳の間百歳の人あることを見ず。花前にして、こゝちよく酔ふことも、生涯の間にかほどあることぞ。酒錢をしまし、貧しきことをいはずして、はるのはなをたのしみて、よをしまし、く過し、はづべき道理、このこゝろあらバ人のみちにたがはず。よくよく人との道理をさとり侍る人なれバこそ。

人々怨尤の二字ハ免るべからず。賢愚共にこれあるべし。人をうらみつ、人をとがめ侍る。喫茶喫飯の間もたゞ人の事のみをいふが、彼もかく、此もかくと、家々人々黙々たるハあるまじ。たゞ善をいふことをこのみて、悪をいハぬがよしと決定すべし。その善悪を分明に決定し侍るを、殊によしと定むべし。いづれも自省して、よきを慕ひ悪をあらたむることなり。窮してハ、猶更よを恨み人をうらむるやうに、こゝろひがみて、我ばかりよきにいかなるゆへに、貧苦にせまり侍るぞ。まづしかるべきものハ、なにゆえまづしからぬぞなどゝおもふすがた、明々とあらハれ侍る。見る人これを見る、知る人是をしる。はづべし。

文士にして徹骨の貧なりといふとも、花鳥風月の時々たのしみあるに、詩をいゝ、うたをいふほどの余情もなく、たゞ貧をのみくるしみて、よをうらみ、人を恨みて天理も人理もわすれはて侍る。人々命と分とすでに定り侍るを、露程も是を省せず、なにとなくこゝろみだれ、たゞそのいかりのけしきのみ。人々是を見て、是を畏ち慎み侍るなどハ、一向に人の和をうしない侍るが、いよく濫して、いよく窮すといふになりはて侍る。人はその時その時の模様を見はからい、自身は自身、これを救ふものぞとこゝろへ、その貧苦の骨に徹せざるやうにこゝろへあるべし。

人もほとけ、あみだもほとけ、しやかもまた、人のほとけぞ、名づけてあける、人の品数とあれど、みな人の人のなかにて、人ハさだまる。

この翻刻にあたっては平野翠氏（奈良大学非常勤講師）の御教示を受けた。

# 加藤景範著 『暇日筆記』翻刻

大阪府立中央図書館 読書支援課 佐藤敏江

はじめに

底本は大阪府立中之島図書館蔵（甲和一三二一）加藤景範筆 一冊（二四、六×一七、一c m）  
表紙表裏各一、本文二二、白紙二丁

江戸時代後期の大阪で旧派歌人の流れを引き、代々歌道を教授した二家の内の一つが加藤家であるが、加藤家がその地位をしめるに至ったのは加藤景範の代である。

加藤景範は、江戸時代の歌人・和学者。近世の大坂でいうところの町人学者である。

父親の影響で幼時から和歌に親しみ、烏丸光荣門下の松井政豊に師事、また懐徳堂に学び、後学主の三宅春楼・中井竹山に協力して懐徳堂の最盛期を築いた。

また和歌・和学で名声を高め、歌道を門人に教授した他、著作に励んだ。著作物は、雑学的な傾向が強く、多数に及ぶ。（加藤景範については、多治比郁夫氏による当館紀要第八号、『京阪文藝史料第二巻』『加藤景範年譜』に詳しい）

『暇日筆記』は平成一九年度に収集した加藤景範の自筆資料であるが、かつて、大阪における古書店の老舗であった鹿田松雲堂の『古典聚目』八四号（大正五年一〇月）の写本国書の項に、『暇日筆記』浪花 加藤景範自筆 随筆稿仮冊 一冊」としてとりあげられた経緯がある。

景範が耳にした雑多な巷間の噂話を書き留めたもので、作品としての完成度は低いが、各所に書き直しがみられ、推敲の跡が窺える作品となっている。

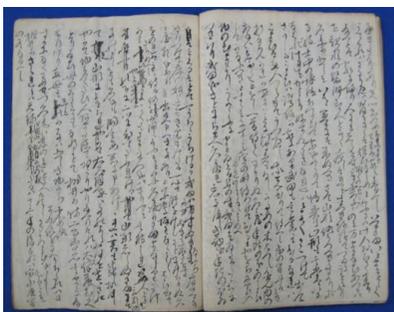
尚、中之島図書館では、この作品以外にも、景範『森銚三著作集九卷』『金蘭斎』の冒頭で「たいへんよいもの」と紹介された手稿本『間思随筆』を所蔵していることを付け加えておく。（本館紀要一二号に多治比郁夫氏により翻刻された後、『日本随筆大成五卷』にも翻刻）



表紙



8丁裏~9丁表



14丁裏~15丁表

中之島図書館所蔵加藤景範著作物

「間思随筆」(手稿)

「教訓十五條」(烏丸光榮著 加藤景範注・筆)

「竹葉露」(手稿)加藤景範／中井竹山／履軒各自筆

「竹葉露」(手稿)

「何世話」(写)

「國雅管窺」

「藏山集」

懷徳堂・関西大学・大阪市立大学等他機関で所蔵している資料の複製(19点)

凡例

収載にあたっては底本の形を尊重し、修正の部分など原文のままとした。

加筆された文章は青字で表示した。

異体字は通行の字体に改めた。

句読点などは適宜これを施した。

解読できない文字は□で表示した。

確定できない文字については(カ)を付して表示した。

訂正の部分は取り消し線を引き、右側に小字で表示した。

暇日筆記

宝暦乙亥春

□□□□□ 五□□ □□ 珍

加藤景範疇手稿本

暇日筆記

○鍋釜などのいかけしてよをわたるおのゝ、松嶋のほとりにて

磯近きあまの苦やの烟にて名にこそたてれ塩かまのうら

○ある土瞽者をあて、さらしなの月見にまかりけり。月出る程いたくめて、哥はいてすやと瞽者にいひければ

わか心なくさめかねつ更科や姨棄山に澄月をみて

とすしけり。それは古哥也といひければ、その月をみてのへもし、留りてわかになんといひけり。

○伊豫の大洲しろしめす遠江の守加藤のきみ、鎗の術にてならふ人もなかりしか、みづから猶心

ゆかぬ事ありと思し召ける。其頃蟠溪和尚に逢給て、ふと鎗の事語り出給ふに、和尚笑てさこそ思すらん。つく／＼君のやうをみ侍るに猶予の究ぬ所あり。いさ心み給へとて、かたみに扇をわか前に置いて、聲をかはしてひとしくあふきみ給へとて、やといふ聲と／＼もに取あくるに、君は取て開き給ふに、和尚はすてに十度あふかれたり。又鎗にてつきてみ給へとて立あひ給ふに、わさのかきり尽し給ふを、扇にてあひしらひて一度も身にうけす。われ此わさ露弁へ侍らねと、受はらふ程いといとま多しといへるとぞ。

○上野下野改かみつけしもつけとよむは、草を毛といふより。野は草の生るなれば、野の多きか草のよく生るかの心にて、けの国と言なるへし。

○大石良雄の山科におはす程、内人は安藝の国にあつけ置れけり。ねたみ心ある人也ける。ある時良雄の方より白き帛をやりて、衣に縫てよといひおくられしに、其比良雄の妾にかるといふ女有。内人これや少しねたかりけん、そなたにてかるにこそぬはせ給ふへけれとて返し遣はせり。其後いくほどなく復仇事遂給り。かの衣は其際のれうとしられぬ。内人こよなう悲しみて、露さる心つきたらましかは、さるむらいのわさはすましき物を、死すとも此うらみはるへきかはとなげき思しけるとなん。其きわめ衣を内人の手にぬはせんと思しけるは、いとふかき心有けめと心弗<sup>に用へき</sup>しれる人のほめけるとぞ。

○わかき男労症のやうにて薬治すれとしるしなかりしかは、くすしの手をはなれて、日ごとにすることなくあそひありきしに、坊間にて大なる布袋の木像をみ出たり。妙工の作にや有けん。ゑめる顔のいひしらすおかしく覚えて買取てもて帰りける。あからめもせず打向ひをるに、何となく心地よけに打多まれ<sup>いひ</sup>少しもなやましけなる時俣、かの顔をみれば、とみにさはやく心ちしけり。かくする程にいつとなくすくよかに成にけるとなん。

○道行人の中に、ふとたれにかよくおほえたとと思ふ人あり。其人はたれにかと思出るに、親しく物言しにもあらで打みしりたる計の人也。まことや、其人此比みさりけりと思ふも、思ば久しく成にたり。○年の程を思<sup>はかる</sup>に、今はおさ／＼なく成にけんよと思<sup>おほえて</sup>するに物あはれ也。

○近き世より、伊豆の海に鯛か淵と名付る所あり。海の底にいと大きな岩あなにて、其中にあるあはひはこと方のにまさりて、其あたりにはめてたき物の数にすめり。いと多かれと、とりうる事まれ也。いかにとなれば、其穴の中はいとひろ／＼としたる本に、えもいはす大きな鯛一ツあり。其鯛のおくの方に向ひたるひまをうか／＼ひて、そと入てとる也。もしはかりたかへぬれば、其鯛にのまる／＼と也。かの鯛小き程其中へ入てあるまくに大きに成て年へたるか、今は其穴を出得ぬ成へしと其浦のあまのかたりけるとなん。

○二条京極のあたりに、大石良雄の妾ありけり。良雄あす東へ<sup>おもむか</sup>むと平本んとするよひの日、か

の妾のかり行れけるに、打みるより、あな心得す。君のおもゝち常ならず。何事のおはすにやととふ。良雄さらぬさまにて、此比いさゝか心地あしかりつる。けにやとまきはして酒打のみ、琴ひきよせ少しかき合するに、妾ま驚おどてさりやたゝならぬ御けしきとみしか、今のしらへのかはりける事よ。君かり初の事にさしも遊るき給ひなんや。こは大事の出来にけるにこそ、さ計の事、今まで露もらし給はぬは、御つゝしみの深きなめりな。けに御ことほりと思給へなから、かつうらみなましもえあらず。何事にまれ、ほのかすめ給へとかこちければ、良雄今はつゝむもいとひんなき心ちして、あるやうまきこえたり。妾いと嬉しと涙落して、やま外まに出たり。其さまなとやらん。心得ぬさま成ければ、よひけれといらへもせず。あやしと出て求るに、大きな松の枝にかゝりてくひれ死しけり。こはなそやといたきおろし、心の限り尽されとしるしなし。やかてかれか父をめして、たゝ何の故とも知らぬますうらみかほにみえしか、さる事あらんとまはかけてもしらす。今はせんすへなし。日比うらなくものしつる物を、何のまもまふしをもあかさてかくはしつるならんまはれは、翁かしらふりて、かれ日比君を神たうとみてありし物を、たとひふと恨る筋ありとて。かゝるわさすへきにあらす。こはなへてならむ事もこそ出来つるなめれ。むすめは君に奉りたれば死すともいかにかせん。唯其事をつゝみ給ふか、心にかゝり侍ると言。良雄も胸ふたかりて、猶かくしたらんは中とあしかりなんと、残りなくかたり聞えたり。翁さそとよるこひて、かれおのこならましかはいつこ迄も後れ侍らんや、女のすへきやうなく、はたをのれか口よりもれなん事もこそと君かおほさんも心くるしさに、御心落為させんとて、さはしつるなめれ。さる上はをのれも年比御恵うける身なれば、娘のかはりに御供まの數にゆるし給は、此世の思出ならんとせちにねかひければ、良雄さしも心のそこみつる上は俱して下らまほしけれと、しかゝ事定ぬる上に、又まを加へたらんは、人々の思はん所もいかにそや、覚束なければ、唯かれかま後のわさ、ねもころにいとまむへし。そもわかすへき事なるを、汝まかはりてよくつとめよとさとされければ、翁とかく思われてなくゝ帰りけるとぞ。

○野會盡(カ)といふは陽煖(カ)の義にはあらて、やまとの訓を雅字をさるへきぎ文字にあてたるなるへし。

○大坂舟越浮談不可記丁に八百やあり。一人の子あり。名を音といふ。いとわる者にて親を苦しめ、人をあさむき、さまゝよからぬ事のみつもりければ、後は公の戒を受、終には父母まで罪を得てからきめやみんとおそれつきてければ、なくゝ公に出て親子の義を絶ておひはなちぬ。其際に、母陰にいましめて、汝心とかゝるうきめをみる。露悔る心あらは吾一言をきけ、今よりいかにほふれまよふとも盗をはかまつてすへからす。大坂にあらん限りはひそかにあり所を吾に告よ。思ふ心ありといふ。其後あり所きつて折々ま錢を袖にして行てあたへけるか、いくほとなく其所をも

去て、いつち行てんしらす成けり。程へて親の家近き所へ盗三人来り。其主~~主~~の男をきり、物とりて帰りけるか中~~中~~、**やか**てあくる朝とらはれて、罪重しとてきられて鼻首せられける。人見知て**其中の一ツ**はかの音なる者兼中~~兼中~~也といひあへり。親きとてやかて行みるに、まかふへくもなまわ~~わ~~か~~か~~もなまきしるし也ければ、なく／＼寺にもて行て埋み、後のわさしけり。其明の年江戸よりとて、かの八百やへ文~~文~~も~~も~~も~~も~~いれたる者あり。とりてみれば、かの音かもとよりの文也。いと奇しとみながら開きてみるに、はなたれし後母の一言せんすへなくて江戸に下り、薩摩の君の下部の数に入て日を送りし程、庖丁のわさよくすとしられて、**今はくりやゆ**をつと~~罪~~あめて侍る。さても年比の過思ふにやる方なく悲しく侍る。罪ゆるし給はらは立帰り、いさ／＼かもとの罪あかなふ計のつかへをたにせまほしとあり。父も母も露あやしとも、思はず是は盗のかまへなめり。遠からぬ程にあやしき事もそあらん、心ゆるす**な**といひをれり。二年過ての春、よひの間にふと入来る者あり。たれそとみるにかの音也。こはいかにぞ、夢にや、こたまのわさにやと、かつはあやし**み**は~~は~~おそ~~お~~も~~も~~し。音は物~~物~~もいはすた／＼うつぶして泣、や／＼ありてありし事つぶさに語る。父母も何とも思ひわかすなからあるやういひて、つ~~つ~~／＼み、つく／＼き／＼、なてみさすりみ、兼夜~~兼夜~~あ~~あ~~み~~み~~るま／＼にうたかふ／＼もなし。人にも語らず猶忍はせて申~~申~~本~~本~~事~~事~~本~~本~~ころみし。かくて是真の音也~~此~~は~~は~~にて心さまはありしに引かへて**心ま**ま~~ま~~成をのこに成けるとぞ、うれしとは更也。此~~此~~人~~人~~にも語り相知方~~方~~もあ~~あ~~れ

○一人の博徒あり。父~~父~~書~~書~~は~~は~~う~~う~~れ~~れ~~へ~~へ~~い~~い~~か~~か~~に~~に~~い~~い~~ま~~ま~~し~~し~~め~~め~~き~~き~~こ~~こ~~ゆ~~ゆ~~れ~~れ~~と~~と~~い~~い~~れ~~れ~~す、父の友にまめ人ありける~~に~~、父、子の事をせちにたのみけり。其よりの男かよな／＼出行比をかうかへて、忍ひ~~く~~後につきて、男か入る家の外に立て、暁帰るに又つきてそれか家迄見送りける。月日重ねてかくしけるか、後かの男ふと心付てころむるにやむ事なし。いとあやし中~~中~~て足とく引かへしみれば、かの父の友也。驚きて其ゆへをとひければ、其事よ汝か博好む事いかにすれとも止す。父いたくうれへてわれによせ聞へたり。これは博~~博~~す~~す~~も~~も~~は~~は~~今~~今~~は~~は~~や~~や~~む~~む~~も~~も~~を~~を~~や~~や~~め~~め~~させよ~~よ~~にはあらず。汝必博徒の交らひに争し出ていかなるあやまちをかし出んすらん。それを心そえよと~~ゆ~~。吾汝か父と年を忘るゝの友也。父齢たかく、今はいくほ(カ)ともあらぬにさるうれへいたきたる。いと哀にすてかたくて、いたくななきそ。われよく守りてんと、うけおひぬ。ま~~ま~~も~~も~~それよりかく~~は~~つきま~~ま~~と~~と~~地~~地~~ひて、いつこにまれ、争ひ~~争~~も~~も~~のおときこ~~こ~~は~~は~~やかて引帰らん物と思ふ也といひければ、かの男大に感じ、とみに夢のさむる心地して博をもやめ心を改めけるをなん。

○神原の君姫路播州を越後へ貶せられ給ひし。罪状七ツあり。其中~~中~~に書写の僧正に道に遇給ひ

し時、僧正こしにのりなから行れしを怒りて、先をととめ、こしより引おろさせられし事ありとなん。又いつの比にか松平出羽の君かりたち出させ給ひし時、大社の北嶋インゲ両家アライツレナリケンにして遙の向ふを通られしか、君のあとよりいたり給ふをしらすや有けん。のりなからさらぬさまにて行れしを、君怒り給ひてかれは木と覺ゆ。などわかさきのりはするぞ。かれ引おろしせとのり給へは、従者廿人計やつてかけ出たり。其時近うまいりける何かしとかいふわか人君の前につと出て、下部のやつこはやりてあやまちもをあらん。をのれに仰付給へといふ候はやとこふ。さはそくゆけとの給ふ。やかてはりり出し先者ともめしありとて皆返し、唯一人追かけ目のすさの中つとかけぬけ、やといひてこしに手をかけしか、いかしけんあをのけにそりたふれぬ。こは何者ぞ、いかなるゆへにやと、すさとも驚きさはけど、ものをいはず。こは故こそあらめ、たとくゆけやとてはるかに行過にけり。や有て君いたり給ふに先おぶ者驚て、こはなぞ、何かしよ、それかしよと呼けるに、心の者心目を開きたり。君いかにそいかにと問給ふ。やうく起あかりて、あやしき事に侍る中哉。木の札さう国ののりものに手をかけ引おろさんとせし程中も目くれ心地まとひしか、さる後は物も覚え侍らすとかしこまりいふ。君あきれ給へる気色にて、さうこは神のたすけもそ付くにみたりにをかすへからすとの給ひて怒もこんととけにけり。長なる人かれか心もちひをはかりしり、ひそかに感し其事となく君にすめねかへ給へりとなん。

○藤堂の御家にか者に次郎衛門事いふ人有。忍むさする者をとり者の上手也けり。同じ御家に重き罪人有けるか、事あらわれんとせし時、いつちへか逃かくれけん。この方なくもとめさせられれとしれす。後にそのやかたにかくれをると告る者あり。やかて使を遣はし、かの者さる罪あり。さて置かたければ、罪な中んとす。引出し給はりけんと書送り給ひければ、さしも聞定め給へる上は隠すへきにあらず。されと罪あればこそ吾陰にを頼み来り候なれば、無下にわたし参らせんもあまりにいひかひなく、二日(カ)得しも参らせましく候、たく同じくは罪なため給てんこそなたらかに候へとて、うけひくへうもあらず。つめに公に訴ぬれば、公より出しやるへき御命下りけり。さる上はそむくへきにあらずとて、日を定めて其所までおくり出すへし。とりてを本札といひ送られけり。さて、かの者にあるやうさとし聞えしもいかにもしてきりぬけ逃へし。こなたよりも心を添てんといひければ、かの者おこの剣術しれ者なれば、心得候とうけかひぬ。こなたにも、こたみのとりものはいと晴のわさ也。心ゆるみしてはかられたらん恥也とて、次郎右衛門を初め覚えの者御迎出たり。あすといふこよひ、かの次郎右衛門かひくれにみえず。こはなぞ、かれをこそたれもくたのみ思ひつるにといふも有。おくしてのかれたるなとそしるもあり。君も大に怒り給へと、更に今せんすへもなし。夜待ぬれば彼所に皆至る。むかふの方よりも彼者を見し

て来る中より聲をおぼせしまれ。あはや今とらはれやせん、しそんしてにかしやせんと手に汗すへし。むかふより聲をかけ、かの者を引出かみしか、うしろよりとらへつと聲かけておふを、縄をかけ事なく引立たる者をみれば、次郎右衛門也。其いつこより出けりとけりともみえず。たゞ鬼神のわざと舌ふるひせぬはなし。やかて引返り君にしか聞え上ければ、かつ驚き、かつよるこひ給て、いかなるかまえそと問給へは、此比忍ひてさきのあなぬをうかひつるに、しかくひひ合せぬ。さるはたゞにとらへかへてもあらねは、むかふの人数の内へかくれて、かくははかりしぬといひけるとぞ。

○紀州社宮の湊の川一年二年計に可至一夜の間に川の底高く上る事あり。其さま堤をつき上たらんやう也。あはひ四懸計か程也。あるは五六日十日計もさてあると也。其間は水は地の下をくろり流るゝ也。よしの河の水の上にもさる所有と也。

○頼守大久保侯の御家に桃井平四郎武田十郎衛門とて鎗の上手あり。桃井はすやり、武田は十文字やり也。武田の門人、武田にすやり十文字の利不利を問けるに、武田言、いつれも其利ある中に、物を引よせ逆るをかけとむる事たぐ十文字の利まされりといふ。桃井か門人此を聞て又師に問。桃井言いつれも利あり。中の唯上手まされり。器によらすと聞ゆ。此事を門人たかひにあらそひけるか、これは両師のしあひあらは明らか事定るへし。いかてさあらなんと家の長なと人なとわけあり。ある時長事の序に此事を君に聞えけり。君いとよからんとしあわせましおほせけり。さて日を定め双方の門人ある限左右につとふ。兩人立あひ聲合するかとみしか、桃井はるかにまさるとみえて武田三たひつかれたり。君聲をあげ給て勝負分れたり、ひげやとの給ひてければ、さてやみにけり。武田の門こそりていきとほり、あるは師をうとみけりしと武田もとあいひきき事に思ひて、いかて桃井をうたはやと思ひ定めけり。されは中といきとほる色もみえず。小中か桃井に術いか計とも知さりしに、今そかれの能をしりぬ。をのれか立ならふきにあらず益友を得たりとて在しよりも親しみていとたてなく萬ねをころにむつひけり。桃井もかれか口惜しとも思はずぬを感じて、かたみにかくなく交らひけり。桃井常折々此里のなかに木磯の妓館にかよひけるか、申ある夜に妓館ある年の五月十日の夜木磯へまかると聞て給れば、武田ひそかに用意し、唯一人かれか車道におくれ待てける。さりともしらて夜更て、桃井や酔うつひたるさまにて帰りけるを、武田うかひてより、聲をかけたりしにはしももやせんと後より飛かりし唯一中に討たふしける。桃井も小中に手はなけれしとぬきたに得はなたとみくと討れけり。武田雨にふそまきりし情ぬ。夜明ぬればその所にて桃井あきられたりといひ出て限りなくさはきたり。此時桃あか子平二郎といふか三才也。家の子に千草久兵衛といふ者物はまれと武藝をもおさく習ひ知ける。桃井きられぬと聞て、物も覚えず馳いたるに中の處に走り行けれどとふえさへかくれければせんと

本<sup>く</sup>是<sup>し</sup>を<sup>し</sup>ま<sup>け</sup>ひ<sup>ま</sup>せ<sup>ん</sup>す<sup>へ</sup>な<sup>し</sup>。せめて仇のゑにしとすへき事をたに得はやと、そこら  
見まはりけるに小柄刀あり。地を洗てみれば、柄の表は赤銅に七字打たるに、膳所の城の形を彫  
たり。刀の銘は、<sup>志津</sup>十<sup>の</sup>三<sup>郎</sup>とあり。是をしるしに求めけれど、<sup>ことに見知れる人もなし</sup>し<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>ず。さる程に士の  
闇打せられたる。さて置かた<sup>き例也</sup>とて。祿召はなたれにけり。久<sup>兵衛</sup>は<sup>ことに身をよすへき方</sup>  
もなく桃井の桃田<sup>マユ</sup>の母其妻其子をいさなひて小田原の町のかたつかたに幽か成宿しめ、無用の  
調度みなうりて金百両計ありける<sup>ゆ</sup>けり。なりはひに野菜をうりて、かの三人を、いとまめ  
くはたらきつかへたり。さて、仇の事露忘れず。神にねかひ佛にいのり猶も下者にさへ問け  
るに○野菜をもてありきて近<sup>ま</sup>わ<sup>た</sup>は<sup>東</sup>に<sup>い</sup>は<sup>一</sup>國<sup>を</sup>こ<sup>え</sup>さ<sup>し</sup>を<sup>一</sup>里<sup>を</sup>め<sup>く</sup>り  
て、○心を尽しこれは武士ならば復仇也。其仇八甲信ノ間テアラント言ケレハヤカテ甲斐信農の間  
にわたりぬ○聞けれど、たとる計の事たに聞得ず。其後武田か妻、君の近くつかえける。扈從何  
かしとかやに密通の聞えあり。いつとなくもてさはかれて、君も聞給ひ、各ともに、さて置かたし  
とて所を追はなたれにけり。其後久兵衛は甲斐の国へ立こえ、こゝにしてさすらふる程何とか言  
所にて、とある家に入<sup>ておくの</sup>本<sup>む</sup>に<sup>中</sup>、方を見れば、武田机によりゐたり。みあはせて、共におとろきし  
か、久兵衛いへらく、こはいかて、かゝる所にまかり給ふそと問。武田言しかくゝの事ありて、此比  
こゝに移りたり。汝は何故にかこゝに至りぬると問。さりやおのれ下臆には侍れと、目の前に主を  
討せ、いかてさて過しなや。仇報ひてはあらし物をと志して、かく遠き境までさすらひ侍れと、  
いまた仇の名をたに知得侍らすとかたる。武田大に感したるさまにて、汝<sup>あ</sup>計<sup>な</sup>の<sup>義</sup>人<sup>と</sup>は<sup>也</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>ゆ</sup>。  
ゆき。さ計心を尽したらんといかてほゐ遂すやはあらん。天道の助もそ添給はん。心長く求めよ。  
近き渡りにもある程ならば、必われにしらせよ。助けてほゐ遂させんと、いとまめたちていふ。  
さて、程へけれと聞出る事もなくて帰りぬ。かくする程に大方宿にをる稀也ければ、かくては三  
人の人々、常に水汲米かしき、辛き目み給へんも心う<sup>く</sup>ま<sup>事</sup>に<sup>思</sup>ひ<sup>け</sup>れ<sup>は</sup>仇<sup>に</sup>逢<sup>ん</sup>事<sup>も</sup>い<sup>つ</sup>の<sup>限</sup>  
りもしらねは、今は、妻を迎へてわ<sup>か</sup>口<sup>なる</sup>あ<sup>どの</sup>つかへ<sup>させ</sup>んと<sup>思</sup>ひ<sup>て</sup>、かくとこひければ、とま  
れかくまれ汝心のまゝにせとゆるせり。近きあたりになさるへき女迎出て妻とせり。妻にいへらく汝  
を迎ふるは、吾に代りて、此三人につかへしめんためなれば、吾をは後にして、唯三人の御もととを  
心とせよといふ。妻もそのことはを守り、いとまめやかにつかへければ、三人の人もいとうれしと  
思ひ、久兵衛もうらなく物しけり。久兵衛つねに外より帰ることに、三人の人々待事あり。顔に  
てさすかにそれと打出ることはなくてみそかにいかにやなと問。あるはおくの方に打よりて、忍  
ひやかに物語し、妻いたればさりけなきさまにまきはす物から、みな涙くめるさま也。妻いと  
いふかしとみて、ひそかに久兵衛にとぶ。をのれかくかたみにうちとけて物し給ふに、唯さる事の  
われにのみつゝましけにし給ふか、い<sup>ま</sup>さ<sup>か</sup>心<sup>を</sup>き<sup>給</sup>ふ<sup>と思</sup>ふ<sup>中</sup>、いと悲しくこそ侍れといふ。

久兵衛いふ。汝かく迄心を尽しつかふるに、何の隔つる事あらん。さるはいにしへの悲しき物語す也。聞ても無<sup>ふ</sup>口<sup>くち</sup>の事也といふ。さても猶ありしさまにのみみえければ、又重ねてせちに問ければ、~~本~~の~~事~~さしも心つくして物すめるにつまんも中と隔<sup>へ</sup>た<sup>あ</sup>れあしからんと思ひて、今は心のおくみつればかたるへし。努力にもらすなとて<sup>あ</sup>れ<sup>ば</sup>の<sup>事</sup>い<sup>ひ</sup>出<sup>た</sup>。妻聞もあへず、その仇、われよくしりぬ。なとく聞え給はぬそといふに、久兵衛~~本~~に驚<sup>おど</sup>まつと起あかりて、こは誠か、そもたそやたそととふに、さは聞給へ。をのれ十四五計の程武田の家につかへし<sup>て</sup>ものに、内人のそはなれすつかうまつりしか、ある夜市郎衛門~~本~~より常のさまにもあらず。唯一人行先をもしらせす出られしか、亥子の時過ても帰られず。相知る方残りなくたつね求るれとおはさす。いかにそと内人ねもやらて待れしに、丑過る程、~~本~~の<sup>う</sup>戸<sup>ら</sup>たく。をのれ出て引明たれば、市郎衛門つと入て~~本~~せ<sup>ま</sup>ま、やをらすのこの上<sup>に</sup>上れるをみれば、衣あけに染たり。内人も驚きて、こはいか成事にかと問れしを、音なせそとて、衣をかへて茶をくめとて、やつかれをつきの方へ出し、内人の耳に口をよせて、こよひ桃井を思ふまにころしぬと語られし。いとみそか言なりけれど、物にまきれぬ比なれば、おさく聞<sup>き</sup>とり侍し。かくて茶もて出けるか、又飯をとて、閑かに打くふとせられしか、つと立あかり、やと誤りてけり。こはいかせん小柄刀を落したりとて、~~本~~色をか<sup>へ</sup>られけり。内人其小刀人見知たりやと問れしに、いな此比求めつる程に、知人はなし。さは何条事の侍らんといはれしに、少し色なをりて、やかてねられぬ。内人はかの血衣をみつからすきて、汝ゆめ此事をもらしそ。外に知人なければ、もれたらんには汝か罪そ。命おしくは命とらるなと~~本~~口かためせられし也、と語る。久兵衛悦ひにたへす。今迄つみつるか猶口惜といひて、おくに入て三人の人々をよひてとくおき出給とくくとおとろしぬるに、何事の出来ぬるそと驚てはひ出らる。しかくも<sup>し</sup>て、あなたゆみや、さりともしらて、武田に逢て迹よといはぬ計心の限かきうつしぬる愚さよ、今はたいつこにもうつるひぬらん。さはれ先行てんと~~本~~雨をかみて夜の明るもまたす甲斐にはおもむきける。もとありし方に行けるに、早人かはりていつちぬにけんもしらす。天にさけひて足すりすれと、せんすへなくて又~~本~~も<sup>い</sup>た<sup>つ</sup>ら<sup>に</sup>帰りぬ、二婦人、こは~~本~~地<sup>な</sup>三<sup>め</sup>宝<sup>り</sup>にもすてられたる<sup>な</sup>。見し時はしらす。しれは~~本~~中<sup>な</sup>あらずと悲しめり。久い<sup>は</sup>ら<sup>く</sup>、さなくし給ひそ。月日ふるこそよかめる物を~~本~~の<sup>そ</sup>詞<sup>は</sup>といふこそ、程ふるかよかめるとはうらめしとせめられければ、平二君や人となり給ひぬ。劍術なと~~本~~中<sup>な</sup>くをしえ聞えぬるを、御心さとおはして、術もや懇<sup>げん</sup>給へれば、今は刃先をならへてこそ仇をうち侍るべきといへり。さてある程に蓄へし物も尽なんとすめれば、かち荷持といふ事をさへしけり。一日小田原にありしに、東よりよき武士の荷物とみえて四ツ花菱の紋降たる霞せる長ひつ七ツ人あまた添て来る。久兵衛より付て其荷物もたせ給へ、目出たき御よそひとこそみれ。わか如き浅ましき者は、

かゝる御役にたにつかはれてあゝ物にせまほしと、しはく乞求め畑走(カ)行になりぬ。さてこれはいつこよりの御荷物に待るそと問ければ、これはもとはこの所につかへ給ひし武田の何かし殿の荷物よ。こゝにおはする程はわつかに三百石とり給ひしを、こたひは千石にて本多唐之助殿へめさるゝ也。さるにても物の上手計有難き者はあらし。かの人こゝを去てより近き国々にさまよひてよきつかへもなかりけるにや。近比浅草の坊伯父のお世事も津やとりておはせしか、唯一間なる所にこもりて軍軍学にのみこころをいれおさく外にも出ず。かりに前裁庭に出るにも刀をはなち給はず守りぬ給へるさまを、伯父の坊も大に感して人にも語り給へる津とわか主君傳へ聞給ひしより、さる大祿を賜はる也と語る。久兵衛かつ喜ひかつ驚き猶も江戸へ給ふやと問、七日先津たちておはしといふ。心も空にて畑へもつてつけ天をあふき神を拝し、かけりにかけりて小田原に帰り、三人にかくとつけ、こたひは平二君のお供してこそとて、かねて身をはなたさりし金十両とり出て、両主婦にみせ平二にまいらせ此年は先君の十三年也。いかにもして此五月二日の御忌日過ぎす首とりて歸らまほしけれと、道もはるか也。武田はた用意たゆまずそあらんなれば、心のまゝにも得あらし。帰らん期後るとも露心な尽し給ひそ。をそくとも仇の首は必とりてんといふ。平二もすゝみにすゝみ、兩人乞食のさまに成て父の刀をこもにつゝみ、祖母、母の事久兵衛か妻に返すゝことよせて、かつ悲しみ且喜ひて立出けり。其際の心つかひ思ひやるへし。さて天かける心地して大和郡山にいたり、武田か家をうかふに、ことに用意すとみえて立よるへき□々には人多く集りも近きありきにも従者数多具すめれば、うかふひよらんなよりもなし。さるはとみに事遂へきにもあらずとて、里はな池の堤に乞食めぐこやきして、久兵衛はかれも見知たれば、昼は平二を町に出し、暮れば久兵衛そ出ける。本多の御家に驚坂甚内といふ者あり。貪婪不義のをのこ也。此れ府下にある民、政宗の刀もたりしか、一日驚坂かかりまかりて、かの刀を出し、これを君に奉らまほしく覺侍る。よきにはからひて給中り給はは、其價十か二を君に奉らんと聞えければ、はやも其利に心うこきて、とみにかけ給ひぬ。同し家の土に山形宮内とて剣をよよく見る人あり。刀劍のうたかはしきあれば、たれも此人の定めをうける。さる程に驚坂やかて此人のもとへもち行てしかの事也。まことの物に侍らは君にもうしすゝめ給へといふ。山形つくくみて、いとよき利刀也。されと君には今ことに求め給ふにもあらず。もとよりよき政宗もあなれば不用の物也。唯さて歸し給へといへり。驚坂とかくいひてやます。さはあれと、かゝる古刀きれの程こゝろみては覺束なし。囚のきらるへき折待給へといふ。さはよき心みあり。此比その池の堤に新乞食のあたる。かれをきりてんとすゝむ。あな物くるをし。乞食なれはとて罪なきをいかてといへと、唯はやりにはやりて、こよひ行てきりてん。いさ給へといふけしき、さて止ましささまなればかれ獨ゆかは必きりつへし、さは共に行て救はるやと思ひつれてかの

所に至る。鷺坂やかすみより小の外の外よかれ引出せとやかすみゆんとす。山形と  
~~ぬ~~先事のよし知らせ後まをいはなまはま引出せとて、引出せしは、平二郎こは何の御めし  
に侍るやらん。いきりていふ。鷺坂つとよりて、汝か身にも人に乞るゝ物あるに、刀のこゝろみにい  
のちわれに得させよといふに、平二驚きて、あるかひもなき身のおしかるべきには侍らねと、身に  
志す事の侍るなれば、今とては得参らすましく侍る。志の叢果したらん時こそいかにも思のまゝ  
になり侍らんといふ。汝かことき身に何条志志す事とは何事ぞ、いひ出る上はとまれかくまれ  
きらてはあらし。舌なうこかしそとて、すてに刀ぬかんとす。山形をしとめ、かれか風情なれば  
とて志す事のなかるへきにあらず、さる願のあらんを、しめてきらんも無下に心なきわさ也といへ  
るに、何条さる偽にはからるへき、そも誠ならば其しるしみせよとせりかた、心得たりとて、膝の下  
よりこもつゝみとり出すかとみしか、氷の如くなる物すとぬき出し鷺坂か目の先へさし出し、これ  
そしるし見給ふやといふまままなこおもちおそろしく鷺坂は色もなし。山形大に感じ、あは  
れものゝぶや、志の筋もおさく立にし、さこそ心を尽すらん事、武士のよきかみ也、いさか  
志をたすけんとて、とて方金二枚取出し、いあたへ今は刀をもおさめよ。われも帰らんといふに  
鷺坂平二平先刀を納め恵の辱きを拝して、いとありかたき物から、かねてのそなへも少しく侍れ  
は事たらずしも侍らすとて、さくけて帰しける。鷺坂木木のこさらはしはらく預り置ん。用あ  
らん時取にこよ。わか家はその所也といふ。鷺坂いかりて、乞食よ、汝にやりたる物を返せはとて  
とりいるきかは、たくはへあるといふも偽ならん。たくはへある身にて何条さる浅ましきさまには  
あらん。偽ならずは出しみよとのる。平二は何心もなく、唯いきとほりにたへかねて、又金を出し  
てみす。山形胸つとふたがりて、あな浅まし、わかき心地のいたりなさに、さる貪欲のおのこ作と  
しらて、さは物するにこそ、是かなら禍を招くへしと思へり。さるは不やうの長居也。いさ帰り  
給へとてつれて帰りぬ。山形は帰りても猶心をちす。鷺坂か金に心うつりては必さて見過さし。  
もしこよひの程に行事もそあるゆ木木必危うしと思ひて、やをらかの所に行ぬ。山形のはかるに  
たかはす、鷺坂かの金いかてとらはやの心やます帰りもいらす引返しけり。平二今少し年たけた  
らはやかてそこにはいぬまじきに、わかきけの思ひ至らて、又もとのこやに入てふしたるを、鷺坂  
うかひよりて、やをら刀ぬきはなち、外より刀のかきりつきけるに、平二腹を横さまにつらぬか  
れ、あつと叫ひしか、やかて心もきえぬるをおさへて、かの金うはひ取て帰りけり。しはしありて  
山形来り、こやの内に入らんとしてかはとすへりたふれぬ。あやし雨もふらぬに何の水にかとさつ  
るに、なめらか成手さくり、血と覺えたり。木木猶あやしめて乞食ありや、ままの山形とと打入  
たるに、いらへもせすふしたるさまたならぬけはひひ、むねははかれていたきおすに、たた血  
にまみれて息は絶にけり。口惜しとはさらにもいはず。木木後後木木。いたきて池のほとりへ出

葉など口に入れ、きつをさくりくゝりなどする程、久兵衛は帰りたるこやの外より、今帰りさふらふといふに音せず。打入たるに平二はなくて血くさく、そこらになかれたるさまに大に驚き、こはなそと見めぐらすに、水影にすかしてみれば二人組合たる影あり。そも何者そと刀ぬきもち、やかてきりかけんとす。山形やゝ誤なせそとて、二刀~~兼~~ともに指出し聞候へと、よひよりのさまつぶさにかたるに、久兵衛は~~申~~心くたけ意れ心もうせて、~~未~~ひなきにかりのる止叫~~の~~地~~に~~おし。おとり上りくゝ齒をかみて泣たふれぬ。山形さるはせんすへなし。きりたる驚坂はたやすくうつへし。先うかゝふ仇はこそ久兵衛しかくゝと告、さは心安しうつへきたよりあり。先心しつめ~~れ~~てわか家へ来るへし。いへるさまいとまことしく覚えければ、さる上はおほせにこそ従ひ侍らめといふ。さは此人おひて来り給へとて家に帰り、人にも知らせす~~おく~~の一間に入わか妻子にのみ万まかなひあつかはせ、親族の医師むかへ、とかく療しけれと生つきは絶てつゐにうせにけり。久兵衛悲しみいはゝ愚かにそ成ぬへき、さて山形仇うつへきたより求める程、土中の博徒相つとひて家をめぐりて博打す。山形も其當にいさなわれけれど、もとより好まぬわさなれば、とかくかこつけて出会さりしか、こよひは驚坂か家があり、武田も其當にて有るなれば、こよひそ兩人つてにてうつへし。我先至りて待へし。虎の半計そよき折ならん。かれか家にはことに川守者もなし。かための木はつし置ん、内のあないしかくゝ也とをしへ、暮待てまかりぬ。久兵衛年頃のほあこよひこそかなふべきとすゝみにすゝみ、用意のこりなぐとへの寅の時待つて有り、やをら忍ひ入、物のひまよりうかゝふに、まとゐる上の坐に武田そゐたる。たゝちにつきいり武田をきとにらまへ、久兵衛そ忘るましき物を、年頃のほる~~事~~とくるそとて一うちのうちけるか、武田か刀ぬきも果させず~~刀~~をぬき~~も~~肩先よりきりつけて、床の板迄そきりさけたる。一坐肝をけし、さとにけちりぬ。久兵衛聲をあげ、主出給へ、申へき事ありといふ。驚坂わなぐゝはひ出て、をのれそ主に侍る。何~~れ~~を聞へ給ふそといふ。久兵衛かさま、まなしりさけ、かみ~~ゆ~~たちぬへしの~~ま~~よ。やとう~~盗~~人よよくもわか主人をはきりつる其報しれ、盗人よと~~言~~聲の~~中~~唯~~十~~刀の下に二ツに分てたふれける。や~~小~~山形しらぬさまにて、事のよしをも名をも聞定め君に申あけゝれば、君も感しおほして、~~先~~山形によせられければ、大久保候むかへとり給ひ、世のかゝみにもなれよとて、桃井の蹟二百五十石其まゝに給はりけり。両母も~~平~~の~~事~~は悲しき物から~~十~~人の~~物~~をさへうちたれば、わすかになくさめ□つ久兵衛は孝の道をさへ尽してよろこひをいたしけるとそ。桃井かきられしは元禄~~中~~年の~~中~~果~~した~~たるは十三年の後なれば宝永庚寅の冬なるへし。

別紙

小田原家 スヤリ 桃井平四郎御届五十石

仇(カ)は懇失アル故追放 甲州へ逃 武田十郎左衛門三百石

平四郎子平二郎 三才 家来千草久兵衛

元禄十一年寅年

本田唐之助之助殿忠村家中 山形九内 鷺坂甚内

小刀赤胴十、口脇(カ)口形 裏金銅銘志津三郎

○家居は膝をあるゝにてたれるを、大廈廣屋を求るは居をあんせんとにはあらて、目を悦はしめんとす也。又下さまの貧富に従ひてや、廣くも狭くも立まじりたる。廣きといふも一町に過す、狭きはまことに膝の外なし。それををのれくわか也と拂ひ清め、わづ木成前栽めく物市木土木の車木をわづまも風情あるへくうへなどしたる。さるへき事にはあれと墻一重を限りて、わかよ人のよと思ひしめたも、あるは寸尺の境を争ひなどし出るまじいかなる心そや鳥獸もあさましとみるへき。

○三日月の細くさやかなるは大方はいとあかす身にしむめるを、初秋の三日の比夕さり近きのをきすのひに行住、西の山きは紅をさしたらんやうにて、夕附日の匂ひひき空にふと三日月見出たる□□□□こよなう覚えし。影はほのかにて少し青みたる力にのあかき空にたたむかたつかたに星晴一ツあるかなかきかに本出たもふとしも物も覚見つけかたきせいひしらぬやえぬ程。や、空の色収り月も星も光そひゆくこそ。今たしはしさてすあらまほしく筆えし小さやかなるなり行はいと興なくそ覚えし。

○草庵集の詩句題ををのれもまねひてんと思ひて、冬の部までよみたりしか、一首たによみ本本たりと思ふはなし。されとはしめはいとかたき事に思ひしか、さはなくて思ひめくらすに、より所ある心地すめり。いかか(カ)成故そと思ふに、題は題に定まりたればことなる筋題の文字多き故に中、趣は求め出へくもあらず。趣は趣は定まりたりさる上にはた、題の文字のゆるかぬやうにと心を入れてよむ故に、中、力いれ

安し。これにつきて思ふに、わ本年比の題詠二文字三字の結題を、先其文字をはなたととりもちては心得あしかりけり、唯其文字のゆるかぬやうにするを、題詠のよみかたと心得しはあしかりけり。さ心得てよむ時は、詩句題にひとしくてわやすし。さて哥の本意はそむけたり。さらは朝露を朝霞、夕の霏を夕霏とよむ其文字たらて、さよまん事はいふにたらず。全句朝露の心にてよめらんには朝露とよみたらんに何条事かあらん。中、題を一句によみて全句其題意にたかさはらんは中と高名たるへし。と思ひしも又ひかこと也是は人の皆知事也。中、朝露と題の冬字を一句によみて外に其題意あらはになく共わか思ひこめたる所、初より其題の心にてよみ出したらんには人はいかにいふ共わか心にはゆるしてんと○今は覚ゆる也。

○もよみたのし夜鹿といふ題をとりたりしにはしのも道かや、とよみたのしかも本思わし鹿は大や

う夜なく物なれば鹿といふ一字、題にても夜鹿に成へし。さは夜といふ字はのうこかぬやうにと  
思ひて、~~ま~~は暮のまゝ、この一二の句にて夜の字やゆるかさらんと思ひたりし。今思ふに此  
哥文字をよみたるにて、鹿をよむ本の~~ま~~す。又初花の題にて、哀てふことを一木か中にしも  
あまたにやらぬ枝の初花、又庭初雪を、迹つけてとへかしと思ふ人も又人や侍らん。庭の初雪、  
是は題を一句によみたれと、其句をはなちても句と皆題意をふくむやうにと思ひてよみたりし。  
たゝかうやうによみたりしは、皆文字よみにてねんし出す所にて、すてに哥のさかひをはなれた  
りといふべし。

○京に何かしとか言警者ありけり。はやうより何れの君にかめされてありけるか、さて後も  
折々東にめされけるま。一年の下りに君待うけ給て、いかに道の哥はとの給ひければ、所とに  
てよめるを、書付て上りける。其中に 東路の瀬田の長橋こえわひぬみしかきせゝのよを渡るとて  
といふ哥をみ給て、ことほり也。今より心まゝにせをやしなへとて又めさゝりけるとぞ。

○本多大貳膳所の家臣といふ人有。扇に松と竹と雪ふりたる方をみつから書て、その哥を小い  
巾、時しらぬ松と竹との色も猶白キを後の雪にみすらんといふ哥をよみて書そえたるを 武者  
小路のかみみ給ひて、いたくめて給ひけるとなん。此人娘を嫁する時

なれも又みをくる親にとく成て子を思ふ道の哀しらなん  
とよみてやりけるとぞ。

○源氏物語にいひさして心をふくめたる詞あり。たとへは何として何とすると言ことを何してな  
んと言。かくしてこそかくせめと言事を、かくしてこそといひとめたるあり。

末摘にみつからのうれへはかしことも先こそ〇はこれはいとまきこえさせにくくなんと。

○宝永五年の春京都火災にて内裏炎上し、公卿殿上人の亭里のこりなく焼失たりしに、清水谷  
の大納言実業卿風早参議公長卿も火にあひて、こゝかしこにさまよひ給ひけるか、二人道にて行  
逢給ひて実業卿

風早と聞も恐ろし今日の~~火~~や

との給ひければ、公長卿 清水谷とて、やけものこらすとこたへ給ひしとかや。右太宰得衛門か  
獨言に記す。

○月やあらぬの哥、諸説いつれかとき得たりとみゆるもなし。つくく思ふに、月や昔の月にあ  
らぬ、春や昔の春にあらぬと思へは、月も春も昔の春也。然るにありしにもあらず覚ゆるは、我  
身に去年にかはる事あるかと尋ねれば、われももとの身也。われはもとの身なれとも、わか昨年  
を思ひなけく。心は昨年には引かへて悲しき也。月と春は昔のまゝにて、われも昔のわれか身也。

然れ共、我は月と春との昔のまゝなるにはかはりて、悲しひの心は昔はあらぬわか心と也。

○南部信濃守殿内大藤佐次尾崎富衛門在着し、使者

○南部信濃守殿交代して帰国のむね奏せらるゝに使としてより、~~本例ありて~~ ~~献物献せ~~  
~~本~~ 佐藤大治、屋崎富衛門の二人に命せらる。二人公へ出けるに例御坊主取次で、老中出合  
給ふ。折節他家の使ありけるにめす成爲にカ、南部の御使は次の間へつめられ申はいふに、使いふ。  
わか家の例此は隣にて茶有つる、取次に堀江荒四郎出遅れけるに、何のたかひめありてか、ふと  
あらそひに成て、二人やゝ言あらくのしりける。堀江大に怒り、殿中をはゝからす過言せし条、  
老中へ申上げる。老中其外ありあふ人々あつまり評せらる。其事はとまれかくまれ、上をはゝか  
らぬ条ゆるしかたし。重き罪に落て罰も重く申付るに評議一決す。西常隠岐守殿初より一言を  
もいはすつらつへつきておはしけるを、堀田相模守殿いふかりて、いかにや隠岐とのか何と面々の  
議する事をよそけにはなし給ふは、別に思しめくらさるゝ議論こそあるらめ、さらは今たゝ聞え  
給へとの給ふ。隠岐侯はいく、初よりの評論委しく承りぬ。上を重んせらるゝ条ことほりいたれり。  
されとわか思ふに、民の害にならぬすちは忘給(カ)て咎むへきにあらず。百論の類はたゝ其理を  
取て非を弁給へん事廣き政と言へし。かの兩人は返申にて過言を準とくめらるへきは初より知事也。  
~~本~~ ~~事~~ ~~の~~ ~~それ~~ ~~を~~ ~~忘~~ ~~れ~~ ~~て~~ ~~し~~ ~~か~~ ~~の~~ ~~り~~ ~~し~~ ~~は~~、主~~本~~ ~~家~~ ~~格~~ ~~を~~ ~~お~~ ~~と~~ ~~さ~~ ~~し~~ ~~と~~ ~~思~~ ~~へ~~ ~~は~~ ~~也~~。今重くとかめ給はゝ信濃  
守上~~の~~ ~~お~~ ~~そ~~ ~~れ~~ ~~て~~ ~~か~~ ~~の~~ ~~二~~ ~~人~~ ~~を~~ ~~き~~ ~~り~~ ~~つ~~ ~~へ~~ ~~し~~。わかために身を忘れて争ひしものを、にくしとにくしと思  
ひてんや。其上今にても、もしいつこにまれ誠徒(カ)おこらん時、諸侯をすへて追伐をさせられん  
に、さる争ひをもせぬたしめ、その武士いくら君とて事の用に立なんや。さはさらはさる者を重  
く罪給ふは上の用に立へきものをほろほす也。本~~上~~ ~~の~~ ~~御~~ ~~為~~ ~~に~~ ~~も~~ ~~こ~~ ~~た~~ ~~ひ~~ ~~は~~ ~~か~~ ~~る~~ ~~く~~ ~~い~~ ~~ま~~ ~~し~~ ~~め~~ ~~給~~ ~~は~~ ~~ん~~ ~~事~~  
然るへしとの給ひければ、満座感し合給ひて百の議論空しく成て此一言に決しぬ。

○宝治哥合の作者の内蓮性は宇津宮入道也。為家の舅也。

○いつの比越後高田の町の中へ龍の落たる事有。三日か内うこかす其俣有し。四日といふは天陰  
雲むらかり来るとみしか、彼龍うこき出るとみる程、雲気あたりにみちふたがりて、龍のほりさ  
りぬとぞ。

○今清の都は盛景と言匈奴の地也。南京北京は藩守となれり。北京はいにしへの燕国也。南京は  
呉也。

○からさけの、海より川にのほるはと人、のいひしをたふるはかりわらひしか、枳花を枳殻の花  
と詩に造れるもおもへは此たくひとおほゆ。

○らい山か子規の句に、郭公鳥と成て明にけり。

○安見三輪先生へ、慎獨の心を問ければ、春の夜の闇はあやなし梅花の花のうたの心を思ひみるへ

しとこたへ給ひしとぞ。

○秋年々風ありてたなつ物そこなはれける比、靈元上皇の御哥也とて、

吹風もさはりあらずなしなのはへ君かじめ遊ぶ長田さなた哉

○徂徠談乞食の頭善七と言者の先祖は景晴の家来に車丹晴と言者なるか、御草履取と成て東照君をねらひ手引、をのれか家来をは皆江戸へつれ来り、乞食の内へ入置たるを、事頭れたる時 東照君御免有て乞食の頭と成たるよし。茂卿政談に書せり。

○日本國中惣高二千萬石にして、日本の武者の惣数三万餘騎也。右は日本の惣軍兵三十三萬騎と言たるには十分一に成たりと同書に言。

○戸籍と言は、人別帳の事也。され共今の代の人別帳のときには非ず。今代の人別帳は誠の人別帳にあらず。着到帳の類也。人別帳と言は其村所の家別を記て、其家との亭主を始め家内の人数を譜代の者迄不<sub>レ</sub>残記<sub>レ</sub>之、よめ取は之を記し、養子をすればこれを記し、婦に他へ行は除<sub>レ</sub>之、子生れば年月日記<sub>レ</sub>之、死れば何月幾日に死すと記<sub>レ</sub>之、出家なとすれば、其子細を記して除<sub>レ</sub>之。其師の寺の人別帳に載<sub>レ</sub>之、出替奉公人をはのせす。是は其者の出所の人別帳に有故也と同所に言り。

○羈取ハ張付ニカクルト言ハ、年始ニ禁裡へ羈献上ト言事有ヨリ重キ取サハキニナルニミユ。水戸ノ義公ノ時、水戸ニ羈取アツテ御耳ニ立タレハ、重キ法ヲ破リタル者ナレハ、御自身成敗ナサルヘキト也。夫ヨリ折々申上レトモ、ナニカ御隙入ニテ延引ス。後ニヒタモノ伺タレハ、サラニ斬シ御庭ニ引マセハ、御自身刀ヲ取テニ三度切ントシタマフカ刀ヲステ、内ニ入玉フ。其後人伺ハ、トカク御自身切ラルヘキトノ事ニテ延タル内ニ彼者何方ヤラン。逃テ事ヤミタリトナン。

### 隨筆

○あかはぢかくとは赤耻也。左傳に荅垢といへるは耻をしのぶ事也。

○昔の烏帽子を見しに、小たる一重を黒漆にてすり、



(端ヲ五部折てつけたる也)  
このやうに折目付たる物也。これが左折にも右折にも風折にも土急ほしにもなる也。其時との衣装に随て色ノ<sub>レ</sub>にせし也。これは延徳手間の物にて、いなかの農家に傳はりしよし、しるしせり。みしかき紐一方に一筋つく。これはいかにするにか、さとりかたし。

○夏日の長きを愛すといへるは、まことに炎熱のくるしきをしらぬなるへし。眉山の翁の詞をたせるは、かの風の勝(カ)をもととせるにて、いとむね~~ホホ~~ある筆のすきみなるかし。

一布栖川都に安村搦校といふ警者あり。靈をよくすといふ事を有栖川の宮聞めして、人してめされければ、吉村<sub>ニ</sub>よなう有かたき事とよつこひてやかて参りぬ。

一堀部弥兵衛、安兵衛を養子に定めし時、めあはせんと思へは女子十四也。江戸にての事なれば、互におもてをしらす。後に安兵衛赤穂へ下れる時、もいかなる安兵衛事にか、かのむすめにあはず。程なく事おこりて堀部父子自刃せり。かの娘母につかへて又人にゆるさずわびせ。江戸泉岳寺の邊に尼になりてすめり。其ほと浅野家の祀絶しをいたく悲しひて、おほけなくもかすかにも主君の御跡たてたまはらん事を廿五度(カ)まで公にうたへ出たり。廿五度といふに時の奉行給ひけるは、汝しはくねかひの事出る事なれと、是はいくたひねかふとも、とてもきこしめしあけぬ筋なれば、今より思ひとまるへし。をのこならはとらへとかめ給ふへけれど、女とみゆるし置給へる也。又もねかひ出は罪罪かるからしと仰出され給へる。よりにて其ねかひは思ひとまりぬ。さて朝夕わか持佛にむかひて、君の父の夫の後世のためとは露にけす。人の力もてかなはぬ事なれば、とは只仏の力をたのむ外なし。只かのまつり給ぬるをおととおととせ給へとのみねかへるとぞ。さる事たれかれやことなきか聞しめされて、あはれと思おとと思してめさるゝ方々も多く、きぬなど給はるおりもありけれど、さる物は皆相しれるかたへをくりて、わか身は一生麻おの外の身にふれさりしとぞ。ことし九十一才にて二月廿五日に身まかれり。遺言して、泉岳寺義士の墓のかたはらにしるしをたてけるとなん。

一枕草子昔覚えてふようなる物と言条下に、七尺のかづらの赤く成たると有。官女の験に髪長く、すそに引たるはつぎたるかつらなるへし。

一新勅撰秋部日法性寺入道殿の

すそのよりみねの梢に移りきてさかり久しき秋の色哉

とあるは実こそむけり。是は女御の内屏風のうた故秋を女御にたとへ、入内をすそのよりみねに移るとよまれし也。故なき紅葉の哥にこれを證とすへからず。

# 翻刻『浪華之記行』『大坂城御番所勤方文書』『御支配所勘定太田直次郎様御宿一件』

大阪府立中之島図書館 小笠原 弘之・八木 美恵

大阪府立中央図書館 北川 敬子・日置 将之・苗村 昌世・

山田 瑞穂・佐藤 敏江

はじめに

今回は、大坂に関係した幕府御用に関する文書三点、藩主の大坂城代着任のための先遣隊の道中記（元治年間）、幕臣の長崎着任の道中（享和年間）、大坂城での任務に関する資料（天保年間）の三点を取り上げた。

## 一浪華之記行（二二三・六・一四八）

底本は大阪府立中之島図書館蔵 一冊（十三・五×二〇

cm）表・裏表紙各一、本文五十六丁

同書は、常陸笠間藩主牧野越中守貞明が大坂城代職を拝命、先用役を命じられた笠間藩士が著した大坂への往還記である。元治元年（一八六四）十二月二十日に江戸を立立、



翌慶応元年（一八六五）一月五日に大坂に到着、六日に入城、前任である三河吉田藩との引き継ぎ業務を開始、十五

日昼には藩主一行の着坂を受け、約一年の大坂城勤務の後、江戸長詰を拝命往路で立寄ることができなかつた名所を観光しながら笠間を経由して江戸日比谷屋敷へ到着、江戸詰の任に就いたところで、この紀行文を終えている。大坂城勤務の内容については別途『御用日記』を認めていたらしく割愛されている。

本文は、大部分を江戸から大坂までの往路の道中に割り、帰路については、往路で立寄ることができなかつた名所観光に留め、朋輩とともに、道中の土地の名物、名所を堪能し、昔日に思いを馳せ、一句をひねるなど、封建下での人々にとつての旅の在り方が窺えると共に、幕末の東海道の名所案内の態をなしている。



因に、牧野越中守貞明はこの後、戊辰戦争で幕府軍が敗れると、大坂城を脱出、慶応四年（一八六八）一月二十日に大坂城代を辞任し、最後の大坂城代となった。

二 大坂城御番所勤方文書 (文書二三四)

「大坂城御番所勤方文書」(目録後掲)は、丹波篠山藩の青山家の家臣市瀬家の宝暦から明治にかけての記録である。その中から、五代藩主青山因幡守忠良の大坂城代時代の仕事に関する記録の内主なものを取り上げた。青山因幡守忠良は、天保十一年(一八四〇)十一月三日から弘化元年(一八四四)十二月二十八日まで大坂城代を勤めた。前掲「浪華之記行」の最後の「大坂城代・笠間藩主牧野貞直から数えて八代(二十年)前に当たる。

大坂城内には、行政官僚である大坂城代の他、城代補佐役の京橋口・玉造口両定番、大坂城守衛業務担当として旗本で構成される大番衆に加勢する四加番(山里丸・青屋口・中小屋・雁木坂)と、常時あわせて六名の大名が自らの家臣も率いて勤務していた。

城内をいくつかの区域に分割して常時これらの武士が詰め、本丸と二之丸南側を東西大番頭および大番衆が、本丸北側の山里丸と二之丸東側一帯は加番が、それぞれ屋敷(小屋)を構え警固していた。また、城内から外部に通じる大坂城の追手口・京橋口・玉造口の三口にはそれぞれ城代、両定番上屋敷が構えられ、その配下の武士が周辺を



警固していた。

大坂城代上屋敷は、城内と大坂三郷の町人地に向けて開いた江戸期大坂城の表玄関である追手門の内部にあった。『撰営秘録』によれば、城代の管理区域には、見附番所が二ヶ所、札改番所が三ヶ所あったとされる。上屋敷から追手門や南仕切門への順路の分岐点に見附大御番所、京橋口定番の守衛地との境にある北仕切門に見附番所があり、追手門枡形の周辺には、城内出入管理のため鑑札を確認する張番所、枡形番所、足軽番所があった。本文書内に登場する市瀬大次郎は、者頭などを勤めており、その他の記録からも、市瀬家の人々はいくつかの番所に勤務し、徒士・足軽などを束ねていた平士身分の武士だったと推察される。

(二)『大番交代時之出役覚』(文書二三四・二)

天保十二年(一八四二)八月の大番大交代の際の追手口における業務記録である。

大坂在番の武士のうち、行政官僚である大坂城代や両定番および東西両奉行にははつき

りとした任期は無いが、軍役の大番・加番については、寛永年間（一六二四～一六四三）に制度化されて以降、任期は一年となっていた。目付も半年交代で、これら短期任務の交代を一斉に八月頭から中旬にかけて行っていた。年によって多少のずれがあるものの概ね日割が決まっておおり、一般的に八月朔日までに着坂の上、二日には追手口から加番衆が仮御城入。三日京橋口より山里御加番、四日追手より青屋口御加番、五日玉造口より中小屋御加番、六日玉造口より雁木坂御加番が交代。重ねて五日追手口より東御番頭が仮御城入、七日玉造口から御城入。十日に追手より西御番頭が仮御城入、十二日に追手より御城入。両番頭の御城入の間に、大番衆の小交代も行われる。

早朝より行われる交代の儀式は、『金城聞見録』に「其行装甚厳にして且花麗也。此日市中の男女袖を連れ廣原に出て見物す。」とある様に、豪華で威厳があり、大坂市中の人々はこぞって大手門に見物に訪れ、江戸後期には大坂の年中行事の一つとして根付いていた。

(二) 『玉造口御門定番御城入之節御固人数并絵図面』（文書二三四・三）

天保十五年（一八四四）に、玉造口定番として着任する出羽長瀨藩・米津越中守政懿の御城入の儀式の参考として、前任の越前敦賀藩・酒井右京亮忠毘が、天保十二年（一八四一）に御城入した際の記録が公用方より回覧され、それを書写したものの。後半には出火の際、御番所勤務者が取るべき対応についての心得が添付されている。

(三) 『大坂御城御番所勤方大格』（文書二三四・六）

前二点の資料と違い、記録ではなく手引書として作成されたものである。各門の開閉、追手門内の城代上屋敷と各御番所の取次方法、大坂城に出入りする鑑札の確認方法、問題が起こった時の対処などを詳細に記している。加番衆の内、大交代の際に唯一追手口から御城入する青屋口御加番の交代の手順について最後のかなりの部分を割いている事から、八月の大交代が大坂城勤務者にとって重要な職務であったことが窺える。

参考文献

- 「大坂城誌」小野清編著 名著出版復刻 昭和四十八年（三七八・八七九）  
「大坂城の歴史と構造」松岡利郎著 名著出版 昭和六十三年（七二九・八九三）  
「撰宮秘録」中村勝利校注 日本古城友の会城郭文庫 昭和五十三年（三七八・一二七九）  
「金城聞見録」政芑著（甲和・七一六）

三 御支配所勘定太田直次郎様御宿一件 (三二八・二九二・一四八) 一綴

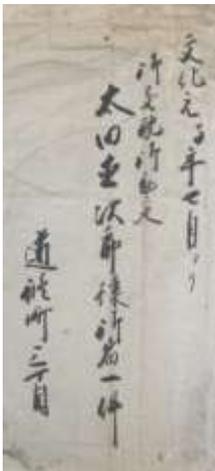
本文書は、菓の町として知られている道修町の元禄〜明治初年にわたる各時代約八六〇点の資料群で、当時の三丁目住人の人口動態・経済の動き・町内の取締・警備・行事・諸規定を網羅した町方文書―「道修町文書」(三二八・一〇二〜二九二)―の内の一点で、幕臣大田直次郎の長崎勤務赴任時の道中の大坂宿泊時の記録である。

大田南畝 寛延二年(二七四九)〜文政六年(一八三三)

名は覃、通称直次郎のち七左衛門、号、南畝・四方赤良・四方山人・蜀山人・寝惚先生・杏花園等。幕府の役人であったが、幕臣としてよりも文化人として知られており、黄表紙、

嘶本、洒落本、滑稽本、狂詩集等の著作があるが、

南畝の名前を高らしたのは狂歌で、天明狂歌の中心的存在であったが、天明七年狂歌・戯作と絶縁、因みに、この後寛政の改革により、朋誠堂喜三二や蓬萊山人帰橋の止筆命令、恋川春町の自殺、門人宿屋飯盛の江戸払い、山東京伝の手鎖の刑、版元蔦屋重三郎の身代半減等、受難時代を迎える事となる。



江戸の文化のリーダー的存在であった南畝と大坂の関係をみていくと、

享和元三月〜二年三月、大坂勘定として大坂銅座に滞在、在坂の様子は「葦の若葉」(日記)

「遡遊従之」(中之島図書館蔵 翻刻有) 等で窺える。「遡遊従之」(問答書 自筆)は、南

畝の質問に木村兼葎堂が答えたもので、兼葎堂は南畝へ答書を持参後間もなく(享和二年一月)没している。兼葎堂と共に、当時の大坂の地で、必見と言われた住吉へも参詣しており、本文書の献立控中の追加文に来客として出てくるかぶらほ(蕪坊、佐伯重甫)と、住吉の浦で合う約束をしたが、かけ違つて会えず、茶店の柱に和歌一首を書いて帰つたという話もこの前後である。(住吉大社の境内に句碑有)

「改元紀行」(往路)「壬戌紀行」(帰路)はこの時の紀行文である。

南畝が、蜀山人を号したのは、この在坂中で、銅の異名が「蜀山居士」である事により、住友家の私家版「鼓銅函録」(享和年間刊)には、蜀山人の題字が入っている版がある。

南畝の交遊範囲は広く、南畝を中心とする狂歌グループ四方連には、五世市川团十郎(花道つらね)始め江戸歌舞伎役者が揃っており芝居好の面目躍如たるものがある。大の三津五郎最負であった事から、上方役者の代表格ともいえる三代目歌右衛門を嫌っていたが、後年最負となり、「梅玉余響」(天保九年猿笠著)には、「狂歌は蜀山人にとひしが浪花にか

へりてより鶴廼屋翁または六々大人に随ふてまなぶ」と記されるに至っている。

余談であるが、明治期の大坂の商売名鑑「商工技芸浪華の魁」「浪花諸商獨案内」に、菓子「せんべい ねぼけ」（大江橋北詰）の名がでているが、雑誌「上方」によれば、大江橋北詰に、「ねぼけ堂」という菓子屋があり、南畝の句を焼きつけた煎餅を売っていたとの事、狂歌作者大田南畝（ねぼけは号）の名の大坂の地への浸透ぶりが窺える。

文化元年（一八〇四）長崎奉行所詰を命じられ、赴任するが、「御支配所勘定太田直次郎様御宿一件」は、長崎への道中（月日〳九月十日）で、道修町三丁目に宿泊した時の接待の記録である。文中に「御見舞人多く」と記されているが上田秋成もその一人で、八月十五日に道修町の宿舎を訪問した事が、「胆大小心録」（一〇八条）に記されている。秋成とは気があったとみえ、長崎滞在中に、秋成の「藤口冊子」の後序を作成、また帰路（文化二年十一月五日）には、京都の西福寺に隠棲した秋成を訪問している。この時期、ロシア艦隊（レザノフ使節）長崎に寄港しており、南畝が対応している。尚、長崎への旅は、「革命紀行」（往路）、「小春紀行」（帰路）に詳しくし。

本文書は、既に「大田南畝全集第八巻」（岩波書店）の月報に、多治比郁夫氏により一部紹介されているが、夏の大坂らしい献立、その献立一つにも、御用宿を勤める側の様子が窺える事から紹介する事とした。

#### 参考

「遡遊従之」（甲和・八四二） 木村兼葎堂 大田南畝書 享和二年  
影印版「遡遊従之」（大阪資料叢刊一） 大阪府立図書館 昭和四十六年刊

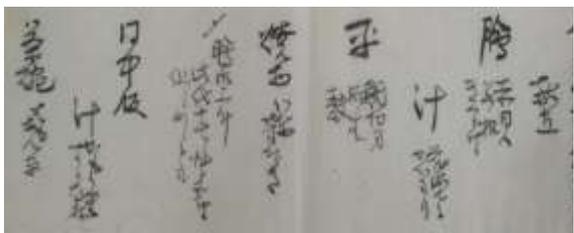
「鼓銅図録」（甲和・三五五・七六三・七六四・八五一・一一四三）増田綱著 享和年間 住友家私家版

#### 凡例

本書は底本の忠実な翻刻を原則としたが、通読の便を考慮して、一部漢詩を除き、返り点、句読点を施した。

反復記号「ゝ」「ゞ」「ゞゝ」「ゝゝ」「ゝゝゝ」は底本のままで表記した。

異体字については標準の字体に改めた。



本文において朱で記された部分はそのま朱で表記した。また、本文において行の横に補記された部分は青で表記した。  
 付箋は、指示された個所に書き入れた。  
 判読できなかった文字は□で表記、判断に迷った場合は文字のしたにカを付した。  
 活字のない文字は□にルビで表記し、( )内に文字の説明を付した。

大坂城御番所勤方文書目録

11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
略会席料理献立	御給仕方心得書	〔諸事勤方〕心得	口達之覚	〔御固所詰交代ニ付通達〕	大坂御城御番所勤方大格	御城近辺出火之節下馬先御固メ人数操出行列 八町四方出火之節火消人数 三ヶ寺(天王寺・建国寺・専念寺) 大坂市中出火之節以上	操出惣御人数割 市中御巡見 遠方御巡見 両町奉行御出 御下屋敷江御出之節御門	忠良公御城代中 三御寺御参詣 心得方其外御番所心得方大略記	玉造口御門御定番御城入之節御固人数并絵図面 付)出火之節役々	大番交代時之出役覚	御城入之日上旅使宿直勤并市中巡見御城外御行列
	文政7年借用写置	文政2年10月中旬		4月12日			壬寅7月改	天保15年3月	天保12年8月	天保12年閏正月27日	
小納戸	市瀬			市瀬大次郎あて 鈴木幸右衛門・堀内 弾右衛門出	箕浦又市殿ニ貫之 市瀬正誼	松田久右衛門より 貸写置 斎藤控	御供頭控借写 御 地目付…近藤半助	市瀬正忠控			
			御狩之儀								

22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12-6	12-5	12-4	12-3	12-2	12-1
〔明治維新規律改正ニ付再触写〕	大赦ニ付御咎御免	蓋簪会規約	〔鹿児島県下騒憂ニ付笹山士族会 開催通知等下書〕	乍恐御窺書	笹山藩藩士録	〔宝物目録〕	〔城内宝物等目録〕	目録	〔大名家格覚〕	交肴一尾	五色毛氈之内	到来之鳥子紙	先□申し付候 六日	・ ・ ・ 塩鮭之内いぶし鮭 ・ ・ ・	小納戸より差出物品状
2 明治 日 治 6 年 7 月	辰 2 月	〔明治〕	明治 10 年 3 月			10 月 25 日		文化 7 年 2 月 8 年 10 月							
貫属区長	元八上新村出生 当時無宿 記助 代人	笹山士民学芸之 会	笹山士族あて 安藤					奉書 奉文 御 内書写		小納戸	小納戸	小納戸	小納戸	小納戸	小納戸
		擁翠書楼蔵用箋使 用		領内儉約ニ付伊勢 講并ニ愛宕講改正 借 銀濟方仕法		堀内主殿持ち帰り	善右衛門持ち帰り		初官位家格等						

38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23
書簡	書簡	書簡 (法事お知らせ)	麻疹処方書	〔多葉粉代銀覚〕	〔覚〕	〔法事覚 22年5月12日〕	〔端午之祝儀目録〕	御歎帳 到来物帳	隆興君拝賜御服添書 (包紙共)	日々〔覚〕	〔御役履歴〕	御屋敷絵図面	由緒書仮写	〔小学校寄付申出書〕	式番組定約証
12月10日	11月15日	4月14日	文政7年孟春					文政元年～7年	宝暦13年	明治12年～18年	天保12年～明治3年	文化7年9月2日		12月16日	明治9年11月29日
旦那あて つき出	市瀬家内一同あて馬場先御門番所枿形〔市瀬〕大次郎出	沢井充中・一瀬順吉郎・市瀬□三郎・松田大右衛門・田塩おとらあて 市瀬寅太郎出					板倉佐渡守	鶴三郎・平三郎関係		市瀬大次郎 市瀬寅太郎		市瀬四郎右衛門		式番組惣代市瀬寅太郎等8名	
					高田先生関係	22年5月12日 (旧4月13日当日)			宝暦8年大坂城代 拝命ニ付賜服	隠居願 買物覚等		□建継絵図面 願差出ル取払并切 文化七年九月二日	市瀬正誼とその子供 (三男児)		家禄奉還ニ付儉約之社結成

53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39
書簡	書簡下書 実三郎病死二付遺留 物品御下渡之為上阪	書簡包紙 (15件)	書簡	書簡	書簡	書簡 (包紙共)	書簡	書簡	書簡	書簡 (年始状)	書簡	書簡	書簡	書簡
7月13日			極月21日	9月12日	8月9日	4月12日	3月28日	2月11日	2月2日	正月		8月23日	正月5日	1月26日
市瀬寅太郎あて 石田五三郎出	砲兵第四連隊あて 市瀬大次郎代市瀬 寅太郎	青山惣左衛門 吉 原六左衛門 堀内 弾右衛門鈴木幸右 衛門 蜂須賀小	大次郎あて 市左 衛門出	市瀬大次郎あて 甲賀安定出	市瀬大次郎あて御 藤□□を出	市瀬大次郎あて 堀内弾右衛門・鈴木 幸右衛門出	一瀬大次郎あて 鈴木鍋五郎出	市瀬大次郎あて須 藤幸左衛門出	一瀬大次郎あて 甲賀又左衛門出	市瀬平馬・大次郎あ て 甲賀彦三郎(季 綱)・又左衛門(道 熙)出	市瀬四郎右衛門あ て 寺井伊兵衛教 寛出	市瀬四郎右衛門あ て 河合次郎太夫 (重徴)出	市瀬御三方あて わかむら忠治	市瀬あて 小林與 惣治出
	裏面…受領書見本書			前破損										

71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54
野調(漢詩)	漢詩(山陽七言)	奉寿 前藩主八句華甲(漢詩)	加茂社御奉納之御製	古々路覚	高砂 五段の次第	[謡演目]	長寿養生覚	書簡(刃傷一件下書)	書簡下書	書簡	書簡 鳥羽伏見の戦いの様子	書簡(悔状)	書簡	書簡(見舞状)	書簡包紙(5件)	書簡	書簡
						4月26日 4月5日	文政8年冬				正月4日	極月7日		4月25日		2日 明治23年1月	8月19日
市瀬強齋生実所持		市瀬正居	関白輔熙熙 中務 卿職仁親王等				青山凌善御隠居ニ 借用写置		岸本治右衛門・御内 室あて 市瀬一同 出			出 お万寿あて 平内	祖母あて こま	市之瀬平太郎あて 岸本出	市瀬寅太郎あて 石田五三郎 蜂須 賀弼之丞 堀内弾 右衛門等出	市瀬寅太郎あて 今井史夫出	市瀬寅太郎あて 今井史夫出
		七絶		明治天皇御製并 名家和歌		4月26日 宅ニテ 岩井				後破損 残暑強 く							

79-3	79-2	79-1	78	77	76	75	75	74	73	72
財産取調ニ付上申用付下書	〔下書〕	〔府県職員等級表等覚〕	戯歌 風呂場の障子に	梟の先なるわらひ草序歌	歳旦	歳旦	詠草二首 市瀬氏賢母尼公八十とせの賀を祝し侍りて	詠草二首 長月の末つかた高野村にやとりて鹿の声をきゝて	漢詩・詠草下書	漢詩・詠草下書
						正月				
					さ□	源正武	精益□	廣文		
					市瀬正誼君今歳華旦の春・・・				漢詩・和歌の添削	

浪華之記行

頃は元治元甲子年極る月の末の廿日、浪華てふ都に旅立のいわひせんと筆を取ツて、おろかなる紀行を口すさみ、只後の旅路の一助にもと、寸志の功を残すものは松風軒の主し琴主

こたひ君公

大君の召におふせて、霜の月朔日に登營ありしに、斗からんや、浪華金城鎮護の命を請け給ひ、吉田の城主 **松平刑部大輔殿也**に打交りて守れよとの仰言にて 君は更なり。下として

もいつれも万歳を唱へ怡わぬはなかりけりし。亦附属せるやからには、いつれも新なる職事

を蒙り御供せる有かたさ、須弥山より高く蒼海よりも深く、拙等もこの内にたつさわりて、

まつた先用の命をうけ、彼の地に至りては悪さなせる人立の軽重を別ち闇照を別けてして

君に力を添うべしとあれば、元よりおろかものにして所置に惑ふ事多ければ、蒐せんかふせ

んとあんしいなまんとせしか、それも本意ならんと心付きて、事をなせる文を書写し、また我 君にこたひ心を添へ給ふは、宮津の城主 **松平伯耆守様也**は格老の内にして、いとねも

ころに事を傳へられ、拙等も彼方の待臣たちに教を受け末事成らせるに、吉田衆方早ふ登

坂せよとの来状にて、俄に支度取整へ 君を初め重臣たち、亦友とち等に暇を乞ひ、又合

部屋の朋友には暫時別れの酒造汲まんと、酒屋ニ向けし見當を少し廻して西廻宮ひるこぬや

うに夕方と言付やりて、荷の支度取、始末さへとゝのへて、待ッ間程なく、持たらせツ、搔

き集めたる海山の料理程にはあらねども、なまくさうを鮮らけき魚の皿盛りにて、先ッ杯を起

しツ、家内のうちも睦ましう汲終りしは亥中過、臥し戸をやをらおし建て、暫時まどろみ

眼を覚し卯時と起す。寅の時刻 餉支度の其内に再ひ起す。盃は又も別れの名残とて膳に

向へは梅干の浮塩咲きて見事さは是旅立の真事ならんと筆取ツて

年の内に春来にけりとおもふかな波の華にも梅か香そする  
相部屋の人とに對して

楽しさや一と坂越へてあわす顔

魁かけて浪華に開けむめの華

とかくして支度もとゝのへは、馬被義と共にやりを持たらせ平井に音信、連立ちて、馬荷は跡に少し遅れ、残れるものに頼み置き 御屋敷を出立。六ツニ近し。数奇屋橋御門を通り、山下御門通り南鍋町より尾張町ニ出て、東西に向ひ品川通り、札の辻辺ニ而夜明ヶ切る。大木戸より高輪に懸ツて天気よろしく

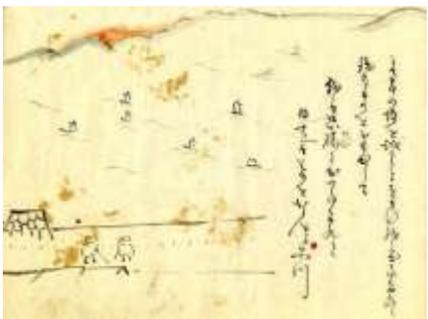
○高輪や旭の筋通る青海原

として、五ツ時より早ふ●品川駅に着。爰にて荷物改めのひまあれは来るを待ち、あたりの茶店に立寄りて一杯を催し朝風殊ニ寒ければ

汐風に吹かれて寒し●袖か浦 蛤鍋にぬくむ一杯

無レ程ゞ月改め出来して、馬の支度も調ふまゝ少しく先に牽かせ、我々は関門の改めあれば、印鑑を取出して引合せ、番所を過ぎて馬に打乗り、東の海●を詠めなからつくゝとかたるへみれば、はや此月も十日ニ過すして、明るとは夢にも知らねと心には知れて、何国の驛場にて年の坂を越るかともひ、我は心易けれと残るものをおも出して

我は只旅に心の易けれと内ては暮をなんと●品川



と少しく内の事杯おもひやりて、無レ程大森の駅ニ継ぎ、此處ニ而東海の名産海苔を調ふ。價若干一帖一朱也。

名物にちと乗込んで買ふたれば才布の口を銭か●大森

無レ程六郷涉しにぞ

馬よりはまた足腰もやすらひておもし○六くに渡し守かな

越へて直ニ川崎につき昼食事す。少し落付を得しまゝ  
落付を得しは昨日に引かへて心持まで●川崎の驛



＜神奈川臺ヨリ横濱遠望之図＞

支度調、無<sup>レ</sup>程生麦に出、此辺衢<sup>ちまた</sup>ニ蛤の貝多く有し。

なまむきも濁らすよめはなまむきとよむはむき身もひ  
さく故かと

と一句して、神無川に近き、右は山左には海、横濱開湊<sup>かふ</sup>にし  
て景色よろし。

日の本にとづくに人も●神奈川と首<sup>くび</sup>うなたれて頼む交易  
として、爰は馬上なからに打過き、無<sup>レ</sup>程して程ヶ谷に近き

急きたるに程ヶ谷ありて、安<sup>〜</sup>とまだくたひれもせぬヲ着  
とはとして、馬を継かへ廿八丁を過さて境木といへるに着き、武蔵相模の境界と聞、此間中  
く〜ニ遠し

鎌倉の御代納りし其<sup>のち</sup>后はむ蔵の国か長く●境木

爰も馬にて乗過し、境木より廿三丁と聞て戸塚へ着く。爰ニ泊。



姦<sup>かしま</sup>しう飯賣<sup>ふかうかめ</sup>浮女<sup>うら</sup>か呼留<sup>よ</sup>て●戸塚<sup>と</sup>まへては放<sup>はな</sup>ちこそす<sup>す</sup>れ

此處に○一泊、初泊なれば珍らしく案着の祝酒を催し、夜分殊に冷  
へければ働<sup>はたら</sup>のおふな炬燵<sup>かまど</sup>して温<sup>ぬ</sup>ませくれ蘇生<sup>そせい</sup>せし心持<sup>こころもち</sup>そして寝  
むけを催<sup>もよほ</sup>し、床<sup>とこ</sup>を延<sup>の</sup>へさせま<sup>ま</sup>とろみ、間<sup>ま</sup>なく起出<sup>あ</sup>して朝餉<sup>あさけ</sup>も早<sup>はや</sup>ふ  
とうへり。出立の支度出来て宿りを出て少し行けば、戸塚の松並  
に草は有り。爰<sup>こゝ</sup>にて不二<sup>ふじ</sup>を初めて近く見る。

なれと半腹には雲を覆<sup>おひ</sup>ひ、桮<sup>さかづ</sup>は雪白<sup>せきぱく</sup>妙<sup>た</sup>のよそほひ、是三国一と初て

雲晴れて旭<sup>あす</sup>に照<sup>て</sup>らす富士の根<sup>ね</sup>は三国一の空<sup>しらた</sup>の白妙

此臺、水無月な文月近し間、茶や懸りて賑ふよし、往来人に小女出<sup>こ</sup>て自然生のほや〜を賣  
ふ。價<sup>い</sup>ニツひらと言し。

ふたひらのおわしに妹<sup>いも</sup>か直<sup>し</sup>と行くは自然<sup>しぜん</sup>に出来るやまの妹<sup>いも</sup>かな

とたわれ言を吐て爰方廿三丁を過て影取といふ至り、馬の上にて寝むけを催しかけ取て聞く。  
 氣安さや今年は旅の暮にして其●かけ取も傍示杭かな  
 と氣安き旅を馬の上、廿八町ニして無<sup>レ</sup>程●藤澤ニ着く。右之方に遊行寺清浄光寺、寺中に  
 小栗判官之墓所、續て照天姫十二の殿原立の石碑有り。宝物荒増に一覽なす。本堂の大造言  
 しも更なり。

みちるしの有るなればこそ名も廣く日本国を遊行上人

此馬を下ツて町中に江の嶋弁財天の花表あり。参詣は帰路に譲る。朝早ふ通行して南郷の松

原に懸る。景宜敷、富士を右ニ見、往昔は刑場と言し。衢に子  
 供等多く出てかしをあきのふ。

頼朝公鎌倉柳都の頃

我は只馬にしあるを子供等は笑ひもせぬにおかしかふとは

見飽かぬに○南郷りの惜し富士の景

として馬上なからに爰を打過ぎ爰を過て●馬入川与いふ此渡し  
 を涉りて、平塚の駅に近し。○昼食事を遣ひ

程もよし飯も茶もよし菜もよし●平塚なひか玉の疵かな

老入前百ト四十八匁にして支度も取廻、次なる宿大磯江急かん  
 とせし。平塚の外れに田な歩あり。富士の景宜敷を見て

爰を過て無<sup>レ</sup>程●大磯ニ出て継かへ、彼の往昔名たゞりし虎少将

の由来を尋ねんと虎子石一見せんと、寺院に音俣開扉を頼。然るに僧出て由来を説く、



<南郷松原ヨリ不二眺望之図>



<平塚宿出口ヨリ富士遠望之図>

右之僧瘡毒ニて鼻拔些見苦し。如何敷体なり。右僧の曰、虎少将は虎子弁才天之化身にして、容顔美麗玉の如し与て、曾我十郎祐成通ひ給ひて契りを結び、なき后も虎少将尼と成るよし、いさゝか虎は、祐成の打死の後に尼と成りて所の翁を案内にて、井手の屋形祐成の最期の迹は爰かと斗いと、涙に沈みつゝ、

柄要

露とのみ消にし跡を来てみれば尾花か袖に秋風そ吹く

右の歌を吟して悟りしとなん。虎出生は相模国緒越の里にて生れたり。よりて乳名をお菟と唱し也。後に虎と改る。其故を尋るに、をとゞは異国楚之国の言葉にて虎の事也。又緒越の



<虎子石 弁天像>

里緒越の原共に相模の名所ニ而、和哥には諸越を唐山にかけてよめるも多し。人丸家集に

あつま路のもろこしの里にをりてたつきぬをさからの衣と言ふらん

是等の事あれば、浮女と讃とも中々凡人の及よとあらんとかんしつゝ、いわれを問ふに、僧敢て唱を不<sub>レ</sub>為、只少将此石を籠卷せしよし、十郎五郎の矢疵あり、太刀疵ありと講しけれ共證としかたし。

右を一覧して十二臣の開扉料を祝して此寺を出、門前ニ虎子石と丸石ニ彫入たる有るなり。なててたしめに一句口すさむ。恋之言葉にて

曾我中に秘蔵にしたる虎子石肌なめらかに手さわりもよく

此宿内に花不見はし、けわひ坂も有り。寺外れ左り傍に幸福寺と言寺あり。西行法師鳴立澤の故跡ニて立寄り見れば、いとゞ淋しし秋の夕くれなとおもひやりて ○西行ノ杖且碑名等は略<sub>レ</sub>之

(欄外) 西行は本名ヲ佐藤兵衛行清ト言し。北面ノ侍ニ而常ニ大内ニ殿居ありしか、風与二条ノ后を垣間見て恋慕之心発りいろ／＼と申入しか、先ニも武夫のこゝろ哀とや思召けん。今夜大内の外庇まで竊に忍び待べしと申送られければ、行清疆り無<sub>レ</sub>之怡ひ暮るゝをまちて、差圖の所まで忍侍しか、后は更に来らず。餘り待侘て思わすまどろみしに后来り給ひて見しに、行清まどろみて有を見て○我ならば鳥の鳴にて待へきにおもわねはこそ君はまどろむ かくよみ給ひ帰らんとせし時行清目

を覺して○よひはまち夜中はうらみ嘯しは夢にやみんとしばしまとるむ　と返しければ、后も哥の心をかんして是より互に深き中となり(カ)、后より毎度哥よみ送れとも行清一向哥心知れず。行清おもひけるは、われ弓矢を取つては人の下に出すといへとも、今哥之道にて女に及はざるこそ残念とて髪をそり、名西行と改哥修行せしとなん

○黄昏はさそや鳴立ツ澤の跡落葉に水の滴なかれる　青好

爰を過て、吾妻の森宮といふあり。鎌倉御代ニは此邊、大分賑わしよし。七ツ半に近くして小田原ニ着く。當宿大久保侯の御城下往昔北条の古城、是は今の城郭ニ非らざるよし。○此泊万屋といふニ宿る。不事馴にして不都合而已也。飯蛸梅干等の名物を題して

すき腹に喰ふ塩辛の味もよくおふいり蛸とあたまてんく

入れ立ての煮花に添へし赤積を茶受け一とツ梅ほふしかな

此宿早ふ出立して、山さか下らんと支度取急き歩行となり、出懸ケにうゐるふの店八方のる梁作りを一見して

機能を世間に廣く○うゐるふと今に其名を　虎屋藤右衛門

僅にして此宿を出外れ、無<sup>レ</sup>程山に懸りければ、名にし逢ふ礮礮第一なる管根にして、聞しに増(カ)る難所言ふも更也。大久保侯の御領且江川氏の御預り所ニして、小田原方二里にし湯本へ着く。此處轆轤細工等名物数多なり。爰に北条氏早雲入道の安置、早雲寺と言ふ寺あり。

いにしへの咄しも今に○早雲寺只時よりも時節なるらん

爰方追と坂に懸り、大阪ニツ三ツを越へて畑江出る。此處宿や数多あり。象煮餅をひさぐ。呼留る声かまひすし。

○箱寝なり文箱枕であるふのに客呼留てごうを煮るとは

なとたわれ言をはき出して、一杯の酒と丁子を替へていそかわしく爰を出、又山に懸りて

先かけて爰で度足も○箱根山其ねき事も叶ふなるへし

息を入れ、且氣を養ひかり臘月といふとも、身に汗して峠に登り、権現江參詣せんと道を急く。右之方ニ駒ヶ嶽といふ大山見やる。又八合メ程ニして甘酒やといふ銘物、小女出て年中商ふよし。此坂方向ひにはけ山有り。大石悉く落懸りて見へる。昔之北条合戦の節芭かり事ニ而石ニ突扣をかけしよし言々傳ふ。いかにもおきたる石にひとし。變替石といふ也。

夏冬の隔てもあらず此小屋にても美しくき小女あま酒をうる

として峠に至り、権現江參詣せんと近道して、右江切れ無<sup>レ</sup>程町江出る。家数仮成ニ有<sup>レ</sup>之。

式之鳥居際に年歴たる大釜あり。三ツ有て古代のよし。爰を出て湖水脇に出る。道幅狭き

場所に俳諧歌の碑名あり。桃李園桃人与有<sup>レ</sup>之。

逢事に鳥の空事いつわらは舌や抜かれん関の釘抜

爰を過て金剛王院前江出る。森とたる樹建石の松は笞を帯ひ、社頭の古ひし事、今に往昔をおもひ出しけり。

(欄外) 管根両所権現は伊弉諾伊弉冉ノ應作也

坂下左りに曾我の社有り。又行者の堂あり。本殿に至り三拝九拝して御礼を仰け、無<sup>レ</sup>程下山、斎の河原ニ出る。空海上人作物之地蔵尊数多有し。爰に石の花表有り。不二の景尤よし。

湖水の眺望又宜敷、水清くして魚住ますと言ふも此処なるへし。四里の峠を登りて一里に餘れる湖水有。是日本随一之関所なるへし。是を杉山を越して無<sup>レ</sup>程宿に出る。本陣○石内

太郎左衛門与やらん。往昔々御出入なるよしニ而、迎し者兼而出し置御関所前ニ懸りて搔羽

織着用ニ而、主人代罷出て万事取斗吳是ニ頼ム。爰を過て石内ニ立寄休息、昼餉を出し酒魚

も出せし。また爰にて傾け、同家裏坐敷富士の景別によろしく、前ニ廣とたる湖水、向ふは

不二の高嶽ニして尽語に延へかたし。

湖にその影移す富士かねは是三国に一の風景 琴主

として爰を出立、主従六人○食事茶代ともに○忒百匁を置いて出立。馬荷は爰にて継替、又歩行となりて無<sub>レ</sub>程西平に出る。此處不二の景宜敷、西行法師の山の上なる山は爰を言ふとあれは、

又山の上に不二見る管根かな 青好

此山禁に曾我五郎の乗たる石橋と言ふあり。線香等を上けて足の願叶ふと言し。左二いさゝか

尾花毛の駒も藐姑峯のすゝきかな はせを成べし よみ人しらす

朝鮮人之詩二

○獨立巍と白王蠻

中天積雪夏猶寒

五雲佳氣連金闕

雄鎮扶桑萬歲安

朝鮮張應斗



右等之富士の詩有り。実二三国一の風景なるへし。爰より三ツ谷且○山中といへるに着く。

此宿に山中熊蔵爰二茶代一朱と言しものあり。大君御上落ありし時、敷石奉納せしよしにて、下り坂中

く、礮砦なり。尤他力を頼まず一人の力にて無願にていたせしよしにて一旦は地頭より叱りを受けしよし。

石を敷気は山中に聞ゆれと褒美取気はとんとくま蔵

爰より手前山中にかぶと石といふあり。道中に有し。爰を下りて三嶋宿に近シ。三嶋の明神

江參詣。また地震后普請中にて近拝を許されす。●此宿梅木佐助ト言シやと言ふニ○泊す。夜前ニ引換へ

て殊之外ニよろしく。

そちこちと心を附けて取成せは昨日の穴を今日て●梅木や

爰を早ふニ打立、並松を過て無<sub>レ</sub>程●沼津へ着き、水野出羽守殿御城下拝し、此城大手より僅ニして大海に近し。馬上なからに打過て●原に出ル。景色よろしく、此日より風吹出して、富士雲を覆ひ朝まの景無し与ていそくか爰に

大山祖の女木花開耶姫尊浅間とこへの俣によむは、信州の浅間と混ぜさる為なるべし。又伊勢にあさま山あり。うたにはあさへまとよめり。案するに朝熊も共に朝隈の義にして、字は借りたるのみ。むらさきの筑波と言ふも、山際の隈むらさき立たるを誉て言し。

摘要 富士の農男と言し弁

四五月の頃、富士の雪消へ残りたるか、宝永山の辺凹なる處に、人の形ちの如く雪の残る事あり。是を農男と名く。この残雪見ゆる年も有。また見へさる年もあり。田子の土人の日、

農男みゆる年はかならず五穀熟すと。又混こ陽漫録ニ載する處の富士の根かた、水田中に麦熟すと言し。是を水入麦といふ。是雪水菌となりて麦みのると言し。富士の眺望は、駿州有渡郡大野村府中より三龍飛寺の本堂より見るを第一とす。清見寺是ニ次く。原吉原の間又好景也。三嶋沼津より見れば、又大にひきて見ゆる。岩渚薩陀峠より見れば胸につかへるやうにて凄し。藐姑峯は齋の河原より一の平まで富士を右に見る景尤よろし。また朝毎に雲起りて傾きを覆ふ。土俗これを笠雲と言し。その雲西へ行く時は三日を出すして雨あり。東へ行く時は快晴すと言し。

馬上にては烈風は無レ殊ニ、難儀して一句一詠も出さずして、さかは松山ニ續て海原なり。右は富士足高山を見晴らし、晴天なれとも風故ニやんことなくやみぬ。此邊ニはせをの碑あり。馬上なからに

○少しつゝ時ニ残して富士の雪 はせを

原の宿にて馬継替へ、江川俟御支配所ナリ。富士絶景なれば、

とふ見ても形か面白し不二の山

爰を過て吉原ニ繼ぐ。一里半と聞く。

出足らめか  
てたらのめの句は○吉原をおもへとも景色よさに止められもせし

又氣を興して紀行しツ、早くも●藤川ニ着きて、川邊を詠めやるに急流ニして凄こし。石は角洒れて丸く成り、実ニ船越しは氣味悪しき渡し也。此川上信州方落下と言し。又富士大石寺と言し寺川上ニ有りて、此處方川海苔を出す。絶品也。禁賣買芝川海苔ト言し。少し雪解水ニ而水にこりければ

ひ  
一と二夕日温みに富士の雪解けて空に知られぬ水増り希理

向の岸を岩渚と言し。

○不二川も首尾能く船て此岸に岩渚ならぬ洲か渚に着く

○岩渚は船に迸ふるものなれば南無阿弥陀仏口て栗の粉

(欄外) 栗は西木ト書テ行基モ一生杖ニ突レシト云々

此岩渚の名物栗の粉餅ノ名物有り口す。西ノ木と書て西方浄土に便あれば、少しく心を用ひて爰に讀入れ、此茶店甲州の雨端硯多く出ル。拙も一硯ヲ求。爰を出、無程三軒茶屋と言しあり。今は数軒に及へり。前の田子の浦、後ろは富士の根かたにして、往昔者人の古事なとおもひ出して

富士影の浦に呼子坎田子の海

白妙のふしか根青ふよこせしとしきりに洗ふ田子の浦波

忘れては波にも雪の積るかと晴れて影見る田子の海面

是より●江尻迄の濱辺を●田子の浦と言ふ。蒲原を早ふ出立してまたくらきに通ル。大方町続き也。尤塩はまにて、あわひさゝひの名物なり。波音など高く明り六ッ前に過候。宿は●

羽田や万右衛門ト言しに泊り、由井ニ向て仮成と言し

よき妹か来たるあわひとまぢかねて○由井立髪をかき付て待ッ

などして一笑し、一杯を愈し三人して程よく呑也。はやくも草臥の出て来て何事も打忘れて

一ト寝入し、此宿海際ニて山上を○さつた峠親知らず子知らずと言ふ難所もあればとおもひに近頃は親も

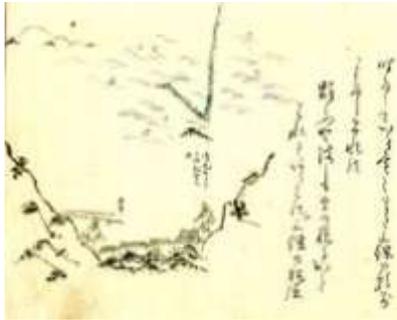
知り子も知りとなれる歌

大樹公御上洛ありし。其後は海邊を通行故、人馬共に爰に通に、此所より塩焼洲河あり。向ひをみれば三保の松原海中にみへ、渡るに當ッて不二山見ゆる。此日風ありて雲靈空に出る。

時雨るゝや傾き覆ふふしの雲落葉に水の別かぬ小ななかれ

倉沢行くもあわびの片おもひさゝひの亮に灯はともすとも

右手前に僅小村あり。●倉澤といふあわびさゝひの銘物也。爰は朝故空しく打過ぎ、無レ程して●興津ニ出る。爰ニて馬を継ぐ。其内清見寺江詣て聞し眺望、庭前に這梅有り。爰ニて一詠



<清見寺ヨリ三保眺望之図>

海を吹く風の便りに気をもみて梅か姿を松に隠すか

右之梅這ひたる所十七間といゝ、往昔は○清見か関と言ゝありしよし、家道永應院と言し。

鞍壺に寝ッ起ッして詠むれば波より低く○三保の松原向ひは三保、左りに當りて富士の景色見ゆ。此日風ははけし。少しく時雨していと寒く、また三保の影別ニよろしければ

疑ふや波にも雪の積るかとはれてあらわに○三保の松原

此清見寺坂下より馬ニ乗り、次の江尻りへといそく。一りと

二町故無レ間●江尻江着き、此所は馬少くして車ニて荷を運び、人は駕籠ニて継立る。此處に

川有。橋をちこはしと言し。此橋は三保江行く、よき風景也。また久能山への道もあり。爰

を過て中ノ郷また○小吉田といふて間の宿に銘物の酢し有て桶ツゝに積る賣る。一と桶三十

式坎。

一桶はすもしなれとも是ま傳と茶にして我は○足る事と知る

爰よりは又歩行となり道宜敷、此邊に權躅の名所アリ。またあしくほの茶出る。無レ程●府

中に出る。此處々日改めなればなれば、脇●本陣望月清右衛門(マヤ)といふにて暫時休息なし、○  
昼食事髪月代等いたし●御城拝見大手先方御堀廻り一覽致す。名にしおふ今川公築かせ給ひし郭にて言しも更なり。拜見相濟而本町方阿部川へ之近道ニ懸り、荷物は槍持に打任せて、無レ程川端に出る。此處ニ而川札を出す。肩車にて渡す。荷物は連臺にて越す。當城は聞處田中城主本多伯耆守殿守らせ給ひしよし。月二十五日定の交替なるよし。川岸に出て見れば、  
兩脇に名物○あへ川餅をあきのふ。形牡丹餅ほたんもちの如し、あつきのあんを附る。

乗ツたらは首持ちくびもちあけてへツたりと○あんころんあゝかたらほんにたまらすと

先ツく無事に爰を打越し、直に丸子宿に着き、とろく名物はたべつして只見しのみ

摺鉢の中をやたらに小すり小木ぬらりくとする摺るとろく汁

爰を通り過して無レ間○宇都谷峠に近し。此禁に○御羽織やと言しあり。太閤秀吉公 神君様其他將軍家方御羽折を拝領して今に所持なし。且馬の寄ッ屈を半足ツ、御城代江献上古例のよし。是方少しツ、坂となり、坂上に自然生寒水富士の雪酒を賣る。また十団子とて小サき団子を糸に通し漸つゞに釣してあきのふ。是をかふて峠の觀音に献すといふ。

手遊びの珠数たまごひかずよう似た白玉しらたまはなんしやと馬士に○問ふ団子哉たんごかな

爰より●宇都谷峠に登り、殊ニ礮砦けんそなる事言しも更なり。半腹はんぷくに過すして馬より下り歩行となる。此邊裏白沢山に生茂り見事なり。宇都山越へとて往昔業平朝臣東都なりのひらちやせんあつに下らせ給ひし時  
葛生茂り御歩行悪し、けに御杖ごつゑにて切らせ給ひしよし。今日けふ葛切れくむに繭出ると言し。

心にはやたけにそれとはやれとも高きに胸を○宇都の山越

たとるく葛の細道踏ふみわけてうつゝに歩行山越への旅

右の山を下りて無レ程●岡部に着く。

はや年の終りに近き旅なれば問やか(カ)馬子に手を●岡部宿おか

爰を継かせ宿を出、姿並左の方に駿州田中の城有り。道方左り日暮候におよんで●藤枝に継く。爰に●一泊。此處に連歌師巢光ついでの旧地アリ。竹の花活いけ其他寄物を出す。また此宿にから

し堂ほとゝきすと申し与て

冬でさへうつかり口ニ入たらば盲目めしいても泣く○ほとゝきす哉

爰をは早ふ出立して無<sub>レ</sub>程瀬戸に着く。染飯そめいの銘物を商ふ。

ゆツたりと腰打こしうち付けて御茶うけにたべたけれども道を○赤飯あかか

爰方三軒家村といふ有り。爰を過て大井川に近し。●搗田宿に着て、従<sub>レ</sub>是は肩車と聞き気味悪くおもひ、先ツ一杯を汲て気を付けんと茶店に立寄り、無<sub>レ</sub>間汲修りて爰を出、●大井の神社を拝し無事を願ふ。肩車に乗り

一杯の酒に心も○大井川其川越も無事てめてたく

右川水丈はさ程ニあらねと、急流ニして人足の苦勞おもひやるべし。此川を涉りて無<sub>レ</sub>程●金谷に越す。僅にして山に懸り金谷坂と言し。大井川は駿州遠州の境也。坂上を不二見臺と言しアリ。下に大井川を見渡し、向ひに不二を見る。

見渡せは晴れて心も○大井川原に叶ふかに不二を見越して

爰に茶店アリ。不二見茶屋と言し。大坂余程有<sub>レ</sub>之。右を下りて●菊川と言し宿アリ。いと淋しき谷間のやうに見ゆる。僅なれば此宿を過ぎ、無<sub>レ</sub>程菊川峠に懸り、爰を佐与の中山そたてかんをんと言し。長き峠にていと飽果あきけもし。峠に子育そたてかんをんて觀世音あり。脇に夜鳴松あり。峠に茶店あり。これにて飴を商ふ。飴の餅家毎いさくにひさく。

○そよと吹風も淋しき松の聲

として爰を打過ちかたき、衢みちに夜鳴の石といふアリ。其丸き中程

に南無阿弥陀仏と彫入あまはしたつと言したり。

西行上人

としを經てまた越へきとおもひきやいのち也けり小夜の中山

うたの命は身命のいのち発句のいのちは時の間のいのち

いのちなりさよの中山にてあわん はせを

又越ん佐夜の中山にてあわんわか松急 はせを



<無間山小夜ノ中山ヨリ眺望ノ図> <小夜ノ中山家毎ニ飴ノ餅ヲ賣ル>

是空海上人の筆跡と言し

小夜更けて人音まれに成る時はいしももの言し○中やまの驛坂  
あわれさを夜なく聞やまつのごゑ

として爰より下り、向ひに見渡ス山は○無間山と言し。謂は長ければ略レ之。夜鳴石化鳥刃きんば  
の雉子孕婦男子音人親のあた討の事は此處の商本しょうほんに譲ゆづりて爰に略せる也。

沈しづみみても其名は朽くちす釣鐘つりかねの今井けいの底そこにありと答へん

爰を下りて●日坂に出る。爰にて昼食事を調ふ。蕨餅わづひもちの名物あり。茶店食事の給仕に、また  
二人に至らざる兄弟の美人アリ。妹は姉に増り、顔色小町嬉き批ひの再来かとあやしまれけり。  
いづれも眼を傾けけりて

なるへくは夕餉ゆふくわも爰こゝて一泊ひととせり妹いもに手足をさわらびの餅もち

たわ言を残して馬を継かせ、次なる●掛川へといそぐ。昼後に過行道をいそぐまゝ、家毎に  
葛布くさふを商あきなへとも老おいにりもせて、馬を継かへし而巳なりにて、●原川といふを早ふ打越さんと一句

○原川を越へて今宵は○袋井と馬には鞭を打て○掛川

として急しまゝ日暮るゝにおよんで●袋井へ着く。●株かぶやといふに一泊。此夜酒を慎しむ。  
早とまどろみてまた明けぬに見付へ付き、此処富士の見納のなりよし。又上方より来りし者  
は爰にて初て不二を見初める言し与て、言葉を仮りて

一と夜さに出たとはあまり迎山むかひやまな是はほんまな●御富士様かと

として馬を継く。爰に富士見臺といふありと言し。所のもの物語りせし也。また加茂川橋と  
言し有り。爰方●池田宿を外して天龍への近道有り。是は往昔神祖御通行の場所故、今に往  
来を咎めず。天龍は○大天龍○小天龍と言し二瀬有るよし。二夕瀬共に涉しにて渡る。

水上は空にも近き○天龍の登り下りの船のするとき

として川方上り、川端を抜けて無レ程松原に出、濱松江の往還也。並松の結構は言しも更な  
り。東海道一之松並と言し。長き道を通り過て●濱松城下江出る。町並殊ニ賑わひけらし。  
町半に○五社明神の社有り。爰方右者大手御門ニ而名にしおふ名城にて、今もおもひやられ  
けらし。今○井上侯御城主にて六万石也。此處ニ而昼食事をとゝのへ●篠原と言し間の宿あり。  
遠きやうに覚ゆ。漸にして●舞坂に出る。爰にて○船渡しに懸る故、少しく手間取有レ之よし

ニて、暫時御出入之旁江立寄、支度之間待合せし也与て、銘物之のりニて一杯を催し、茶代式朱遣ス。



<今切之御関所図>

新磯を乗り越へんとて一杯の酒に心も○舞坂の駅  
とかふする息ニ支度出来、荷物積ませ主従六人乗組して  
新居ノ渡舞坂ヨリ一里今切トモ云し

今切之御関所 遥ナレトモ見通故カ此処ニ而立ナから小便ヲ製禁ス

一里の渡しをまどろむ間に越へて、御関所前に着すれば、●  
新井の宿御出入のよしニて○中山屋孫次郎といふもの来り。御  
関所方之手形等持参、案内よろしき旨ニ而通行、右中山屋ニ  
て酒肴出し、挨拶等見斗、一朱遣文道を急きて国須賀江いそく。此所  
之御関所、松平刑部大輔殿七万石也。  
船中ニての詠

新磯にくたくる波や冬の海船縁到る風の間にく  
此宿をいそきて無<sub>レ</sub>程山に懸り、余程の山有り。此山中に一  
軒の茶屋あり。是を汐見峠といふ。絶景なり。

茶屋有て暫時休らひて

遠波の真白に高し汐見坂

水や空寒に流るゝ帆の影を霞の中に見る○汐見坂

空低う見るや長閑な海の果



<汐見峠ヨリ遠州灘眺望之図>

日暮しに近ければ、急きて山を下りければ、●国須賀驛●岡田やと言しに一泊し、爰を早ふ  
出立して次なるニ夕川に移る。此ニ夕川といふ方吉田迄の間、夕さりに當りて、山中に巖の

観音といふアリ。往昔池田殿先祖、国須賀驛江御宿陣ありりし折節、御夢に今宵は大難生る

故、供廻り早く引上ケ有哉ニと御造あり与て、何事やらんと人数取纏メ山上ニ引上りけれ  
は、無<sub>レ</sub>程津波大山の如くに上り来り。国須賀驛一時に波ニ洩かれし由、然ルに池田家御人  
数老人として難なく、是観音の教え給ひし故也とて、即時に使者を立られしに、巖の内に壱  
寸八分の観音御座ましければ、直に拝礼ありて爰に祭り、今に巖の観世音といふ。又山  
上に一丈有餘の観音を立せ給ひ、御前立として、遠州灘を守らせ給ふよふなさしめ給ふとな  
ん聞ぬ。元は国須賀驛にありしよし、其此に新居の関所山抜して今切と言し名の残りしよし。  
無<sub>レ</sub>程吉田城下に近き町並、殊の外ニ宜敷由申傳となん。七万石●松平刑部大輔殿へ向ツて

右之方に御城有<sup>レ</sup>之。右町を馬にて乗越へ、町外れニ豊橋といふ大橋有り。三州一の大橋なり。長サ百廿間有ると言し。爰方勢州白子江之船出し。此邊近郊の老若男女共に伊勢參宮、春先殊ニ賑わしきよし。また娶り前の者は參宮して神を引合せを願ふといふ。

伊勢へ行くとのねへさんも色○白子器量○吉田と人に○豊川<sup>間</sup>

として、爰を打過ぎ●稻おといふに一里半よと聞く。いと淋しくやうやうにして、爰よりまた一里廿四丁を過て●赤坂といふに着き、馬を継かせ宿ノ中邊也。

旅の連兄弟<sup>はらかい</sup>よりも氣安と互に心○赤阪<sup>あかたか</sup>の驛

として次なる宿江●法藏寺と言し。神君御手跡御学文ありし御寺にて御朱印地、且御羽織御机御文庫等も今にあるよし咄しに承る。爰にて法藏寺取繩とて、名物を賣る。其謂神祖御幼童たりし時、徒被<sup>レ</sup>遊、朋友しはり奉りしは、御運開かれ給ひて御あやかりたしとて、今に家毎に賣る。

其縫<sup>ぬい</sup>のあるなれば身も○法藏寺年経ぬれとも繩<sup>なわ</sup>朽もせし

右法藏寺を過て右に當り、神君御伯母子様御旧跡、今に連めんたり。また少しく行く。左りに、三州山中御宮と言し有り。神君門徒与御合戦之折柄、御身隠れの山故、御難所岩屋穴アリ。爰より山鳩舞上りし故、御無難に御遁れ遊はされし故、神骸を舞上り八幡宮と言し。御陣所跡、御手植の檜且御手植の竹等今に有し。岡崎方之近道あり。また左りに吉良道とあるは、同州西尾松平主水正殿城下へ之道ナリ。五里と言し。直くに行きて岡崎城下江近

し。●本多美濃守殿城下ニ而城至て見事、櫓数数多見ゆ。町並も能く日暮ニ近くして●三ツ漏<sup>ぞ</sup>やといふに泊る。一杯を催して少しく面白うならんとせし時、飯盛の全盛両三輩来ッて頻りに伽を進メけれども、受け引かねは、雇人して頻りに進メ与てよき程に姦りちらして臥りにければ一句

なふり見る其口先は●みツ漏<sup>み</sup>や三筋<sup>さん</sup>てころふ岡崎の女郎

なふられる事とも知らて飯盛はこれ○岡崎の宵女郎衆かな

など戯れ事して打臥、早ふ爰を立つて●矢作<sup>や</sup>ニ懸る。今は涉しニて渡る。橋は右に見る。今僅に残りける坎。是日本の一なるべし。彼の太閤また幼名かりし時、蜂須加ニ出會ありし古事などおもひ出し

あな取ッて道連にせし夜働き子供にはぢを○蜂須賀<sup>蜂須賀古六の古事</sup>のぢ

爰を過て無<sup>レ</sup>程大濱といふに着き、間の宿にしていと淋しく●知立<sup>チリウ</sup>辺の道をいそぐ。此宿に



<今川上総介義元討死塚図>



<尾州桶狭間之図>

はまた●池鯉鮒大明神と言しありて、口はみむしの災難を免れし神有り。依而参拝、爰ニて昼の食事をととのへ、右の手前に業平手作の観音有り。爰に●往昔八ツ橋有りと言し。今は名のみ也。

そのからのゆかりや筆てかきつばた

池鯉鮒は遠慮して、蛤鍋ニて昼の支度しければ

名にめて、○池鯉鮒は少し五まむしはさう与て蛤鍋ひるひて昼餉  
とうへる

三州尾州の境なる。少し道を急いそきしに、越前敦賀ツルガより戻りの歩兵大勢に出合。道幅狭ければ

常ならば直と行へき道なるに歩兵に道を○前後するとは

として前後といふを過ぎ、先なる●桶狭間桶狭間焼ノ瀬戸有之江立寄らんといそきし所、無レ程してそこに出、右なる田中に義元公、左りの平原ニは諸士討死の墓所とに有レ之、いと淋しく物あわれ也。

其他登、高原の碑文あれとも誰も知る處、また事長ければ略レ之。元治元年十二月廿八日爰ニ参詣、有様をおもひ出して

ほろりする涙を継くや矢建墨 青好  
右ニ當りて松一木あり。是義元公鎧懸の松と言し。今に駒寄せの掛りて有り。又た

桶狹弔古碑  
 登高原，眇遠慨歎興敗于前跡，何國蔑有餘獨悲此桶狹云記曰永祿三年駿俟西征五月十九日陣桶狹山北織田公以奇兵襲之駿俟義元滅夫駿強國也方其當霸相甲請以賦從尾人亦往往送款於是大舉入尾攻鷲津丸根拔之曰明且屠清洲而朝食衆皆賀置酒軍中會黑色

起西北風雨暴發敵人鼓聲亦從背震皆不意其猝至中軍大亂格鬪死者二千五百餘人夫自足利氏失鹿四海戰場周以修亡甲以暴滅而未有若此一戰而跌者也勝敗如化誰知其極但勝之不可保矧可驕哉悲也夫雖然或聞軍敗自先鋒還鬪與其乎二百人皆死或守孤城不走請主尸而歸若斯類者

桶狹弔古碑

登リテニ高原ニ一眇ミレ遠キヲ 慨歎レハ興一敗ヲ于前跡ニ何國ニカ蔑ナカレレ有餘獨悲ム事ニ此ノ桶狹ヲ一云記ニ曰永祿三年駿俟西征シ五月十九日陣桶狹ノ山北織田公以奇兵襲レ之駿俟義元滅ヒメ夫駿強國也方リテ其當霸相甲請ヒニ以賦從尾人亦往往生送リテレ款拾レ是 大舉入リレ尾ニ攻鷲津丸根拔ク之ヲ曰明且屠ニ清洲ヲ一而朝食セント 衆皆賀シ置酒ス軍中ニ會一黑色

起ク西北ニ一風雨暴發シ敵人鼓聲亦從レ背震フ皆不レ意ハ其猝至ルヲ中軍大亂格鬪死者二千五百餘人夫自リ足利氏ノ失ヒシ一鹿四海戰場トナリ周ハ以修亡甲以暴滅ヒヌ而未有下若此ノ一戰メ而跌シカ者上レ也勝敗ハ如化誰カ知其極ヲ但勝ハ之不可保矧ヤ可驕ヤ哉悲イ也カ夫雖然或聞テ軍敗ルト自先鋒還リ鬪ツテ與其乎二百人一皆死或守リテ孤城不走請主尸ヲ而歸リヌ若斯類ノ一者

累世所養、豈不皆忠烈、我  
籍使後人有庸主之村、外  
結強援、內用若士、師徒雖  
虧、駿遠之地、尚全猶足以  
向、西報伐也、游蕩忌讐、卒  
以播遷、悠々蒼天、此何人  
哉、今生平世、眇歎前跡、已  
歷二百五十年、時雖邈、事  
猶昨、則後人吊之、亦於今  
也、則是千萬世、亦何有極、  
請建碑以記之、銘曰  
三軍覆野茫茫、孰有

後孰孤傷、亂之思治  
已值今時、建行碑、酌  
古邱、來吊之、千萬秋  
治不忌亂、視舊跡碑  
文化已夏五月、尾張儒宦

秦鼎撰

大坂天満邸

中西融書

碑陰記

此碑也、豐長輩有所感而建  
之、碑文所載先鋒、還闘在、他  
人猶且扼腕、況於豐長輩

累世所養、ヒシ、豈不皆忠烈、カ、ナラ、哉  
籍、使、後、人、有、テ、庸、主、之、村、一、外  
結、強、ヒ、援、ラ、内、用、若、カ、ク、ノ、事、キ、士、ラ、師、徒、雖  
虧、ケ、タ、リ、ト、駿、遠、之、地、尚、全、猶、足、以  
向、テ、西、報、伐、ス、ル、ニ、也、游、蕩、メ、忌、讐、ラ、卒、ニ  
以、播、遷、セ、ク、悠、々、蒼、天、此、レ、何、カ、ナ、ル、人  
哉、今、生、平、世、眇、歎、ス、レ、ハ、前、跡、已  
歴、タ、リ、二、百、五、十、年、ヲ、時、雖、邈、ナ、リ、ト、事、ハ  
猶、昨、則、後、人、吊、フ、モ、万、レ、亦、猶、レ、今  
也、キ、サ、ハ、則、是、千、萬、世、亦、何、有、極、リ  
請、建、碑、以、記、サ、ン、レ、之、銘、曰  
三、軍、覆、野、茫、茫、孰、有

後 孰カ孤傷スル 亂之思治  
已值ヒヌニ今時一 建テ二片碑ヲ 酌  
古邱一 來吊ヘレ之 千萬秋  
治不レ忌亂 視舊跡碑  
文化已夏五月 尾張儒宦

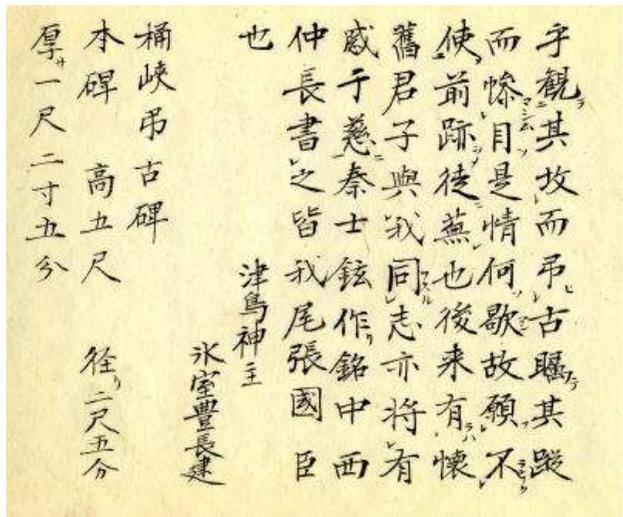
秦鼎撰

大坂天満邸

中西融書

碑陰記

此碑ヤ也、豐、長、カ、輩、有、ラ、レ、所、感、ス、ル、而、建  
之、碑、文、所、載、先、鋒、ヨ、リ、還、リ、闘、フ、ト、ハ、在、テ、モ、二、他  
人、猶、且、扼、腕、ス、況、ム、ヤ、於、ヤ、二、豐、長、輩、ニ、



乎觀<sup>テ</sup>其<sup>レ</sup>故<sup>レ</sup>而<sup>レ</sup>弔<sup>レ</sup>古<sup>レ</sup>矚<sup>テ</sup>其<sup>レ</sup>蹤<sup>ヲ</sup>  
 而<sup>レ</sup>慘<sup>マシム</sup>目<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>情<sup>レ</sup>何<sup>ソ</sup>歌<sup>マシ</sup>故<sup>願</sup>不<sup>ラン</sup>事<sup>ラ</sup>  
 使<sup>メ</sup>前<sup>跡</sup>徒<sup>ニ</sup>蕪<sup>也</sup>後<sup>来</sup>有<sup>ラ</sup>懷<sup>ノ</sup>  
 舊<sup>君</sup>子<sup>ニ</sup>與<sup>レ</sup>我<sup>同</sup>志<sup>亦</sup>將<sup>レ</sup>有<sup>也</sup>  
 感<sup>于</sup>慈<sup>ニ</sup>秦<sup>士</sup>鉉<sup>作</sup>銘<sup>中</sup>西<sup>也</sup>  
 仲<sup>長</sup>書<sup>之</sup>皆<sup>我</sup>尾<sup>張</sup>國<sup>臣</sup>  
 也

津島神主  
 氷室豊長建

桶峽弔古碑  
 本碑 高五尺 径二尺五分  
 厚一尺二寸五分

乎觀<sup>テ</sup>其<sup>レ</sup>故<sup>レ</sup>而<sup>レ</sup>弔<sup>レ</sup>古<sup>レ</sup>矚<sup>テ</sup>其<sup>レ</sup>蹤<sup>ヲ</sup>  
 而<sup>レ</sup>慘<sup>マシム</sup>目<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>情<sup>レ</sup>何<sup>ソ</sup>歌<sup>マシ</sup>故<sup>願</sup>不<sup>ラン</sup>事<sup>ラ</sup>  
 使<sup>メ</sup>前<sup>跡</sup>徒<sup>ニ</sup>蕪<sup>也</sup>後<sup>来</sup>有<sup>ラ</sup>懷<sup>ノ</sup>  
 舊<sup>君</sup>子<sup>ニ</sup>與<sup>レ</sup>我<sup>同</sup>志<sup>亦</sup>將<sup>レ</sup>有<sup>也</sup>  
 感<sup>于</sup>慈<sup>ニ</sup>秦<sup>士</sup>鉉<sup>作</sup>銘<sup>中</sup>西<sup>也</sup>  
 仲<sup>長</sup>書<sup>之</sup>皆<sup>我</sup>尾<sup>張</sup>國<sup>臣</sup>  
 也

津島神主  
 氷室豊長建

桶峽弔古碑  
 本碑 高五尺 径二尺五分  
 厚一尺二寸五分

斯くの碑有て、平原には義元公を初め奉り、諸勇士等討死の墓処アリ。右碑文を以て知るへし。又此少しく先に至りて●有松村と言し有り。何れも今川の落人のよし。世に鳴海絞と言し是也。

今川の流の末<sup>も</sup>有松に君を待たてしほりするかな

向のよき絞りがたんと有まつと登り下りの人にかわせる

爰を過て無<sup>レ</sup>程鳴海に近し。今宵は宮泊りといそぎ、漸にして宮に至り泊らんとせしか、折節●松前豆州侯京都方御下向ニて、同宿殊の外に混しければ、一軒として宿するへふもあらし。  
 (欄外) 宮人の懸たる畏にかゝる人は浮世くるひに踏まよふなりと

依而●無<sup>二</sup>餘義<sup>一</sup>問屋へ申請して、馬を出させて荷物を付替、佐谷へ廻らんと、供揃わすれば連立、●馬被義之槍持、爰ニ失たり与て、そちこちと尋ねけれども更ニ別らす。せんすへなくおもひて打遣(カ)り、同所方尾州街道ニ懸り

(欄外) 熱田神社ハ祭神五坐第一天照大神第二素盞鳴尊第三日本武尊第四宮實姫命第五建稻種命神躰草薙宝劔ト云々

●熱田宮居を右に見て、此邊の茶店に立寄り一杯を催して、このしろの魚田楽としやれて、茶碗酒に気を付け、爰を打立、凡半道程も来りし頃、左りに切れ佐谷海道、松原と成り、其處方右ニは伊吹山、向ひには北陸道の山と、いつれも雪降積りて寒きこと言斗りなし。また夕陽にむかつて名古屋城の鯨鋒輝き渡り、いと見事なれば

落る日に登るひかりや鯨の鯨(カ) 青好

としていそげとく中とに、道遠くしてやるせなく、式里にして漸く●岩塚と言しに着き、

爰に宿らんとせしか、差支し由ニ而餘儀なく川を越へ、●万場マンバと言しに着き、●桔梗やと言しにて●一泊を乞ふ。見懸はよりてよき宿、しかし伊勢参宮の頃ならては、多分に宿借ものもなかりし由物語る。是も旅の一つ咄しならんと、一杯を催し猪肉をもふけ、温みを入れ、一と寝入す。

○万場マンバさんかそちこち世話をするなれととんだ難儀に大晦日かな

これも長途事なれば、是非ニ及はず。爰よりは荷物を車に附ケ人共に打乗りて、佐谷へ越る途中、●神守と言し宿有り。爰ニ尾張●津嶋牛頭天王日本最初の宮居アリ。是は衢より拝礼して通り行き●佐屋江着き、今日は大晦日なるに、斯く安くと車坂にて、年の越るも旅にしあればこそと、我身を祝して

人は皆越るにあしき年の坂を気安く我は御車で越す

●伏見やと言しにて、●昼食事支度せし處、御出入のよしニ而、酒肴出レ之与て為二挨拶一と○金百疋為レ取候處、殊之外為二果配音義一且渡舟場近し。世話等厚致し呉、尤此宿は尾州侯御領にして船場近し。運生賃之由、往昔方仕来りのよし申聞、且名物大根を三人江為二土産一到来与て

○伏見やな暮る土産は甲子の是こそ年の○尾張大根

として暫時砂河原を歩行、此邊砂白き事雪の如くいと見事、木の根半ほとは砂ニうつみ有し。木曾川の末と言し。爰を船にて乗り越へ、八ツを過るに●桑名宿へ着き、京屋小兵衛ニなん宿る。海際に伊勢太神宮の花表あり。爰より上る。十万石松平越中守殿御城下ニ而、町並いと見事なり与者大江戸に近し。大晦日なれば、やく払ひ等衢に多し与て為レ払二一笑一、又泊屋の取なし昨日に替りて丁寧なり与て

昨日にはまた引かへて今日こそ都合よきめに大晦日かな

年の終りに斯くよき事のあれば、翌年もまた能からんと臥戸に入り、酒肴など取寄せ小魚あじ小はだ等の小魚、いと見事の料理、また道引をよびて、揉ませながらに白波と共に、枕を付ケて年を明にし与見れば、はや快晴にて、元治二乙丑年と代る。初に斯く天氣の能きも芽出度ければ、

はつ東風に今年の顔を吹かせけり

唯向くも東の方や旭の恵み

是より爰を立ては●小向ひと言しに行ケば

明るかとおもへは馬に乗初めの都の方に最早小迎ひ

爰にて家礼のよしにて、屠蘇象煮餅を出し、殊の外之馳走に逢ひ、またきに大に過し芽出度、爰を旅立に小向ひを過ぎて、●富田と言しに着き、爰は名にしおう蛤の名物、松の蓋を以て

焼き皿に載せて出し、人呼て桑名の焼蛤と言しは是也。立寄りて一杯を命し賞翫ス。

まつかさ温められたる蛤は水沢山で○富田よい味ち

一と皿價百匁と言し、早き故打立ちて次宿●四日市と言うに向ふ。爰に至りて昼の食事を支度に、家号●太田やと言に付けて飯盛と題して、

外目か 岡眼から見たれはとんだ二ツ山抱子の顔に太田山出し

なとたわれ言そして、食事を仕舞追分てふにて、天照らすおほん神の御花表を不斗拝し、参宮せし心持そして

元日や斗らす伊勢の花表先

拝伏は丁度恵方や伊勢の神

(欄外) はせを いせに詣て、何の木の花とはしらす匂ひを

西行上人の哥に 何事のおわしますかはしらねともかたしけなさに涙こぼるゝ

はせを 四日市より馬ニ乗りて杖突坂引き上るに荷打返して馬より落

○歩行ならば杖突坂を落馬哉

名所なれば二段切ニても論なしとかや

烏丸光廣卿の紀行ニ 草臥て歩行より通る旅人はみな杖突の里とこそ見れ

爰を立ちて無<sup>レ</sup>程●石薬師と言しに着き馬を継ぎ、恐ながら馬<sup>上</sup>なから

尊とさや都<sup>有難や杖突かて越す坂の上</sup>に近き此里は石も薬師に替る芽出たさ

(欄外) ○此石薬師の東なる此坂ニ杖突ノ名アる事ハ日本武尊醒ヶ井ノ御足ヲ三重縣曳ます時佩なくる所の御鍛ヲときはしめて杖ニ突給ふより三千年の今迄も呼事也ト言し

爰をいそきて次なる●庄野の驛にいそくに一里也。此邊牛多くしてさもいかめしき出立也。七ツ過る頃に着すれば、爰に留めんと問屋のもの懸入けれども、我<sup>レ</sup>は先へ超へんとおもふ心あれば、とう<sup>レ</sup>馬をかさせ

とう○庄野<sup>しやうの</sup>かふ庄野とはしたれとも今宵は馬之登る○亀やま

として、日くるゝに及んで、●亀山ニ着く。六万石石川保之助殿<sup>宗十郎</sup>(カ城下也。地邊高き處ニ

ていとよろし。●伊勢やと言に着く。元日の事ニして屠蘇<sup>そす</sup>等出してなに与て祝して曰

蓬菜<sup>ぼんさい</sup>も  
亀山なれば

蓬菜に臥すのも旅の恵様(カ)かな

○亀山に臥すや斗らぬ花の旅明くれは早く霞さわたる

なとして爰を明け早ふ立ち、荷人共に車に乗りければ、

乗り越る其○亀山も心持よく車の音も吉くと鳴る

爰方一里にして、殊の外に早ふ●関の宿に着き打乗。然ルに當宿に名高き地藏尊有り。また関の戸と言し菓子もありけり。

日の本にあまたおはせとその中にこれこそ○関の地藏成らむ

此宿僅の宿にして出抜ケ、少しツ、の山あり。間くを登りて四五漸の茶屋有。向ひに狩野古法眼元信●筆捨やまと言しあり。景別に見事なれば

○往昔の繪師さへ筆を投かれし筆捨やまに筆を取とは

憚りて口繪を止む。淋しき道を抜けて●坂の下と言に着く。また馬を替て、爰よりは●鈴鹿山と言しに懸りぬ。宿外る頃に至りて、右の山禁に、坂上軍将田村丸、鈴鹿鬼神退治の折、一と度拔出給へは千の矢先と化し、觀世音の應讓ありしを祭り給ひし。●清水の觀音巖石を鑿ちて爰に祭りて有る。參詣す。

○放ツ矢の千筋となりて飛散るは是觀音の妙智力かな

爰を超へて青人中の家五七軒も過て、●鈴鹿太神宮の宮居あり。此社前に置て下馬し歩行と成り、馬は背を輕ふして登山させ、彼の唄を思ひ出して、

○昔は馬さへ物を言しとあれば○鈴鹿に曳けて慈悲をくわへん

殊の外に礮礮なり。此辺の杉数十丈に伸び、いと見事也。登り詰るに山上に茶店あり。越へて左りニ至り、田村大明神の社あり。山下り際に至りて大なる石燈籠あり。金毘羅江寄進のよし也。山を下りて●一とおあり。蟹か澤と言し。そのかみ大蟹出て人を取与て飴を以て是を取、今に●水飴また竹の皮に宮餅程ニならへて賣る。

(欄外) ○あめの水もうる也

水飴につゐほたされて横這に出て取られたる蟹か騒きは

少しく下ツて、田村川と言しあり。渡りて檜原あり。山中に田村大明神を祭り有之。宮作り結構ナリ。無程して土山の宿に出る。名物お六漉櫛を賣る。三ヶ月やと言し家号多し。

○土山にちらと見初めし三ヶ月や宵から一ツ召して行かんせ 琴主

爰にてまた繼かへ、左へとて次なる御城下、●加藤左京大夫殿也。無程して●水口宿に着き、

●京やといへる宜敷爰にて亀やま伊勢やりの添手紙持参して、依而付扣置、また爰よふちやふち二詣よ兆ちやうたる一婦あり。年夢物と承り、三日之内なれば早ふ爰ニ着き、髪月代をいたして、暮際ニ湯ニ入。然ルに例の五右衛門、殊ニヲきの強さにはしやきて入りし内に、水のもる事、さるの如し与て、手廻して三人そろくに入湯。然ルに夕餉の支度も調ふまゝ酒を盃し、一杯を傾けんとせしは、三元日の事にて屠蘇とそを出し、また殊の外に取繕ひて、鯛の味噌積つて其他珍味ちんみも出し 存外に酔て

上方ノ言葉○めツそうな御馳走物にうかされて○御免やすく呑酒つゞのしやく

夜四ツ過る頃床ニ入り一と寝入して、早ふ爰を起出し支度取調ふて、馬ニ打乗り少しく行けは川有。●横田川と言し下流ニして左りの山上に庚申有。又岩不動有り。いと淋しき山陰也。右之方に向ツて●三上山と言しあり。笠をふせしことくの山ニして見事也。●遠藤但馬守殿領分也と聞く。世人是を百足山と言し鏝ぬり也。少し小川を越して●万里小路藤房公古跡妙勸寺村と言カに有り。此辺城跡殊ニ多し。又観音寺妙勸寺等其他七十防、往昔は、之處信長公放火ありしよし言傳、今残る處僅四五寺、又此邊の川往来方高し。往来する處は水門の如く成所あり。江州●家の梁川と言し。雪解等の砌一時に落来りしよし也。爰を越れば無レ程●所部石部の宿に継ぎ馬を継ぐ。彼のお半長右衛門の一事などおもひ出し、今●まてまてはままやと言しあり。伊勢の帰りはさそやお半も十五や十六なれば  
草臥て○前後も知らず寝る時は堅ひ○石部の枕知らずに  
此前、石部与水口の間の宿に、加茂の長明の故跡あり。爰を立ちて間の宿●梅の木と言しに着く。薬宿数多あり。和中散と言し看板出し有也。前に薬師如来を祭り有レ之。

衢ちかにも●薬師や一句ふ三無和中散

爰を過ぎ、よ程過ぎて漸く草津に出る。此處○竹根鞭の名物、または乳母か餅と言しを賣る●家居あり。見事成家作与て悪口を

○草津とは扱たまらぬと旅人の袖引たれと○乳母か餅賣る

此●草津も許は布薩なるよし、光照ほさつ布薩を受け給ひし時より此名初まりしを、あやまりてくさつといふよし也。爰にて昼の食時をとゝのへ、然るに矢走渡しを馬士の進メに任せて涉り、此処の習にして、賃は馬士より払ふと言し。暫時乗り合の晦に雨氣を催し、少しツ、降り出せとも、余語の海の絶景言し斗りなく筆を起して八景を

矢走帰帆

真帆かけて矢走に着くや帰船

唐崎一ツ松

雨に些淋しく見るや一ツまつ

夕雨に景色の添ふや

三井晚鐘

年の内の春らし眠る三井の鐘

勢田夕照

水かけの扱長橋や勢田の景

栗津晴嵐

偶たま(カ)に洩る日に景色添ふ栗津哉

比良暮雪

照り返す日に雪見るや比良の嶽

消へ残る雪や比良野と夕景色

石山秋月  
の楳の尻

芋影の笹笹湖に長くさし入りて麓せの岸に船着を見る

堅田落雁

友しとふ夕部や雁の堅田浦

など、近江の八景を一と処より見しおもひを口と述て、無<sub>レ</sub>間大津の川岸に着き、荷物は軽子の持運ひて、あたりの軒下に休らひ置。宿は問屋の近くにとりて●一泊を乞ふ。繁昌東都に續く。此處の名産源五郎ふな、且大津画等は家毎に見へ、古風今に顕われ牛車は江戸に陪す

牛ノ鳴聲も

○最ふ爰に来たかとおもふ登り坂牛の歩行のよりおそくとも

(欄外) ○膳所一体はおものと言しとかや。文字「供御」御膳温飯如<sub>レ</sub>此ナリ。をものは栗津の濱をいふとかや。むかし禁裏へ鮮魚を日次に貢せしよしも

○とこほる時もありしなあふみなるおもの、濱の蟹の日つきは

御土産に一枚召して行かさんせ大津画は江戸府 志エト下通に出るほと

(欄外) ○義仲寺三井石山ノ話ハ婦リノ記行ニ譲テ出サズ

此處遊女殊に多し。字をお茶様と言しとかや。

膳居へて客待ちうけの●御茶様は一と口物にほふのやけとう

などたわれ事言ふて早ふふせり。翌は伏見てふ夜船にて愈登坂となれば、京一覽の望み起り早ふ荷物は巻荷として先へ廻し、我と三人りは歩行となりて追分てふ二いたり、家毎に

十六盤そろばんを商あふ中に、一里塚前の庄兵衛といふ宜しと言し

京とうへ登り下りのいとさん少女を言し 幼かの玉を算好言カしてくらす○庄兵衛商賣カ

此処右の山上に関大明神と言し有り。蟬丸を祭て彼のこれやこのゝ古事をおもひ出し、また関の清水と言しあり。走り井といふニ走り餅を商ふ。

これやこの讀まれし人は神下はからつ爰神に○逢坂の関

走り井にて

きくしたる手に冷え退かぬ清水かな

従レ其無レ程坂道少し有レ之。右も左りも山々にて景色殊ニよろしく、又た山科の里に近よれば、天智帝の御陵たなほを過ぎて大き成山有レ之。従レ是三条通りと言し。左りの山は東山といふ麓に東山御防彼の

蒲団着て寝たる姿やひかし山

の古事をおもひ出し失礼を不レ頻(カ)

鹿の子またらに茂ける若松

従レ其三条五条四条と渡り所と一覽、祇園并大仏参詣智恩院一見、折節焼失後にて市中淋敷、全くの一見のみにして昼を過れば、伏見街道に出て昼食事をとふへりて、●伏見●針屋庄九郎といふに着く。爰ニて夕食事、船の支度も調ふて乗組、夜舟にて淀川をくたり、彼のくらわんかの商ひ船も出る。

初夜聞て知らぬ里とふ夜船かな蒲団丸めてなふせて透風

などして明ける七ツ過る頃、八軒家てふ●和泉やといふに着船いたし暫時休息、夜明けに及んで髪月代とふいたし、着船の祝酒をとふべりて五軒屋敷へ案内せんとせしか、未だ吉田衆住ひ居られし俛、當時者御門とやらニ仮り住ひ故、爰ニ至りければ、御長屋拝借被ニ 仰付一一寸立寄り、平井氏江罷出 公用の事なれば万事同氏江頼み、部屋へ引取、長途之勞を休めけり。

○浪花ともあれ新らしや今朝の春 旭美

是方吉田衆方之挨拶を待ち、着坂之由は平井氏へ頼み、然ルに翌六日昼後方御 城入いたし、御上屋敷江可ニ罷出一旨被ニ申越一有ニ付、相應及ニ應答一、翌日ニ至り九ツを待ちて支度調ひ、三人連立ちて御上屋敷江出、御内玄関方案内を乞ひ、御廣間御取頭取次を得て、鎗之間てふに通り、吉田様衆類役江逢、一別以来之應接相済、案内にて御小書院と言しに曳て、暫時休息、従レ其代と類役罷出傳達有レ之。御帳記之引合等目錄書にて引合、御吸物御酒御飯等迄出レ之、委曲御用日記ニ讓て略レ之。従レ其日と御上屋敷江罷出、又仮屋敷を取立ツて日と勤

番、然ルに十五日昼時ニ至りて、

殿様御着阪万事一陣ニ讓ル。従<sup>レ</sup>其御受取後御城入廿一日也。我々も同日引越役處受取、甲乙番を建て、万事無<sup>レ</sup>滞相勤、然ルに明くる寅となりて、正月十一日御有用<sup>レ</sup>之罷上候処、別勤を被<sup>二</sup>仰付<sup>一</sup>。江府長詰、家族も召連候哉。御宅従日数ニ而出立之旨、御番頭方達し有<sup>レ</sup>之候得共、又江戸へ之御用被<sup>二</sup>仰付<sup>一</sup>、御用済迄之御有餘申立濟寄ニ而、廿三日浪華出立、夕七ツ時を過て、八軒家方乗船、伏見て夜明ヶ朝餉をとふべり。従<sup>レ</sup>其竹田街道ニ懸り、大津江四ツ時頃ニ着く。爰ニて昼之支度をと<sup>レ</sup>のへ、又三井寺の参詣ニ望あれば歩行ニて登り、所と遥望、奥の院弁慶の引摺り鐘を見て、

注湖に響き巡るや三井のかね

従<sup>レ</sup>其参詣果て大津ニ出、銘産大津画をと<sup>レ</sup>のへ、また堂を求めて彼の

大津絵の筆のはじめは何仏 はせを

(欄外) 右ノ句意三日閉口題四日トアリ。一書ニ大津ノ乙州か新宅ニ而越年ノ句也。三ヶ日モ過テノ口ひらき殊ニ處ノ物煩ナレは欠(カ)句にし給へり。四日の事なれば何仏と居玉ふ。滑稽感するに絶たり。大津絵は岩佐と言し人始たりと言し

などを思ひ出し

土佐くさといわれて<sup>ドモ</sup>嘯又兵衛か書き廣めたる大津繪の具に

此宿中を過て粟津原ニ掛らんといそけは、右に義仲寺と有り。彼の朝日將軍の御墓并兼平手植之松等今日残れり。相並んで<sup>注</sup>笹蕉翁の牌あり。大坂ニおみ給ひ白骨は此義仲寺ニ納入給ひしよし。また碑名は晋其角の書と言也。爰ニて揚雲雀を見て

名なを高う○粟津か原や揚雲雀 青好

彼の片隅ニ<sup>注</sup>笹蕉翁庵居之跡アリ。爰ニての吟のよし。

(欄外) 大坂花屋庵ニ而歎 辞世は旅に病て夢は枯野をかけ廻る はせを

木曾殿と背中合せの寒さかな

折々ニ伊吹を見てや冬籠り

當院ニ、今翁の像を祭ル堂あり。誰人の詠るしれす

時鳥雀に首を上げさせて

庵主に呼へは罷出、其角の短尺又者翁の真蹟等あり。いつも石山幻住庵ちろく<sup>〱</sup>の清水を巳(カ)て製すとあり。爰を出て松並方右者粟津、左りは湖水ニて眺望よろしく

はるかせやなに(カ)路のみゆる水の面 青好

従<sup>レ</sup>其膳所の城下に出、水に移る城、日に移る余語の湖

凧の尾を白眼で居るや鱸頭

はや彼是昼を過れば、いそき石山ニ参詣せんといそき、連もなう唯獨り漸にして山門に出る。麓に湖水縁ニは茶店、夏月は螢の名所ニて賑ふよし。門内に入れば紅葉の若は也。また桜の

含<sup>くみ</sup>み今日も開かんとする。即夜境内きらひやか、岩の間方吹出す水、龍頭方出る。爰にて口そゝき石の担<sup>こ</sup>を上りて庭の結構、けに石山の名頭れけり。鐘楼并鞍楼もあり。又も檀を揚りて端風作りの所あり。是を源氏の間と言し。往昔紫式部五拾四帖を爰にて書頭せし處也と言し。

はや花のゆかり見ゆるや石山寺

従<sup>レ</sup>其觀音寺へ拝礼果て裏山へ廻り月見堂へ近寄らんとする。庭上に翁の碑あり。膳所に泊り、暁石山寺に詣て、彼の源氏の間を見て

曙はまたむらさきにほとゝきす　はせを

月見堂一覽湖水爰より見ゆる。麓は人家勢田も見ゆる。沽

はし影のひは湖に長し宵の月　青好

従<sup>レ</sup>其下山左りの方に撞鐘あり。是者諸人二つく事を免す。龍宮方揚りしよし。三井の鐘に準し又岩に穴悉く有<sup>レ</sup>之。いづれも縁結者一国に有し。

かんおんに縁を誓ひの石山は男に堅<sup>かた</sup>ひ契り成へし

そこゝこ一覽、此尊体は山城国清水を移し奉るとある。願主は當国北郡浅井備前守長政息女淀殿、秀頼公来世の為とて、御誓願伽らん御建立とあり。堂構の古ひ物淋しく覚ゆ。下山元の道を返りて勢田ニでる。此時八り下りなれば、都の方を返り見て

我かけもは<sup>ちと</sup>や長橋や勢田の夕

爰方餘程原道を過て●野路村と言しあり。田の中に往昔玉川の跡あり。只菰も名のみ、水も枯れて少く

菰も枯れ水さへ<sup>潤</sup>たれて只爰に名にし●近江に野路の●玉川

爰を過て兼平の塚あり。無<sup>レ</sup>程して草津に出る。登坂の紀行にあれば爰に略せり。駿河<sup>するが</sup>洲<sup>洲</sup>に入りて府中中程方久能山　御宮江と望生し、相廻りて参詣致し、御宮柱<sup>カ</sup>之結構また言しも更なり。絶頂より麓<sup>麓</sup>を見るに、十二町と言し上三三防あり。井戸あり。容害の宜しきは二ツとなき土地なるよし。一ツ井を勘介井戸と言也。甲州山本勘介近国之砌る堀見候よし如何成日照りにも水満とたるよし。従<sup>レ</sup>其下山、海原を過て三保の片側を通る。興津に出て爰に泊る。また三州ニ出て山中之　御宮と言しに参詣、神組御開運、舞上り八幡宮と言し。御守り等も爰方書る。また藤沢に來りて鳴立沢へ立ち寄り、従<sup>レ</sup>其江の嶋参詣の念生して、彼所江罷出、暮る頃恵ひ寿屋と言しに泊ル。翌日参詣御<sup>ついで</sup>殿<sup>殿</sup>迄不<sup>レ</sup>残<sup>レ</sup>拝礼相済、七里か濱を過

て腰(カ)越村江来り、切り通しを過て星の井戸一覽、從<sub>レ</sub>其案内を得て八幡宮江參詣、雪の下  
にて昼食事いたし、また案内を得て五山等江參詣、從<sub>レ</sub>其●保土ヶ家宿に泊り、翌六日江戸へ  
歸、御用取始末いたし、十三日出立、十五日笠間江案着、家内の歎また言しも更なり。家事  
取始末相整へ、四月朔日出府、日比谷御屋敷江着。今之職事無<sub>二</sub>油断<sub>一</sub>

蕪入の心てうれし寅の春 旭美

元治元甲子年極月廿日<sub>ヲ</sub>慶應二丙寅至正月撰<sub>レ</sub>之

『大坂城御番所勤方文書』

『大番交代時之出役覺』

八月四日、六日、七日、十二日大交代之節、内外固御人数并御番所出役之面々曉八ツ半時御下屋敷江相揃、七時前御門前へ立揃七ツ時相圖有レ之、御武器(カ)方繰出、土橋江相詰立揃候事。

但靱腰附御鉄炮玉込切火繩之事。

一内固御城入御人数も御番所出役之御物頭、御番士、御長柄奉行、御徒目付、御徒長柄小頭、御長柄之者、足輕小頭、立番足輕、帳順之通御番目付跡押いたし、土橋張御番所前方一行ニ立、張御番所前ニ而御城入人別相改候事。

但御人数證文御番目付持参致候事。

一御破損役之者兩人共土橋江八ツ半時罷出、出役之番頭江御使相届七ツ時相圖臺提灯附揃、内固御破損役一人は御人数引連御城入、臺提灯内固御人数立揃候段、大御番所江相届候事。

但御破損役御人数通證文帳御番所江持参候事。

一御破損役御城入(カ)之儀、御上屋敷御家老江案内申達出役是有。當番之御番頭、御目附、舛形御番士一人立合、冠木御門(カ)明より内外棒突足輕兩人宛差出、御人数相改御城入相済(カ)候事。

但御家老直大御番所江出役、尤御鍵左之通御徒目付為レ持候事。

大御門扉 御鍵

冠木御門扉(カ) 御鍵

北仕切御門扉 御鍵

右御家老出役候は、北仕切出役之物頭、同所扉御鍵御家老方請取之、北仕切江相詰、御交代相済引取、大御番所江御鍵持参之御家老江相納候事。

但右御物頭北仕切江出役之節、(カ)御鍵致ニ持参一候事。

一内固御人数并御番所出役之面々明ケ七ツ時過、御城入ニ付通證文御番目付、張御番江差出、通詞番相添、大御番所江差越、早速三番所江触出、御家老、御番頭、御番目付、舛形之御番士一人立會、冠木御門(カ)明レ之、御門内外棒突立番足輕兩人ツ、差出改候事。

一舛形出役之御家老、御番頭、御番目付御城入、即刻御家老、御番目付大御番所へ罷越、冠木御門扉御鍵并(カ)御鍵大番所江出役之御家老ヨリ請取之、舛形江持参候事。

但御鍵御徒(カ)目付ニ為レ持候事。

一御加番京極甲斐守様、青屋口御小屋請取御人数御城入通證文、張御番所江持参、大御番所方公用方へ差出候。公用方方御下知之旨、早速大御番所江申達、舛形出役之御家老、御番頭、御番目付、御番士一人立會、冠木御門(カ)明ケ内外棒突立番足輕兩人ツ、出候事。

但御證文引合御人数操入候事。

一右御人数北仕切御門通候ニ付、同處出役之御物頭、御番士一人立會、(カ)明候事。

但御小屋請取御人数青屋口案内足輕一人差出、提灯持中間一人、且夜中右場所通用之儀

御番頭方前日以「書付」相断候事。

一内外御固不レ残立揃候段、内外御破損役方大御番所江御断、即刻 殿様大御番所へ御出之御案内、出役之御家老方公用人迄手紙ニ而申遣候事。

一明七ツ時過 殿様御平服ニ而井戸脇御路次方御出、直ニ外固為「御見聞」、土橋迄御出、此節大御番所當番之御目付御先立ニ而、同處出役之御家老公用人御供之事。

一殿様外固為「御見分」被レ遊ニ御出「候」付、舛形出役之御家老、御番頭、御番目付、御番士老人立會、冠木御門開レ之、御城相濟御門へ舛形江引取候事。

一殿様大御番所江被レ遊ニ御立帰り「御出役之御目付様江宜敷旨御案内、使公用人取斗遣」之御使御供之御徒方差遣候事。

但山里御目付様、西御目付様江御出故、山里江之御使ニ不レ及、即刻御目付様方大御番所江御出御挨拶相濟、外固為「御見分」、土橋迄御出て御先立大御番出役之御家老可「相勤」事。

一右御目付様御城之節、舛形出役之面と前条之通立會、冠木御門閉之事。

一御目付様外固御見分相濟大御番所江御立帰り、平日之明六ツ時式寸五分程早へ御大鞆打同様御下知ヲ以、公用人方通詞番足輕南仕切御門迄申遣、同所方御大鞆櫓江通詞即刻御大鞆相成、打切も時分見合公用人方申遣打切候事。

但六ツ打出時分見斗、御番頭方差図ニおよひ提灯消し候。拍子木御門下ニ而為レ打、提灯并燭臺共為レ引候事。

一明六ツ時御大鞆打出シ大御番所出役之御家老、當番之御番頭、御番目付大御門江罷越、御大鞆打切両扉開レ之、此節舛形出役之御家老、御番頭、御番目付、御番士老人例之通り立會、冠木御門両扉開レ之、御蝦も勿建寄置、両御門江立會て、面と向と者番所江引取候事。

但舛形御番所者大御番所方之見通ニ相成候間、御家老始下座敷へ下り罷在事。

一北仕切御門出役之御者頭、御番士立會、南扉開之、御蝦勿建寄置、登り御加番様御通り相濟候は、開候節之通立會、御門へは平日之通り明置候事。

一右北仕切出役之御物頭、内外固引取候比御鍵持參候間、大御番所江引取、扉御鍵御蝦共御番頭江相納候事。

一青屋口下り御加番内藤因幡守様御小屋迄、大番所脇出役之御使者役御案内、御使者公用人方申談相勤候事。

御口上

御人数勝手次第御操出候様被レ仰遣「候事。右御使者北仕切御番所迄相越居、御門明キ即刻青屋口江罷越御使者相勤、口上御返答之趣公用人江申達候事。

但継上下着用

御使者 若堂老人

草り取老人

一内藤因幡守様御人数段と御操出、引續因幡守様御出、大御番所江御立寄、殿様御挨拶等有レ之、御熨斗塗三方出レ之。尤御近習勤レ之直御城出御家老始不レ残下座之事。

一 下り御加番様、京極甲斐守様土橋先江御扣、右御場所迄大御番所脇御使者役御案内、公用人方申談相勤候事。

御口上

御人数御勝手次第御操入候様被<sub>レ</sub>仰遣<sub>一</sub>候事。

右御返答公用人申<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>達候事。

御使者 若堂老

鍵持老

草り取老

登り御加番京極甲斐守様御人数御操入、引續御同人様御城入大御番所江御立寄 殿様御挨拶等有<sub>レ</sub>之、御熨斗塗<sub>二</sub>方出<sub>レ</sub>之。尤御近習勤<sub>レ</sub>之相濟、甲斐守様青屋口江御引取、御家老始不<sub>レ</sub>残下座之事。

但御人数青屋口御小屋迄、為<sub>二</sub>御案内一足輕老人士橋中程方御先立致し、甲斐守様御城之節は土橋中程方御供目付老<sub>一</sub>人御先立致し罷越候事。

一 御交代相濟、甲斐守様被<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>御引取<sub>一</sub>候は、大御門江御家老へ御番頭、御目付罷出兩扉<sub>レ</sub>之、大御番所江引取、此節冠木御門へ者、舛形之御家老、御番頭、御番目付、御番士老人立會、兩扉<sub>レ</sub>之<sub>二</sub>開<sub>一</sub>明置引取候事。

一 冠木御門扉<sub>レ</sub>之立會之御番頭、外固為<sub>二</sub>引取<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>申段、御家老江申置候。張御番所出役之御番目付、外固不<sub>レ</sub>残引取候様御門繼<sub>二</sub>而相達<sub>一</sub>、夫方舛形内御長柄奉行へ相達為<sub>二</sub>引取<sub>一</sub>候事。

一 御門<sub>レ</sub>之上、御番頭罷出御交代相濟候段 殿様へ申上候事。

一 御出役之御目付様大御番所御引取、即刻 殿様最前之通御路次方被<sub>レ</sub>遊<sub>二</sub>御引取<sub>一</sub>候事。

但内固御人数引取御城出之節者、常之通御門札<sub>二</sub>而罷出候事<sub>一</sub>。

一 固之面<sub>レ</sub>御人数引取之儀、御番頭案内有<sub>レ</sub>之、御中屋敷江行烈<sub>二</sub>而引取可<sub>レ</sub>申事<sub>一</sub>。

一 面<sub>レ</sub>箱提灯者草り取<sub>二</sub>為<sub>レ</sub>持可<sub>レ</sub>申事<sub>一</sub>。

一 固之面<sub>レ</sub>着服羽織袴之事。

一 足輕小頭以下服立取候事。

一 固之諸士始、御目付様、御加番様御通之節、手明之者下座致候事。

一 六日鷹木坂御加番様御交代之節、内外固御次第前<sub>二</sub>同<sub>一</sub>。南仕切江出役之御者頭、大御番所方築違并南仕切御門御鍵御番頭方請取罷越、右御両御門共開<sub>レ</sub>之<sub>二</sub>開<sub>一</sub>御蝦も勿建寄置、登御加番様御通り相濟、開候節之通立會、御門<sub>レ</sub>開<sub>一</sub>平日之通明ケ置候事。

但御鍵納<sub>レ</sub>方前<sub>二</sub>同<sub>一</sub>。

一 七日東御加番様御交代之節、内外固右同前、北仕切江御番頭不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>出役<sub>一</sub>、南仕切江罷出、御門両扉開閉之儀北仕切同様取斗可<sub>レ</sub>申事。

一 十二日西御番頭様御交代之節、固等諸事同様、南仕切江御者頭不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>出役<sub>一</sub>候事。

但於<sub>二</sub>大御番所<sub>一</sub>御熨斗炮者御精進日<sub>二</sub>は不<sub>二</sub>差出<sub>一</sub>候事。

一 御武器<sub>レ</sub>其外諸士下<sub>レ</sub>迄雨具且夜明提灯引候節取集之筋方世話可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>致候事。

一大交代節若雨天ニ候はゞ、侍固之者手傘半合羽下駒(ト)相用、尤殿様、御目付様方大御番

所江御出席ニ付、御見通し相成候場所者、下駄不ニ相用一候事。

但御先立致候者は手傘半合羽相用、下駄者不ニ相成一候事。

上書

天保十二辛丑年

四日 六日 七日 十二日 大交代ニ付出役之面々次第書帳

御交代日割

追手御門方

御加番様方仮御城入

追手方

一 四日 下り

内藤因幡守様

登り

京極甲斐守様

同

一 五日 東御番頭

曾我伊豫守様仮御城入

同

一 六日 鷹木坂下り

山口周防守様

登り

稲葉兵部小輔様

追手方

一 七日

戸田隼人正様

曾我伊豫守様

同

一 八日

小交代

一 九日

同

一 十日

同

一 十一日

同

追手方

一 十二日 西御番頭下り

建部内匠守様

登り

大岡紀伊守様

『玉造口御門御定番御城入之節御固人数并絵図面

付) 出火之節役々心得方其外御番所心得方大略記』

△表紙▽

天保十五年辰三月写置

玉造口御門御定番御城入之節(カ)御固人数并繪圖面

出火之節(カ)役と心得方其外御番所心得方大略記

市瀬正應扣

△本文▽

天保十二年十一月大御番所御者頭日記書抜

一明後六日、酒井右京亮(カ)様玉造口(カ)御城入ニ付、同所為ニ御固ニ當役(カ)人、御目付(カ)人、

御馬廻り三人出張相勤候様、公用方より御達在(レ)之候間、相心得候様、御番頭(カ)通達有(レ)

之。尤當日着服、當役御目付(カ)兩人者継上下、平士者平服之旨、固場所都而繪圖面之通。

一前文出役之者御番合都合も有(レ)之候。

席と申談候而可(レ)相勤ニ旨、是又公御用所達し之旨、御目付吉原新七郎ヨリ通達有(レ)之候事。

一申談ニ而栗林季十郎今曉玉造口為ニ御固ニ出役ニ付、長谷川居残相勤。

一今朝玉造口御定番酒井右京亮(カ)様御城入ニ付、為ニ御固ノ一出役之面と、御者頭代栗林季

十郎、御目付加藤利兵衛、御(カ)人木下幸八、金田荒太、石橋軍治、御徒士目付清水傳太、

着服供連焼七ツ半時御下屋敷江(カ)相揃。

東雲挑灯引ニ而、出張行列左之通

一 小頭 小頭 棒突足輕廿五人

二 御者頭 若當 鎗 狹箱 草履取 口付 馬

三 御目付 若當 鎗 狹箱 草り取 口付 馬

四 御馬廻り 若當 鎗 狹箱 草り取 口付 馬

五 御馬廻り 若當 鎗 狹箱 草り取 口付 馬

六 御馬廻り 若當 鎗 狹箱 草り取 口付 馬

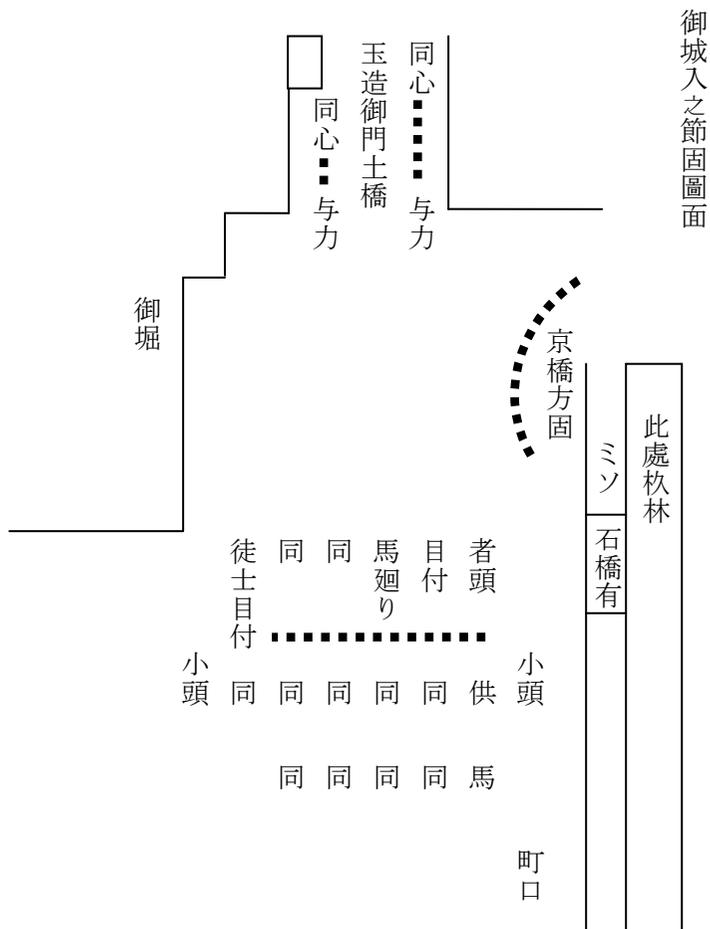
七 御徒士目付 草り取 雨具持 釣臺 式荷

八 才領(カ)人 天保十五辰ノ三月 米津様御城入節固出役之名前左ニ記

御者頭市瀬大次郎、御目付大塚欣兵衛

御馬廻り石田半三郎、一井栄之助、松田傳

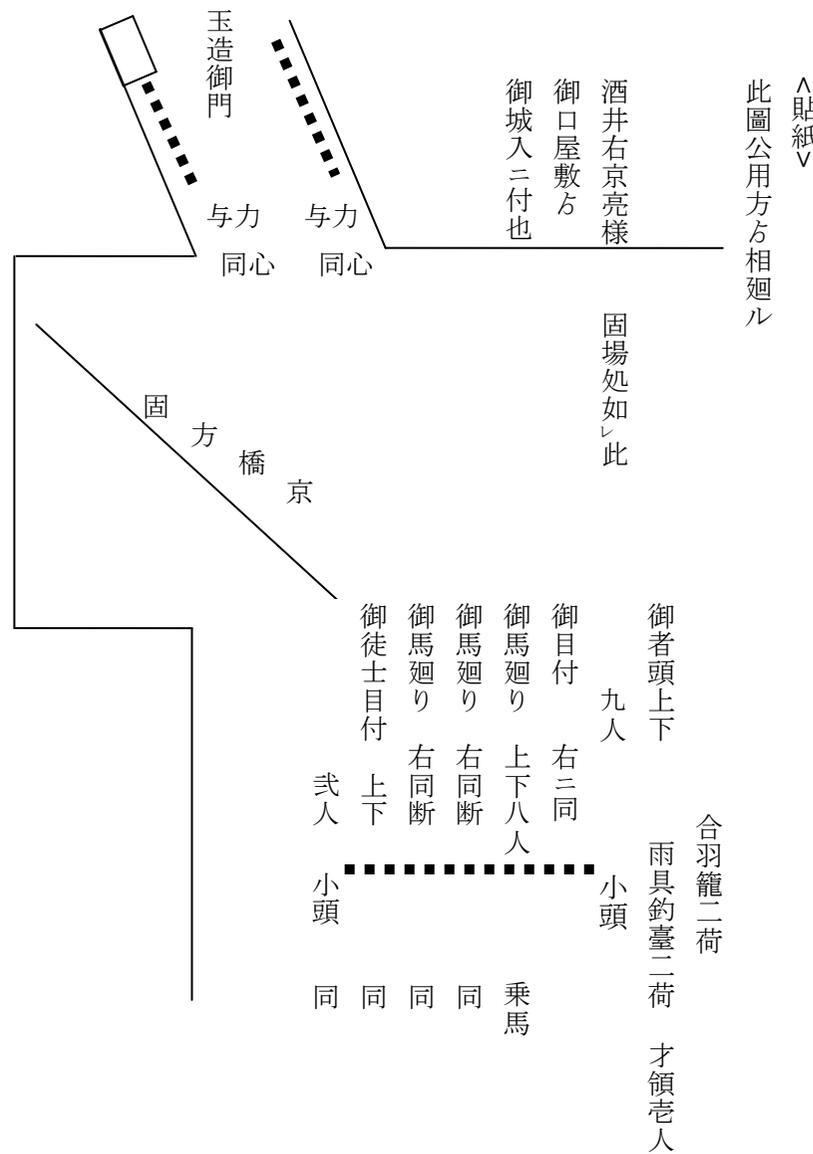
御徒士目付小林善藏、山口小右衛門、稻垣藤三郎也



天保十五年辰年三月廿六日米津越中守様御城入之節固圖面

△貼紙下▽

右圖面者天保十二丑十一月公用方々相廻ル圖面也



此度玉造口御定番米津越中守様 御城入、都而天保十二丑年十一月酒井様 御城入之節之通り相心得候様通達有<sub>レ</sub>之。

尤固場先例之通り例之繪圖面与者京橋方固場此度御達有<sub>レ</sub>之候与相替り候申立付為<sub>二</sub>心得<sub>一</sub>、尚又繪圖面大略認置候事。

一右御城入之日限相知、公用方<sub>方</sub>達し有<sub>レ</sub>之候は、出役之名前相印、御上屋敷御目付江相届候様、御番目付申聞候<sub>二</sub>付、名前認差出候處、翌日以<sub>二</sub>切紙<sub>一</sub>御家老被<sub>二</sub>仰達<sub>一</sub>候与御目付方<sub>方</sub>執達有<sub>レ</sub>之。

一朝御太鼓六ツ時<sub>二</sub>而出張、四ツ半過御城入相濟、御門<sub>レ</sub>り候<sub>二</sub>付、如<sub>レ</sub>元行列<sub>二</sub>而引取。但し附弁當也。

天保十二丑年四月十八日被<sub>二</sub>仰出<sub>一</sub>出火之節役<sub>二</sub>心得方

一夜中出火遠近<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>拘、七人番所不寝番方凡何筋何邊与張番所江申継候は、早速非番之公用人小屋并御目付<sub>二</sub>為<sub>レ</sub>知、五軒屋敷御門迄申越、御門番相越申聞、五軒屋敷御下屋敷と、五軒屋敷御門下番<sub>二</sub>口觸<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>致可<sub>レ</sub>申。尤町御奉行方<sub>方</sub>為<sub>レ</sub>知使参り候は、前同様手續<sub>二</sub>而公用人江可<sub>二</sub>申聞<sub>一</sub>事。

但御番目付方當番御目付江も申越、席觸、御屋敷觸も可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之。

一外張迄町御奉行御出之節、公用人<sub>二</sub>者下屋敷江罷出、御對話<sub>二</sub>およひ候間、御番之面<sub>二</sub>御規定之通下座可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之事。

但御用人者高張挑灯<sub>二</sub>若當草り取<sub>レ</sub>人宛召連、火事具着用罷出、尤書役も相詰、地目付共も火元見届罷越可<sub>レ</sub>申候。御番之面とは大御番所<sub>方</sub>通達有<sub>レ</sub>之候迄は、火事具着用<sub>二</sub>者不<sub>レ</sub>及候間、此段も相心得可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申事。

一御番所向火事具着脱所、公用方<sub>方</sub>大御番所江都度<sub>二</sub>通達之事<sub>二</sub>候得共、近火等餘機之儀者必通達相傳候斗<sub>二</sub>も有<sub>レ</sub>之間敷候条、猶勘弁可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>候事。

一御城近邊之出火者勿論之儀、遠火迄も三時以上<sub>二</sub>およひ候得者、御本丸百騎衆方、尤御案内之上、御定番、下御加番、上御番頭、御目付も御出御同道之事。

但し御挑灯之儀者、御徒士目付手廻り小頭預り、御参殿中等御挑灯時刻<sub>二</sub>およひ候は、非番之御供目付、當番御徒目付手廻り小頭せ話致し、書番も持運、御行列帳員数之通、無<sub>二</sub>御不都合<sub>一</sub>様、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>取斗<sub>一</sub>、蠟燭者兼而御供頭<sub>二</sub>而用意可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之事。

一三ヶ寺且八町四方町中出火御人数被<sub>二</sub>差出<sub>一</sub>候程合、餘に時難<sub>レ</sub>決候は、出役之向并御目付等方非番公用人江申談之上、御下屋敷御門下番<sub>二</sub>、二ツ續拍子木御下屋敷、五軒屋敷為<sub>二</sub>打廻<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申事。

但其所出火之最寄承り次第、御役所向下役迄も御下屋敷江欠付、人数等せ話可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>致候事。

右者兼而之心得方迄<sub>二</sub>餘機急卒之場合ゆへ、其心得<sub>二</sub>而御不都合<sub>二</sub>相成<sub>一</sub>候様可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>致候。右之通大御番所<sub>方</sub>通達有<sub>レ</sub>之。

『大坂御城御番所勤方大格』

△表紙▽

大坂御城御番所勤方大格

箕浦又市殿ニ貫レ之

市瀬正誼

△本文▽

罷掃

大御番所

一番頭 一人

一者頭 一人

一大目付 一人

一馬廻り 五人

一帳付 一人

通詞番足輕 四人

下番中間 四人

一鉄炮 三拾挺 玉箱三荷

洞乱三拾

火繩三拾

矢箱二荷

靱式拾

一弓 式拾挺

但替弦靱之内ニ有り。 壹對片

一幕 八本

一番土鎗 外ニ

鉄炮 式拾挺 洞乱式拾

弓 拾張 火繩式拾

纏 式本 靱十穗

右急時御用之節ため大番所ニ被ニ差置一。

一大御門、冠木御門、西之御丸仕切扉之海老者大御番所有レ之、御太鼓櫓下仕切御門海老は

同所仕切御門御番所ニ有レ之候。

一御太鼓櫓下仕切、西之御丸仕切、両御丸扉之鍵は、大御番所ニ有レ之。大御門、冠木御門

両所扉之鍵は、御居間ニ被ニ差置一。

一平日番頭膝代り、者頭、大目付之内相勤、馬廻り西番五人之内。

一兩人膝代下座之節者、不レ残相勤候。地御役人、御代官、大御番御組頭、大御番御在役之

御方、惣御番衆御門出入之節者、當番使役、馬廻り兩人之内一人下座、薄縁へ出、御家来御供人数何人と相断候を承<sup>レ</sup>之、御主人御會釈之節御時宜仕、惣番人は下座不<sup>レ</sup>仕候。

一下座之事、御城代、御定番、大御番頭、御加番方、町御奉行、境御奉行、御舟手兩御目付右之御方へ番人惣下座仕候。

一御切手、口上書大御番所へ侍分持参之節者、右使役之馬廻り之内請取ニ罷出候。右御切手、御口上書足輕持参之節者、通詞番足輕請取ニ罷出候。

一御證文は御上屋敷方徒士目付持参、番頭請<sup>ニ</sup>取<sup>一</sup>。

一明ヶ六ツ御門開之節、御上屋敷方明ヶ六ツ前ニ、家老一人冠木御門御鍵持参、大御番所方番頭、大目付、足輕小頭召連罷越、御太鼓六ツ打切、御門開之海老者大番所番頭受<sup>ニ</sup>取<sup>一</sup>、鍵箱ニ入置申候。暮六ツ前ニ家老一人御門へ罷出候。大御番所方番頭、大目付、足輕ニ海老為<sup>レ</sup>持、冠木御門へ罷出立合六ツ打切、海老をおろし、番頭海老篤与<sup>レ</sup>候を見届候。

一御太鼓櫓下仕切御門扉御鍵、番頭方使役馬廻りへ相渡致<sup>ニ</sup>持参<sup>一</sup>、當番之者頭へ相渡立合、明ヶ六打切候而、御門開之御鍵大御番所へ持参立合候義、番頭へ相達、御鍵番頭受取申候而、箱ニ入置申候。

但シ暮六御門<sup>レ</sup>之節、南仕切當番者頭方ニ預り置候。海老おろし申候而、使役馬廻り立合ニ罷越<sup>一</sup>候。

一西御丸仕切御門扉之御鍵、當番者頭ニ番頭方相渡シ致<sup>ニ</sup>持参<sup>一</sup>、北仕切之當番馬廻り立合、明ヶ六打切候而、御門開之御鍵、海老共ニ大番所へ持参、立合之義番頭へ相達候。右之御鍵、海老番頭請<sup>ニ</sup>取<sup>一</sup>、何も箱ニ入置申候。暮六前北仕切之海老、番頭方物頭ニ相渡ス。致<sup>ニ</sup>持参<sup>一</sup>北仕切當番之馬廻り立合、六打切候而、海老おろし候を相改メ罷帰ル。御門<sup>レ</sup>馬廻り立合之義、番頭へ相達候。

#### 御太鼓櫓下御番所

- 一者頭 一人
- 一馬廻り 一人
- 一番人足輕 五人
- 一下番中間 二人
- 一同断御門外箱番所中間 二人

右中間は南仕切番人之内一人、北仕切番人之内一人、暮六時方夜中斗兩人泊り。

鉄炮 五丁 玉箱一荷

胴乱五ツ

幕 片

是ヨリ置附御道具之分

- 一三道具 一組
- 一熊手 弐本
- 一棒 七本
- 一捕縄 五筋

一松明 五本

平日人改無<sub>レ</sub>之、御城代、御定番、大御番頭、御加番方、町御奉行、堺御奉行、御船手  
兩御目付惣下座仕候。地御役人、御代官、大番頭、組頭、大御番御在役之御方、惣大御  
番衆御通之節、御會釈被<sub>レ</sub>成候ニ付、番所ニ其俣罷在候而御時宜仕候。

西之御丸仕切御番所

一馬廻り 三人

一番足輕 五人

一下番中間 二人

一鉄炮 五丁 玉箱一荷

胴乱五ツ

一幕 片

從<sub>レ</sub>是置附御道具

一三道具 一組

一熊手 二本

一棒 五本

一捕縄 五筋

一松明 五本

平日御時宜之義、南仕切勤方同断、御門御通平日人別改無<sub>レ</sub>之候。

七人番所

一足輕小頭 一人

一番人足輕 六人

一長柄 式拾本

從<sub>レ</sub>是置附御道具

一三道具 壺組

一熊手 二本

一棒 六拾五本

内式拾本長柄之脇ニ立掛置、六本番人之所ニ建掛、残る四拾本番人之後掛置。

一捕縄 五筋

一松明 十本

右當番足輕御金出入或式御道具、又は長崎御荷物、其外人留之節、兩人宛棒突立番<sup>ツキ</sup>ニ罷出候、

并上屋敷之方々南<sub>カ</sub>仕切御門、追手御門兩方へ御通り之御方下座之注進大番所へ仕候。夜中

大御門下不寝番、御門下足輕与兩人宛一時代り打込ニ相勤申候。

御門下

一足輕小頭 一人

一番人足輕 六人

一棒

五本

御置附

平日所々被<sub>レ</sub>遣被<sub>レ</sub>置候御鑑札、小頭際ニ掛置、御門出入相改申候。小頭何人与札ヲ讀、次ニ罷在候十人は足輕何人と答申、五人以上之人数は西番之足輕人数ヲ算相改三人目足輕何人与

(付箋) 札を讀、次ニ罷在候十人者答申候。五人以上之人数は西番之足輕人数を算相改三人目之足輕何人与

高を合、出入相改通シ申候。大御番頭御両判之御門札にて御家来、又は与力同心御組頭之御家来、大御番衆之御家来、御門出入仕候。御定番方御両人之御門札者御銘と御判を以、御組与力同心御用之節は相通申候。御家来は御門札之上ニ、追手、玉造、京橋与三ヶ所之書付有<sub>レ</sub>之札持参之時は相通し、御一判之札持参之時は相通不<sub>レ</sub>申候。

一御加番方は、御銘と之御判札を以、御門出入相改候而相通申候。

一迎送札は、御先方御家来他所へ被<sub>レ</sub>遣、或御呼入候節、御證文又は御切手、御番頭之御家来方口上書等大御番所へ参候。大御番所方右之趣書付、御門下へ差出候。小頭受<sub>レ</sub>取之、迎札送札へ引合、人数相改メ於<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>相違<sub>レ</sub>は御門出入相通申候。

一御番頭、御加番方平日御城内御小屋之内、塵芥持出候掃除中間は、札廻之者平日之札を以相通り申候。其外御小屋方日用調物ニ罷出候中間、十人以上も出入札を以相通候。

一御城代之御家来は、右御定番、御番頭、御加番之御家来御門出入同断ニ御座候。

一下掃除之百性十人余、折節致<sub>二</sub>出入<sub>一</sub>候。此節は、中間小頭先達而大御番所へ人数断申達候ニ付、人数之断、御門下、舛形、張御番所三ヶ所へ申達、平日出入札ヲ以、人数相改相通申候。

一惣而武器、乗物、長持、葛籠其外之道具類出入共ニ相改不<sub>レ</sub>申候。但乗物は戸を明させ候而相通候。

一下座之節は、御城入御外出とも拍子木打、舛形<sub>マヌ</sub>口相知申候。

但夜中者七人番所も打込ニ一時代り、両宛不寝番相勤申候。

舛形御番所

- 一馬廻り 二人
- 一帳付 一人
- 一番足輕 六人
- 一下番中間 二人
- 一鉄炮 五挺 玉箱一荷
- 一 桐乱五
- 一幕 片

從<sub>レ</sub>是置付ル道具

- 一三ツ道具 一組
- 一熊手 二本
- 一棒 十本
- 一捕縄 五筋
- 一松明 五本

平日御門出入改之義、馬廻り何人与札を讀、次ニ罷出候十人足輕何人与答申候。其外出

入改様御門下同断。下座有レ之節は御城入御外出共、張御番所御門下方<sup>シヤウキ</sup>柝打候ニ付立

合候而、下座仕候。無<sup>二</sup>下座<sup>一</sup>之分、南仕切、北仕切御番所同断。

一御證文、御切手、口上書ニ而人数出入、迎札送札ヲ以相改通シ申義、御門下同断。

一終日御門出入書付、暮六前御帳大御番所へ差出、番頭受<sup>二</sup>取之<sup>一</sup>。

一宿次御状箱并ニ長崎<sup>御用物</sup>到来之節者、張御番所方通詞書来候ニ付、大御番所へ遣<sup>レ</sup>之、并長崎御

荷物入候節は、當番之馬廻り一人冠木御門之立合ニ罷出候。夜分は臺挑灯一張出<sup>レ</sup>之候。棒

突足輕兩人冠木御門扉両脇ニ罷在候。御荷物持運之人数相改、出入相通申候。昼之内は馬

廻立合ニ不<sup>二</sup>罷出<sup>一</sup>候。足輕之勤方、右同断。

但夜中足輕一人宛ッ不寝相勤申候。

張御番所

- 一徒士 三人
- 一番人足輕 六人
- 一下番中間 二人

外ニ御堀端立番中間一人宛ッ泊り申候。

御城入當日、鉄<sup>ツ</sup>鉋<sup>ツ</sup>五挺玉箱締候内、受取之節定候番人之外、大目付罷出候由。

置付御道具

- 一三ツ道具 一組
- 一熊手 二本
- 一長柄鎌 五本
- 一棒 拾本
- 一捕縄 五筋
- 一松明 七本

平日御門出入改之徒士何人与札を讀分、次ニ罷出候十人は足輕は何人与答申候。其外出入改様舛形御門下同断。

一下座之節、御城入之節は、柝打、舛形へ相知申候。

一御使者有<sup>レ</sup>之節は、御城代、御番頭、御加番方、御目付方へ何方方御使者有<sup>レ</sup>之旨、御使者之名、御音物之趣、通詞書ニ相認、舛形へ差越、舛形ニ而受<sup>二</sup>取之<sup>一</sup>、大御番所へ差越候。

一 所と御飛脚、或は當所飛脚宿方御状箱并御荷物等番所迄進來候節は、御城内先と之御小屋へ通詞書相認、舛形江遣、舛形方大御番所へ差遣之一、他所方來候御状、其外包物等御番所ニ而一切受取不レ申、御城内御小屋方受取之侍被ニ罷出一受取之被レ申候。

一 宿繼御状箱、長崎御用物到來之節、町御奉行方御状箱來候ニ付、其品ニ通詞書相認差遣之一候。長崎御荷物夜中到來之節、三箇四固迄は臺挑灯一張御荷物際ニさし置、番人足輕一人棒突附置、五固以上は臺挑灯二張御荷物之後方はニ附置申候。御城内へ入候節は冠木御門脇ニ棒突立番足輕兩人罷出、御荷物侍運之人數相改、出入相通し候。

但御荷物昼之内來候節も番人勤方右同断。

一 御金納之節、張御番所迄御納被レ成候御方方御金箱員數、侍人之人數書付、御番所へ持參、右書付舛形迄遣、舛形方大御番所ニ差遣之一候。御金入候節は棒突足輕兩人罷出、人數相改入申候。尤御番所ニ而御銀箱之員數書留メ申候。

一 外向御構之場所、御堀へ入落候坎、其外浮物等有レ之節は、御堀立番中間張御番所へ相達候ニ付、右浮物之品委(カ)細書付ニ相認、大番所へ差越候。

(付箋) 行倒レ

一 拾子酒醉行倒レ乱心者有レ之節、當番之徒士之内老人、大御番所へ罷出、番頭へ委細申達ス。

一 火事有レ之候節、火事番之足輕、御番所へ何方ニ煙相見へ候段致ニ注進一候ニ付、御門繼ニ大御番所へ申達候。追而火元見之足輕、御番所へ相届候ニ付、是又大御番所へ申越候。

但夜中は足輕一人ツ、不寝相勤申候。

大御番所

一 御城代御一判、地御役人御子息方御門出入御張紙一通。

一 御三判、御城入医師御定書一通。

一 御太鼓坊主家來御門出入札御定書老通、二三町人手代并家來中御門出入札御定書老通。

一 御定番御一名之御印形、六役与力同心御門出入之御定書老通宛。

一 御番頭御兩印御印鑑一枚、御加番方御銘と之御印鑑四枚、大御番所へ御差出被レ置候。右之御書付共、大御番所へ御差出被レ置候。

一 御城代、御定番、御番頭、御加番方、町御奉行、堺御奉行、御船手兩御目付、地御役人、御代官、右御衆中御鑑札公用役人方方徒士目付ヲ以大御番所へ差越候。番頭受取、徒士目付衆所之請取證文遣レ之候。即刻舛形當番之馬廻り老人、張御番所方徒士一人、御門下方小頭一人呼寄、右印鑑札三ヶ所へ相渡之一候。御門出入之訳共申渡候。

一 兩御目付、三月六日、九月六日大手口方御交代被レ成候。此節平常之通相替儀無レ之、人留メ仕迄ニ候。立番等出シ不レ申候。

一 兩御目付方他所へ御越被レ成候節、又は地御役人方江戸へ御下り候砌、御鑑札上候趣被レ仰出、公用役人方方徒士目付ヲ以申越候ニ付、舛形、張御番所、御門下、右三ヶ所へ申遣、何も御鑑札持參、番頭受取之、徒士目付へ相渡、徒士目付方御鑑札受取之印形、帳

面ニ為<sup>レ</sup>致申候。若御鑑札ニ御増印有<sup>レ</sup>之候而、御鑑札引替候節、受取渡右同断。

一御城内之御門出入札、若紛失之節、御城代へ御届御座候而、公用人方申来候。其節は、右札紛失之御方方目明三人、御門下、舛形、張御番所へ被<sup>ニ</sup>差出<sup>一</sup>候而、右之目明見合之上、御家来入申候。御番所番人者人数之高相改、札之義者目明断次第相通申候。

一御城外之御方、御門出入札紛失之節は、御届有<sup>レ</sup>之、公用役人方申越候。目明は無<sup>レ</sup>之ニ付、御門出入之義、御門下、舛形、張御番所へ番頭方早速申談、右之御方之札ヲ以は出入相留

メ申候。若御城内ニ罷在候者は、御城代へ相伺、御差圖次第<sup>ス</sup>第二仕候。

一御證文は、公用役人方方、徒士目付大御番所へ持参、番頭受<sup>ニ</sup>取<sup>一</sup>之。當番之物頭、大目付立合、御印鑑ニ引合、於<sup>レ</sup>無<sup>ニ</sup>相違<sup>一</sup>者、右之趣書写、御門下、舛形、張御番所へ遣置、迎札或送札見合、出入相済候而、右之書付御門下大御番所へ差越、出入相済候段、番頭江相達候。尤大御番所帳面ニ其趣書留申候。右御證文之趣は、二条御番衆方御合力米之御金為<sup>ニ</sup>御請取<sup>一</sup>御城内へ御出入之節は、御番頭御両印之御證文ニ而御通申候。御加番方方之御

證文、御在所或他所へ人数十一人以上被<sup>レ</sup>遣候<sup>カ</sup>、亦者御城外へ町用ニ罷出相煩當日御城入難<sup>レ</sup>成、

(付箋) 御構

町屋ニ一宿仕候者、翌日御呼入被<sup>レ</sup>成候節、或前日御構之場所御用之筋之義有<sup>レ</sup>之ニ付、役人御出申候町屋ニ一宿仕候者、翌日御呼入被<sup>レ</sup>成候節<sup>カ</sup>、又は御家来病氣ニ付、町屋へ被<sup>ニ</sup>差出<sup>一</sup>、養生被<sup>ニ</sup>仰付<sup>一</sup>候<sup>セツカ</sup>、乱心ニ而即死、病死、桶櫃乗物<sup>アツク</sup>被<sup>ニ</sup>御出<sup>シ</sup>被<sup>レ</sup>成候節は、御證文ニ其品申来、迎札送を以出入仕候。右出入無<sup>レ</sup>滞相済候而、御證文は徒士目付ニ相渡、公用方へ遣候。

但御番衆之御家来町用ニ罷出相煩、當日御城入難<sup>カタク</sup>成、町屋ニ一宿仕候而、翌日御呼入被<sup>レ</sup>成候節は、御番頭方御切手大御番所へ参候而、迎札を以入<sup>レ</sup>之、御番頭之御家来一宿出切<sup>キリ</sup>之者、御番頭之御家来方之断書ニ而、迎札を以入<sup>レ</sup>之、御番頭之与力之家来も家来ニ准シ、断書迎札を以入<sup>レ</sup>之。

一御番頭、御加番方馬落候而御城外へ出候節<sup>セツ</sup>は、御證文来出<sup>レ</sup>之。持人は平日之出入札を以廻シ之者相断候ニ付、御門出<sup>レ</sup>之。先前格承候處、御證文不<sup>レ</sup>来候而も相通儀も承傳候得共、近来御證文、御切手御<sup>ニ</sup>差<sup>一</sup>置<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>成候。

一乱心者御城内方御出被<sup>レ</sup>成候節者、牢輿ニ乗せ御出<sup>シ</sup>被<sup>レ</sup>成候。御證文御上屋敷大御番所へ

被<sub>レ</sub>遣<sub>レ</sub>之、改様右之通仕置<sub>レ</sub>之候。三ヶ所御番所御門脇ニ、當番之足輕、棒突兩人宛出ス之由承<sub>リ</sub>傳<sub>レ</sub>之候。

一科人御城外江(カ)被<sub>二</sub>差出<sub>一</sub>候節は、小手<sub>レ</sub>ニ而御出被<sub>レ</sub>成候。御證文御上屋敷より大御番所へ被<sub>二</sub>差遣<sub>一</sub>、改様三ヶ所御番所勤方右同断。

一手負之儀先格承<sub>レ</sub>之候得共、御城外江御出被<sub>レ</sub>成候義、相知<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>申候。

一御切手は御番頭方大御番所へ直<sub>二</sub>被<sub>レ</sub>遣候。右御切手持参之者、侍分之者ニ御座候得者、當番使役之馬廻<sub>リ</sub>罷出請<sub>二</sub>取<sub>一</sub>之、番頭へ相渡。又は御切手持参之者、足輕ニ而候得者、通詞番之足輕受取申候。右御切手番頭、物頭、大御目付立合、御印鑑引合、相違無<sub>レ</sub>之候得者、出入其外御證文之通右同断。御切手は大御番頭、御組頭并御番衆方御家来、江戸御宿所へ被<sub>レ</sub>遣候飛脚之者、御知行所之被<sub>レ</sub>遣候御家来、又は年季<sub>二</sub>被<sub>二</sub>召抱<sub>一</sub>候幼少之者、御城内へ御呼入被<sub>レ</sub>成候節、永之暇被<sub>レ</sub>遣候御家来等、御切手ニ其品申来、迎札送札ヲ以御門出入仕候。右出入相濟候而、御切手は御上屋敷へ差上申候。

一御番頭、御加番、御目付、右之御方御知行所方参候百性者、御證文御切手被<sub>レ</sub>遣、迎札送札を以、御門相通シ候。但御番頭方御切手は大御番所へ被<sub>レ</sub>遣候共、御上屋敷へ相伺御指

圖之上、御門相通申候。并大御番衆御知行所方参候百性御呼入候被<sub>レ</sub>成候節は御番頭方

御切手被<sub>レ</sub>遣候、右同断。

一御番頭方御切手共御番所へ被<sub>レ</sub>遣候節、平日通シ来候御文意之外ニ相違之品申来候共、御門相通申候而、早速御上屋敷へ申上候。

一御加番方江戸或御在所其他所江被<sub>レ</sub>遣候御家来十人迄は、御口上書ニ而從<sub>二</sub>御上屋敷<sub>一</sub>徒士目付持参、番頭受<sub>二</sub>取<sub>一</sub>之其趣書写、御門下、枳形、張御番所へ差出置、送札或迎相改御門出入相濟、御門下方右御口上書之写大御番所へ差出、番頭受取、其趣帳面ニ書留申候。右御口書は大御番所ニ差置申候様、老人已上は御證文ニ而迎送札を以出入右同断。

但御證文ニ迎札送札之訳ヲ書載<sub>セ</sub>参候。若迎札送札之訳ケ書落有<sub>レ</sub>之候得者、御先江

差戻シ認直シ候而参候。

一大御番頭御組与力同心又は御家来十人迄は、江戸其外へ被<sub>レ</sub>遣候得共、御番頭之御家来方断書御番所へ直<sub>二</sub>差越<sub>一</sub>、通詞番足輕請<sub>二</sub>取<sub>一</sub>之、番頭方ニ差<sub>二</sub>出<sub>一</sub>之候。其趣書写、御門下、舛形、張御番所へ差出候送札或は迎札見合相改、御門出入相濟、御門下方右御口上書之写大御番所へ差出、御番頭請<sub>二</sub>取<sub>一</sub>之、其旨帳面ニ書留申候。右断書は大御番所ニ差置申候。

組<sub>(イイ)</sub> 十一人以上は御番頭方直之御切手ニ而大御番所へ被<sub>レ</sub>遣、迎札送札を以出入相通相濟候而、右御切手御上屋敷へ上<sub>二</sub>ケ<sub>一</sub>之。

但御組与力者御家来も右同断。

一御三判御城入醫師之外為<sub>レ</sub>之病用<sub>一</sub>御呼入被<sub>レ</sub>成候醫師は御證文ニ而御上屋敷方大御番所へ来、番頭、物頭、大目付立合、御印鑑ニ引合相改、御門下、舛形、張御番所へ右之趣書

写、送迎札を以相通申候。日限之極メ有レ之候而、御呼入被レ成候節、御證文日限書載參候。日限之定無レ之、毎日御呼入被レ成候節者、其度々御證文參候而、迎送札を以出入相通申候。

但シ御三判御城入御醫師は御呼入被レ成候御方方迎送札ニ而出入相通申候。御三判御城入醫師御加番様へ御呼被レ成候節、其御家来方口上書大御番所迄来候而、迎送札ヲ以出入相通申候。西御番頭之迎札ニ而御呼入被レ成候得者、罷出候節も西

(付箋)

差出し西御番頭之迎札ニ而入、東御番頭

差出候西御番頭之迎札ニ而入

御番頭之迎札ニ而御番頭送札ニテ差出候儀は被レ相成一候。

一御番頭、御加番并御組頭方御同道ニ而御外出之節は、御番頭、御加番方方御供廻り何拾人之内何拾人者先達而出ル、何拾人は被レ召連一候与書付、御供番之侍大御番所へ持參仕候ニ付、使番之馬廻り罷出請取、番頭へ相渡候。三ヶ所御番所之右書付之趣を以、人数相改出入共相通申候。御番頭、御加番方、御組頭御通之節は、被レ召連一候御供之内方御供廻り何人与大御番所、御門下、舛形、張御番所へ御断有レ之、御通被レ成候。御城入之節も右同断。

一町御奉行、堺御奉行、御舩手両御目付方御城入御外出之節、御供之仁(カ)大御番所、舛形、張御番所へ御供何人与被レ召連一候段相断申候ニ付、使役馬廻り承候而、大御番所帳面ニ書留申候。

一地御役人方并御在番御役人方、御城入御外出之節も右同断。御主人御會釈被レ成候得共、下座薄縁ニ而直御時宜仕候而、番頭へ御供何人与相達候ニ付、帳面ニ書留申候。但右之御衆中御通被レ成候節、御供之断、舛形、張御番所ニ而相断候節、右番人御番所ニ其俣罷在承レ之候。御番衆跡御登之節、御城入之時、御家来断候得者、御使役出御直御断ニ候得者、番頭出ル。惣而御直参之御方、御番所之直御断ニ候得者、番頭罷出承レ之候。

一町御奉行御組与力同心并御家来、御蔵奉行方之手代并御家来、順ニ小掲之者、御太鼓坊主之僕、右者町御奉行之御判を以、御門出入相通候。

一御太鼓坊主六人

村(カ)藤十郎寺嶋藤兵衛

尼崎文右衛門寺嶋三兵衛

右者御三判御帳紙ニ而無札ニ而御門出入相通申候。藤十郎、藤兵衛手代并家来共は、御三判之札を以御門相通申候。

一御本丸御修覆之節、諸職人人足御呼入被レ成候節は、御番頭御兩判之迎送札を以、御門平日出入相通シ候。人数高之儀は其節御門下へ右札廻之者相届候ニ付、人数相断相通申候。一御加番方御城内御構之場所并御小屋へ諸職人御呼之節者、趣御口上書參候ニ付、公用役人方方番頭方へ差越候。右之趣書写、三ヶ所御番所へ申渡候。御呼入被レ成候御方方札廻之者迎送り札を以御門出入仕候。人数高之儀、御門下改様右同断。但御小屋へ御呼入被レ成候節、日限何日ト相極メ之義は、御口上書ニ御書ニ御書加被レ遣候。若日限相延候儀有レ之節は、追而御断可レ被レ成候旨、是又御書加被レ遣付、御極之日限之外、翌日入候節は張御番所ニ留置、公用役人迄申遣、御城代御差圖之上ニ而右諸職入申候。亦は日限御極メ無レ之

分は相濟候節、追而御断可<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>之候旨、御口上書ニ御書加有<sup>レ</sup>之、右出入相濟候節は札廻シ之者御門下へ今日切ニ而職人出入相濟候段相届申候。

一 御城代御構之場所ニ御破損御修覆有<sup>レ</sup>之節は、諸職人人足入候得共、破損役人より其趣申來御門下、舛形、張御番所へ其旨申達、迎送り之札ヲ以、御門出入相通申候。

一 從<sup>ニ</sup>江戸<sup>一</sup>宿次御状箱來候節は、町御奉行方御状箱張御番所迄來候ニ付、御門次ニ右御番所方差越候。即刻公用役人迄遣候。其節冠木御門之御鍵家老持參、公用役人老人并徒士目付同道、大御番所方番頭、大目付、舛形馬廻り一人立合、御門くゞり明<sup>ニ</sup>御状箱<sup>一</sup>徒士目付請取、公用役人へ相渡候。即刻御門へ、番頭海老を見届候。追付町御奉行之御返書御上屋敷方來候ニ付、御門次ニ其使へ相渡申候。

一 御鷹野鳥參候節、町御奉行方御状箱張御番所迄來<sup>リ</sup>候ニ付、御門次ニ大番所へ差越候。早速公用役人迄遣候ニ付、御上屋敷方家老一人冠木御門之御鍵持參、公用役人一人并徒士目付兩人同道、大御番所方番頭、大目付、舛形當番之馬廻一人立合、御門披<sup>レ</sup>之、御鷹野鳥家老受<sup>テ</sup>取<sup>テ</sup>之、右相濟、即刻御門へ<sup>レ</sup>之、町御奉行方へ之御返書、御上屋敷方來候ニ付、御門次ニ御使へ相渡シ候。右御番所番頭、大目付平服ニ而立合ニ罷出候。

一 京都從御諸司代宿次ニ而御状箱來候節も、町御奉行方御状箱被<sup>レ</sup>遣候。張御番所方大御番所へ差越候ニ付、即刻公用役人方迄遣候。追付徒士目付罷出、御門下方御状箱受取申候。追付町御奉行方へ之御報、御上屋敷方參候ニ付、御門次ニ御使へ相渡シ候。

一 長崎御用物夜半來候節、町御奉行方御状箱張御番所迄來候ニ付、通詞書ニ御荷物数持人之員数書付、大番所へ差越候。即刻公用役人方へ遣候。御上屋敷方家老一人、公用役人一人、徒士目付一人、大番所方番頭、大目付、舛形當番馬廻り一人立合、御門開<sup>レ</sup>之、御荷物は公用役人受取、序御多門江運入候。此節舛形方臺挑灯一張御門わきへ差出候。御荷物持人之人数馬<sup>(ウマ)</sup>冠木御門兩脇ニ棒突足輕兩人罷出、人数出入相改申候。出入相濟、御門へ、海

老ヲ番頭見届申候。追付町御奉行へ之御返書、御上屋敷方來候ニ付、御門次ニ差<sup>テ</sup>遣<sup>テ</sup>之候。但昼之内右御荷物來候節者、張御番所方通詞書ニ御荷物之高人数高相認、大御番所

へ差越候ニ付、公用役人方へ遣候。公用役人、徒士目付、同道ニ而罷出、御荷物受<sup>テ</sup>

取<sup>テ</sup>之、御多門へ入申候。尤立合ニは不<sup>ニ</sup>罷出<sup>一</sup>候。御門棒突足輕人数改様夜中同断。

大

御門之内、石垣之角ニ立番兩人罷出、御荷物御多門へ納候迄は人留仕候。

一 御金納候定日、市御多門之鍵、大御番所ニ有<sup>レ</sup>之候。小頭ニ相渡掃除申付、御金納候節、張御番所方御金高并御金箱之員数書付、大御番所へ差越候ニ付、舛形御番所へ申通シ、立番足輕差出候。大御門前、立番足輕出<sup>レ</sup>之、人留申付候。

但御金持運之者は、御城代、御定番之中間罷出、右持人御門下ニ而出入相改通シ申候。一 臨時御金出入之節は、前日公用役人方為<sup>レ</sup>知候ニ付、御多門掃除小頭ニ申付候。御金出入之節は、定日御金出入之通、立番足輕等右同断。

一 毎月市日二者、大御番衆、市御多門迄御出ニ付、右市日二者町人共〇

(付箋)

賣物之品と致し持参一候町人共町所

町処名書付、御上屋敷方兼而大御番所参候而有之候。町人共来候節は、張御番所、舁形  
ニ而人数相改、帳面ニ記シ入申候。大番衆市御多門へ御出候節者、公用役人方其旨大御番  
所へ為知候ニ付、御門下、舁形へ右之段申渡候。大御番衆御出之節は、御組頭御同道ニ而  
御出被成候より御城代火之元見廻りとして、徒士目付一人罷出候。外にいケ様之事有之  
候而も、此方方制スル事無之候。

一 追手御門御修覆之節は、公用役人へ申遣候。但諸々白壁等之落候儀坎、又は御番所向軒瓦  
杯落損、或諸道具等之損候節は、御破損役人へ番頭方申遣候。

一 御城内御修覆之節、御材木冠木御門くゞり通り兼候節は、御破損御奉行方御断有之由ニ  
而、公用役人方大御番所へ申越候。御上屋敷方家老冠木御門、大御門之御鍵持参、大御  
番所方番頭、大目付、舁形方馬廻り立合、片扉開キ申候。出入相濟候而、即刻右之人数立  
合、御門へ之。

一 御太鼓櫓下仕切御門片扉開き候節、大御番所方使役之馬廻り右御門之御鍵改致し持参一、當  
番之者頭へ相渡之、大御番所方大目付罷越立合、片扉開之、御出入相濟、立合御門へ、  
使役之馬廻り御鍵持参、番頭へ其旨相達候。

一 西御丸仕切御門片扉開候節は、大御番所方當番之者頭、大御門之御鍵致し持参一、西御丸仕  
切御門當番之馬廻り立合、片扉開之、出入相濟、御門へ、御鍵持参罷歸り、番頭へ其旨  
申達ス。

一 御太鼓櫓下仕切御門夜中通用之義、何方方申来候共其旨承届、早速御上屋敷へ申遣ス。御  
城代御下知之通相勸候。尤くゞり通行之義、御上屋敷へ外方用事有之候而は、御下知を受  
公用役人方くゞり明ケ通行可有之旨、申来候節は早束通用為致其趣即刻家老共へ申達  
候。但夜中急用ニ而右御門下方手紙状箱など通用之義申来候而、通用致させ

(付箋) 差而急用ニ而無之、明朝之用儀ニ而

即刻家老共へ申達候。夜中先へ通置申度由なと有之類共差留置、一先相尋候而、了簡之

上右御番所へ致し指圖一候。

一 西之御丸仕切御門、大手御門勤方、右同断。

一 御城外昼四ツ時過、大御番所當番之大目付見廻相勤、番頭へ申達候。

但大目付見廻り之外、昼之内御城内外足輕見廻りは無之候。

一 御堀へ人落候節、御堀立番中間、張御番所へ相達候ニ付、其旨大御番所へ申越候。尤破損  
役人方口も申遣候。御上屋敷御家老方へ番頭方申達候。張御番所へ番人足輕附置廻而、  
立番之足輕申付、張御番所方罷出候足輕者御番所へ引取申候。追而破損役人罷出受取申候。  
其節張御番所ニ兼而相渡置候絹木綿、綿入、帷子、上帯、下帯、其者着用之品と之通着せ  
替申候。右之趣も張御番所方大番所へ申越候。但死人浮上り候節は、張御番所方申越候ニ  
付、立番中間取上ケ置、破損役人方へ申遣候様致し差圖一候。御上屋敷家老方へ男女年頃之  
義等申遣候。立番等之儀右同断。

一御堀ニ生類又は筈、其外軽キものゝ類落有レ之節は、張御番所方其品大御番所番頭方へ申越候ニ付、取揚捨候様致ニ差圖一候。右之外長立候道具類落入有レ之節は、破損役人方へ申遣候。家老共方へも申遣候。立番足軽差出候義右同断。

一御城外御構之場所ニ捨子有レ之節、張御番所方男女年頃之義申遣、通詞書を以大御番所へ申越候ニ付、家老共方へ申遣候。尤破損役人方へ申遣シ候様ニ致ニ差圖一候。立番足軽之義右同断。

一乱心者、酒酔、張御番所辺へ来候節、大御番所へ申越候ニ付、家老共方へ申遣候。張御番所當番之足軽附置、荒立不レ申候様取斗、腰掛へ可レ遣旨申付候。近止而御上屋敷方御差圖之趣、張御番所へ申渡シ候。

但子細有レ之節は、物頭を遣致ニ吟味一、其趣御上屋敷へ申遣候。<sup>ツカワシ</sup>追而立合等も入候節は、大目付罷出候様申談候。

一御城之塵芥有レ之節并石垣之草取候ニ付、御ホリへ筏をおろし候断、大御番所へ相届候。

一御城内御構之御堀へ生類落候節は、破損役人方へ申遣、取上ケさせ候。家老共方へも其段之申遣候。

一御本丸方御道具市御多門まで運出候節、南仕切御門片扉開レ之候。尤立番之足軽差出、人留申付候。御道具持運候者、破損役人召連罷通候。

一冠木御門くゞり鉄物損シ候而御修覆有レ之、くゞり方出入難レ成節は、御門片扉開候。立番之足軽兩人扉之脇ニ附置、出入相ニ通之一候。

一御城内ニ御城代、御定番立合之御破損場所御修覆有レ之節は、御城代、御破損役人、両御定番御組御破損役与力之焼印鑑、御番所へ受取置、諸職人、人足腰札ニ而相廻シ不レ及出入致させ候様ニ御上屋敷方大御番所へ申来、其以後右之鑑札共、舛形、張御番所、御門下へ渡置、御門出入相通シ申候。亦者御破損御奉行御三人之御鑑札腰札斗ニ而札廻シ無レ之御門出入相通ス義も有レ之候。

但両御定番御組与力、御破損役兩人、御城代御破損兩人、右破損役四判之出入札ヲ以御修覆中御門相通シ候。

一御弦指遠江并俣半七郎御用之節は、御弓奉行御両判之札ニ而出入可ニ相通一旨、御上屋敷方大御番所へ申来、三ヶ所御番所へ申渡、御門出入相通候。

一大御番衆へ奉公人女召来入来候。是は御切手ニ不レ及、迎札ニ而入、誰様之御組誰様之振袖之女留袖カ女女食□坎下女坎申、其品を帳面ニ記置候。何月何日送札ニ而出ル与書付置候由承傳候。

下ケ札 如レ此記有レ之候得共、無レ程  
御番衆へ女出入等無レ之事

一毎年御番所煤拂、十二月十三日足軽中間罷出、昼之内南仕切、北仕切御門御番所、勝手次第ニ致ニ掃除一候。大番所、七人番所は昼之内七ツ過方致ニ掃除一候。舛形御番所、張御番所は札改ニ而有レ之ニ付、暮御門メ候舛形へ御上屋敷方足軽中間罷越致ニ掃除一候。

一正月松飾之義は、押詰ニ公用役人方追手御門松飾之義御破損御奉行方御断有レ之由、大御番所へ申来候。尤下役人諸御番所へ致ニ松飾一候段、相断申候。

一正月五日之内、番頭方馬廻帳付并足輕小頭迄麻上下着用、但番頭、物頭、大目付はのしめ着用、七日十五日常服ニ而相勤候。

一五節句者番頭方馬廻帳付足輕小頭迄麻上下着用、但番頭、物頭、大目付、七夕、八朔、白帷子着用、七ツ時方番士不<sub>レ</sub>残着服ニ而相勤申候。

一追手御番所七ヶ所燈油之義、從ニ公儀一相渡候左之通。

短夜之節

有明 三ヶ所 一ヶ所ニ 五勺宛

亥刻迄 四ヶ所 一ヶ所ニ 貳勺宛

右七ヶ所油合一夜ニ有亥ノ刻迄ニ合三勺宛

但一ヶ月ニ 大月 六舛九合宛

小月 六舛六合七勺ツ、

右者二月朔日方七月晦日迄

長夜之節

有明 三ヶ所 一ヶ所 七勺宛

亥ノ刻迄 四ヶ所 一ヶ所 三勺宛

右七ヶ所油合一夜ニ有明亥ノ刻迄ニ合三勺宛

但一ヶ月 大月 九舛九合

小月 九舛五合七勺

右者八月朔日方翌正月晦日迄

右之通、從ニ公儀一相渡申候。御用達油や上手代腰掛迄致ニ持参一候。當番番頭、證遣十人者ニ為ニ受取一候。

油手形認様左之通

請取申油之事

油合何舛何合

右者大坂御城追手御門御番所七ヶ所之内、有明三ヶ所亥刻迄四ヶ所、當亥十月大之分灯油燈心共ニ受取申所仍而如<sub>レ</sub>件

年号月

安藤對馬□内

誰印

薩摩屋九兵衛殿

右之通程付(カ)紙ニ認遣ス。

八月御交代四日青屋御加番追手方御城入ニ付勤方

一八月朔日、四御加番、市正曲輪御石火矢受取并小屋見分之御家来、翌二日御城内へ御入<sub>レ</sub>候ニ付、先達而合證文御使者ヲ以、張御番所迄被<sub>レ</sub>遣、御上屋敷方取次罷出受<sub>レ</sub>取之一、追而右之證文大御番所へ徒士目付持参、番頭受取置、翌二日、四御加番方御家来、張御番所

へ御城入之御證文銘と持参ニ付、御上屋敷方取次罷出請<sub>レ</sub>取之<sub>一</sub>、追而右之御證文御上屋敷方来候ニ付、前日請取置候合證文ニ引合、於<sub>レ</sub>無<sub>ニ</sub>相違<sub>一</sub>者御門下、舛形、帳御番所へ申遣、御門出入相通申候。右御家来御用相済、御城外へ罷出候節、御加番方御家来一人宛大御番所へ参候而、前日之合證文并當日持参之御證文共ニ一通宛、御加番方御家来へ銘と番頭方相<sub>レ</sub>渡之<sub>一</sub>候。

一同四日、青屋口御加番御交代ニ付、前日御迎入御呼入<sub>レ</sub>候御證文從<sub>ニ</sub>御上屋敷<sub>一</sub>方参候ニ付、書写、三ヶ所御番所へ遣置候。人数入候節は御加番方目明之侍三人、御門下、舛形、張御番所へ被<sub>ニ</sub>差出<sub>一</sub>、腰札ニ而人数相改入申候。尤立番足輕出<sub>レ</sub>之候。

一同四日、御加番追手口御交代ニ付、固之人数、御城内ニ入候人数は、家老共方之證文、前日張御番所へ差出置、手札持参、大目付相改、御城内へ入申候。御城内外固、或武器方、諸士、徒士、足輕、中間、臺挑灯等之儀、委細繪圖ニ有<sub>レ</sub>之候。右固メ候而大御番所迄致<sub>ニ</sub>案内<sub>一</sub>早速御上屋敷へ申遣し候。以後御城代御番所へ御出、土橋先之固メ御見分ニ御出、追付御城入、西御目付方へ御使者被<sub>レ</sub>遣、早速御越、城外固メ御見分して、土橋先迄御出為<sub>ニ</sub>御案内<sub>一</sub>家老一人御先へ罷立候。

一御城代、兩御目付、大御番所御着座被<sub>レ</sub>遊候而、番人不<sub>レ</sub>残下薄縁へ下罷在候。舛形も右同断。

一夜之内七ツ時過、御加番方小屋受取之御家来、張御番所迄御證文持参ニ付、舛形へ差越候。舛形ニ罷在候番頭受<sub>レ</sub>取之<sub>一</sub>相改、大目付ニ相渡シ、大御番所へ右之證文致<sub>ニ</sub>持参<sub>一</sub>、大御番所當番之番頭、物頭相改、御證文は大御番所ニ差置、大目付は舛形へ罷歸り候。冠木御門家老、番頭、大目付、舛形當番之馬廻り一人、立合開<sub>レ</sub>之、右人数右御家来相改入申候。御小屋迄之為<sub>ニ</sub>案内<sub>一</sub>足輕一人相添遣候。

一明六ツ前、登り御加番土橋先迄御越、御扣御座候旨、張御番所迄御使者来、早速大御番所へ申越候。

一明六ツ例之刻限方御太鼓早ク打可<sub>レ</sub>申旨、御太鼓坊主方へ御差圖有<sub>レ</sub>之候。此使、通詞足輕遣候。

一明六ツ打切、御門開<sub>レ</sub>之、公用役人伺<sub>レ</sub>之、家老、番頭御鍵為<sub>レ</sub>持、大御門江罷出候。番頭直ニ舛形へ罷在候番頭之冠木御門開<sub>レ</sub>之、冠木御門者家老、番頭、大目付立合、即刻開<sub>レ</sub>之候。

一明六打切、青屋口下り御加番へ御人数御纏出候様、御使者被<sub>レ</sub>遣、人数段と纏出、畢而右御加番大御番所へ御出有<sub>レ</sub>之、熨斗出、御挨拶相済候而、御外出被<sub>レ</sub>成候。

一登り御加番ニ御人数御纏入被<sub>レ</sub>成候様ニ御使者被<sub>レ</sub>遣、御人数段と纏入、朋勢為<sub>ニ</sub>案内<sub>一</sub>足輕一人相添罷越候。人数入候而、右御加番御城入被<sub>レ</sub>成候。為<sub>ニ</sub>御案内<sub>一</sub>徒士目付一人土橋

中程迄罷出、御供番へ右之趣申達、御先へ<sub>レ</sub>立申候。大御番所へ御出、熨斗出、御挨拶

相済、御小屋へ御越被<sub>レ</sub>成候。御案内、右徒士目付勤申候。家老、番頭、海老為<sub>レ</sub>持、大御門へ罷出候。舛形ニ罷在候番頭へ直ニ申談、冠木御門<sub>レ</sub>させ、大御門即刻<sub>レ</sub>之、番頭

海老相改、御城代、両御目付、大御番所御立被<sub>レ</sub>成候。冠木御門者家老、番頭、大目付立合<sub>メ</sub>之。

一 右御加番御城入相濟候而、御供之内、人数御在所へ御戻シ被<sub>レ</sub>成候ニ付、御證文御上屋敷へ参、追付大御番所へ徒士目付持参、番頭請<sub>テ</sub>取之<sub>一</sub>、御門下、舛形、張御番所へ書写遣置、人数出候節は目明侍三人、御門下、舛形、張御番所へ被<sub>ニ</sub>差出<sub>一</sub>、腰札ニ而御門出<sub>レ</sub>之候。此節、大御門、冠木御門へ立番足輕兩人宛罷出、人数改メ相通候。

一 右御加番、御荷物運入候ニ付、御證文是又大御番所へ御上屋敷方徒士目付持参、番頭受<sub>テ</sub>取之<sub>一</sub>、三ヶ所御番所へ写遣置、目明之侍<sub>力</sub>罷出、腰札ニ而目明之侍見合次第、御門出入相通候。

一 右御加番方御印鑑、御鑑札、御上屋敷方徒士目付持参ニ付、番頭受取、御門下、舛形御番所へ相渡候。

一同五日、中小屋御加番御交代ニ付、御迎人追手御門方入候ニ付、御證文御上屋敷方来、書写、三ヶ所へ遣置候。目明之侍被<sub>ニ</sub>附置<sub>一</sub>、腰札ニ而相改、人数入<sub>レ</sub>之。

一 中小屋御加番方御印鑑、御鑑札、徒士目付持参。御印鑑は大御番所差置、御鑑札は三ヶ所御番所へ相渡候。

一同五日、鷹木坂御加番明六御交代ニ付、御迎人入候ニ付、目明腰札御門出改様右同断。

一同六日、東御小屋御番頭明七日交代ニ付、御迎人御呼入、目明腰札御門出入改様右同断。

一 鷹木坂御加番方御供之人数御番所へ御戻ニ付、御證文御上屋敷方来、目明腰札御門出入改様右同断。

一同七日、大御番衆明八日御交代ニ付、御迎人御呼入、御組頭之御證文、大御番衆御銘と御印有<sub>レ</sub>之、御番頭御表印御證文御上屋敷方徒士目付持参、番頭受取書写、三ヶ所御番所へ遣置、大番衆方御迎人御呼入、御銘と御切手御組頭御表印ニ而壱通宛大御番所へ持参、使役之馬廻り受<sub>テ</sub>取之<sub>一</sub>、番頭へ相渡、者頭、大目付立合、右御一紙御證文ニ御印鑑引合相改、大御番衆之御切手は大御番所ニ留置、翌朝御組頭へ家老直ニ相渡ス。

一 大御番所番頭判鑑、先達而三ヶ所御番所へ遣置、大御番衆御名并御迎人何人与書、番頭致<sub>ニ</sub>判形<sub>一</sub>、御番衆之御家来ニ相渡、張御番所、舛形番人ニ被<sub>ニ</sub>見せ<sub>一</sub>御門下ニ右之書付差置候様申付遣候。

一同八日、大御番衆御番代ニ付、大御番所へ家老壱人麻上下ニ而罷出、徒士目付一人相詰候。

一 固メ之人数、明七半時過中屋敷へ相揃、纏出シ、御城内へ入申候。立番足輕は家老證文先達而張御番所へ出置、手札持参ニ付、張御番所ニ而大目付相改、御城内へ入申候。固メ之式、諸士、足輕、臺挑灯之儀絵圖ニ有<sub>レ</sub>之。

一同八日、御番衆御番代ニ付、御外出并御城入之御番衆、上下何拾人与有<sub>レ</sub>之御證文ニ通、御上屋敷方徒士目付持参、番頭受<sub>テ</sub>取之<sub>一</sub>、者頭、大目付立合相改書写、三ヶ所御番所へ遣置、御番衆へ、明六打切候而御勝手次第御外出有<sub>レ</sub>之様ニ御口上、徒士目付へ家老申渡遣候。追付御家来一行ニ而御城外へ罷出候。右相濟候而、御城入之御組頭へ、御勝手次第御城入有<sub>レ</sub>之様ニ御口上、是又家老徒士目付へ申渡、追付御家来之合一行ニ而御城内へ入候。

此節朋勢案内足輕一人差出、人数入済、御主人は踏<sup>(ト)</sup>方御城入被<sup>レ</sup>成候。

一 御番衆御番代之節は、大御門、冠木御門は片扉開<sup>レ</sup>之、明六打切、大御番所<sup>ヲ</sup>家老、番頭大御門江罷出、片扉開キ、直ニ冠木御門へ罷越、舛形加番罷在候大目付立合、冠木御門片扉為<sup>レ</sup>開、家老、番頭は大御番所へ直ニ引取、大目付は舛形ニ罷在候。御番代相済、御門へ之義立合右同断

但御太鼓櫓下御門は、前<sup>ト</sup>方両扉開<sup>レ</sup>之、右御門御鍵は大御番所<sup>ヲ</sup>使役之馬廻り持参大御番所當番大目付罷出、物頭与立合、明六ツ打切、両扉開<sup>レ</sup>之候。御番代相済、御門へ立合等之義右同断。

一九日、御番衆御番代ニ付、勤方右同断。

二十日、右同断。

二十一日、右同断。

但御番頭、明十二日御交代ニ付、御迎人御呼入ニ付、御證文来候。人数入候勤方、四日同断。

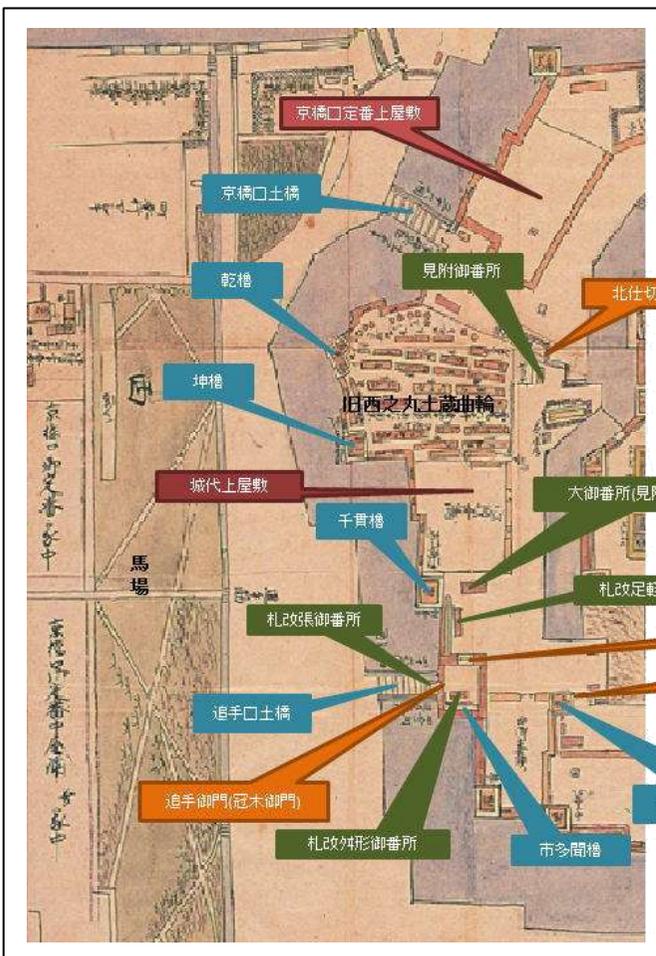
一 十二日、御番頭追手方御交代、御人数方御先へ御城入被<sup>レ</sup>成候。大御番所へ御出、御城代御差圖之上、御人数被<sup>ニ</sup>纏入一候人数入仕廻、御番所御立被<sup>レ</sup>成候。勤方固メ之式四日同断。

但御上屋敷表御門立番者頭并足輕共無<sup>レ</sup>之、御上屋敷表長屋角方御堀端迄立切足輕十人罷出候。北仕切御門ニ加番之者頭并立番足輕無<sup>レ</sup>之候。南仕切御門之勤方右同断。

一 御番頭御城入相済、御供之人数御在所へ御戻ニ付、御證文来、者頭、大目付立合相改書付、三ヶ所御番所へ遣置、人数出候目明シ腰札人数改様四日同断。

一 右大御番衆御在役之御書付、御番頭御両印之御張紙、御上屋敷方徒士目付持参、番頭請<sup>テ</sup>取之<sup>一</sup>書写、御門下、舛形、張御番所ニ差置候。右勤方、先格之趣如<sup>レ</sup>此御座候以上。

# 徳川大坂城の構造



※城内屋敷(小屋)の配置  
 ■ 行政官・三口(大手・京橋・玉造口)守衛  
 ■ 大坂城警備担当

道修町三丁目文書 雑書 (三二八、二九二、二四八)

文化元子年七月ヨリ御支配御勘定 太田直次郎様御宿一件 道修町三丁目  
文化元子年七月ヨリ  
御支配御勘定 太田直次郎様御宿一件 道修町三丁目

文化元甲子八月十五日卯中刻御着、同十八日卯中刻御出立  
御勘定大田直次郎様上下七人御用宿 御逗留中諸入用一件

〈覚 四丁省略〉

文化元甲子八月

御勘定大田直次郎様御宿中料理献立控

八月十五日朝御着

献立

膾 赤貝 若根 きくらげ

汁 花海老 かいわり

平 鯛切身 湯は 麩

焼物 いな背ひらき

膾御上斗

此代十七匁式分五厘

但しめしとも

同中飯

汁 かもうり すり胡麻

茶碗 はもあん平

御上斗くわし椀 たいらけ 松たけ

焼もの あじ塩焼

此代十五匁四分五厘

御附之御酒

雑煮 のしもち 平かつを 青こんぶ

硯蓋 かまほこ 海老 玉子 からたけ はしかみ

御上計木具

吸物 茂魚 みる

大鉢 鯛濱焼

同 作り身

井鉢 したしもの

ㄨ 此代廿九匁九分

善部

膾 すゝき 岩たけ 大根白髭

汁 しゅんさい 赤貝

香物 なら漬芥子 大こん

平 玉子すりみ かふら しいたけ

御上斗菓子わん 鯛骨葛きり うと 松露

焼物 鯛塩焼

御上者中るい

ㄨ 此代廿六匁六分

同十六日朝

御上斗猪口 百合根 にくあへ

汁 あらい豆腐 のり

平 こく□□□□ 海老 長いも やき麩

焼もの はも骨切

ㄨ 此代拾壹匁

同 中飯

御上斗猪口 たち魚作り身 海そうめん

汁 かいわり とうからし

平 はもてんふら ふき 松たけ

焼もの 鮎付丁焼

ㄨ 此代十三匁三分

同 夕飯

御上斗向 はもてんかく

汁 身しゝめ めかぶ

くわしわん こんふ ほら 百合根 岩たけ

焼もの きすこ忒疋つゝ いたり附

ㄨ 此代十一匁三分

同十七日朝

御上斗猪口 煮梅 砂と汁

汁 根いも すり胡麻

坪 ししか 玉子衣うけ 麩

焼もの 小たい

ㄨ 此代十四匁壹分

一寸御酒御上斗これは先格無候へとも少々存寄にて

此代五匁六分

同 中飯

上斗猪口

汁 はもすり流 たゞき菜

平 魴 大こん 岩たけ

焼もの めしろいり附

此代十四匁百分

同 夕 御出立

膾 作り身 くわつら 海そうめん

汁 身蛤 もそく

香物 なら漬 大こん

平 鯛切身 松たけ 長いも

御上斗御菓子椀 しんしよ するめ

焼もの 鯛塩焼

此代式十一匁五分

御出立 酒之部

硯蓋 花海老 玉子厚焼 はもてんかく 松たけ たこ

小鉢 魴切焼

吸もの 味噌 ほしぼら かんさらし

鉢 御上鯛切身 中いな 下たち魚

吸もの 胡麻 すゞき 白髯こんふ

鉢 したしもの

吸もの 松たけ

鉢 玉子 かまほこ ちから梅

此代四十二匁七分

御酒殊の外のはすみゆへ雑費不<sub>レ</sub>出 依<sub>レ</sub>之而吸もの鉢有 先格より餘分ニ相出候事

同十八日

猪口 はも 木うり

汁 とうふ 浅草のり

平 やき鯛 かもうり しいたけ

焼もの なし

中下之分猪口ニ木うり酢あへ

此代九匁三分

但し飯代一度上之客右式さら内々付込有<sub>レ</sub>之也 會所へ書入置も木者不<sub>二</sub>相用<sub>一</sub>

蓋

右之通、首尾能御出立被<sub>レ</sub>遊、目出度、重疊<sub>く</sub>  
御見立

中橋町境ニ柴屋忠介 小西佐兵衛 大と屋新右衛門

會所表迄 鳥飼屋檜藏 同 惣七

其間迄 あふら屋藤兵衛 ふた屋忠兵衛

通候故如<sub>レ</sub>此ニて十二まで者不<sub>レ</sub>行 右ニ候町代惣代名札ヲ以下役与兵衛ヲ遣ス

追而

御勘定方、寝ほけ先生とて高名之御方ゆへ、取持之衆中一統いろくくと骨ヲ折、書を賞望いたし各申受候。右ニ付御見舞人多、客来たへ不<sub>レ</sub>申事故、酒等いかふはすみ申候而、酒代殊之外餘分与相掛り申候事。

別而小にし左兵衛、書を殊之外せふり被<sub>レ</sub>申、餘分にニ被<sub>二</sub>申受<sub>一</sub>候。依<sub>レ</sub>之而氷豆腐百、錢別ニ被<sub>二</sub>差出<sub>一</sub>候

追加

右酒宴之節、誠ニ敵之様ニ泉屋新兵衛といふ町人の、腹に何もなきのうれん大順才者老人参、めつたむしやうに黒き顔して道三町人共ははるか下ニ見て、酒計スハくくらしい候ゆへ、懷中紙入は落さぬやうニ首へひもかけ居候。有時ニ

業平と背中を合して寒さかな

然ルに、其後夜客来し内ニ、かぶらは、又はばたとやらいわん阿蘭陀いしや一座ニて、右ばた絵一枚取あげ見るニ、右の和泉新、夫はなんでこさると尋ニ、是はきぬたエ、成(取)程といふ様成(取)。丸<sub>ヲ</sub>會所清六同様之もの也。ケ様なものは重而見付次第、有合之棒ニてた<sub>く</sub>きふせ、御宿中のはらいせいたすもの也。穴賢<sub>く</sub>

惣會所之書出シ 下書之写

覚

一 百七十式匁式分 御上下七人八月十五日朝より十八朝迄御賄料

但し御着御出立まで御老人前式匁三分宛 平日者老人前式匁宛

一 三匁 のし代

一 七十四匁 御上絹夜具三帖 蚊帳三張 寝こさ一枚 下夜具者老帖 勝手方夜具六

帖かりちん

一 六十式匁 御宿前に人足雇ちん

一 四十五匁四分 御逗留中油ろうそく 炭薪茶代

一 四十一匁式分 飯湯殿取繕風呂かりちん 其外所々取繕入用

一 十八匁 御宿入用處新ニ相調老人払損候

ノ四百式十二匁八分

内金壺両 御宿料上下置也

代六十三匁八分

残り三百五十九匁

右之通扣置候事

八月廿日

年寄 柴屋忠介

月行司 近江屋藤兵衛

小にし左兵衛

年中 ふた屋半衛門

とり養屋惣七

ふた屋忠兵衛

鳥飼屋檜蔵

助役

文化元子年八月

御宿楊御借物之留

道修町三丁目

覚

一 掛あんと 近江屋藤兵衛様

一 上あんと 式本 大□□伊兵衛様

一 掛あんと 壺ツ 右御同人

一 上たはこ盆 式ツ 近江屋藤兵衛様

一 掛軸 一箱 近江屋藤兵衛様

一 袋入花生 右御同人

一 手拭かけ箱 右御同人

一 箱入料紙箱

同 并硯箱 近江屋藤兵衛様

一 春□木具 大式

小壺 右御同人

一 御刀掛ケ 右御同人

一 箱入柳菓子盆 壺 右御同人

一 手たらい 壺 鳥飼屋惣七様

一 刀掛二 絆屋深左衛門様

文化元子年八月

道修町三丁目 年行司

御宿掛り買物帳

覚

七月晦日 一 並粉 代九匁 九束

一同 一 竹くき 代五 五合

一同 一 手間 代弍厘 半人

八月朔日 一 榎粉 代七匁 五束

一同 一 並粉 代三匁 三束

一同 一 竹くき 代壹匁 壹升

一同 一 手間 代四匁 壹人

八月二日 一 竹くき 代五 五合

㊦ 檜皮屋太郎兵衛

一同 一 木賊茶吞茶碗 代三匁四 十

一同 一 大ちびん 代壹匁弍 壹

一同 一 中ちびん 代弍匁五分 壹

㊦ 善屋平兵衛

八月六日 一 本尺廻り長弍間半三〇留り 代十五匁六分

一同 一 弍丁尺廻り長弍間半割留り 代七匁九分

一同 一 弍丁同弍間半割留り 代五匁八分

一同 一 壹丁本尺弍間弍尺

代三匁六分

⊗竹屋甚右衛門

八月七日

一 沓間すたれ 代三百五十文 貳枚

一 雪隠窓すたれ 代百文 沓一枚

⊗四百五十文 葭屋善兵衛

八月五月初

一 手傳 沓人 家根繕ひ

同七日

一 同 沓人半 仲庭しつくい 惣仕替

同八日

一 同 貳人

同九日

⊖ 同 三人 十日 貳人

九人半

朔日より二日四日 五日 六日

一大工 沓人 半人 沓人半

一 半人 同八日 半人

⊖ 沓人

一 次六郎兵衛障子張 沓人

同六日 半人 同八日 半人

但しなんと類腰張用とも

⊗貳人

⊖美の紙 沓匁六分かへ 沓束 代拾六匁 紙屋亀太郎

〈以下五丁略〉

文化元年子年八月 掛り役人 鳥飼屋藤兵衛

小にし佐兵衛

御勘定大田直次郎様御用宿之節會所普請方諸費物一件記レ之

△以下寛二丁略▽

別紙

御證文式通写遣<sub>レ</sub>之条可<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>其意<sub>一</sub>候以上

子七月

大田直次郎

人足三人馬三疋從<sub>二</sub>江戸<sub>一</sub>肥前長崎迄、上下并九州中國筋村々之内廻<sub>レ</sub>村御用中、幾度茂可<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>之、是者御用二付大田直治郎罷越付而相渡申候者也

文化元子七月 采女印

二

大田直治郎持参之御用書物、長持忝棹從<sub>二</sub>江戸<sub>一</sub>肥前長崎迄、上下并九州中國筋村々之内廻<sub>レ</sub>村御用中幾度急度可<sub>二</sub>持参<sub>一</sub>者也。

子七月

采女印

覚

御證文

一 人足三人

一 馬 三疋

同忝疋者人足三人代ル

外 賃人足三人

右者大田直治郎儀、肥前國長崎御用交代ニ付、明廿五日明ケ六ケ時江戸出立被<sub>レ</sub>致候間、書面之人馬之

三

道中無<sub>レ</sub>帶差出、賃錢之分者御定賃錢請取、餘計之人馬一切差出申間敷候。

尤川越渡船場等者前後宿々申合、差支無<sub>レ</sub>之様可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>致候。此先触早々順達、伏見宿より大坂銅座江可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>相届<sub>一</sub>候。以上。

子七月廿四日

大田直治郎内 長谷川丹治 印

品川宿より 東海道筋 大津 京都廻り大坂迄

宿々問屋年寄中

泊附

七月廿五日 神奈川

四

同廿六日 藤沢

同廿七日 小田原

同廿八日 三嶋

同廿九日 蒲原  
八月朔日 府中  
同二日 金谷  
同三日 見附  
同四日 白須賀  
同五日 岡崎  
同六日 宮  
同七日 関  
同九日 石部  
同十日 大津 京都廻り伏見  
（以下覚一枚略 混在カ）

長崎御交代 御支配勘定方 太田直次郎様

同 十一日 乗船 大坂着

追而上下被<sub>二</sub>罷越<sub>一</sub>候。泊宿<sub>二</sub>而者宿老軒申付置、所有合之品を以相賄、馳走ケ間鋪儀一切被<sub>レ</sub>致間鋪候。以上。

差上申一札之事

一此御触書老通、昨三日夜天龍川端迄御着被<sub>二</sub>遊下<sub>一</sub>候處、出水仕夜越難<sub>レ</sub>仕、今四日卯下刻御渡船仕候。為<sub>レ</sub>其一札差上申候。以上。

子八月四日 □州年寄

天竜（カ）

太郎右衛門

太郎兵衛

乍恐口上

長崎御交代御支配勘定役

大田直次郎様

右御宿此度西會所へ被<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>奉<sub>レ</sub>候。乍<sub>レ</sub>恐書付を以御<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>申候。以上。

文化元子年七月十三日 紙屋忠助

御東

御支配 道三

御東御請役

□永喜弥太様

天草□御交代

小川喜一郎様

右御三人様とも江戸表當月廿過之御出立

乍恐口上

御支配御勘定方

太田直次郎様 御上下七人

右者就<sub>二</sub>御用<sub>一</sub>從<sub>二</sub>江戸表<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>御登遊<sub>一</sub>候<sub>二</sub>付<sub>一</sub>、先月十三日丁内かい所御宿被<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>仰付置<sub>一</sub>  
一今卯中刻被<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>御着遊<sub>一</sub>候<sub>二</sub>付<sub>一</sub>乍<sub>レ</sub>恐此段御断奉<sub>二</sub>申上<sub>一</sub>候。以上。

文化元子年八月十五日 道修町三丁目年寄

紙屋忠助

御奉行様

〈以下覚一枚略〉

— 坤の部 —

小林 孔

(大阪城南女子短期大学教授)

岸本 悠子

(立命館大学大学院博士課程後期)

天保の末から明治期のものとはいえ、この時期の俳諧一枚摺が、

当時の人の手でまとめられて現存する例は非常に珍しい。標記の『萬色一瞞』(朝日新聞文庫 226・3―1)は、そのときに趣向を凝らし、季節や人生の節目などに俳人間で配布された一枚ものの摺物を、大きさと年次によって編成した七分冊の総称である。それぞれの内訳を寸法(表紙部分を測定、単位は糎)、枚数、年次の順に記せば、

乾三冊

第一冊 縦41・5×横27・5

167枚

嘉永六年至安政五年

第二冊 縦39・0×横27・8

72枚

天保十四年至弘化二年

第三冊 縦40・5×横28・0

211枚

弘化三年至嘉永五年

坤四冊

第一冊 縦19・6×横25・7

136枚

天保十一年至天保十三年

第二冊 縦18・8×横25・4

176枚

天保十四至弘化二年

第三冊 縦22・2×横29・8

115枚

弘化二年至明治六年

第四冊 縦20・6×横28・0

223枚

嘉永五年至安政三年

の構成である。乾・坤七冊の各分冊番号ならびに収録枚数によれば、年次を逐って一定量ごとに分冊化したものではなく、明治六年以降のある時期に、まとめて編集したものであろう。ただ、各分冊内の一枚摺の配列順に、およそ誤りらしきものがない点(月、季節が前後することはあるが、これは編集上の取り合わせによっても生じた可能性がある。この編集については後述する)、飛来当時から年度ごとに分類、整理がなされていたのであろう。実際に一枚摺を受け取り、その一枚一枚に目を通した当事者にのみできる編成といえばよいか。

右の三十四年にわたる都合一〇〇枚の一枚摺を取捨し、編集した人物が松蔭こと岸田素屋(そおく)である。名を禮助という。天保期には梅室門となり、やがて大坂では花屋庵鼎左に次ぐ俳人大家の列に加えられる。後に市中南農人町一丁目に住居し、南組惣会所の

執務を行なう惣年寄となった。公人としても著名な人物で、したがって交流は俳諧ひとつをとつても広範に及ぶ。文化十年（一八一三）に大坂で生まれ、明治十一年（一八七八）十二月二十一日に六十六歳で歿している。一枚摺の年次をここに照合すれば、素屋の数え年二十八から六十一歳までの期間となり、おおよそその俳歴とも重なってこよう。先に『萬色一睨』の編集時期を明治六年以降と記したが、翻つて考えれば、素屋の生まれた文化十年は癸酉（みずのととり）の年で、この干支は明治六年で一巡（いちじゅん）する。つまり、編成・編集の動機が、自らの還暦を記念するところに端を発していたのではなかったか。ちなみに、翌明治七年には松蔭の号を門人の素梅に譲与したという（明治七年七月廿九日付唸風宛素屋書簡・加藤定彦氏編『明治俳壇消息抄』・立教大学 日本文学 第九十九号・二〇〇七年十二月）。

俳諧の一枚摺は、その時どきの挨拶や披露の役割を終えると、再び顧みられる機会の少ない当座性を強く持つている。しかし、一〇〇枚におよぶ一枚摺が、長期間にわたって集積され、これを鑑賞用にまとめてみれば、それ自体稀有な発想として衆人の目をひきこつた。また、一枚一枚を開き見る後人は、その多様な趣向にも目をひきこつられ、一睨（いちじゅん）の体験を余儀なくされる。

編集にあたっては、乾の三冊に全紙大および縦半裁（一部例外がある）の一枚摺を収め、全紙は二ツ折、縦半裁大は裏面（の隅）を糊で貼り合わせ、袋状に表裏一丁の体裁で綴じられる。坤の部四冊には、横半裁大をはじめ、四裁、六裁等の小判が綴じ込まれている。横半裁大は二ツ折、四裁以下の一枚摺は同じく裏面に糊が用いられ

貼り合わせて袋状の形態とされている。六裁以下の小判は、ときに貼り交ぜの状態で綴じられる。したがって、四裁以上の判型では、裏面の情報採取することもできる。なお、全七冊すべてに反故紙（一枚摺の袋が裏打ちに用いられている場合もある）を再利用した原表紙がかけられている。

さて、二ツ折にされた一枚摺の多くは、折り目が経年のスレで損傷し、二句程度が判読できないといった状況にある。同じ摺物が他にも存在し、照合の機会を得れば、この不明箇所はたちどころに埋めることができるが、現時点ではいまだその機会に恵まれていない。目録中の同一事例についてお気づきのことがあれば、是非ご教示を賜りたい。なお、本目録稿に掲載した書誌事項についての詳細は「凡例」に譲り、このたび一点一点のデータを採取するにあたっては、絵入り多色摺の形式が定着して久しい天保以降の一枚摺であることから、何よりも全体の構図（画文の配置）が想像できるよう項目を用意した。また、江戸期末から明治初期にかけての俳諧人名録にもなりうるのではないかとの期待から、入集者のすべての情報を採録することにした。やや煩雑な印象を与えるむきもあるが、趣向の多様性にも対応すべく、情報量の不足のなきよう万全を期したつもりである。乾三冊を含めた目録稿が完成したあかつきには、これまでの研究史には見えてこなかった江戸後期俳人の交流の様相や、入集頻度、改号時期、俳人の歿年、門流の形成など多くの新たな事実を拾い出すことができるはずである。

現在作業中の乾三冊の目録化には、いましばらくの時間を要する

から、その間にも、目録の不備に対するご指摘、ご批正を賜りたいと思う。修正すべき点は修正し、より正しい情報を提供すること、これが目録に課せられた責務でもある。

ここに、『萬色一瞞』坤の部四冊分を公開する。

〔凡例〕

- 一、本稿は、大阪府立中之島図書館所蔵『萬色一瞞』全七冊（朝日新聞文庫 226・3-1）のうち、坤の部四冊に含まれる俳諧一枚摺を収録したものである。
- 一、配列は、各分冊原本の順にしたがい、小番号を記し、該当する年次を冒頭に▼を付して明示した。
- 一、記載項目は、前記の小番号、分類、判型、主催者、画者、画題、彩色、画の配置、筆耕、入集者、句数、行数の順でこれを示し、必要事項を備考に※を付して加えた。
- 一、分類は、歳旦、春興、夏興、秋興、冬興、歳暮、追善、慶賀、その他とし、その他に分類したものはその内容を備考に記した。
- 一、判型は、全紙、半裁、三裁、四裁、小、変形とし、小ならびに変形に分類したものはその内容を備考に記した。
- 一、主催者は詞書などで判明する場合を除きおおむね最終行の人名を採録した。
- 一、作品に画が含まれる場合、画者、画題、彩色、画の配置を記したが、画が含まれない場合は、画者に×を付し、残りの画

についての情報はすべて―を記した。

- 一、彩色は、多色摺の場合は○を付し、単色摺の場合は「単」と記した上で（ ）内に色を示した。

- 一、画の配置は、一枚摺を四分割した場合の右上をア、右下をイ、左上をウ、左下をエとし、画像が含まれている箇所を記号を用いて示した。

【例】

ウ	ア
エ	イ

- 一、画者の情報がない場合は「画者不明」と記し、現時点で判読できない印記がある場合は「画者未詳」とした上で画像を付した。

- 一、入集者は、一枚摺に含まれる作者名をすべて採録した。また、肩書がある場合は人名の前に（ ）で示した。連句の場合は、連衆を□で囲み、同一の連衆で繰り返される連句は二順目以下は省略した。漢詩、和歌等、俳諧以外の作者も□で囲むこととした。さらに、「斑竹」、「班竹」等、入集者の表記が二種類確認できる場合は一方に統一した。なお、同一人物と

おぼしき俳号に表記のゆれのある場合は、「ゆきを」、「シキ雄」、「多代女」、「きく雄」、「起久守」のように統一を加えたものがある。

一、句数は、原則として発句を数え、連句などが含まれる場合はその旨別に明記した。なお、前項の入集者に関連して、連句の場合、同一連衆でくり返されるものは、たとえば、五吟半歌仙などとした。

一、行数は、年記、人名、画中詞および画にまつわる記載を除いた本文とした。また、段組のある場合はその情報を加えた。なお、全面の散らし書きについては行数を数えず、×を表示した。

一、備考には、年記がある場合は原本の通りこれを採録し、その他については前記の内容を含め、必要に応じて適宜記載を加えた。

一、表記は可能な限り原文どおりとした。なお、経年の擦れで判読できなかった文字、および想定される文字が表記できなかったものに関しては□で、推定される文字に関しては「」で示した。

## 初篇

「坤之初篇／萬色一睜／松蔭」



※ 表紙見返しに「天保十一子歳旦より

／全 十三寅年尾至／凡三年之間／表裏合小口ニ而／通計七拾五葉／是に泄しモ猶可在耶」とある。後表紙には「齋生書庫所蔵」とある。

▼天保十一年

1 歳旦 半裁 松青 周鳳 海老・若菜図 ○ アイ ×  
吐翠・菊尾・一睡・莫笑・空春・黄雲・清茂・玉彦・閑叟・  
岱年・梅室・萬籟・松青 13 13

※ 「歳庚子元旦是年亦對天橋而試筆」

2 歳旦 四裁 荷少 土嶺 梅・折曲図 ○ イエ ×  
素芯・紫金・曲阜・禾木・大梅・曾見・溪斎・助宣・小簍・  
伯遠・芥舟・五株・素伯・荷少 14 二段 25

※ 「庚子初はる」

3 歳旦 四裁 桃室 應朗 鼠・巾着図 ○ イエ ×

朝陽・砺山・忝交・素屋・自然・棹哥・守愚・古鏡・都春・  
桃斎・湖澗・枝雄・芦涛・豊樹・桃室 15 二段 1 7

4 歳旦 四裁 蟻兄 魚大 樵夫図 ○ アイエ ×

守一・冬川・乙鵝・乙鵝・冬川・守一・乙鵝・蟻兄 8 1 5

5 歳旦 四裁 素屋 桜堂 蒲公英図 ○ アイ しぐれ庵

梅室・林曹・鶯居・桃室・知風・卓丈・古鏡・素屋 8 1 1

※ 「子の春」

6 歳旦 四裁 花屋庵 公美 綱引図 ○ イエ ×

耕春・丑崖・竹枝・蘭秀・翠葉・季楽・胤三・(南都) 李蠖・  
晋質・梅土喬・(かふち) 李溪・了々・(京海) 曲阜・(京海) 竹理・  
秋月庵・花屋庵 16 2 3

7 追善 四裁 松陰主人 × | | | ×

(亡) 和文雄・東啓・宗林・十交・斑竹・其雀・二鶴・貞嶽・

鶯宿・必山・(洛) ノ翁・素屋・(亡) 春瓢・松陰主人 14 2 3

※ 和文雄追善

8 春興 四裁 鼎左 長水 筆・硯図 ○ イ ×

梅室・平山・杜鷺・松女・卓丈・蘭秀・不二門・蘭里・其乙・  
胤三・(自然更) 悉川・杜園・其珀・耕雲・不爭・翠葉・醉諷・  
帑樂・絜柳女・井竹女・必山・素屋・湖旭・鼎左 24 2 5

9 追善 四裁 東溟 島寅 桜・稚児図 ○ アイエ ×

梅室・一肖・鼎左・卓丈・杜鷺・朝陽・砺山・岱年・佳峰・  
其山・慈光・東溟 12 2 2 五

※ 慈光愛子(兒) 追善

10 春興 四裁 岳鳳 桃嶺 嵐山春景図 ○ イエ ×

梅室・杜鷺・卓丈・雲炭・(さが) 丈翠・(なには) 一肖・(天王寺)  
無一・松隣・(男山) 山鳥・(男山馬年改) 太鳳・(男山馬勇改) 双鳳・  
(せつ原田) 梅雄・(せつ原田) 鷄雄・(せつ) 鋤六・(せつ) 竹窓・  
(せつ) 梅静・(ふしみ) 方蓼・(ふしみ) 梅麻呂・岳鳳 19 2 7

11 春興 四裁 九齋 島寅 松・桜図 ○ アイ ×

梅室・素屋・必山・丈翠・島寅・花炊・波女・かうち・杜鷲・  
砺山・馬原・九齋 12 1 2

12 慶賀 半裁 東溟 島寅 庭中打水図 ○ アイエ ×

一肖・□□・□□・桃年・鶴年・椿枝・知流・花調・其山・  
蘭秀・其珀・杜園・井竹女・知風・素屋・必山・鼎左・蒼虬・  
朝陽・杜鷲・卓丈・鳥谷・太老・箕風・九齋・砺山・岱年・  
梅室・一鶴・蟬羅・完穂・桃塙・無極・傲鷲・三峽・歌月・  
(しかす更) 慈光・東溟 39 4 3

※ 慈光改号祝

13 その他 半裁 鶯宿 鶯宿 蝙蝠図 単(墨) ア ×

一肖・鼎左・葛居・林曹・残夢・桃室・井左・超然・其瓏・  
秋水・砺山・平山・卓丈・可大・杜鷲・月江・楓良・斑竹・  
良化・必山・素屋・梅室・鶯宿 23 2 5

※ 芦の丸家引退記念

14 夏興 四裁 一肖 × | | | ×

鼎左・必山・鶯宿・素屋・桃室・其瓏・葛居・残夢・一肖 9 1 1

※ 「天保庚子夏」／銀箔散らし料紙

15 夏興 小 鼎左 × | | | ×

一肖・葛居・素屋・桃室・其瓏・鶯宿・松隣・必山・平山・  
鼎左 10 1 2

※ 八裁／銀箔散らし料紙

16 夏興 小 岳鳳 狩野永嶽 巴瓦図 単(墨) アウ ×

(撰ハラ田) 梅雄・(撰ハラ田) 鋤六・(撰ハラ田) 竹窓・(河ナカラ)  
露渌・岳鳳 5 5

※ 十八裁

17 夏興 四裁 為聲 斯承 郭公図 ○ イ ×

禾木・大梅・鳳朗・荷少・為聲・為聲・為聲・平吉・竹里・  
為聲・為聲 11 2 2

※ 「庚子夏」

18 秋興 四裁 遅流 × | | | ×

よし香・白桂・弄化・溪斎・(尼) 千雪・曾見・千輅・素芯・  
遅流 9 1 2

※ 「子のとし」／銀箔散らし料紙

19 秋興 半裁 一肖 華堂 月下水辺雁図 ○ アイウ ×

藍亭・國彦・桃年・柳扈・鶴年・五韻・指香・花調・風月・  
九瓜・椿枝・可樵・二桎・蔡々・月桂・半窓・秀葉・杉古・  
其翠・其有・李蝶・知流・春兮・好月・紫鳳・墨山・白江・  
(兵ゴ) 墨叟・(明石) 一甫・廣流・(三田) 冬岐・(イヨ) 蒼均・  
蒿居・松隣・醉茶・文鷲・帟尺・其山・洗志・佳峯・一肖

41 5 2

※ 「庚子秋」

20 秋興 四裁 素屋 南溟 盆踊図 ○ アイエ ×

東啓・元之・十交・東雪・守香・柳川・双鶴・斑竹・梅郷・  
貞却・素屋

11 1 5

21 秋興 四裁 古鏡 × | | | ×

梅室・西月・鼎左・鶯宿・素屋・必山・梅曦・杜鷲・有節・  
岱年・平山・起久守・秋光・此槌・稻海・古鏡

16 1 6

※ 銀箔ちらし料紙

22 冬興 四裁 杜鷲 × | | | ×

梅室・杜鷲・箕風・斜月・有節・蒼均・蔦雨・太老・まつ女・  
かうち・九起・桃五・岳鳳・翫鳥・五株・なみ女・丈翠・卓丈・  
梅南・蝸角

20 2 1

※ 朱囲み枠

23 その他 四裁 休叟 画者不明 児・宝珠見立芋図 ○ アイ ×

梅室・秋水・一肖・鼎左・井左・蔦居・桃室・超然・其瓏・  
鶯宿・素屋・井資・必山・起久守・梅左・(双鶴更) 休叟

16 2 4

※ 剃髮改号記念

24 秋興 四裁 鳴々 長水 小川図 ○ アイウエ ×

紫金・老樹・曲阜・退歩・一東・鳴々

6 二段 2 4

25 冬興 四裁 平山・高野山雲烟社 × | | | ×

梅室・鼎左・素屋・閑那・昭々・荷岳・李山・研露・溪石・  
守一・逸中・暁峯・一雅・尺牙・鼎峯・平山

16 2 0

※ 「庚子抄冬」／薄茶刷毛目料紙

26 冬興 半裁 文鷲 × | | | ×

佳峰・文鷺・可撫・半窓・其山・八千坊・佳峰・文鷺

両吟歌仙+6 49

※ 「かのえ冬」／天青打曇料紙

▼天保十二年

27 歳旦 半裁 永久 自然堂 松・鶴図 ○ アイ ×

梅室・杜鷺・柳絲・雲凌・一肖・其山・雨凌・蘭堂・鶯居・  
映門・露泉・鳳棲・卓池・桐一・榎堂・宣□・老□・若人・  
月外・蕪琴・嫌山・又々・貫河・呂叟・竜風・錦枝女・瀾長・  
春鶴・四山・史子・臥息・聞二・茶静・真斎・野堂・台々・  
壺天・樹村・百和・馬朝・月窓・洒一・文老・朶丈・富梅・  
橋水・鶴翁・秀直・冬峽・駿壹・秀翠女・千斎・晨支・逸淵・  
鳳朗・永久 56 56

※ 「かのとの丑春」

28 歳旦 三裁 立介 翠臺 遠山鴉図 アウ ×

梅室・護物・年風・棹江・芹斎・知雪・春浦・磨彌・月雄・  
々井・清由・豊涯・素洞・三志・柳壺・林坡・一雄・太甫・  
淇亭・立介 20 32

29 歳旦 小 素屋 秀華 仔狗置物・鶯笛図 ○ イエ ×

梅室・東雪・松左・梅郷・素屋 5 10

※ 「辛丑歳旦」／六裁

30 歳旦 四裁 素屋 一蕙美 懸想文壳図 ○ アイ ×

東雪・松左・松人・柳枝・多吞・南枝・素屋 7 8

31 その他 四裁 素屋 松陰素屋 富士松原図 ○ イエ ×

梅室・蟻兄・山蔭・林曹・必山・桃室・鶯宿・淡叟・白鷗・  
鼎左・起久守・平山・素屋 13 20 八  
※ 平山雉髮祝章

32 歳旦 四裁 松左 文麟 鶏置物図 ○ イエ ×

梅室・素屋・松左・松左・松左 5 15

33 歳旦 四裁 斑竹 松陰素屋 山家梅林図 ○ イウエ ×

梅室・必山・鶯宿・素屋・斑竹 5 13

34 歳旦 四裁 八千坊 一鳳 車夫図 ○ アウエ ×

五繭・一居・十帟・里居・月桂・其山・帟尺・李蝶・竹児・  
八千坊 10 二段 1 6

※ 「辛丑春」

35 歳旦 四裁 林曹 一鳳 乗合舟図 ○ アイウエ ×

知堂・知堂・林曹 3 1 0

36 歳旦 四裁 林曹 月鳳 牛置物図 ○ イ ×

梅室・卓丈・土實・松月・橙花・春塘・盆中・月鳳・千樹・  
南枝・艸乙・林曹 12 1 6

37 歳旦 四裁 最之 最之 常磐木図 単(墨) アイウエ ×

西月・平山・可大・来青・最之 5 5

※ 「保丑春」

38 歳旦 四裁 蟻兄 梁益 開花牧牛図 ○ イエ ×

裏咲・忍之・湖龍・梁益・忍之・裏咲・梁益・湖龍・蟻兄

9 1 9

39 歳旦 四裁 林曹 一鳳 猿曳図 ○ アイエ ×

梅室・卓丈・鳳岡・乙鳥・月窓・園生女・淇竹・一花・梅時雨・  
竹端・鬼窓・其雪・桜哉・時人・林曹 15 2 0

40 歳旦 四裁 林曹 一鳳 雪笹図 ○ アウエ ×

繩子・繩子・林曹 3 6

41 歳旦 四裁 林曹 一鳳 正月飾図 ○ アイウ ×

蟻兄・霞外・霞外・霞外・林曹 5 1 1

42 歳旦 四裁 林曹 一鳳 正月箸図 ○ イウエ ×

梅室・桃晴・桃晴・桃晴・林曹 5 1 0

※ 「辛丑」

43 歳旦 四裁 林曹 一鳳 餅花図 ○ アウエ ×

春風・春風・林曹 3 4

44 歳旦 半裁 雨翠 義亮 德利図 単(墨) アイ ×

岱年・杜蓼・映門・齊堂・柳絲・九起・祇白・其山・蔣池・  
霞柳・金菜・方汀・黙池・白椿・有節・悠々・梅癩・紅柳・  
鶯卵・楚夕・梅石・蒼虬・雨翠 23 2 3

45 歳旦 半裁 林曹 一鳳 臥龍松図 ○ イウエ ×

樵雨・林曹・青雲・梅室・林曹 両吟半歌仙+3 2 3

46 歳旦 四裁 蟻兄 × | | | ×

蟻兄・蟻兄・蟻兄 3 1 0

※ 金格子梓

47 歳旦 四裁 曲阜 運照顔 群鴉図 ○ アイウエ ×

蒼虬・梅檣・梅室・素屋・白雀・十交・烏塵・鼎左・鳳朗・  
杜有・荷少・禾木・紫金・退歩・西月・曲阜 16 1 7

48 歳旦 四裁 蟻兄 梁益 印版図 ○ イエ ×

守一・李栖・乙鵝・乙鵝・守一・乙鵝・蟻兄 7 1 6

※ 「辛丑」

49 歳旦 四裁 鼎左 蜨睡 鶴亀図 ○ アイエ 鼎左

(東江庵) 翠葉・(東江庵) 翠葉・(花屋主人) 鼎左 3 7

※ 「辛丑歳旦」

50 歳旦 四裁 二鶴 画者不明 貝合図 ○ アイウエ ×

梅室・休叟・木兄・窓月・二鶴 5 1 4

51 歳旦 四裁 花屋庵 蝶睡 胡蝶図 ○ アイ ×

鳳車・友之・杜園・秋岨・月桂・耕雲・英居・其珀・(糸海)  
退歩・(日向) 明之・(石見) 青池・(茨木) 茨董・(かふち) 月所・  
七杉堂・花抱庵・花屋庵 16 1 6

52 慶賀 四裁 北仲 宋景 福寿草図 ○ イエ ×

北仲・必山・鶯宿・素屋・双鶴 5 1 5

※ 北仲還暦の祝賀

53 春興 四裁 蕙逸 太逸 春草図 ○ アイ ×

(洛) 梅檣・(洛) 岱年・(洛) 萬籟・(波花) 鼎左・(波花) 鶯宿・  
(波花) 必山・(波花) 蟻兄・(波花) 素屋・(波花) 林曹・梅室・  
(湖南) 蕙逸 11 1 3

54 慶賀 四裁 鳳車 × | | | ×

花屋庵・(寄生庵) 鳳車 2 1 6

※ 鳳車立机披露／天銀引料紙

55 その他 四裁 其瓏 × | | | ×

其瓏・秋水・淡叟・鼎左・白鷗・平山・桃室・超然・起久守・素屋・必山・梅室・其山・空静・秀里 15 1 9

※ 「天保丑のとし」／秀里帰東餞別／天銀引料紙

56 その他 半裁 秀里 一鳳 帰雁図 ○ アイ ×

流水・雪水・箕山・昇鶴・一水・一童・井華・空静・秀里

※ 帰東離別挨拶

57 歳旦 四裁 鼎左 花屋 奇石図 ○ イエ ×

蘭秀・其珀・兪三・不二・井竹女・醉諷・鼎左 7 1 4

58 春興 四裁 蟻園 蟻園 竹図 单(金) アイ ×

梅室・蒼虬・有節・卓丈・鼎左・霧瀨・粉良・千塵・古鏡・老波・半山・蟻園 12 1 6

59 春興 四裁 梅室 李喬 桜花・紙雛図 ○ イ ×

秋平・寄峯・仁々・桐園・直江・(ツバタ)鶯呼・北洞・車休・

素文・白二・佳年・蘭洲・応叟・良甫・作山・路艸・巨弓・梅荘・柳壺・西洋・保丸・梅室 22 2 2

※ 摺物所の印あり

60 その他 四裁 鼎左 花屋庵 水辺鴛鴦図 ○ アウ ×

(古稀)幻芝道人・蘭秀・雨外・買山・草居・月人・桃澗・其珀・不爭・精禾・不二門・すゐ葉・井竹女・万垣・秋岬・其乙・都春・左栗・鳳車・平山・鼎左 21 三段 3 7

※ 「辛丑春三月」／幻芝老人送別

61 春興 四裁 林曹 × | | | ×

卓丈・紫筵・桃晴・樵雨・桜哉・釣月・松室・素郷・霞外・林曹・卓丈・紫筵・桃晴・樵雨・桜哉・釣月・松室・霞外・素郷・林曹 10 + 連句九句 + 題 1 2 3

※ 「辛丑閏正月末四日遊城南梅荘即興向順者任出作之遅速」／天地色違打曇料紙

62 春興 四裁 梅癩 来章 小松図 ○ アイ ×

岱年・雨翠・蔣池・其山・一肖・梅室・蒼虬・梅癩 8 9

※ 銀箔散らし料紙

63 春興 四裁 梅室 画者不明 松桜図 ○ アイ ×

大帯・黄年・此水・芹齋・理雄・素文・保丸・(少年)萬是・  
(少年)楠香・(女)千菊・(七尾)酒袋・亀悦・澤山・随行・可由・  
井・柳壺・仁々・梅室 19 19

64 春興 四裁 梅室 五竹 桜花図 ○ アイエ ×

芹齋・市扇・亀巢・柳壺・春涯・要堤・梅室 7 14

65 歳旦 小 遅流 × | | | ×

遅流・曾見・千輅・千輅・遅流・曾見・曾見・千輅・遅流

三ツ物三組 1 2

※ 「丑の春」／六裁／朱色桜枝摺込料紙

66 歳旦 小 箬風 東南 梅花図 ○ アイ ×

箬風・箬風・箬風 3 15

※ 「かのとうし」／八裁

67 春興 小 蟻兄 × | | | ×

乙鴉・蟻兄

※ 二十四裁／早蕨囲み枠

68 慶賀 小 斑竹 × | | | ×

梅室・斑竹・素屋・卓丈・必山・平山・梅室・平山・必山・  
卓丈・素屋・斑竹 六吟半歌仙+6 27

※ 「辛丑閏正月四日」／誕生祝／六裁／薄茶刷毛目料紙

69 夏興 小 九起 平山 山水図 単(墨) アイエ ×

百谷・百谷・来青・玉嶺・平山・生化・九華・尋尺・かうち・  
花水・九起 漢詩二章+9 27 一二

※ 六裁

70 夏興 小 九起 平山 夕涼図 ○ イウエ ×

来青・素屋・巨洲・平山・尋尺・政雄・翫鳥・生化・禾明・  
篤明・仙歩・都岐雄・月岡齋・豊丸・松歌・蒼虬・九起

※ 六裁 17 31

71 秋興 小 淡叟 × | | | ×

起久守・白鷗・其瓏・超然・素屋・其山・洗志・二桎・(少年)  
 弘一・鼎左・淡叟 11 二段 2 2

※ 十二裁／天銀引料紙

72 その他 小画者未詳 松・村雨図 単(墨) アイウエ × 0 0  
 ※ 十八裁／絵のみ



73 春興 四裁 江波 江波 辛夷花図 ○ イウエ ×  
 玉汀・素海・五葉・東川・柳壺・江波 6 1 1

74 夏興 四裁 九起 彦松 艾・菖蒲図 ○ イ ×

梅室・有節・蒼虬・九起・(ナニシ) 里居・(在京) 枕江・(アフミ)  
 素口・(コナン) 義正・春英・董路・右村・寛嶺・杜鷲・龜遊・  
 霞筵・杜春・いさみ・かうち 18 2 3

75 春興 半裁 夜白 × | | | ×

有節・夜白・夜白 両吟歌仙 + 1 4 2

※ 刷毛目霞に銀箔散らし料紙

76 夏興 半裁 梅株 蛎堂 蓮・蛙図 ○ イエ ×

(下原) 梅株・(下原) 梅株・(下原) 二山・(下原) 二山・(惣社)  
 月湖・(惣社) 月湖・(惣社) 一河・(惣社) 一河・(惣社) 碩志・  
 (惣社) 碩志・(惣社) 梅窓・(惣社) 梅窓・(ツキ) 柳水・(ツキ)  
 柳水・(板倉) 可調・(板倉) 可調・(板倉) 春魁・(宮内) 心雪・  
 (宮内) 心雪・(ヲサキ) 素涛・(川辺) 青楓・(川辺) 青楓・(川辺)  
 緑煙・(辻田) 琴雨・(辻田) 琴雨・(笠岡) 淡亭・(笠岡) 淡亭・  
 (笠岡) 史也・(笠岡) 卓尔・(笠岡) 卓尔・(有井) 帰春・(有井)  
 帰春・(ヲカダ) 春圃・(ヲカダ) 春圃・(ヲカダ) 簞月・(ヲカダ)  
 器月・(ヲカダ) 香雨・(大坂) 素屋・(大坂) 淡叟・(京) 有節

40 4 4

77 夏興 四裁 梧庵 × | | | ×

可大・閑那・幻芝・鼎左・李山・守一・昭々・雄岳・佐伯・  
 五来・茄三・柳柯・岸苔・草左・旦山・逸中・素江・義明・  
 荷岳・一雅・鼎峰・平山・梧庵 23 2 3

※ 朱色宝珠草蔦繫梓

78 夏興 四裁 桃年 雄仙 御田植巫女図 ○ アイ ×

立逸・左麗・淡叟・起久守・白鷗・帟尺・理答・種蒔・春湖・  
 桃年 10 1 1

79 夏興 四裁 富子 東南 李桃園 ○ アイ ×

蒼虬・平山・九起・素屋・其瓏・巨洲・必山・五木・林曹・  
暁梅・梅盧・回風・秋十・蓬壺・如竹・文鷺・松澗・富子

18 2 3

80 夏興 四裁 右雀 清亮 大文字図 単(墨) アイウ ×

九起・右雀

2 6

81 冬興 四裁 梅日 × | | | ×

鼎左・梅日・鼎左・吟馬・梅日

両吟連句六句+3 1 5

※ 「辛丑初冬」／枯薄囲み枠

82 冬興 四裁 石鞞 方隠居 茶釜図 単(金) イ ×

梅室・虚白・月坡・卓丈・杜鷺・鳳尾・石鞞 7 1 2

※ 「辛丑冬」

83 歳暮 半裁 太良彦 × | | | 仙鳧

太良彦・平山・卓郎・餘力・五嶺・三思・里雪・北雲・其山・  
窓雪・菊丸・松溪・東光・恕月・麟定・珪葉・まるゐ・柳處・

豊雅・松甫・義景・宣女・清寄・梅外・太郎彦

半歌仙+7 2 8

※ 「辛丑臘八」／雲鶴図摺料紙

▼天保十三年

84 歳旦 小 素屋 松陰(素屋) 富士図 単(墨) アウエ ×

平山・鼎左・斑竹・素屋

4 1 7

※ 八裁

85 歳旦 小 素屋 × | | | ×

素屋・素屋・素屋

3 6

※ 十六裁／青打曇檀紙

86 歳旦 小 斑竹 是真 日本橋・富士図 ○ アイウエ ×

斑竹・禾木・平山・素屋・九起・鼎左・平山・梅窓・禾木・

連句三句+7 1 9

※ 「壬寅春」／六裁

87 歳旦 小 八千房 × | | | ×

月桂・月桂・月桂・八千坊

4 1 2

※ 「壬寅歳旦」／八裁／天朱色引金箔散らし料紙

※ 六裁

88 春興 小 素屋 × | | | ×

92 春興 小 可明 × | | | ×

契他・平葉・不醒・可明 4 8

梅室・淡叟・素屋

※ 六裁／丹青墨三色墨流し料紙

※ 十六裁

93 春興 四裁 素屋 塘雨 張子寅・チャルメラ図 ○ イエ ×

89 春興 小 助宣 是真 売花図 ○ アイ 憲齋

梅室・九起・松園・途松・東啓・双鶴・梅歩・守香・貞美・友枝・秋介・元枝・梅郷・十交・素屋 15 2 0

護物・山外・樸翁・杜有・伯遠・荷少・筆正・可承・北雅・平山・溪斎・禾木・助宣

94 春興 四裁 素屋 文喬 桶・梅・椿図 ○ アイウエ ×

※ 「壬寅春」／六裁

千来・貞恒・芦水・素屋 4 4

90 歳旦 小 太良彦 × | | | 仙髯

三思・北雲・里雪・平山・桓谷・太良彦

95 春興 四裁 素屋 里重 椿図 ○ ウエ ×

※ 「壬寅」／六裁／鳥蝶摺込料紙

96 歳旦 四裁 素屋 来章 梅花・白魚図 ○ アイ ×

91 春興 小 有節 東南 花籠唐女図 ○ アイウエ ×

梅室・洗雨・洗雨・其春・其春・文貫・文貫・淡叟・素屋 9 1 0

茶溪・素峯・有節

※ 「壬寅初春」

97 歳旦 四裁 素屋 竹堂 老女・破魔矢図 ○ アイ ×

恒人・恒人・恒人・淡叟・鼎左・秋水・其瓏・素屋 8 10

98 春興 四裁 一雅 画者不明 女官図 ○ アイ ×

閑那・荷岳・鼎峰・一雅・素屋・井竹女・必山・鼎左 8 13

99 春興 四裁 其山 一鳳 柳図 单(緑) アウエ ×

岱年・棠居・淡叟・其山・其山 5 8

100 歳旦 四裁 八千房 應拳 虎衝立・正月飾図 ○ アイウエ ×

(秋田) 國彦・(作カツ山) 青州・(備松山雪居更) 松年・(備西大手) 布国・文鷲・半窓・李蝶・瓠舟・指香・其山・八千房

11 二段 1 9

101 歳旦 四裁 八千房 一鳳 梅図 ○ イウエ ×

帛尺・帛尺・帛尺・佳峯・八千房 5 1 2

※ 「壬寅春」

102 歳旦 四裁 八千房 雄仙 女官図 ○ アイ ×

(アハ) 釣月・(白川) 晋夫・(白川) 鴨明・柳扈・五髯・一居・月桂・招鶴・柰母・耕春・八千房 11 1 1

103 春興 四裁 鼎左 × | | | ×

月桂・耕雲・文賀・松吟・井竹女・素屋・(河内) 月所・(河内) 其乙・(河内) 茶楽・(河内) 竹操・(石州) 一桃・(作州) 蕙圃・(能州) 荷月・(郡山) 思月・(郡山) 梅日・(江戸) 梅筆・鼎左

17 1 7

※ 花鳥帶摺(水色) 料紙

104 春興 四裁 鼎左 × | | | ×

一寸為・買山・巨洲・其風・土湖・杜園・翠葉・紅英・吟馬・文賀・(さかひ) 荒野女・白雀女・井竹女・(日向) 双鳥・(吉野) 全柳・一雅・鼎左 17 1 7

※ 花鳥帶摺(桜色) 料紙

105 春興 四裁 鼎左 × | | | ×

(在南部) 月人・鷲雄・孤月・翠葉・楓可・素梅・松好・英居・(醉風更) 桃雨・文賀・秋崔・(かふち) 不二門・(かふち) 雪翠・(かふち) 月所・(糸海) 曲阜・(津山) 松人・(名張) 春領・鼎左

※ 花鳥帶摺(水色)料紙

18 1 8

106 春興 四裁 花屋庵 × | | | ×

倚州・十交・文賀・素梅・其珀・蘭秀・雨草・奇撰・松坡・  
翠葉・(かふち)松眉・(かふち)其乙・(かふち)孝享・(かふち)  
秋豆・都花庵・七杉堂・花屋庵

17 1 7

※ 花鳥帶摺(灰色)料紙

107 歳旦 四裁 林曹 梅紅 初詣図 ○ アイウエ ×

梅室・卓丈・青雲・推雨・林曹

5 5

108 歳旦 四裁 林曹 一鳳 早蕨・鳥図 ○ アイエ ×  
(枝猿更) 椿友・椿友・林曹

3 4

109 春興 半裁 林曹 狩野内記・藿園 雉子・松図 ○ アイ ×

菴園・冬松・頭洞・桜枝・柳枝・豊鶴・如籍・公鳥・霞雄・  
夢長・雅蓬・可笑・蝶遊・菴園・月窓・長丸・其雪・其撲・  
桜時雨・鬼窓・時人・桜哉・子烈・西湖・梅室・林曹 26 2 6

110 歳旦 小 松雨 画者未詳 正月飾図 ○ イエ ×

梅室・岱年・十代丸・九起・鼎左・素屋・松雨

7 9



※ 八裁

111 春興 小 岳鳳 × | | | 岳鳳

方圓齋・岳鳳・岳鳳

3 7

※ 八裁／一部青摺料紙

112 春興 四裁 柳壺 × | | | ×

梅室・杜鷲・文翠・風光・かうち・斜月・有節・卓丈・九起・  
鼎左・素屋・桃室・林曹・虚白・砺山・護物・風外・遅流・  
禾木・鳳朗・柳壺

21 2 1

※ 金・朱の枝囲み枠

113 歳旦 四裁 蟻兄 保大 打出小槌図 ○ ウエ ×

蟻兄・蟻兄・蟻兄

3 6

114 歳旦 四裁 蟻兄 保大 神事始図 ○ アイ ×

豊水・季雄・古柳・立石・白鷺・雲和・乙鵝・蟻兄 8 1 0

115 歳旦 四裁 茶飯堂 保大 搔寄神官図 ○ ウエ ×

佳葉・芝雀・佳葉・二及・芝雀・二及・呂竹・茶飯堂

8 二段 1 5

116 歳旦 四裁 蟻兄 保大 鞠図 ○ アイウエ ×

豊水・豊水・乙鵝・乙鵝・梅室・蟻兄

6 7

117 春興 四裁 二畳庵 應成 蛤香合図 ○ イエ ×

撫調・有響・松好・修竹・芦江・杉古・(河内)不二門・(河内)豊樹・素梅・杉夫・茂雄・(南トカク)吟馬・五葉・二畳庵

14 1 5

※ 「壬春」

118 春興 四裁 二畳庵 應成 貝合弁天図 ○ イ ×

有鳳・松好・(中シマ)松居・竹雪・(河内)不二門・(河内)南齡・(山楽男十歳)絮八・杉夫・素陶・(ナ夕)芦舟・(南トカク)吟馬・綾雄・素梅・二畳庵

14 1 5

※ 「壬寅」

119 歳旦 四裁 紫金 × | | | ×

卓池 紫金・呉厓・卓池・紫金・(夜半亭)呉厓・(紫狐菴)紫金・(青々)連句三句+4 1 0

※ 「天保十三壬寅年」/金銀囲み枠/「紫狐菴」の印あり

120 春興 四裁 太良彦 椿年 萬歳図 ○ アイ ×

里雪・平山・卓郎・雪柳・雪松・雪舟・三思・里雪・太良彦

連句三句+6 1 1

※ 「壬寅春」

121 春興 半裁 杜有 石湖 松竹梅図 単(墨)アイ 葦斎(盛義)

護物・禾木・露谷・資喬・波同・祖郷・溪斎・平山・逸淵・溶々・流芝・瓦村・淇水・除道・呂岳・遊路・秀之・可承・宜菜・伯遠・大鵬・助宣・怡兮・氷狐・杜有

25 2 5

※ 「壬寅春」

122 春興 半裁 左栗 是真 富士遠望図 ○ アイ ×

鳳朗・護物・確嶺・由誓・一具・得燕・雪口・伯遠・山介・撲翁・風外・逸淵・平山・禾木・淡叟・白鷗・其瓏・桃室・必山・素屋・超然・鶯宿・田丸・鳳車・方珠・不爭・其珀

井竹女・蘭秀・鼎左・月所・松月・瀧川・釣来・松眉・山楽・  
茶楽・月来・其乙・不二門・左栗 41 4 1

※ 「壬寅春」

123 春興 半裁 荷少 荷少 雪割草図 ○ アイ ×

梅室・卓池・淡叟・鶴翁・鼎左・紫金・岱年・必山・退歩・  
其山・素屋・白鷗・□□・□□・□□・□□・□□・鳳朗・  
護物・助宣・杜有・伯遠・山外・精太・駿臺・小篔・文以・  
永久・芥舟・呂叟・文昇・荷了・竹烟・晨支・古春・嘯谷・  
仙華・都雨・素伯・平山・氷狐・素行・五株・溪齋・禾葉・  
禾木・荷少 47 4 7

※ 「壬寅春」

124 その他 四裁 梅價 × | | | ×

杜鷲・丈翠・南溪・有節・萬籟・禾明・壽堂・九起・梅通・  
芳英・風光・如柳・風阿・金菜・梅室・杜蓼(欠席)・梅價

※ 月次・平安総会二月九日／天金引料紙

16 2 2

125 その他 四裁 北村菴(杜鷲) × | | | ×

梅價・杜鷲・丈翠・南溪・有節・万籟・禾明・壽堂・九起・  
梅通・芳英・風光・如柳・風阿・金菜・梅室・杜蓼(欠席)・  
岱美・斜月・(長サキ)岱雲・(タンバ)蝸角・(エト)杏齋・(大ツ)  
鳩人・かうち 23 2 6

※ 月次九日会／色違打疊料紙

126 その他 半裁 南枝 雀堂 芙蓉図 ○ イエ 仙鳧

卓池・流芝・水竹・蓬宇・碧山・漣山・早恪・沙鷗・而后・  
月底・黄山・方汀・夜白・省吾・淇石・桐一・東宇・石鼎・  
虚白・砺山・石鼓・九起・岱年・杜鷲・梅通・多朗・月撫・  
芹舎・岱美・芳英・丈翠・岳鳳・有節・平山・淡叟・其山・  
自樂・白鷗・鼎左・林曹・松隣・祇白・梅室・一具・鳳朗・  
山外・蔭竟・惟□・壺□・風外・抱琴・女柳・溶々・玩甫・  
祖郷・氷狐・惟草・樸翁・禾木・氷谷・抱儀・由誓・麻交・  
太良彦・峽舎・言山・苜窓・蘆畝・駝岳・箕年・其丈・多美古・  
豊見女・留木・紫水・萬頃・菑堤・幻芝・粗文・小柯・松什・  
丁知・石外・玉圃・仙鳧・枝玉・得蕪・南枝・餘力 89 9 4

※ 「壬寅夏」／送別

127 夏興 四裁 鼎峰 竹洞 三日月図 ○ アウ ×

鼎左・淡叟・必山・可大・其山・素屋・其瓏・井竹女・九起・

平山・米海・五株 12 1 3

128 夏興 四裁 鼎峰 竹洞 笹竹図 単(墨) アイウエ ×

閑那・杉露・茶烟・素江・昭々・逸中・茄三・柳柯・石々・  
荷岳・一雅・鼎峰 12 1 2

※ 127と同一であつた縦半裁を二ツに切る

129 秋興 半裁 平山 凌雲 水月図 ○ アイ 仙鳧

抱儀・松什・遅流・助宣・杜有・伯遠・苴菜・方有・寿口・  
笑山・簾布・叩月・為山・山外・樸翁・禾木・得蕪・烏水・  
由誓・溪斎・逸渕・卓郎・一具・溶々・見外・確嶺・護物・

太良彦・平山・卓郎・溪斎・禾木・見外・梅外・梅山・交輝・  
珪葉・北雲・桓谷・里雪・太良彦・平山 連句六句+ 36 4 6

※ 「壬寅仲秋」

130 追善 半裁 五株 石湖 水辺芦図 ○ アイ 松軒

伯遠・五株・山外・荷少・杜有・溪斎・文昇・素伯・平山・  
守我・見外・古春・得蕪・佳友・波同・芥舟・助宣・資喬・

一具・得蕪 半歌仙+2 2 9

※ 「禾木追善」／131と一対

131 追善 半裁 五株 × | | | 松軒

平山・苴菜・(下総)之桂・李螻・波同・見外・溪斎・助宣・  
杜有・樸翁・山外・百丈・資喬・荷少・文昇・芥舟・古春・  
素伯・嘯谷・守我・佳友・雪香・秀香・半仙・仙芝・(百丈奴)  
鋤秋・三龜・金生・篁嶺・可承・谷鳩・伯遠・護物・五株

※ 「壬寅季秋」／130と一対 34 4 8

132 秋興 小 素屋 景文 紅葉図 ○ アイエ ×

梅室・米臺・貞美・十交・斑竹・素屋 6 9

※ 六裁

133 秋興 小 梅室 夜潮 花売女図 ○ アイ ×

杜鷺・鷺秋・希成・艸子・芦岸・魯月・梅室 7 7

※ 六裁

134 その他 小 花屑 蘆空(華屑) 出帆図 ○ イエ ×

惟草・花屑・如風・菫楽・桃谷・可松・惟草・菫楽・桃谷・  
可松・如風・九起・花屑 連句六句+7 二段 1 8

※ 「壬寅秋日」／送別／六裁

135 冬興 四裁 桂眉 画者未詳 羽根箒・袱紗図 ○ イエ ×

梅室・登象・木容・素屋・明良・杜蓼・杜鷺・桂眉 8 13



136 冬興 四裁 有明雄 来章 山茶花・爐開図 ○ イエ ×

梅室・卓丈・素屋・杜鷺・虚白・如斎・東邱・有明雄 8 16

二篇

「坤之二編／萬色一睺／松蔭」



▼天保十四年

1 歳旦 半裁 素屋 松陰・鶯宿 住吉浦遠望図 ○ アイウ ×

梅室・米臺・素屋・斑竹・其春・十交・鶯宿・松園・其春・

一三・花美・東啓・貞美・守香・如蘭・秋介・東雪・南枝・

誠之・芦秀・(京)素鶯・(カヅ)雅山・(備中)松年・(備中)吐雲・

(備中)香雨・素外・(高野)茶烟・一雅・荷岳・鼎峰・米臺・

梅郷・十交・斑竹・素屋 連句六句十 29 36

2 歳旦 四裁 花屋菴 公秀 住吉図 ○ アウ ×

草居・李曉・霞岳・秋岨・文賀・松唸・井竹女・(かふち)月所・

(かふち)不二門・(いたみ)曲阜・(茨木)柳月・(津山)霞涯・

(作忍)崑久山・(備中)器月・(高野)閑那・花屋菴 16 17

3 歳旦 四裁 林曹 画者未詳 住吉太鼓橋図 ○ イエ ×

鷹拳・玉堂・黄白・東塘・知堂・林曹 6 一部二段 12



4 歳旦 四裁 鼎左 公秀 住吉燈籠図 ○ アイウエ ×

(石見)青池・(備中)史也・(いせ)梅曦・(伯忍)带雨・(石忍)

知鶯・(作忍)一鶯・(津山)霞涯・(かふち)月所・奇撰・蒼居・

壺外・不二・文賀・松唸・起然・鼎左 16 二段 24

5 歳旦 四裁 花屋菴 公秀 住吉太鼓橋図 ○ アイウエ ×

(秋田在坂) 国彦・(久留米) 風歌・(津山) 雪塘・(作劬) 耕雨・

(高野山) 荷岳・(かふち) 瀧川・瀧川・(石劬) 計雀・(石劬其雄更)

帰松・(天和) 梅冷・(在石見) 蕪昏・(在大坂) 箕年・(備中在坂)

未精・井竹女・素屋・松隣・花屋菴 17 二段27

6 歳旦 四裁 林曹 一鳳 繁縷図 ○ イエ ×

古遊・豊雪・松室・三餘・紫莖・桜哉・林曹 7 9

7 歳旦 四裁 林曹 應成 凹窓・正月飾・鳥図 ○ ア ×

国彦・宜嵐・好月・宜涼・時人・林曹 6 12

8 歳旦 四裁 如薺 松谷 臨海楼閣図 ○ イウエ ×

梅室・素屋・木容・九起・有明雄・東邱・如薺 7 11

9 歳旦 四裁 素屋 春山 小松図 ○ アイ ×

茂卿・貞恒・楓斎・梅室・素屋 5 6

※ 「癸卯試筆」

10 歳旦 四裁 素屋 巖松 雪兔・茶山花図 ○ イ ×

真号・山朝・其春・芦汀・途松・梅室・素屋 7 13

11 歳旦 四裁 千来 文輝 弓・椿図 ○ イエ ×

千来・千来・千来・千来・千来・千来・素屋 6 16

※ 「癸卯歳旦」

12 歳旦 小 其樂 岸弘 海老飾図 ○ イエ ×

其樂・其樂・梅室・淡叟・素屋 5 10

※ 八裁

13 歳旦 小 米山 上桂 若水図 ○ アイ 松軒

穀露・石居・宜稻・左賀恵・見外・尾山女・米山 7 7

※ 「卯のはる」／八裁

14 歳旦 小 素屋 × | | ×

素屋・素屋・素屋・素屋・素屋・素屋・素屋・素屋 8 7

※ 「卯の正月」／十六裁／銀箔散らし料紙

15 歳旦 小 斑竹 景文 露臺図 ○ イエ ×

平山・鶯宿・素屋・斑竹・斑竹 5 7

※ 「癸卯春」／八裁

16 歳旦 小 林峰 × | | | ×

鼎左・素屋・平山・閑那・荷岳・一雅・林峰

7 7

※ 十六裁／天青打曇料紙

17 歳旦 小 五株 × | | | 松軒(凌雲)

平山・みどり女・伯遠・山外・五株

5 10

※ 「卯の歳春」／十六裁／刷毛目料紙

18 歳旦 小 平山 凌雲 小松・鶯囃 ○ アイエ ×

松什・魯中・墨堤・閑鷗・平山

5 13

※ 八裁

19 歳旦 四裁 其山 季玉 兔上下囃 ○ イ ×

淡叟・國彦・箕年・其山・其山

5 12

※ 「うの春」

20 歳旦 四裁 國彦 季玉 兔筏土囃 ○ アイウエ ×

淡叟・鼎左・其山・箕年・國彦

5 14

※ 「卯の春」

21 春興 四裁 應叟 翠臺 胡蝶囃 ○ ウエ ×

梅室・虚白・見外・素屋・十丈・立介・年風・柳壺・應叟

9 9

22 歳旦 四裁 呂鳳 画者不明 宝珠囃 単(朱) アイ ×

梅室・護物・林左・素屋・杜鷲・柳壺・竹塙・可丈・平山・五株・見外・氷狐・呂鳳

13 15

23 歳旦 四裁 伯遠 是真 松・木肌囃 ○ アイウエ 松軒

山外・伯遠・平山・子恭・文昇・五株・得蕪・みどり女・伯遠

連句八句+1 11

※ 「癸卯孟春」

24 慶賀 四裁 南枝 行年 橙皮顔・封書囃 ○ イエ 仙髯

南枝・南枝・岫舎・祖郷・仙髯・卯月・浄友・萬古・流芝・石外・枝好・未央・枝玉・玉圃・得蕪

15 26

※ 「天保癸卯如月十八日」

25 歳旦 半裁 杜有 × | | | 仙髯

護物・大鵬・露谷・苴菜・見外・祖郷・瓦村・逸渕・石外・  
平山・波同・溪斎・流芝・巧笑・除道・五株・伯遠・氷狐・  
秀之・太良彦・杜有 21 2 2

※ 「癸卯春」／薄橙色空押曇料紙

26 春興 四裁 鼎左 × | | | ×

惟草・如風・淡叟・平山・超然・其瓏・素屋・白鷗・桃室・  
井左・必山・鼎左 12 1 2

※ 青二重囲み枠

27 春興 四裁 平山 凌雲 胡蝶図 ○ アイウ ×

山外・松什・(草廬更)折桂・伯遠・杜有・呂川・みどり女・  
五株・平山・平山 10 2 1

28 その他 四裁 曲阜 二莖 八重桜図 ○ アイ ×

鼎左・鼎峰・閑那・紫金・退歩・太乙・老椿・必山・鳴々・  
直二丸・素白・曲阜 12 1 8

※ 餞別

29 夏興 四裁 月下 × | | | ×

岐鵬・芦汀・柏林・梅翁・閑哉・吐香・月窓・狸友・孤芳・  
盧館・雪暎・千瓢・蔦雄・楳鈴・(石蓼更)世外・(大坂)素屋・  
(大坂)其山・(京)岱年・(江戸)鳳朗・(江戸行脚)徐力・鼎左・  
(日々庵)月下 22 2 7

※ 鳳凰牡丹花摺料紙

30 夏興 半裁 必山 画者未詳 水辺馬図 ○ アイ ×

必山・鼎峰・石々・昭々・茶烟・荷岳・峯仙・一雅・杉露・  
**茄三**・梅室・鼎左・素屋・閑那・(イタミ)太乙・(イタミ)鳴々・  
(イタミ)曲阜・鼎峰・昭々・荷岳・峯仙・茶烟・石々・一雅・  
茄三・必山 連句十句 + 16 2 8



31 夏興 小 淡節 閑嶺 団扇 火鉢図 ○ アイエ ×

雨翠・龜渕・政雄・文雄・素屋・其山・梅室・九起・鳳朗・  
晨支・淡節 11 2 4

※ 六裁

32 夏興 小 平山 × | | | ×

鼎左・其山・半答・素屋・伯遠・縁園女・折桂・平山 8 9

※ 八裁／刷毛目格子模様料紙

33 秋興 半裁 悠平 果庵 秋海棠図 ○ アイ ×

梅室・杜鷲・卓丈・木容・岳鳳・有節・岱年・九起・淡叟・  
鼎左・素屋・林曹・虚白・砺山・沙鷗・而后・卓池・水竹・  
鳳朗・晨支・逸渕・惟草・見外・由誓・年緒・呂鳳・柳壺・  
悠平 28 2 8

※ 「卯のはつ爍」

34 その他 半裁 鼎左 栢田 帆船図 ○ アイ ×

平山・淇斎・卓郎・五株・一具・幻芝・楳翁・松什・山外・  
杜有・伯遠・雨外・巨洲・翠葉・文賀・井竹女・十交・斑竹・  
其瓏・素屋・(野山) 鼎峰・卦龍・鼎左 23 2 7

※ 祈願／船の帆に定家の「我道を」の一首を載せる

35 追善 半裁 伯遠 凌雲(松軒) 流水三日月図 ○ アイエ ×

平山居士・杜有・五株・呂川・山外・松什・伯遠・得蕪・溪斎・  
溶々・青和・□□・□□・□岡・富女・満女・折桂・呂川・  
山外・松什・五株・伯遠 連句六句+15 4 7

※ 「卯の葉月」

36 追善 半裁 半谷 一鳳 枯枝叢虫図 ○ ウエ ×

平山居士・半谷・其秀・雲耕・太乙・墨雨・希康・蔣池・其秀・  
雲耕・太乙・大洋・蔣池・墨江・李青・希康・佳城・鼎左・  
梅堂・半谷 脇起連句八句+12 2 9

37 秋興 四裁 左掌 画者未詳 登坂図 ○ アイエ ×

鳳朗・風外・杜蓼・水田・山月・晨支・有雨・左掌 8 1 5

※ 「卯の爍」



38 秋興 四裁 井左 徐来 高台寺図 単(墨) アイウ ×

桃室・其瓏・素屋・淡叟・鼎左・杜園・徐来・必山・井左

※ 「癸卯」 9 1 1

39 秋興 四裁 蔭村 起久守(見外) 鶏図 ○ アイ 松軒

賀堂・石居・為山・溶々・五音・百尺・見外・蔭村 8 1 2  
※ 「癸卯の秋」

40 冬興 四裁 伯遠 是真 紅葉・落葉図 ○ イウエ ×

**曲阜・伯遠**・松什・山外・呂川・助宣・荷少・五株・伯遠

両吟連句六句+7 2 0

※ 「卯初冬」

41 秋興 小 見外 起久守 貝飾図 单(墨) イエ 松軒

良輔・環池・不爭・見外・見外 5 1 5

※ 「癸卯秋」／十六裁

42 秋興 小 伯遠 × | | | ×

呂川・山外・伯遠 3 6

※ 「卯秋」／十六裁／薄空押摺料紙

43 冬興 小 梅室 × | | | ×

(粟津) 砺山・(在京) 木容・(在京) 淡節・(行脚) 碩水・(甲斐)

岳中・(江戸) 梅笠・(江戸) 荷了・(上毛) 西馬・(京) 杜鷺・(京)

梅笠 10 2 6

※ 「癸卯」／八裁

44 冬興 半裁 五株 椿年 山居図 ○ アイ ×

淡叟・鼎左・紫金・白雀・退歩・素屋・太乙・必山・林曹・

梅室・助宣・精太・遅流・禾葉・溪斎・為山・伯遠・山外・

文昇・杜有・松什・芥舟・民賀・李葉・千本・五株 26 2 6

45 冬興 半裁 素伯 × | | | ×

**曲阜・荷少・五株・素伯・伯遠**・**五株**・荷少・曲阜・曲阜・

五株・荷少・荷少・五株・曲阜・荷少・素伯

五吟半歌仙十和歌一首+10 4 7

※ 「癸卯孟冬」

46 追善 半裁 梅外 × | | | 仙覺

梅室・淡叟・素屋・鼎左・卓池・多代女・江三・よしみ・西馬・

碩布・護物・由誓・卓郎・其徳・溪斎・逸測・杜有・頭住・

光玉・木頭・梅郷・慄々・壽文・伯遠・太乙・得蕪・助宣・

由之・粗文・南枝・惟艸・盧布・確嶺・見外・風外・素磨・

幻外・呂川・石膽・石外・五株・青和・松什・**太良彦・勾外**・

**卓郎・溪斎・確嶺・逸測・松什・護物・素磨・濱吉**・(釈) 玉英・

涼花・清甫・種丸・一石・淡月・三益・槐雪・三英・桃午・

松溪・三省・窓雪・松甫・巢古・魯水・志一・一亀・文輝・

珪葉・永長・雪柳・東光・葛堂・よし丸・梅山・宣女・雪松・

柳處・義景・遊澤・清寄・里雪・梅外 連句十句+77 8 8

※ 「天保癸卯のとし十月十日」／芭蕉百五十回忌／雲鶴図摺料紙

47 追善 半裁 杜有 × | | | ×

禾木居士・杜有・護物・月葉・平山・波同・流芝・溪斎・撲翁・

助宣・古春・荷少・山外・文昇・五株・除道・伯遠・田蓼・

露谷・南洋・喜川・爐扇・護岳・一陽・溶々・為山・大鵬・

見外・金令・亘菜・谷鳩・祖郷・松五・素伯・一具・呂川・

護物・山外・伯遠・助宣・松什・溪斎・流芝・呂川・五株・

杜有 脇起歌仙+10 4 8

※ 「天保癸卯冬」／天地墨摺料紙

48 追善 半裁 山月 南斎 茅屋図 ○ アイ ×

哦月・素六・梅室・梅通・岱年・九起・鼎左・其瓏・白鷗・

桃室・淡叟・井左・超然・月坡・素屋・晨支・鳳朗・山月

半歌仙 3 0

※ 「癸卯又無初抄日」／芭蕉遠忌

49 歳旦 小 素屋 × | | | 素屋

素屋・素屋・素屋・素屋・素屋・素屋 6 5

※ 「辰春」(○注 弘化元年)／二十四裁／天地金引卍字繫空押料紙

50 追善 四裁 斑竹 采鳳 枯薄図 ○ ウエ ×

淡叟・鼎左・白鷗・呂國・鶯宿・杜鴻・具物・素屋・斑竹

※ 斑竹母追善

9 1 6

51 慶賀 四裁 杜鴻 東南 雪中仕掛図 ○ イエ ×

淡叟・白鷗・桃室・呂國・其瓏・井左・鶯宿・鼎左・斑竹・

元枝・具物・守香・素屋・杜鴻 14 2 9

※ 「癸卯冬」／改号祝

二七

52 秋興 半裁 素屋 翠亜 雪山図 ○ ウエ ×

(洛) 梅室・(洛) 岱年・(洛) 杜鷲・(洛) 卓丈・(洛) 木容・(洛)

淡節・(洛) 一斧・(洛) 松父・(洛) 轡角・(洛) 笠介・(洛) 政雄・

(洛) 此山・(洛) 孤柳・(洛) 雨翠・(洛) 栞亭・(洛) 芳英・(洛)

風光・(洛) 虚白・(下バ) 如柳・(サガ) 丈翠・(大坂) 林曹・(大坂)

白雀・(大坂) 素屋 23 2 4

53 秋興 半裁 雨江 × | | | ×

(エド) 遅流・(エド) 茶静・(エド) 鳥吟・(エド) 梅笠・(エド) 惟草・(エド) 得蕪・(エド) 風外・(エド) 逸瀨・(タンバ) 月撫・(タンバ) 大年・(タンバ) 蓬雨・(タンバ) 雲帯・(タンバ) 千丈・(タンバ) 松露・(タンバ) 九華・(カミ) 悠平・(カミ) 呂鳳・(カミ) みつ女・(カミ) 遊夢・(カミ) 素玉・(カミ) 北山・(カミ) 朴風・(カミ) 鹿裘・(カミ) 柳壺・(大聖寺) 丹嶺・(フシミ) 護芳・

(フシミ) 紅園・(フシミ) 梅塙・(フシミ) 五柳・(フシミ) 木端・(フシミ) 丁翁・(イセ) 流芳・(イセ) 探斎・(イセ) 一幽・(イセ) 春整・(イセ) 梅曦・(ヲハリ) 楚山・(タンマ) 雨竹・(タンマ) 其頼・(タンマ) 雅笑・(タンマ) 苜頼・(タンマ) 大鳳・(ワカサ) 微角・(ワカサ) 千翠・(ハリマ) 一簣・(チク后) 山公・(チク前) 可成・(雨香更) 雨江・雨江 49 5 1

54 歳旦 四裁 素屋 秋亭 棗図 ○ アイエ ×  
梅室・千来・芦汀・途松・梅漁・東雪・南枝・梅居・如蘭・杜鴻・(具物更) 愚佛・素屋 12 1 9

55 歳旦 四裁 素屋 秋亭 棗図 ○ アイエ ×  
(高野) 鼎峰・(高野) 荷岳・吾柳・一三・花美・東啓・元枝・涛鼓・秋介・(具物更) 愚佛・斑竹・素屋 12 1 8

※ 54・56と同一絵柄。ただし色が異なる

56 歳旦 四裁 素屋 秋亭 棗図 ○ アイエ ×  
松園・茂郷・貞恒・貞美・萬壽人・(玉川) 都春・(高野) 茶烟・(高野) 茄三・(備中) 香雨・斑竹・杜鴻・素屋 12 1 9

▼弘化元年  
57 春興 四裁 梅漁 秋亭 梅花閑居図 ○ イエ ×

梅室・淡叟・鼎左・杜鴻・斑竹・如蘭・涛鼓・愚佛・素屋・(守香改) 梅漁 10 2 1

※ 「甲辰春」

58 春興 四裁 素屋 春貝 面・雷太鼓図 ○ イエ ×  
楓室・松晴・芦汀・一三・途松・枝月・雪山・貞歳・素屋 9 1 9

59 歳旦 四裁 素屋 華山 飴壳図 ○ イエ ×  
蓮子・孤松・三千里・途松・枝月・不熾又・一三・蓮子・孤松・三千里・途松・枝月・不熾又・一三・素屋 15 1 7

60 歳旦 小 素屋 南溟 松ヶ枝・靈芝図 ○ イエ ×

千来・千来・千来・素屋

4 1 5

※ 「甲辰歳旦」／六裁

素屋・杜鴻・斑竹・愚佛・(梅郷改)柿守

5 8

61 歳旦 小 冬岐 × | | ×

梅室・卓丈・素屋・林曹・停雲・草居・冬岐

7 7

※ 「甲辰」／六裁／一部文字緑摺／一部水色料紙

66 歳旦 小 ひさ女 藤公 南天図 ○ イエ ×

梅室・曲阜・可道・伯遠・芥舟・素伯・溪斎・荷少・ひさ女

9 1 5

62 歳旦 小 鼎左 鶯宿 鶯図 ○ アイウエ ×

玉岡・吾柳・和集・鶯宿・素屋・鼎左

6 6

※ 「辰のはる」／六裁

67 歳旦 三裁 鳥吟 抱玉 小松・文台図 ○ イ ×

梅室・九起・杜鷺・(在京)荷了・梅通・卓丈・淡節・雨江・

二九

63 歳旦 小 見外 画者未詳 春山飛鳥図 ○ アウ 松軒

米山・尾山女・爐扇・石居・百尺・見外

6 1 3

※ 「辰の春」／六裁



64 歳旦 小 素屋 × | | ×

素屋・素屋・素屋

3 3

※ 「甲辰」／十八裁／天銀引料紙

68 歳旦 小 呂国 × | | ×

呂国・呂国・呂国

3 5

※ 「甲辰春」

南枝・茶静・逸渕・鳳朗・鳥吟・鳥吟 49 4 9

春向・幻外・魯心・蓼戸・菫堤・かのふ・(李蠶更)キ外・湘玉・

遅流・惟草・溪斎・為山・風外・得燕・見外・梅笠・弄化・

小柯・聴松・瓦村・夷則・溶々・太珉・鶯阿・流芝・大鵬・

虚白・素屋・黄山・卓池・由誓・一具・祖郷・□□・万古・

※ 「甲辰」／二十四裁／前書に「薙髪せし年のあくる春」とある

／青囲み枠

69 歳旦 小 埼玉菴 圭岳 鶴飾図 ○ イエ 仙鳧

壽文・埼玉菴

2 4

※ 「辰のはる」／八裁

70 歳旦 小 素伯 文筌 萬歳図 ○ アイ 葎雲

梅室・荷少・曲阜・東一・素伯

5 1 1

※ 「辰の春」／六裁

71 歳旦 小 溪斎 × | | | ×

溪斎・遅流・為山・為山・溪斎・遅流・遅流・為山・溪斎

三ツ物三組 1 2

※ 「辰の春」／六裁／青打雲料紙

72 歳旦 小 斑竹 朱冲 松飾図 ○ アイウ ×

素屋・斑竹・斑竹

3 1 1

※ 「甲辰」／十二裁

73 春興 小 松陰 松陰 豆図 ○ イエ ×

松陰

1 8

※ 二十四裁

74 歳旦 小 素屋 素玉 福寿草図 ○ アイ ×

梅居・梅卿・梅居・梅卿・素屋

5 1 5

※ 「甲辰歳旦」／二十四裁

75 春興 四裁 此方 小需散人 柳図 単(墨) アウエ ×

華実・菰野女・金江・馬風・(なには) 井資・鼎左・素屋・其山・此松・笠斎・此方 11 1 2

※ 「古今堂梓」の方印あり

76 歳旦 四裁 鶯宿 鶯宿 宝珠・自然薯図 ○ アイ ×

斑竹・涛靴・里隠・可成・李純・素屋・鶯宿 7 7

77 歳旦 半裁 桃室 朱冲 草子絵模写図 ○ アイ ×

湖関・其鶯・都月女・巴聲・柳糸・照婦女・呂居・草江女・  
紅雀・其笑・哥月女・里居・美魚女・井石・登山・路松・  
(其月更)梅家・其梅・玉鳳・其柳・椎好・花月女・吏阿・松好・  
桃室 25 2 8

※ 「甲辰歳旦春興」

78 歳旦 半裁 井圃菴 長水 富士雲龍図 ○ イウエ ×

(江戸)芝暁・(江戸)亀仙・(江戸)半斗・(江戸)文曆・(江戸)  
春人・(江戸)丸人・(江戸)双山・(江戸)一瓢・(江戸)曾雲・  
(江戸)如鶴・(江戸)丹頂・直丸・旭芳・嘉井・桃里・春好・  
尽一・不角・其朝・季月・南草・山笑女・起廻女・眉玉・保光・  
文種・章山・眉水・一朝・眉溪・眉楓・荷村・松齋・其楽・  
(サカイ)此方・素屋・井資・井圃菴 38 3 8

79 歳旦 四裁 曲阜 曲阜 富士雲龍図 単(墨) イエ ×

梅室・伯遠・素伯・荷少・助宣・山外・松什・五株・素屋・  
林曹・淡叟・鼎左・曲阜 13 2 6

※ 「辰之大」

80 春興 四裁 此山 岸郎 土筆図 ○ アイエ ×

梅室・九起・木容・淡節・雨江・富勢・桂芽・十丈・松緑・

半松・此山 11 1 3

81 歳旦 四裁 呂鳳 × | | | ×

茶静・金令・見外・伯遠・惟草・卓郎・逸淵・卓丈・素屋・  
鼎左・其種・貴存・春鷺・亀村・柳堤・鶴居・柳壺・悠平・  
呂鳳・呂鳳 20 2 3

※ 朱飾梓／鳳凰空押料紙

82 歳旦 四裁 悠平 素玉 神社紅梅図 ○ イ ×

梅室・鳳朗・風外・茶静・仁寶・呉城・見外・素屋・卓丈・  
杜鷺・北山・晴江・(小マツ)草紫・遊夢・雅居・八橋・みつ女・  
巴龍・(在京)素玉・鹿恋・呂鳳・柳壺・悠平 23 2 6

83 歳旦 四裁 柳壺 画者不明 南天図 ○ アイエ ×

風外・茶静・呉城・金令・溪斎・逸淵・仁宝・見外・鼎左・  
素屋・克亭・子用・(梅素更)木兄・如蝸・五葉・松兮・桐園・  
自石・応叟・悠平・呂鳳・柳壺 22 2 2

84 歳旦 四裁 北山 素玉 夫婦岩初日出図 ○ アイエ ×

素信・卓丈・風光・雨江・淡節・素屋・見外・呉城・溪斎・  
樸翁・呂鳳・大夢・鹿恋・朴風・好山・桑因・柳壺・晴江・

梅枝・素玉・雪我・悠平・北山 23 2 3

85 春興 四裁 呂鳳 画者未詳 鳩雌雄図 ○ イエ ×

(ナニハ) 鼎左・(ナニハ) 素屋・(金沢) 柳壺・(金沢) 北山・(金沢) 悠平・(エド) 見外・(エド) 伯遠・(エド) 金令・(七尾) 竹塙・(トキ) 花浣・(寺口) 重障・(二ノ宮) 靄居・(杉ノヤ) 柳堤・(三ノミヤ) 鯉口・(タケベ) 貴存・(タケベ) 五雄・(ノト) 其種・(ウセツ) 習之・(松ナミ) 稻波・(正院) 鳳兮・呂鳳 21 2 9



86 歳旦 四裁 鶯呼 画者不明 松・梅図 ○ アイウエ ×

(京) 梅室・九起・杜鷲・(浪花) 鼎左・素屋・砺山・(東武) 見外・氷壺・溪斎・(トヤマ) 樸翁・(大聖寺) 丹嶺・呼亭・(チヅ) 呂鳳・(所口) 竹塙・(金沢) 立介・悠平・柳壺・鶯呼 18 1 8

※ 「辰春」／朱囲み枠

87 歳旦 半裁 北山 作波 白梅図 ○ アイ ×

梅室・杜鷲・卓丈・淡節・木容・雨江・岳鳳・梅通・有節・九起・岱年・砺山・玉脂・林曹・素屋・其山・鼎左・淡叟・祖郷・惟草・五株・茶静・農支・金令・鳳朗・呂鳳・稻波・

竹塙・東神・杳坡・呼亭・丹嶺・柳壺・悠平・北山 35 3 5

※ 「たつの新春」

88 春興 四裁 北山 習謙 椿図 ○ イ ×

(京) 九起・(エド) 茶静・(ノト) 竹塙・(ノト) 勤泥・(ノト) 文器・悠平・(エツ中) 和鳴・(ノト) 柳堤・(ノト) 寄鼎・(ノト) 友朔・(ノト) 龜遊・(ノト) 直知雄・(ノト) 美升・小柳女・□□・北山

※ 青囲み枠／「如月／葵園舎」／89と一対か 16 2 2

89 春興 四裁 悠平 習謙 胡蝶図 ○ ウ ×

(ナニハ) 鼎左・(ナニハ) 素屋・(ノト) 荷月・(ノト) 鯉桃・里魴・呼亭・(ノト) 史牧・(ノト) 花水・芒翠・(エド) 卓郎・梅室・(ノト) 稻波・推夢・(エド) 見外・(エド) 風外・悠平 16 2 2

※ 青囲み枠／「如月／葵園舎」／88と一対か

90 歳旦 半裁 竹塙 中山 林和靖図 ○ ウエ ×

鳳朗・一具・由誓・得蕪・逸渕・金令・惟草・山外・祖郷・氷壺・助宣・伯遠・為山・仁寶・梅令・南枝・百丈・杜有・禾葉・抱儀・五株・卓郎・松什・流芝・見外・茶静・確嶺・

護物・梅室・卓丈・天遊・素屋・鼎左・嵐外・柳壺・悠平・  
可丈・樸翁・呂鳳・竹塙 41 4 2

91 歳旦 半裁 千丈 × | | | ×

秋水・淡叟・鼎左・桃室・鶯宿・素屋・万利・山麗・空静・  
其山・蟻兄・林曹・白鷗・其瓏・風葉・樺六・夏男・其青・  
松彦・流水・雪水・貴山・乙鵝・潮水・馬禿・春榮・霜鴻・  
三中・杉夫・一来・白雀女・寿扇・竹水・竹風・千齡・子蝶・  
蘿月・直丸・旭芳・芦巾・蜂化・松人・巨洲・(ヒゼン) 悠々・  
甫旧・岱雲・(筑前) 千丈 47 5 0

※ 桜色・草色天地引料紙

92 春興 半裁 千尺 × | | | ×

白鷗・千尺・其瓏・其瓏・千尺 三吟歌仙+2 4 0

※ 「甲辰」／桜色刷毛引料紙

93 歳旦 半裁 思文 × | | | ×

梅室・思文・有節・有節・順海・思文・思文

※ 「甲辰春」／金砂子散らし料紙 三吟半歌仙+和歌一首+4 2 5

94 歳旦 半裁 太良彦 是真 活花図 ○ アイ 仙鳧

梅室・九起・素屋・鼎左・其山・淡叟・卓池・乙良・御風・  
松竹・卓郎・由誓・嵐外・伯遠・杜有・見外・呉城・□□・  
□山・溪斎・魯心・逸渚・(雲水) 幻外・呂川・五株・由之・  
玩甫・寿文・慄々・確嶺・其山・豊雅・窓雪・菊丸・一石・  
兮阿・松甫・種丸・淡月・志一・巢古・魯水・里雪・梅山・  
交輝・珪葉・よし丸・東光・葛堂・雪松・柳處・我葉・遊澤・  
雪柳・嘯月・永長・宣女・清寄・千桜・梅外・太良彦 61 6 2

※ 「天保甲辰のとし春」

95 歳旦 四裁 里雪 椿年 羽根・毬図 ○ イエ 仙鳧

梅山・交輝・珪葉・東光・葛堂・よし丸・一石・志一・宣女・  
永長・梅外・太良彦・里雪・里雪・里雪 15 2 7

※ 「甲辰春」

96 歳旦 四裁 伯遠 是真 弁天嫗図 ○ アイエ ×

松竹・助宣・呂川・得蕪・富女・満女・緑女・五株・杜有・  
折桂・山外・伯遠 12 1 5

※「甲辰初春」

97 歳旦 四裁 交輝 × | | | 仙鳧

(洛)梅室・(浪花)素屋・(三河)卓池・(ムツ)鶯阿・伯遠・卓郎・由誓・溪斎・巳千・幻外・碓嶺・志一・里雪・梅山・東光・葛堂・珪葉・太良彦・交輝 19 1 9

※「きのえ辰春」／金箔散らし料紙

98 春興 四裁 孤村 是真 笥函 ○ アイウ ×

呂川・伯遠・久女・錦賀・緑女・栄女・富女・瀧女・さま女・芳女・孤村 11 1 3

※「甲辰仲春」

99 夏興 四裁 流芝 × | | | 仙鳧

山外・伯遠・呂川・松什・杜有・清瀧・三江・機好・蓑甲・先考・魚水・桃江・以礼・新・石寫・登景・梅吏・可悦・元風・ふみ女・つる女・ちよ女・近十・米也・荃裡・勝錦・流芝

※「辰の夏」／剃髮記念／色紙を裏に用い、両面に銀箔を散らす／贈答用に谷折りをし裏を向けて配布したもの 26 3 5

100 春興 四裁 山外 是真 桜花実函 ○ イエ ×

山外・松什・折桂・青和・呂川・伯遠・山外 7 1 4  
※「天保甲辰晩春」／天薄緑色刷毛引料紙

101 春興 四裁 野巢 圭岳・一具・臥春 桜花卉・鳥居・蜂巢合 作函 ○ アイウエ ×

一具・夷則・尊阿・野巢・野巢・野巢・野巢・野巢・野巢・野巢・野巢 11 1 4  
野巢・野巢

※「甲辰春」

102 歳旦 半裁 太良彦 椿年 花見弁当函 ○ イ 仙鳧

鼎左・素屋・其山・蟻兄・淡叟・九起・杜鷲・梅室・素磨・杜有・溪斎・卓郎・**太良彦・伯遠・松什・光輝・呂川・里雪**・松什・伯遠・呂川・里雪・英二・交輝・珪葉・よし丸・葛堂・宣女・東光・梅山・里雪・交輝・葛堂・(其山更)其堂・嘯月・東光・(永長更)敬黒・窓雪・梅山・珪葉・伯遠・呂川・幻外・松什・太良彦 連句六句+ 39 5 4

※「甲辰春」

103 その他 半裁 映門 × | | | ×

映門・竹處・菊圃女・竹臣・桂堂・雲泉・餘力・呂国・素屋・

水月・鼎左・鶯宿・井左・此方・白鷗・桃室・淡叟・其山・

雨翠・其山・淡叟・桃室・白鷗・此方・井左・鶯宿・鼎左・

水月・素屋・呂国・餘力・桂堂・竹處・竹臣・菊圃女・雲泉・

映門 半歌仙+19 4 9

※ 芭蕉像開眼記念／薄茶刷毛目料紙

104 追善 半裁 柳水 祭魚 花簪図 ○ アイ ×

南溪坊・梅通・芳英・黙池・菊陀・釜涼・月撫・芥舎・九起・

雨翠・不染・若種・壽堂・祭魚・龜洞・梢蘿・南徳・柳水

※ 南溪追善 18 3 2

105 夏興 半裁 梅通 芥舟 三条大橋擬宝珠・郭公図 ○

アイウエ ×

菊陀・柳水・窓雨・湖青・龜洞・盛美・梢蘿・一濤・露竹・

佳鳴・南徳・梅通 12 1 2

106 夏興 小 買雪 棟堂 河骨図 ○ イエ ×

虚白・鼎左・岱年・馬良・梅室・月坡・買雪 7 9

※ 六裁

107 夏興 小 鼎左 × | | | ×

鶯宿・素屋・松隣・光林・鼎左 5 7

※ 十二裁／天緑引料紙

108 秋興 四裁 養爪 吞舟 蓮花実図 ○ イエ ×

岱年・馬良・有節・林曹・いはほ・梅曦・夜白・楓下・如光・  
左琴・蓬室・養爪・養爪 13 2 4

109 夏興 四裁 此松 × | | | ×

鼎左・桃室・其瓏・呂国・素屋・餘力・芦山・花調・淡叟・  
此方・藻雨・金江・麦雨・此松 14 1 9

※ 桜色野紙

110 その他 四裁 鼎左 × | | | ×

超然・淡叟・吳国・鶯宿・水月・白鷗・桃室・井左・素屋・  
鼎左 10 1 4

※ 送別／天地桜色綠色摺料紙

111 夏興 半裁 北山 雨鳴 杜若図 ○ アイ ×

鳳朗・由誓・風外・茶静・見外・卓郎・松什・五株・魯心・  
仁寶・呉城・溪斎・梅令・為山・伯遠・氷壺・護岳・祖郷・  
山外・流芝・惟草・金令・逸洩・得蕪・碓嶺・一具・護物・  
卓池・水竹・蓬宇・悠々・杜鷺・岳鳳・素屋・鼎左・淡叟・  
素信・呂鳳・柳壺・悠平・北山 41 4 1

112 夏興 四裁 鶯呼 蕉園 撫子図 ○ アイウ ×

(京) 梅室・(京) 九起・(浪花) 素屋・(浪花) 其山・(江戸) 逸洩・  
(江戸) 呉城・(江戸) 鳳朗・(金沢) 柳壺・(金沢) 年風・鶯呼

※ 「辰の初夏」／「北陸津幡」 10 1 0

113 夏興 四裁 柳堤 画者未詳 水辺蚩図 ○ イエ ×

(ミカハ) 卓池・(京) 九起・(京) 卓丈・(ナニハ) 素屋・(エド)  
呉城・(エド) 仁寶・(エド) 米也・(エド) 金令・(江戸) 流芝・  
(エド) 見外・(エド) 風外・(カヅ) 柳壺・(カヅ) 悠平・(カヅ)  
北山・(大正寺) 丹嶺・(ツバタ) 鶯呼・(伏木) 和鳴・(ウカイ) 生化・  
(正院) 鳳兮・(松ナミ) 稻波・(中居) 寄鼎・(トキ) 花溪・(七尾)

竹塙・(千洛) 呂鳳・(杉ノヤ) 柳堤

114 夏興 四裁 笠斎 小虚散人 金魚鉢図 ○ ウ ×

華美・桃枝・麦雨・李山・藻雨・此松・此方・笠斎 8 8  
※ 「花<sup>西</sup>峯吉梓」の方印あり

115 秋興 四裁 藻雨 小虚散人 海老提灯・鬼灯図 ○ アイエ ×

(ワカ山) 一鷺・(ワカ山) 南舎・蝶夢・酒仙・素白・葎左・稻花・  
井華・其律・藻雨 10 1 0 三六

116 秋興 四裁 李曉 狩野永岳 夜船図 ○ イエ ×

鼎左・永岳・秀竹・柳柯・芦水・杏斎・李曉 7 1 1

※ 「天保甲辰仲秋」

117 秋興 四裁 淡叟 祭魚 案山子図 ○ アイエ ×

鼎峰・此方・松隣・其山・光林・花調・桃室・呂国・水月・  
鶯宿・素屋・鼎左・淡叟 13 1 4

※ 「甲辰仲秋」



25 2 5

118 秋興 小 太良彦 画者未詳 河畔図 ○ イエ ×

卓郎・呂川・敬黒・太乙・太良彦 5 1 1

※ 「甲辰仲秋」／十六裁／画者の印があるも、綴じ目で見えず

119 秋興 小 伯遠 × | | | ×

呂川・山外・伯遠 3 9

※ 十六裁／網目型押天金引薄青色引料紙

120 秋興 小 此方 聴雨・小虚 月見合作図 ○ アイウエ ×

麦雨・笠斎・李山・藻雨・此松・此方 6 1 3

※ 六裁

121 秋興 小 如草 雀堂 菊花図 ○ イエ ×

流芝・一具・素屋・其山・玄子・呂鳳・柳堤・山外・一止・守唇・為山・勝錦・雨翠・孤柳・祖郷・英泉・棠湖・虚恵・由誓・(来也改)如草 20 3 3

※ 六裁

122 秋興 小 敬黒 × | | | 仙鳧

里雪・太乙・太良彦・卓郎・山外・呂川・幻外・珪葉・敬黒

※ 「甲辰秋」／六裁／秋草墨摺料紙 9 2 2

123 秋興 半裁 丈翠 祭魚 道標・秋草図 ○ アイ ×

梅室・杜鷺・梅通・寿堂・如柳・琴亭・祭魚・烏谷・岳鳳・卓丈・篤明・仙歩・禾明・風光・有節・岱年・柏翠・富川・如明・大竹・一睡・杜良・芳水・丈翠 24 2 6

※ 「柳鶯社」

124 秋興 半裁 草居 花屋主人 菊花図 ○ アイ ×

(一翠改)松翁・雨外・買山・有声・月人・(赤穂)隠居・聴洋・蘿斎・其珀・楓可・井竹・可就・秋崖・夢石・穀袋・霞岳・隣草・鳥暁・(我詠更)素流・耕夫・静志・梅川・桃舟・芦郷・芝耕・鼎左・草居 27 3 0

125 追善 半裁 杜有 石湖 朝顔図 ○ イエ ×

梅室・其山・素屋・鼎左・九起・岱年・可大・波同・半谷・

黄山・水竹・卓池・素樸・鼎峰・閑那・五株・虚白・遅流・  
徐道・祖郷・溶々・為山・一具・松什・伯遠・折桂・太良彦・  
叩月・山外・卓郎・友竹・呂川・見外・得蕪・流芝・鏡亭・  
青和・溪斎・杜有 39 6 4

※ 「辰のとし」／平山一周忌

126 秋興 半裁 太良彦 抱一(文村) 綿花図 ○ アイ 仙鳧

白鷗・松什・卓郎・交古・杜有・見外・呂川・湖山・幻外・  
祖郷・太乙・蝶美・涼花・清甫・龜齡・榎賀・英二・厩角・  
白水・里雪・交輝・珪葉・東光・葛堂・敬黒・よし丸・雪柳・  
遊澤・一亀・栄古・志一・梅月・太良彦 33 3 4

※ 「甲辰仲秋」

127 秋興 半裁 太乙 壺格 砧図 ○ アイ 仙鳧

虚白・梅室・九起・素屋・其山・淡叟・呂鳳・卓池・悠々・  
御風・松什・湖山・杜有・交左・見外・蝶美・涛々・白鷗・  
叩月・由之・青和・伯遠・山外・呂川・魯中・幻外・濱吉・  
石居・百尺・米山・寿文・東阜・静我・里雪・敬黒・珪葉・  
葛堂・友輔・一儼・梅月・稻豊・遊澤・由誓・卓郎・  
**太乙・卓郎**・太乙 45 十三吟半歌仙 6 4

※ 「甲辰秋」

128 慶賀 半裁 如草 × | | | 松軒

鳳朗・茶静・逸洌・水由・鳥吟・湖山・風外・為山・遅流・  
溪斎・弄化・百丈・双・秋香・惟艸・萬古・山外・伯遠・五株・  
助宣・太乙・徐道・杜有・呂川・松什・卓郎・梅笠・氷壺・  
金波・青和・由之・幻外・呂鳳・見外・得蕪・権陰・小柯・  
聽松・魯心・春峨・青府・瓦村・金令・一具・祖郷・溶々・  
臥春・夷則・太眠・勝錦・玄子・流芝・  
**玄子**・一具・祖郷・(米也改)如草 連句六句+ 53 6 2

※ 「辰の冬」／改号披露／雲鶴図摺金箔散らし料紙

129 冬興 小 應知 鵬居 落葉図 ○ イエ ×

可大・李裳・鵬居・一清・應知 5 6

※ 六裁／前書に「初冬三日應知亭にて」とある

130 秋興 四裁 淡節 高雅 萩・薄図 ○ アイ ×

黄山・桃鳥・而后・旭嶂・桃秀・李裳・馬曉・芝石・月底・  
鴨居・蓬陽・半嶺・露井・梅裡・金樵・我竟・應知・一清・  
可大・卓丈・淡節 21 2 3

131 冬興 四裁 天遊 碧潭 羽扇図 ○ イ ×

天遊・黄山・蓬陽・適齋・修竹・聽松・溪居・一貫・桃里・  
表畝 10 1 2

※ 「辰仲冬」

132 冬興 四裁 天遊 高雅 狐天狗面図 ○ アイ ×

天遊・月底・黄山・桃鳥・而后・鵬居・應知・李裳・一清・  
蓬弄・烏月・桃秀 12 1 4

※ 「辰陽生」

133 冬興 四裁 鼎左 × | | | 素屋

九起・卓丈・東升・素屋・桃室・呂国・松隣・湖雲・此方・  
水月・鼎左 11 1 2

※ 「甲辰初冬」／前書に「河東大鵬楼上即興」とある／  
薄茶引刷毛目料紙

134 冬興 四裁 養瓜 珉堂 冬苺図 ○ アイ ×

岱年・九起・淡節・祭魚・砺山・卓丈・梅室・有節・杜鷲・  
素屋・梅曦・楓下・天遊・蓬室・玉舟・しか・きよ・六峯・  
珉堂・左琴・養瓜 21 2 8

135 冬興 半裁 水月 × | | | ×

梅室・水月・白鷗・素屋・桃室・井左・岱年・呂国・有節・  
淡叟・此方・杜鷲・松隣・烏谷・吳雀・卓丈・杜蓼・淡節・  
鼎左・成祇・九起・岱月・梅石・祭魚・梅室・烏谷・梅石・

岱年・有節・卓丈・祭魚・岱月・成祇・淡節・九起・杜鷲・  
杜蓼・松隣・呂国・井左・其山・白鷗・淡叟・桃室・吳雀・  
此方・鼎左・鶯宿・水月・素屋・佳峯

連句二十四句＋27 5 6

※ 「甲辰神無月十八日」／天地銀砂子料紙

136 その他 半裁 金令 其一 水仙図 ○ アイ 仙鳧

呂鳳・由誓・見外・鳳朗・一具・貴存・柳堤・竹外・花溪・  
北山・竹塢・萬古・風外・米山・溪齋・為山・溶々・小柯・  
伯遠・惟草・得蕪・湖山・百尺・松什・鳥吟・茶靜・梅笠・  
幻外・石居・太良彦・逸瀨・卓郎・山外・不爭・鶴居・鳳兮・  
素玉・生化・悠平・柳壺・祖郷・金令 42 7 3

※ 「甲辰初冬」／呂鳳帰国送別

137 その他 半裁 見外 凌雲 水仙・山茶花図 ○ アイ 松軒

呂鳳・悠平・北山・木圭・和鳴・季圓・嵐汐・晴江・棋樵・  
松坡・鶯呼・習之・晚籟・稻波・奇鼎・竹雨・淇洲・野艾・

其種・竹塙・柳壺・大鵬・百尺・米山・(女)尾山・萬古・見外

※ 「甲辰の冬」／呂鳳帰国送別

27 4 0

138 その他 半裁 徐道 × | | | 仙鳥

徐道・呂鳳・見外・幻外・護岳・悠平・柳壺・一具・金令・

太良彦・杜有・米山・萬古・太乙・石居・惟草・山外・大鵬・  
百尺・伯遠・為山・溶々・苴菜・祖郷・溪齋・松什・卓郎・  
由誓・鳳朗・呂鳳・見外・幻外・護岳・徐道

五吟半歌仙+29 5 6

※ 「甲辰初冬」／呂鳳帰国送別／天地薄茶引刷毛目料紙

139 その他 小 杜有 × | | | ×

呂鳳・見外・溪齋・柳壺・悠平・杜有 6 1 2

※ 呂鳳帰国送別／六裁／銀箔散らし料紙

140 春興 小 鶯宿 鶯宿 印版・白梅図 ○ アイ×

梅室・素屋・(松好更)汶室・素陶・神尊・操居・曲阜・為声・  
直丸・旭芳・不角・林亭・里柳・鶯宿 14 1 7

※ 六裁

▼弘化二年

141 歳旦 小 百丈 是真 紅梅・賽銭図 ○ イエ ×

梅室・太乙・白雀女・曲阜・溪齋・五株・芥舟・素伯・荷少・  
百丈 10 1 9

※ 六裁

142 歳旦 四裁 富女 × | | | ×

伯遠・立志・孤村・栄女・よし女・菟代女・瀧女・久女・  
さま女・錦賀・富女 11 ×

※ 模様入り短冊・色紙散らし料紙

143 歳旦 四裁 伯遠 是真 江口遊女図 ○ アイエ 松軒

助宣・杜有・松什・得蕪・山外・荷少・呂川・五株・富女・  
折桂・伯遠 11 1 5

※ 「乙巳初春」

144 歳旦 四裁 杜有 萬士 旭日雪中梅図 ○ アイウエ ×

伯遠・大鵬・徐道・見外・五株・溪齋・杜有 7 7

※ 「乙巳孟春」

145 歲旦 四裁 李旦 凌雲 湯呑函 ○ イ 松軒

梅室・其山・素屋・鼎左・淡叟・嵐々・梁居・一止・呂鳳・  
貴存・竹外・甫山・怒兮・其外・其翼・石鼎・呼牛・太良彦・  
見外・李旦

20 2 0

※ 「弘化乙巳の春」

146 歲旦 半裁 太良彦 椿年 海苔・梅花函 ○ イ 仙鳧

梅室・九起・鼎左・素屋・其山・淡叟・素麿・松什・杜有・  
卓郎・由誓・流芝・山峰・伯遠・太乙・肆山・眠牛・忍齋・  
祖郷・寿文・五株・見外・由之・呂川・幻外・右斤・叩月・  
為山・確嶺・(陸奥)一止・江三・児川・一照・桃宇・梅溪・  
松甫・玉英・白水・駿龍・先之・(少年)梅宇・青牛・其堂・  
窓雪・菊丸・魯水・志一・交輝・梅山・珪葉・嘯月・葛堂・  
遊澤・よし丸・敬黒・雪柳・柳宇・宣女・東光・里雪・太良彦

61 6 1

※ 「弘化二年乙巳春」

147 歲旦 半裁 太乙 孤村 笥・鶯函 ○ アイウ 仙鳧

素麿・蝶美・白鷗・千嶺・湊々・忍齋・太良彦・松什・伯遠・

折桂・杜有・助宣・青升・金令・徐道・山外・大鵬・由之・  
叩月・為山・竹山・萬古・如草・晴齋・孤村・幻外・呂川・  
右斤・得蕪・見外・溪齋・卓郎・太乙

33 4 4

※ 「弘化巳の春」

148 歲旦 半裁 松軒 是真 笙・諸道具函 ○ アイエ 松軒

由誓・一具・得蕪・祖郷・萬古・伯遠・金令・緑葉・松什・  
山外・あかし・溶々・太眠・見外・流芝・為山・梅室・杜鷲・  
淡節・卓丈・九起・梅通・祭魚・孤柳・冬岐・岱年・淡叟・  
其山・白鷗・素屋・鼎左・□□□□悠々・映門・西疇・  
乙良・北山・悠平・柳壺・呂鳳・野巢・友甫・杜有・秋香・  
惟草・溪齋・聽松・只濤・一裕・蓬流・魯心・夷則・如草・  
勝錦・梅笠・玄子・百丈・萬里・徐道・小柯・鳥子・蒼明・  
台朗・陶一・南枝・風外・三和・鶴翁・千齋・竹煙・西馬・  
焉哉・永久・呂叟・逸洌・鳳朗・鳥吟

78 9 0

※ 「弘化乙巳春」

149 歲旦 四裁 雨青 × | | | 松軒

伯遠・見外・五株・由誓・山外・楳堂・石羊・盛風・梅吏・  
舟仙・雨青

11 1 1

※ 「乙巳初春」／扇面仕様

150 春興 四裁 岱年 画者未詳 椿図 ○ イウエ ×

至風・至風・至風・至風・祇白・白鷗・烏谷・岱年 7 1 5

※ 「巳春」



151 春興 四裁 素屋 秋亭 小島・富士遠望図 ○ アイエ ×

梅室・鼎左・(塙)此方・(南山)鼎峰・荷岳・器水・(玉川)都春・  
梅居・右柳・東啓・尤美・素曰・林亭・元枝・芦室・柿守・  
杜鴻・斑竹・素屋 19 2 4

152 春興 四裁 素屋 秋亭 翁吹笛図 ○ アイエ ×

梅室・松隣・鶯宿・松園・茂卿・貞恒・龍橋・一三・途松・  
(石見)青池・(備中)香雨・東啓・林亭・可生・松室・貞美・  
秋介・梅漁・愚佛・杜鴻・素屋 21 2 3

153 歳旦 四裁 愚佛 素屋 柴門・梅林図 ○ イエ ×

登旭・おに丸・連波・一虎・和楽・其若・可生・城之・素屋・  
愚佛 10 1 7

※ 「乙巳鶏旦」

154 春興 四裁 素屋 秋亭 椿・花挿図 ○ アイエ ×

芦汀・蓮子・孤松・三千里・途松・晴樹・何龍・露澄・一三・  
三亀・貴徳・月試・狛子・文貫・素屋 15 一部二段 2 6

155 歳旦 四裁 李暁 岸岱 蛤・蛭図 ○ イエ ×

鼎左・秀竹・与加呂・李暁・李暁 5 9

156 歳旦 四裁 松隣 文雄 海老・炭図 ○ イエ ×

鼎左・素屋・蘭秀・井竹女・卦龍・(石州)青池・(かふち)自来・  
一東・登柳・老化・東枝・梅霞・松隣 13 1 4

157 歳旦 四裁 花屋菴 × | | ×

素屋・(英居改)耳洗・(南山)器水・(かふち)南齡・春水・松坡・  
三津里・(土佐)物海・(ふく山)紅顔・(兵庫)柏翠・秀竹・  
(さかひ)此方・(八尾)秋宣・秋唄・花屋菴 15 ×

※ 梅紅葉等囲み枠散らし料紙

158 歳旦 四裁 鶯宿 × | | ×

梅室・素屋・光林・超然・鼎左・里柳・人笑・理調・皎月・

儼窺・芝月・如光・風光・里玉・露光・長年・里隱・鶯江・  
林亭・鶯宿 20 2 1

※ 「清庵柱雨林」印がある／薄桜色料紙に白抜き「鶯」の  
字摺り込みがある

159 春興 小 鼎左 鼎左 狐・宝珠図 ○ アイエ ×

玉岡・和集・素屋・鼎左 4 9

※ 六裁

160 春興 小 冬岐 梅室 蒲公英図 ○ アイエ ×

虚白・可松女・其山・素信・冬岐 5 9

※ 六裁

161 歳旦 小 素屋 素屋 旭日松図 ○ イエ ×

素屋・素屋・素屋・素屋・素屋 5 6

※ 「乙巳春」／十二裁

162 春興 小 此方 小虚 木彫鳥型玩具図 ○ イ ×

(浪華) 其山・杜鴻・斑竹・素屋・此方 5 9

※ 八裁

163 歳旦 半裁 此方 小虚 松原図 ○ アウエ ×

此角・麦雨・鹿野女・桃枝・此松・千枝・其律・(南) 蘆月・  
馬風・文岳・晴方・浦住・千塵・春籠・笠斎・(浪華) 鼎左・  
素屋・呂国・蘆山・井資・光林・休叟・水月・秋水・其山・  
淡叟・(洛) 岱年・有節・九起・卓丈・淡節・祭魚・杜鷺・梅室・  
華實・富春・鼓腹・米汁・貴低・徐下・芦丸・奈可女・一之・  
素白・芦月・木父・(少年) 芦角・雨尺・松夫・江鳥・孤鳳・  
其風・松庭・子尺・五楓・看雨・竜枝・芦舟・此方 59 6 1

164 歳旦 半裁 餘力 画者不明 舟曳図 ○ イウ ×

梅室・虚白・淡叟・雨翠・史也・涼呼・石鼎・梅通・岱年・  
其山・鼎左・丈翠・九起・素屋・有節・風光・花調・枝月・  
青崔・杜鴻・白止・蘭秀・桂洲・節之・烏谷・響角・杜鷺・  
布国・淡亭・月下・茶烟・禾明・米室・梢蘿・斑竹・米山・  
文賀・梅西・龜栖・香山・篤之・栗々・翠葉・井竹女・淇悠・  
桃室・黙池・昌風・桐一・一具・南枝・太良彦・得蕪・夜白・  
梅曦・孤柳・仙歩・東宇・玉旨・淡節・燕川・篤明・碩水・  
(寿堂更) 道機・梅石・餘力 66 6 9

※ 「巳のはる」

165 歳旦 半裁 月下 来章 御齒固之図 ○ アイ ×

(大坂) 鼎左・(大坂) 素屋・(洛東) 九起・(京) 梅室・琴風・梅鈴・  
梅翁・晴林・其泊・詠禾・吐香・素風・運梅・翠賀・如流・  
春諷・梅林・南嶺・青蛾・月窓・英月・孤楓・芦汀・素考・  
世外・月下 26 2 8

166 歳旦 四裁 光林 秋亭 胡蝶・辛夷図 ○ アイエ ×

鼎左・超然・鶯宿・素屋・此方・松隣・蘭秀・荷涼・蘭操・  
其珀・操居・井竹女・文賀・卦龍・里柳・人笑・里隱・林亭・  
鶯江・風光・光林 21 2 1

167 慶賀 四裁 賀曉 文麟 天狗・福面図 ○ イエ ×

(千来改) 賀曉・賀曉・賀曉・賀曉・賀曉・素屋 6 1 5  
※ 千来改名祝

168 その他 半裁 徐道 圭岳 飛鳥図 ○ アエ 仙鳧

淡叟・素屋・鼎左・白鷗・林曹・其山・虚白・九起・節之・  
枝月尼・梅通・杜鷺・祭魚・寿堂・松蘿・有節・梅室・栢山・  
流芳・而后・月底・黄山・卓池・石采・水竹・蓬宇・呼卵・  
竹里・碧山・立宇・祖郷・一具・杜有・得蕪・金令・溶々・

萬古・小柯・見外・溪斎・由誓・徐道 42 4 7  
※ 「弘化己如月」／祖郷帰国送別

169 歳旦 半裁 大鵬 凌雲 紅梅・水辺閑居図 ○ アイエ ×

遅流・宜稻・奔蝶・護岳・井之・秋香・見外・乙雄・谷鳩・  
釣雪・琴高・萬古・杜有・為山・溪斎・宜菜・大鵬 17 1 8

※ 「弘化乙巳孟春」

170 春興 半裁 溪斎 × | | 筆耕不明

大鵬・静軒・溪斎 三吟歌仙 3 7

※ 和漢聯句／金銀箔散らし料紙

171 春興 三裁 西疇 柳木 小松・土筆図 ○ アイ 淳堂

由誓・一具・萬古・夜松・風外・卓池・黄山・梅曦・其山・  
斑竹・杜鴻・素屋・梅通・雨翠・岱年・梅室・乙良・□□・  
驚眠・夏桐・稻彦・秀女・関伍・梅逸・道雄・木山・守年・  
竹宇・古巷・杜里・流水・眉白・梧葉・西疇 34 3 7

※ 「巳の春」／紙背は黄色色紙に「牧蒔□□菴」の  
表題を入れた料紙を継ぎ172とともに貼る

172 歳旦 小 素屋 東南 豆人形図 ○ イエ ×

一三・一三・素屋

3 1 2

※ 「乙巳歳旦」／二十四裁

173 歳旦 四裁 呂鳳 × | | | ×

(エド) 見外・金令・杜有・徐道・米山・萬古・大鵬・百尺・  
(ナニハ) 素屋・(京) 有節・北山・卯方・鶴居・貴存・鶯叟・  
美升・角招・龜村・竹外・疎石・北鳴・大雄・柳堤・柳壺・  
悠平・卓丈・呂鳳

27 2 7

※ 「巳の春」／「能登此花連」／宝珠空押朱色飾枠

174 春興 四裁 鶯呼 × | | | ×

(京) 有節・杜鷺・祭魚・九起・(ナニハ) 杜鴻・斑竹・其山・  
素屋・(江戸) 呉城・梅石・見外・溪斎・北山・賀水・我柳・  
鹿恋・柳壺・大夢・鶯呼

19 1 9

※ 模様入り短冊枠

175 慶賀 変形 雀叟 × | | | ×

梅室・淡節・雨江・梅先・梅后・一幽・雀叟

7 2 2

※ 「乙巳のはる」／俳号命名入門祝賀／半裁よりやや小／  
金箔散らし料紙

176 その他 半裁 不明 画者不明 社殿・時鳥図 ○ アイ ×

梅室・淡節・□大・□岐雄・□□□□□□□□□□□□□□□□  
□雄・□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

15 1 9

※ 「化夏」／潤水留別

三篇

「坤の部三」



▼弘化二年

1 冬興 四裁 泥牛 × | | | ×

黄山・桃鳥・應知・桃秀・我竟・李裳・一清・棋裡・芝石・

而后・泥牛 11 1 1

※ 「乙巳」／桜色料紙

2 秋興 四裁 木山 乙良 瓜図 ○ アウ 淳堂幽人

由誓・有節・其山・萬古・柳壺・(在江戸)鷺眠・素屋・樹石・清民・徐道・悠々・風外・一具・龜友・古巷・梧葉・飛高女・眉白・稻彦・道雄・梅逸・雪良・竹宇・董沙・夏桐・西疇・乙良・守年・木山 29 3 3

※ 「巳の長月」

3 秋興 半裁 斑竹 秋亭 南天・簑虫図 ○ アイ ×

梅室・其山・伯遠・曲阜・松隣・鼎左・溪齋・此方・荷少・太乙・可松・吳城・卓池・鼎峰・芦室・應叟・西疇・元枝・松露・悠平・芦江・有節・見外・柳壺・茶烟・桜哉・北山・柿守・鶯呼・秋亭・藻雨・餘力・淡叟・光林・白雀女・李暁・其律・都春・松室・卦竜・素曰・鶯宿・素屋・杜鴻・斑竹

※ 「乙巳秋」

4 秋興 半裁 素曰 花屋主人 椎茸図 ○ アイ ×

45 4 6

6 冬興 半裁 稻彦 雪叟(乙良) 椿・炭籠図 ○ アイ 篤淳堂

(エド)由誓・万古・松什・百丈・樹石・見外・(ラク)岱年・有節・(ナニハ)素屋・其山・松隣・鼎左・(ヒゼン)悠々・(スルガ)漣山・(キイ)鼎峰・(イセ)石鼎・(カヅ)柳壺・北山・(ミカハ)

※ 「弘化乙巳秋」／平山三回忌追善

呂川・九起・鼎左・素屋 49 5 8

5 追善 半裁 素屋 秋亭 木槿・空蟬図 ○ アイ ×

杜有・松什・山外・溪齋・卓郎・太良彦・遲流・荷少・為山・得蕪・溶々・見外・一具・梅室・黙池・雨翠・孤柳・可大・黄山・我竟・烏律・閑那・鼎峰・茶烟・杉露・九花・可松・呂鳳・半各・董秋・都春・淡叟・其山・水月・此方・卦竜・巨洲・杜鴻・斑竹・光林・鶯宿・松隣・伯遠・折桂・五株・其山・素屋・素曰 48 5 4

※ 「乙巳秋」

石采・卓池・飛高女・眉白・春成・北里・竹宇・道雄・董沙・  
木山・守季・梧葉・可邨・梅逸・夏桐・西疇・乙良・夕照・  
古巷・稻彦 38 4 0

※ 「巳の冬」

7 歳暮 半裁 眉白 雪叟(乙良) 新年調度図 ○ アイ 淳堂幽人

(エド) 由誓・鳳朗・万古・溶々・鷺眠・氷壺・風外・一具・  
(ラワリ) 而后・芝石・應知・(ノト) 呂鳳・□□・□□・□□・  
□□・□□・□□・□□・淡節・梅室・春成・北里・竹宇・  
董沙・木山・可邨・梧葉・梅逸・夕照・古巷・稻彦・(雪郎更)  
如好・夏桐・飛亭女・西疇・乙良・道雄・眉白 39 4 2

※ 「巳の抄冬」／状態悪く一部推読を含む

8 秋興 半裁 守年 圭岳 鶉図 ○ アイウ 仙鳧

由誓・一具・萬古・樹石・伯遠・吳城・機蝶・惟草・風外・  
(ラハリ) 黄山・(ミカハ) 塞馬・(イセ) 梅曦・(ムツ) 多代女・  
英泉・□斎・楓関・(スルガ) 碧山・(ヒタチ) 野巢・(デハ) 松華・  
(ヒゼン) 悠々・(サド) 文仙・(カミ) 卓丈・此山・(ナニハ) 素屋・  
其山・(ラク) 梅通・有節・麟足・青哉・青枝・琳峯・素考女・  
三免・鷺川・十良雄・暉翠・稻彦・尔弓・飛高女・古巷・亀友・  
董沙・竹宇・梅逸・眉白・梧葉・西疇・乙良・木山・守年

※ 「乙巳秋」

9 夏興 四裁 悠平 × | | | ×

(山城) 有節・祭魚・烏谷・(ラシミ) 岳鳳・(大和) 髭雄・(河内)  
不二門・(和泉) 擔鶴・北方・(摂津) 素屋・呂国・杜鴻・斑竹・  
(三田) 冬岐・素玉・朴陽・里夕・三津女・風和・(高ま) 武亥・  
卓丈・悠平 21 2 1

※ 牡丹空摺緑料紙

10 歳旦 三裁 鼎左 × | | | ×

梅室・卓池・觀水・柏枝・(松玉改) 琴雄・松榮・岱年・草居・  
玉輝・権玉・一推・二郎・素屋・鼎左 14 1 4

※ 「弘化第二乙巳初春」／天銀引料紙

11 夏興 小 松隣 冬雄 蝸牛図 ○ イエ ×

鼎左・素屋・松隣 3 8

※ 八裁

12 秋興 四裁 花佛 富長水 赤蜻蛉図 ○ アイ ×

梅室・九起・卓池・一具・溪齋・伯遠・杜有・見外・此方・  
月下・乙良・淡叟・鶯宿・素屋・光林・井竹女・松隣・鼎左・  
木笠・馬脉・魚村・花佛

22 2 2

※ 「乙巳七月」

13 秋興 四裁 徐道 凌雲 草花図 ○ アイ 松軒

柳壺・北山・卓丈・悠平・呂鳳・一具・金令・卓郎・杜有・  
萬古・伯遠・由誓・溪齋・見外・徐道

15 1 5

※ 「弘化乙巳とし初秋」

14 秋興 四裁 二葉 × | | ×

一具・為山・見外・伯遠・丈翠・禾明・素屋・多代・溶々・  
玄子・一止・春室・茶山・都岐雄・祭魚・其山・鼎左・有節・  
黄山・御風・二葉

21 2 2

※ 青二重囲み枠

15 夏興 四裁 箕年 × | | ×

一東・箕年・春草・可休・重成・金丸・樗大・梅霞・金丸・  
一東・春草・幻居・可休・竹山・重成・有水・此君尼・登終・  
其山・素屋・松隣・箕年

連句六句+16 2 5

※ 「巳乃夏」／青囲み枠

16 夏興 四裁 漁村 秋亭 白牡丹図 ○ アイウエ ×

鼎左・鶯宿・素屋・松隣・光林・梅室・岱年・物海・馬脉・  
木笠・漁村

11 2 2

17 春興 小 肆山 × | | | 仙鳧

(浪花) 鼎左・素屋・(武さし) 太良彦・肆山

4 1 5

※ 「乙巳のはる」／八裁／刷毛目模様料紙

18 夏興 小 素屋 × | | | ×

鼎左・素屋・餘力・杉露・茶烟

5 1 1

※ 九裁／布目地天銀引料紙

19 夏興 小 素屋 東南 駒図 ○ アイ ×

松隣・餘力・素屋

3 6

※ 八裁

20 冬興 四裁 一雨 長水 水辺茅屋図 ○ イエ ×

由誓・一具・見外・素屋・松隣・吐屑・蘭秀・荷涼・井竹女・  
其珀・秋亭・光林・鶯宿・鼎左・一雨 15 1 7

21 冬興 四裁 鶯宿 方齋 時雨・蔦囿 ○ アイウ ×

鼎左・松隣・光林・水月・超然・素屋・里柳・風光・鶯江・  
操居・如光・里隱・林亭・鶯宿 14 1 8

22 冬興 四裁 一雨 文賀 法楽壳囿 ○ イエ ×

梅室・岱年・杜鷲・有節・道機・木容・光林・松隣・眉山・  
井資・溪叟・由誓・素屋・水月・其山・曉雨・井竹女・幸女・  
蘭秀・吐屑・荷涼・鶯宿・枕窓・九起・鼎左・一雨

26 一部二段 3 4

23 冬興 四裁 木笠 長水 小松・鶯囿 ○ イエ ×

梅室・九起・岱年・卓池・一具・溪齋・松竹・太良彦・五株・  
杜有・見外・由誓・淡叟・其山・素屋・光林・井竹・松隣・  
鶯宿・水月・鼎左・魚村・馬脉・花佛・木笠 27 3 6

▼安政五年

24 冬興 半裁 葦波 葭亭 芦辺囿 ○ アイ ×

25

慶賀 半裁 畝月 是真 真鯉囿 ○ イエ 抱節子

有節・芹舍・淡節・赤甫・文海・公成・梅通・鼎左・林曹・  
松隣・知風・素屋・五鈴・而后・一清・指石・梅裡・蓬宇・  
由誓・芳艸・尋香・魯心・白亥・山子・霞村・明水・靖路・  
田蓑・花海・見外・為山・天由・逸淵・多代・清民・一止・  
舍用・唵風・腫山・乙良・契史・鷗池・左郊・豊容・半夢・  
抱節・蟻城・青茅・天馬・一外・權居・逸松・高路・梧井・  
正孝・帆風・橘外・松裡・青葉・露丘・得二・嵐艸・宇雀・  
鯉勢・應可・東阡・草尺・羅村・北誕・茶番・葦波 71 7 1

※ 「戊午冬」／群鳥は画題とせず

守黒・佳悠・由儀・菊彦・畝月・雨桐・秋里・池鶴・素風・  
佳哥・大雅・山兒・五英・一秋・美ふね・桃園・柏翠・如牛・  
春松・蓼山・五雄・鶯谷・芹舍・有節・鳥岳・梅通・素屋・  
挙一・鼎左・林曹・而后・抱儀・拙誠・きく雄・祖郷・明水・  
五渡・不染・花海・由之・氷壺・為山・山子・西馬・瓦村・  
留木・波鷗・抱叔・松鶴・龜遊・五休・完鷗・東潤・由誓・  
美ふね・桃園・和晴・春松・澄江・器養・如牛・大雅・  
是得・田珂・蓼山・素風・桂歌・池鶴・山兒・五雄・一峰・  
泰阜・柳塘・貞寿・五嶺・真齋・柳柯・琴月・嘯齋・秋里・  
柏翠・五英・一秋・守黒・由儀・得燕・(風月堂) 佳悠・(律庵)  
雨桐・(静松舍) 菊彦・(守帆庵) 畝月

連句二十二句＋68 108

※ 「午の季夏」／改号祝

▼万延元年

26 歳旦 三裁 撫泉 圭岳 正月飾・烏帽子図 ○ アイ 鷗波

為山・山子・きく雄・花海・可嘯・泰山・青柿・普陽・雪香・  
山醜・研月・三交・溪斎・卓郎・見外・等栽・露心・永機・  
芳艸・新甫・尋香・氷壺・抱儀・(京)梅通・公成・淡節・赤甫・  
黙池・波同・有節・芹舎・(大坂)林曹・素屋・松隣・(兵庫)  
可大・(アハ)茶雷・(トサ)元史・(キイ)黍丘・(近江)帆道・  
乙也・(ヲハリ)梅裡・而后・(ミカハ)蓬宇・(遠江)杜水・(サガミ)  
ゆきを・(アハ)あやを・(下サ)毳年・(ヒグチ)梅谷・(上毛)  
乙瓢・(エチゴ)鷺眠・(カガ)大夢・(デハ)御風・玄子・多代女・  
江三・□市・(会津)布山・**撫泉・仏孫・為山・花海・山子**・  
**きく雄**・仏孫・涼洲・竹晴・波雨・素燈・撫泉

63十連句六句 70

※ 「庚申春」

27 追善 半裁 茶雷 × | | | ×

青芽佛・多代女・清民・蓬宇・一止・為山・鼎左・羅村・鯉勢・  
帆風・露丘・而后・一清・半夢・梧井・李曠・芳艸・唸風・

桃年・橘外・青□・葛路・松裡・婦牛・棹舟・東阡・嵐艸・  
宇堂・蓬園・公成・左郎・一惺・非々・權居・有節・梅裡・  
葉陽・應可・一水・淡節・尋香・素屋・左一・蟻城・芹水・  
董坡・如虹・其樟・騏郷・草尺・茶雷 51 72

※ 「安政庚申三月五日」／一挙園一周忌追善／天に齒朶青摺  
模様料紙

28 春興 半裁 留木 是真 春草・胡蝶図 ○ アイウエ 鷗波

仙鳧・香以・卜早・山林・毳提・静亘・松舟・かく川・大桜・  
在尔・阿雪・不染・芦窓・都嶺・為山・鼎左・素屋・赤甫・  
湖水・而后・一清・青池・梅臣・二鷗・梅裡・李曠・市猿・  
契史・香雪・三巢・種好・松青・思水・試風・双室・大夢・  
□□・仏眼・甘雨・如月・魚念・柏翠・雨桐・普卜・御舟・  
桃園・涼花・巢欣・權隨・由儀・等栽・卓郎・露心・山子・  
精義・芳艸・如泉・新甫・樹石・古笠・きく雄・花海・波鷗・  
文昇・抱儀・多代女・かつら・ひなも・女柳・妙輝尼・英子・  
小車女・たか女・春友女・まつ女・多ミ古・ちかや・花晨・  
東訓・完鷗・到遠・一鼎・鳩峰・藤主・毳来・呂風・柳・亘夕・  
月夕・只青・五休・白起・竹賀・梅香・蕪玉・菊丸・琴舟・  
樂之・松鶴・留木 100 100

※ 「庚申春」

29 追善 半裁 清雅 禾園 花器・櫻花・短冊箱図 ○ アイ 龍溪

柳涯居士・柳涯居士・柳涯居士・柳涯居士・(山城) 煤通・有節・  
(ナニハ) 林左・素屋・(ムサシ) 逸淵・卓郎・為山・(水原) 乙良・  
(下シン) 契史・(五泉) 尤儀・(長丘) 司山・呉烟・(サクラ松) 亘風・  
(小千谷) 野光・(今マチ) 雪潮・(村マツ) 市猿・(三ツケ) 実骨・  
逸交・澄秋・岱鵬・北龍・梅陽・貫古・史郷・雲濤・茶山・  
(ニコロ) 雅仏・(アツタ) 険洲・(西中ノ又) 蕉丘・(アラ山) 長山・  
(西中ノ又) 一点・(枳ほう) 春疇・(當所) 古志雄・梅園女・青甸・  
春洛・古山・茶夕・柳眠・西清・崑山・知石・唐湖・二陽・  
可水・文室・尾静・史仙・安邑・里蚩・茂柳・貫子・布洗・  
清亘・白夜・柳亭・柳外・白圭・清雅 63 7 3

※ 「萬延元年庚申冬日」

30 秋興 四裁 碧水 清梧 月・薄図 ○ アウエ ×

梅通・淡節・鼎左・素屋・茶雷・悠平・菖雨・旭齋・可候・  
金陵・而后・為山・氷壺・花海・芳草・新甫・等裁・見外・  
未足・如風・清良・一雨・惊父・岱一・素山・星佳・静淵・  
柳好・清梧・撫泉・御風・唸風・碧水 33 3 3

※ 「庚申の秋」

▼文久元年

31 歳旦 四裁 石居 守一 鷄几巾図 ○ アイエ 陵岡

見外・(南都) 松壽・(同) 洗我・守一・三保女・幾三・不居 7 7  
※ 「酉の春」

32 歳旦 三裁 少錦 南岱 梅・鶯印板図 ○ アイ 松仙

公成・九起・梅通・鼎左・知風・素屋・抱儀・卓郎・甘志・  
為山・見外・而后・一清・梅裡・土前・完伍・蓬宇・春芙・  
□馬・嵐牛・杜水・烏谷・青坡・梅里・馬丈・やな女・葵悠・  
いと女・武栗・竹東・烏孝・簫翁・蘭逸・清暉・欣祇・古洲・  
青蓑・蔦雨・ふさ女・文水・花遊・其朝・季齋・梧桐・芦角・  
雨席・松蘿・琴郭・其蕉・苔雨・**斧年・苔雨・少錦・精知**・  
斧年・精知・少錦 四吟連句八句+53 6 3

※ 「酉初春」

33 夏興 四裁 麦翠 圭岳 藻刈図 ○ アイエ 鷗波

為山・花海・きく雄・新甫・野井・ミき雄・芳艸・尋香・抱儀・  
あやを・七崑年・箆谷・雅仏・丹嶺・素山・江三・多代女・梅裡・  
一清・李曠・帆道・公成・淡節・黙池・草儼・素屋・麦鳥・  
茶雷・婦牛・習竹・煙外・元史・麦翠 33 3 6

※ 「辛酉夏」

34 冬興 四裁 馬六 圭岳 常磐松園 ○ アイウエ 鷗波

公成・有節・梅通・可大・素屋・而后・梅裡・完伍・多代女・  
抱儀・卓郎・為山・馬六・馬六 14 1 5

※ 「辛酉初冬」

35 春興 半裁 草友 是真 旅萬歳休息園 ○ アイ 鷗波

有節・梅通・素屋・梅圓・挙一・梅裡・一清・蓬宇・完伍・  
杜水・麦鳥・葦坡・応可・茶雷・薰岱・蒼湖・旭斎・可候・  
西翁・菴年・巢欣・□□(文) □□清民・壯山・多代女・  
布山・盤斎・素山・静淵・久栄・松圃・鷺眠・習静・柳阜・  
常晴・古棠・李朗・文貞・渭川・雲底・省我・龍湖・涼花・  
逸淵・為山・好以・抱儀・花海・等栽・苴磨・氷壺・さく雄・  
尋香・九峰・不備・新甫・貫乎・左慶・露心・宗丸・錦菴・  
一雄・一止・一賀・潮甫・友遊・葭洲・東風・草波・草露・  
艸栖・草甫・芳草・草友 75 7 5

※ 「西ノ春」

36 秋興 半裁 山士 圭岳 橋上月見園 ○ アイ 鷗波

抱儀・見外・等栽・氷壺・永年・新甫・雪年・露心・其葉・

可嘯・然々・まとか・小雲・甘志・普陽・花海・好以・泰山・

さく雄・睡鷗・芦城・ミき雄・芳草・卓郎・為山・立宇・蓬宇・  
完伍・春芙・一清・梅裡・三楓・不退・醉雨・而后・梅通・  
黙池・芹舎・淡節・公成・素屋・露牛・雲臥・期童・清涼・  
単臥・山士・山士 48 4 8

※ 「辛酉秋」

37 秋興 半裁 花嬌 圭岳 秋海棠・蜻蛉園 ○ アイウ 鷗波

(江戸) 為山・見外・野井・陳良・ミき雄・芳草・花海・さく雄・  
可嘯・泰山・其葉・(ムサシ) 天由・五渡・(京) 公成・淡節・  
九起・有節・波同・(大坂) 素屋・鼎左・松隣・(丹波) 漁瀧・  
(イハミ) 青池・(キイ) 黍丘・(ビンゴ) 梅臣・(アキ) 甘古・(近江)  
帆道・(イセ) 雀叟・(ヲハリ) 而后・一清・梅裡・(ミカ) 完伍・  
(遠江) 嵐牛・杜水・(サガミ) 薰岱・ゆきを・(安房) あや雄・  
椿山・(下サ) 菴年・月杵・(ヒタチ) 筧谷・(上毛) 乙瓢・琴堂・  
(エチゴ) 茶山・鷺眠・契史・(越中) 慶里・(カ) 丹嶺・大夢・  
(テハ) 吟風・睡山・(オク) 多代女・清民・一止・壯山・(イヨ)  
鶯居・(アハチ) 鷗池・(ア) 茶雷・葛路・羅村・麦鳥・禾田・  
草尺・一外・左一・(下サ) 嵐夕・雲外・みき守・栄樹・梅十・  
夢迹・婦牛・疎山・麦翠・梢夕・煙外・応一・清夢・元史・  
梅舎・花嬌 81 8 1

※ 「辛酉秋」

38 その他 半裁 幽止 柳齋 水辺鴉図 ○ アイ 鷗波

(京) 芹舎・公成・(大坂) 鼎左・素屋・松隣・(ヲハリ) 梅裡・

我竟・一清・(ミカ) 完伍・蓬宇・(スルガ) 月栖・(サガミ) 木鶏・

富神・(アハ) 茶雷・葛路・正孝・(トサ) 雲外・ミキ守・(タンバ)

雪光・(チクゴ) 箕風・芝鶴・麦映・(□□) 凉花・(安房) あやを・

(下サ) 崑年・月杵・(ヒタチ) 鶴巢・笏谷・(上毛) 乙瓢・梅郷・

(下毛) 文窓・其翼・(エチゴ) 古棠・光栗・(カヅ) 悠平・(オク)

多代女・壮山・草居・布山・清民・(デハ) 御風・江春・久栄・

素山・(南部) 東岐・旭洋・契一・幾久丸・(松前) 一翫・(エサシ)

一鼎・(エド) 花海・好以・泰山・香芸・可嘯・草甫・甘志・

卓郎・見外・等栽・尋香・氷壺・新甫・ミキ雄・陳良・芳艸・

太年・きく雄・雪年・普陽・抱儀・為山・稔市・蟻道・也大・

不黒・露郷・南交・由池・梅司・庭民・竹舎・松雨・ト二・

唇風・北猿・寒水・衛之・乙五・宇山・幽止 91 9 1

※ 「文久元辛酉初冬」／四季混在

▼文久二年

39 その他 半裁 杉郷 是真 鶯・手洗図 ○ アイ 鷗波

旭齋・杉郷・兎郷・可候・呂舎・季成・芳艸・草甫・芹舎・

有節・淡節・島岳・文海・素屋・松隣・挙一・梅裡・李曠・

蓬宇・完伍・大夢・契史・常晴・御風・唸風・素山・浪兮女・

一止・白亥・多代女・清民・為山・新甫・花海・羽人・苜蓿・

きく雄・花外・抱叔・完鷗・樹石・白起・野井・等栽・甘茶・

氷壺・露心・ミキ雄・九峰・草栖・草友・草甫・芳草・月杵・

季成・有舎・芦水・寥月・保久賀・南茂・茶好・梅五・石丸・

瓢月・寿遊・春風・龜寿・春好・其融・清眠・白斗・梅舎・

桃翠・桐條・たりほ・松栄・白俗・三鳥・桃雨・比古・西翁・

兎郷・可候・旭齋・杉郷 連句八句十 77 9 3

※ 「文久戌とし太郎月」／杉郷快気祝

40 春興 半裁 香嘯 松嶺 花卉・大木戸図 ○ アイ ×

梅通・素屋・麦鳥・梅裡・御風・半湖・寄三・亥白・椿山・

為山・春湖・貫乎・芳草・五雀・得水・氷壺・以兄・その女・

可月・□□・至頌・其岳・鳳翠・磯水・柳水・楽只・竹翠・

花晴・みさを・馬麦・鶴聲・木公・曇仙・桃雨・鬼笑・杉郷・

米佳・藍水・萬丸・美聲・宗露・萩山・可候・梅五・汎翠・

旭齋・西翁・甫倅・仙客・天眠・梅雅・鳳秀・都尽・(秀峯更)

幽々・南志・翠月・暁期・磯山・呉雷・春渚・可水・季塘・

紫谷・月汀・滄水・花外・ミキ雄・月杵・(二仙更) 香嘯

※ 香嘯改号披露

70 7 0

▼元治元年

41 春興 半裁 一志 探泉 桜鯛図 ○ アイ ×

梅通・有節・文海・淡節・鼎左・素屋・為山・卓郎・松朗・梅因・未足・多代・風逸・曠山・素心・燕畔・碧水・唸風・素山・御風・友月・竹童・鳳湖・其麗・鶴揃・岡雨・竹處・以元・竹裡・千柳・桃里・帟岩・可笑・一行・羽林・其翠・花香・之有・市楓・西湖・柳塘・椿僊・句山・羽嘯・其松・湖南・俗一・一志

※ 「甲子のとし」 / 空押黄色粹

48 5 6

42 歳旦 半裁 一叶 是真 厩図 ○ アイ 董斎

一叶・如木・旭斎・(中臣)忠顕・(エド)春湖・窠暁・完鷗・野井・氷壺・卓郎・芳草・等栽・新甫・不染・苜磨・為山・(デハ)素山・唸風・御風・(ムツ)一止・盤斎・布山・清花・多代女・(エチゴ)鷺眠・茶山・(ヲハリ)棗地・醉雨・而后・一清・梅裡・土前・(ナニハ)松隣・知風・素屋・鼎左・(ラク)梅通・赤甫・淡節・鳥岳・芹舎・有節・(下総)如木・真民・杉郷・鬼笑・茶好・南茂・被笑・宝所・白斗・一犁・二石・春雨・兎郷・米佳・有舎・西翁・梅庭・白俗・梅舎・季成・可候・月杵・汎翠・双鯉・竹友・砂月・暉月・知勇・一羽・皐鶴・竹且・遠山・丁志・筈鶯・千之・香興・知黒・菅生

芳茶・柳叶・湖叶・琢之・旭斎・一叶・一叶

和歌一首 + 86 9 3

※ 「甲子の春」

▼慶應元年

43 歳旦 四裁 心星 是真 梅 袱紗図 ○ アイ ×

公成・祭魚・潮水・素屋・梅裡・棗地・老竹・月杵・一朗・半湖・笥言・未貫・寄三・又々・為山・等栽・見外・春湖・古菱女・得水・秀奇・五雀・白元・乙雄・太年・洒雄・ミキ雄・心星

28 2 8

※ 「乙丑春」 / 料紙に「小町」ほかの文字を空押する

▼元治元年

44 歳旦 四裁 心星 其融 鼠 鏡餅図 ○ アイエ 臺敬

梅通・有節・公成・鼎左・素屋・柳壺・御風・卓郎・為山・春湖・新甫・等栽・ミキ雄・泰民・有来・得水・見外・心星

18 2 5

※ 「甲子之初春」

▼慶應元年

45 歳旦 半裁 谷朗 是真 御神木図 ○ アイウ ×

公成・祭魚・素屋・潮水・棗地・梅裡・完伍・蓬宇・杜水・竹外・由儀・月杵・巢欣・清民・六槐・老竹・壮山・松圃・雷山・鳳湖・佳山・契吏・遊古・蓬室・古棠・李朗・石香・裸来・有来・又々・為山・等栽・五雀・龍湖・鳳雛・汲古・弘湖・(在エド) 心星・得水・秀寿・明水・洒雄・心足・貫乎・半湖・白亥・梅白・移柳・笱言・栞堂・一朗・空螢・文谷・岨曉・宇塵・菟寝・逸峰・ミキ雄・谷朗 59 59

※ 「丑の春」

46 その他 半裁 思楽 見外 富士図 単(墨) アイ 臺仙

杜鴻・轡角・**杜鴻・菊雄・思楽・石叟・卓郎・等栽・為山**・**見外**・芹舎・兔□・萬丈・黙池・鼎左・鶯宿・素屋・大年・蘭操・知風・卓郎・為山・見外・等栽・春湖・芽艸・寄泉・不染・鳳雛・草友・甘茶・大瓦・弘美・竹叟・石叟・芳泉・永年・甘志・雅忠・菊雄・思楽 33十連句八句 45

※ 「乙丑春」／杜鴻・轡角送別

47 追善 半裁 此方 麓斎(北洋) 撫子・几息図 ○ アイ ×

(故人) 葦左・井資・五葉・一澄・素屋・眉松・此虹・風丈・其石・麦雨・龜遊女・先春・晴方・雨津・笑方・五葉・みちを・波静・静圓・静也・磐鴻・其英・梅曉・(ナニハ) 杜鴻・眉屋・素江・晴雪・其津・其逸・此方 30 33

※ 葦左追善

▼慶應二年

48 歳旦 半裁 寄三 華岳 行商人・鳥几巾図 ○ アイ 鷗波

(京) 有節・公成・(大坂) 素屋・(ヲハリ) 梅裡・(エド) 為山・等栽・得水・秀奇・文女・南池・薰女・洒雄・ミキ雄・(ムツ) 清民・(テハ) 御風・青荷・長洲・鳥路・修太・髯史・五渡・半湖・笱言・言之・半石・虚反・大椿・夏炉・月叟・桑古・一朗・歴山・水明・祥堂・栞堂・谷朗・文右・空螢・牧雄・鳥曉・花雄・真吟・可適・貫乎・履堂・翠湖・孤月・如水・如久・雲繩・笑月・如柳・雨柳・梅楊・寿斗雄・老池・硯巢・負拙・眺霧・青宜・虚雄・一磨・疎烟・南之・慶虚・寄三 66 66

※ 「丙寅春」

▼慶應三年

49 春興 半裁 右朗 華岳 越後獅子図 ○ アイ 鷗波

有節・公成・素屋・梅裡・又々子・為山・五雀・秀寄・得水・  
序流・洒雄・等栽・椿山・月杵・末貫・巢欣・清民・芽山・  
老竹・芳塢・柳志・松央・松陽・江三・一止・比一・葱玉・  
一鼎・淇山・御風・江春・桂仙・西湖・雷山・金英・積翠・  
契史・雅佛・古棠・李朗・崑山・寄三・一朗・茄言・真吹・  
福柳・文河・歷山・白亥・半湖・空螢・文谷・太逸・喜寢・  
林翠・宇塵・嵐螢・岨曉・富柏・光水・二調・溟山・逸峰・  
ミき雄・谷郎 65 6 5

※ 「とらの春」

50 歳旦 半裁 落淇 綾岡(輝松) 茶屋図 ○ アイ 旧瓦

芹舎・有節・公成・文海・黙池・素屋・鼎左・梅裡・土前・  
士芳・桂仙・桃乙・如風・袋一・為山・春湖・不染・芳草・  
きく雄・ミき雄・佳節・見外・等栽・氷壺・雪貢・馬了・竹亭・  
春生・蟻道・梅南・唸風・可慎・宣机・松成・左右交・燕畔・  
以栗・指山・湖柳・龜齡・遅速・蘭風・徐雲・鼎亘・風柯・  
素泉・八橋・旭峯・好之・竹雄・文后・鶯人・柳外・曉霧・  
鶯甫・幽窓・蕉宇・古柳・落大・素山・落淇 61 6 1

※ 「丙寅春」

▼慶応二年

51 歳旦 半裁 露屋 × | | | 綾岡

芹舎・黙池・九起・公成・有節・淡節・素屋・林鴻・鼎左・  
松隣・蘭操・為山・露心・菊雄・春湖・洒雄・ミき雄・物外・  
乙雄・氷壺・不染・芳草・弘湖・芳泉・五休・永年・鳳洲・  
奇泉・永機・尋香・等栽・大虫・香以・末足・孤月・香陽・  
思樂・見外・春鷗・花兄・蝶遊女・不拙・露山・素瓢・擇布・  
遊月女・永翁・露年・九江・有隣・林隣・太年・露屋 53 5 6

※ 「慶應二寅年内立春」／金箔散らし料紙／太年の句の前に  
「正親句」の朱書が入る

52 夏興 半裁 可慎 水寮 菖蒲・巾着図 ○ アイ ×

可慎・江平・御風・雲涯・素山・落城・梅通・鳥谷・公成・  
淡節・有節・〔松隣〕・素屋・鼎左・由誓・逸淵・見外・祖郷・  
萬古・等栽・魯心・完鷗・鳥吟・尋香・西馬・氷壺・為山・  
而后・李曠・我竟・梅裡・一清・醉雨・茶雷・完湖・蓬花・  
心足・禾月・舍用・春斎・清民・多代女・悠々・雪鮮・落城・  
河曉・雲涯・静柳・素文・唸風・素山・御風・可慎・可慎

連句六句十 48 5 6

53 その他 四裁 永年 綾岡(輝松) 鯛図 ○ イエ 虚叟

二葉・素山・小雲・五休・春湖・大蟲・寒香・青藍・花外・  
黙平・甘志・きく雄・永年 13 3 3

※ 「丙寅冬」／佐藤小雲江府への帰国送別

54 春興 四裁 花兄 悄悄侘齋 寅烏帽子・面図 ○ アイエ 旧瓦

花兄・氷壺・氷壺・花兄 両吟連句六句+2 8

※ 「寅の春」

▼慶應三年

55 慶賀 四裁 春潮 春潮 老松図 ○ アイエ ×

公成・黙池・文海・淡節・九起・芹舎・嵐牛・梅裡・有節・  
見外・ミき雄・氷壺・春湖・未足・無外・為山・素屋・蟻兄・  
鼎左・等裁・春潮 21 2 8

※ 「丁卯のはる」／春湖初老賀

56 歳旦 四裁 旭齋 是真 独活・蜆図 ○ イエ 旧瓦

有節・鳥岳・淡節・潮水・漁藻・素屋・梅裡・醉雨・羽洲・  
士前・悠平・契史・素山・唸風・清民・為山・芳草・等裁・

氷壺・春湖・季成・梅舎・如木・可候・旭齋 25 2 5

※ 「丁卯春」

57 歳旦 三裁 露心 凉荷 胡蝶図 ○ アイウエ 旧瓦

公成・九起・鳥岳・文海・淡節・乙也・素屋・知風・梅圃・  
挙一・潮水・梅裡・素溪・竹涯・静處・士芳・嵐牛・完伍・  
春芙・杜水・蓬宇・文貞・古棠・季朗・葱玉・唸風・素山・  
江春・静淵・盤斎・布山・松圃・杜山・清民・一止・春處・  
乙瓢・旭齋・可候・一聲・一山・水心・為山・香以・きく雄・  
春湖・大蟲・五休・花兄・ミき雄・太年・永年・千億・見外・  
等裁・香陽・葎露・露屋・可鶯・寿泉・黙平・田池・永機・  
未足・氷壺・長亘・懶僻・巖の本・三巴・柴一・只中・其得・  
琴友女・魯仙・榎子・一器・林隣・山朶・谷翁・唯翁・晋路・  
三双・波青・百旨・松鶴・六花・池汀・全雄・岱雅・中鼠・  
柳糸・露艸・是心・竹丸・巖哉・竹叟・凉荷・二水・竹枝・  
如洗・汲古・仙松・如月・欣志・双露・白醉・糸川・千竹女・  
田美・芳草・素訣・靖路・守朗・逸雨・蝶翁・睡水・伍柚・  
貴邦・狐登・露心 120 1 2 0

※ 「卯の初春」

58 歳旦 半裁 其道 保大 杖・巾着図 ○ イエ ×

〔イタミ〕其道・月洲・秋水・清々・鶯室・梅遊・蟻兄・素屋・

梅鼎・字尺・（ラク）指月・（イタミ 少年）秋夕・（イタミ 少年）

桃雄・（イタミ 少年）米因・（アカシ）とく女・（ナダ）清馬・（ナダ）

望月・鼎左・鶯宿・水明・桃兮・五葉・杜鴻・桂香・（ナダ）

春雅・梅屋・都雪・甲嶺・初音・梅雅・竹丸・思外・梅庭・

秋水・其道・月洲・鶯室 連句六句+32 47

※ 「丁卯春日」

夏興 半裁 禾旭 林隣 藤 傘 函 ○ アイエ 青洲

（京）芹舎・魚藻・淡節・（大坂）素屋・杜鴻・松隣・（阿ノ）如雪・

和風・（ナゴヤ）梅裡・流翠・羽洲・（三河）蓬宇・（サガミ）六窓・

卓雅・草巴・三千竹・（大ツサ）他山・葵白・（下サ）七毘年・月杵・

（ヒタチ）谷明・一湖・（上毛）栗堂・（下毛）巢欣・（ムツ）清民・

壮山・非老・風者・禾香女・（モリ丘）此一・山厚・知山・堂雨・

一僊・南江・（デノ）素山・江春・松林・唸風・（エチゴ）市猿・

里三・古棠・（カヒ）香芸・（ムサシ）野井・髯史・寿道・為山・

等栽・菊雄・思樂・春湖・寛鷗・五休・花外・芳草・ミき雄・

狐登・華兄・如白・寄泉・穂年・仙月・寒香・永機・太年・

露山・林隣・擇布・香陽・不染・洒雄・鳳雛・巴山・素水・

吾世・弘湖・弘美・梢雨・五雀・成伍・小雲・由地・木髮・

冰壺・尋香・里木・泰民・序流・大虫・黙平・竹舎・親和・

香以・見外・未足・友史・有せつ・月祭・立志・大我・徳応・

溪宇・梅兵・勝之・宇山・禾旭 107 107

※ 「丁卯晚春」

歳旦 半裁 露山 林隣 春木 曳舟 函 ○ アイ 旧瓦

（京）芹舎・淡節・九起・兔尺・公成・黙池・有節・（ナニハ）

鼎左・素屋・潮水・杜鴻・大年・松隣・（ヲハリ）梅裡・羽洲・

三楓・静處・華岳・醉雨・（ミカハ）蓬宇・（遠江）杜水・（カヒ）

竹良・（サガミ）卓雅・草巴・（ムサシ）野井・髯史・正价・五渡・

（下サ）七毘年・琴堂・乙瓢・（オク）清民・此一・一止・（江サシ）

一鼎・淇山・（ハコダテ）葱玉・（デノ）素山・唸風・（エチゴ）古棠・

契史・（シナノ）渭川・（越中）野鶴・（エチゼン）布珀・為山・

見外・等栽・尋香・冰壺・菊雄・鳳雛・ミき雄・芳草・不染・

永機・宇山・洒雄・友史・梅曉・寒香・禾曉・序流・五休・

甘志・華兄・由地・甘条・如白・春亘・千億・仙月・得水・

素水・五雀・秀素・思樂・芳泉・黙平・大虫・弘湖・弘美・

花外・吾世・未足・春湖・六造・香陽・春鷗・有隣・露屋・

圓知・佳年・菊露・仙羽・永翁・露年・林隣・擇布・太年・

露山 100 100

※ 「慶應卯歳旦」

歳旦 半裁 林隣 南塘 初詣支度 函 ○ アイ 旧瓦

為山・等栽・(京)芹舎・(上毛)乙瓢・きく雄・不染・(三河)  
蓬宇・(下毛)巢欣・五休・芳草・甘志・(デハ)素山・(エチゴ)  
古棠・(遠江)杜水・五雀・如白・芳泉・(エチゴ)市猿・(京)  
公成・(デハ)唼風・吾世・友史・(ムサシ)髯史・(ムツ)清民・  
(下サ)七毳年・華兄・□□・(ムツ)桃壺・悠平・由池・(ナニハ)  
松隣・(ヒタチ)谷明・(ナニハ)潮水・弘美・序流・かそい・洒雄・  
一止・(ムツ)雨橋・(上毛)琴堂・春湖・(ムツ)此一・(ムサシ)  
正价・(ヲハリ)醉雨・(ムツ)清民・梅曉・(ヲハリ)蘆雄・甘茶・  
(サガミ)卓雅・(ムサシ)野井・黙平・(エサシ)一鼎・(ヲハリ)  
羽洲・(オク)風志・永機・思楽・(ヲハリ)三楓・(京)黙池・  
見外・大虫・(ヲハリ)梅裡・(ナニハ)杜鴻・(京)兔尺・宇山・  
(一)淡節・(エサシ)淇山・狐登・弘湖・ミキ雄・氷壺・未足・  
仙目・青宜・(ナニハ)素屋・(カヒ)篤志・禾曉・(京)鳥岳・  
花外・存長・得水・鳳雛・(ナニハ)鶯宿・秀寄・(ムサシ)五渡・  
露山・香陽・有隣・圓知・仙羽・佳年・擇布・六造・太年・  
林隣

95 96

※ 「慶應三年卯甫春」

歳旦 半裁 寄三 東岳 画材図 ○ アイ 旧瓦

有節・公成・素屋・梅裡・為山・等栽・得水・秀寄・文女・  
洒雄・ミキ雄・清民・月杵・青荷・長洲・支英・真水・修太・  
髯史・其好・亜山・素儼・五渡・半湖・一朗・筮言・言之・

半碩・虚友・大椿・夏爐・乙瓢・未室・自叟・桑古・歴山・  
水明・祥堂・谷朗・栞堂・牧雄・鳥曉・可適・棗寿・如水・  
如柳・如久・雨柳・梅陽・翠湖・晴浮・堤心・三笑・湖山・  
二通・梧水・一葉・助丸・清兮女・雪自女・蒼湖・芳翠・頁拙・  
眺霧・且睡・一磨・青宜・虚雄・疎烟・南之・子蘭・應虚・  
寄三

73 73

※ 「丁卯春」

その他 半裁 希聲 光峨 駕籠図 ○ アイ 葦斎

芹舎・公成・黙池・鳥岳・有節・鼎左・潮水・素屋・梅裡・  
醉雨・香雪・車明・巢欣・蓼莪・水明・霞松・祥堂・清民・  
一止・義風・松甫・南江・米賀・而遊・峰秀・松圃・素山・  
馬了・春生・江春・可慎・向山・一鼎・淇山・葱玉・雲底・  
龍湖・渭川・宜哉・梅休・其残・為山・未足・香以・狐登・  
寿泉・弘美・宇山・木和・思楽・親和・等栽・露心・氷壺・  
梅雄・稍雨・ミキ雄・友史・佳節・永機・きく雄・尋香・春湖・  
見外・梅啞・草栖・草友・鼓汀・芳艸・省我・希聲

71 78

※ 「卯初冬」／帰郷餞別

▼ 慶應四年

64 春興 三裁 露心 凉荷 胡蝶図 ○ アイウエ 旧瓦

公成・九起・鳥岳・主童・素屋・梅圃・知風・梅裡・竹涯・  
 素溪・素陽・清民・壯山・文貞・其殘・省我・素信・乙瓢・  
 旭齋・蓬宇・杜水・龜泉・一山・潛水・為山・未足・雪年・  
 等栽・思樂・旧竹・きく雄・永機・香以・花兄・弘美・奇泉・  
 千古・宇山・新聲・葎露・存長・ミキ雄・水壺・三巴・巖の本・  
 魯仙・只中・唯翁・桂糸女・紫一女・琴友女・其得・三双・  
 梅堂・丸人・山朶・林隣・波青・楨子・汶路・楽哉・(米司更)  
 稻谷・遊糸・文路・竹叟・凉荷・梅里・千松・實のり・花村・  
 藪里・霞晴・其川・稻雀・花扇・百旨・双露・調雨・一峯・  
 露草・柳糸・千蝶・其芳・山松・是心・白醉・糸川・千竹女・  
 田美・芳草・素訣・靖路・守朗・逸雨・蝶翁・梧水・伍袖・  
 貴邦・狐登・露心

100 102

※ 「戊辰青陽」／転居披露を兼ねる

65

歳旦 半裁 石丈 石亭 神楽舞囃 ○ アイ ×

巖・魯仙・永眺・可谷・花桐女・緑雪・圃々・桐葉女・知女・  
 又々・古むら・有節・黙池・文海・素屋・鼎左・為山・見外・  
 太年・未足・露心・ミキ雄・謝徳・山朶・凶山・弘湖・玉枝・  
 杉尺・稻丸・菑丈・柳舎・青岱・了我・霞夕・秀奇・長湖・  
 皆如・菊成・紫馨・露屋・松涛・五休・得水・波平・洒雄・  
 石丈

46 46 4 6

※ 「戊辰春」

66

歳旦 半裁 松臈 緑亭 書初囃 ○ アイ 松洲

春湖・為山・木和・梅裡・素屋・蒼山・市猿・契史・積翠・  
 尤儀・志扇・雪潮・百汲・文苞・奇遠・了々・可常・加孫・  
 虚玄・雲〔黒〕・北溟・逸交・雪旦・春逸・柳花・蕉丘・雲遊・  
 桜橋・一思・一正・清雲・松旧・芳主・一葉・史可・竹塘・  
 澄秋・雲朗・大眠・竹陽・唵堂・まつ尾・梅陽・龍溪・柳亭・  
 ミつく・岱鵬・肅坡・雲丈・秋湖・花山・貫古・鶯里・醉茶・  
 雲静・飭悦・樵山・梅枝・竹賀・梅里・松涛・雲涛・松洲・  
 白圭・雲峰・松臈

66 73

※ 「戊辰春」

▼明治二年

67

春興 半裁 芳塙 是真 杜若囃 ○ アイ 葦齋

有節・淡節・文海・素屋・潮水・研露・元史・嵐夕・梅裡・  
 素溪・蓬宇・嵐牛・杜水・尋香・太年・竹良・悠平・市猿・  
 寄三・筍言・半湖・月杵・為山・等栽・見外・春湖・氷壺・  
 甘海・弘美・木和・宇山・芳艸・五休・思楽・きく雄・序流・  
 鳳雛・乙雄・子紹・唵萍・五雀・得水・秀奇・とし雄・故岨・  
 壮山・清知・莱史・江三・梅成・一止・松圃・よし風・竹翠・  
 左洲・潜虬・ミキ雄・洒雄・左竹・芳塙

60 62

※ 「乙巳五月」

▼明治三年

68 歳旦 半裁 堯年 是真 正月飾図 ○ アイ 莖仙宗 (宗祐)

竹堂・三遅・伴廣・盛行・真坂・芹舎・黙池・拾山・淡節・  
有節・素屋・潮水・子紹・市猿・大夢・蓬宇・梅裡・一止・  
春斎・素山・吟風・玄子・史白・思風・山方・見外・春湖・  
甘海・きく雄・万像・洒雄・香芸・逸外・思楽・弘美・為山・  
堯年  
和歌三首+34 4 2

※ 「己乙之冬」

69 その他 三裁 為梁 是真 桶 梅花図 ○ アイ 旧瓦

(西京) 黙池・良大・淡節・文海・卓志・九起・(大坂) 潮水・  
宇尺・海弥・素屋・(尾張) 梅裡・錦水・(三河) 蓬宇・杜堂・  
(遠江) 嵐牛・十湖・尾正・(駿河) 尋香・鳳洲・得之・まほ哉・  
雪柯・五拙・林隣・露山・太年・(伊豆) 連水・玉光・(相模)  
閑茶・可金・子紹・(武蔵) 雪郎・樟翠・三籟・桃(郷)・嵐(松)  
(東京) 見外・等栽・奇泉・洒雄・大蟲・永機・宇山・月彦・  
弘美・松頂・如白・新聲・成伍・存長・かつら女・芳泉・乙雄・  
木和・芳草・蕉露・ミき雄・甘海・春湖・為山・華兄・仙月・  
うめを・采芹・泰民・芝月・禾旭・美柚・吸霞・其英・栄昌・

青冑・黙平・護外・思楽・(信濃) 雪麿・かねる・(甲斐) 松月・  
乙蟻・月彦・関彦・民丸・(上総) 清海・(武蔵) 皆如・錦露女・  
東甫・知音・守白・雪彦・思月・紫道・東郷・関外・易水・  
半醒・月朶・亜物・悟秋・乙彦・(雄喜更) 為果 101 1 0 3

※ 「庚午晚春」／送別／92と同一

70 歳旦 四裁 春峯 我古山人 松竹梅図 ○ アイウエ ×

枕山・文成・文成・秋巖・我古山人・為山・乙彦・草道・  
春峯  
漢詩四章+4 2 5

※ 「庚午のはる」／春峯四十賀

71 その他 四裁 華兄 是真 旅囊図 ○ イエ 月臺

春湖・為山・大蟲・芳泉・沙山・奇泉・美菴・逸外・泰民・  
諫外・東枝・千畝・可三・文昇・正仰・三水・梅枝・真風・  
一厚・静我・ちさ丸・是三・黙平・華兄 24 2 6

※ 「庚午中秋」／春湖餞別

72 夏興 四裁 宇尺 × | | | ×

為山・春湖・鳳雛・黙平・奇泉・弘美・乙彦・大霜・甘海・  
芳泉・石叟・亜物・松民・等栽・見外・思楽・芹舎・淡節・

良大・梅因・卓志・黙池・梅裡・蓬宇・曲川・素山・蕪畔・  
 撫泉・知風・翁笠・馬了・可応・太年・方山・連梅・眠鶯・  
 可秀・素屋・松隣・眉年・井資・可兆・南齡・徐来・鼎斎・  
 碧中・鶴歩・杜鴻・稿□・梅鼎・兔雪・几堂・虚白・可静・  
 野童・朝逸・潮水・昇辰・宇尺

※ 薄緑料紙に銀松木摺

59 59

73

夏興 四裁 宇尺 × | | | ×  
 為山・春湖・鳳雛・黙平・奇泉・弘美・思楽・芹舎・良大・  
 卓志・黙池・梅裡・素山・素屋・松隣・杜鴻・碧中・潮水・  
 昇辰・宇尺

※ 茎葉銀摺料紙

20 20

74

春興 半裁 太年 南山 大樹・遠山 〇 アイ 真斎  
 為山・春湖・千畝・寿紀女・露屋・鳳雛・知来・圓知・杜水・  
 嵐牛・蓬宇・醉雨・羽洲・梅裡・宇尺・素屋・潮水・文海・  
 芹舎・尋香・仙羽・方山・得之・林隣・雪柯・素岳・まふき・  
 青溪・雨石・夢南・音ふる・露山・流翠・月笑・鶯後・歌丸・  
 涛漁・晴年・蟻功・楓暁・松翠・太甫・梅年・太秀・花年・  
 白年・蝸屋・宗端・太年

49 54

※ 「午春」

75

春興 半裁 丑物 × | | | 旧瓦  
 芹舎・黙池・淡節・九岳・良大・文海・卓志・捨山・九起・  
 有節・潮水・菊也・宇尺・昇辰・沙弥・松隣・大年・素屋・  
 乙也・蟻洞・讀雲・其悠・果撫・閨美・士前・芝椿・静處・  
 士芳・高暁・錦水・羽洲・逸志・醉雨・嵐牛・十湖・舒堂・  
 尾正・蓬宇・春芙・杜堂・尋香・得之・まほき・雪柯・五拙・  
 林隣・露山・太年・連月・玉光・閑茶・可金・子紹・雲朗・  
 三籟・北斎・嵐松・古麦・左力・照甫・一雨・友昇・愛海・  
 洒雄・土光・東松・かき守・其英・榮昌・未一・甘雅・暮海・  
 美崑・弘魚・芳草・正价・美袖・吸霞・うめを・禾旭・千畝・  
 秀奇・素水・新聲・如白・宇山・桂女・是三・(東枝更)宗也・  
 二京・きく丸・一得・瓦貢・采芹・黙平・乙雄・思楽・五休・  
 随所・完車・竹東・一鼎・藻鏡・三水・芝月・護外・研月・  
 完鷗・如椽・等之・蔦峯・林甫・一庭・泰民・仙月・皆如・  
 清海・青亘・錦露女・東甫・知昔・守白・雪彦・紫道・鈴丸・  
 思月・蘿谷・閑臥・東郷・易水・為梁・悟秋・為山・春湖・  
 大蟲・(尾在東京)梅裡・(洛在東京)得也・(河在東京)逸外・  
 ミき雄・月彦・華兄・芳泉・甘海・月朶・瑠頂・半醒・謝葉・  
 奇泉・等栽・見外・乙彦・丑物

152 160

※ 「庚午暮春」／金銀砂子散らし料紙

76 歳旦 半裁 藻鏡 是真 稚児・女中図 ○ アイ 旧瓦

(西京) 芹舎・良大・黙池・(大坂) 素屋・潮水・(八十翁) 蟻児・  
(ヲハリ) 梅裡・羽洲・(アハ) 逸外・(ミカハ) 蓬宇・(スルガ) 尋香・  
流翠・太年・(サガミ) 閑茶・草巴・(エチゴ) 契史・(カヒ) 香芸・  
九江・寿邨・(上毛) 栞堂・(下毛) 蘆外・(カツサ) 羽人・松古・  
(センダイ) 宗古・(一旦) 芳塙・(エサシ) 一鼎・淇山・綺石・  
(ムサシ) 完鷗・泰眠・井之・松圃・岸杉・笠下・(東京) 為山・  
春湖・ミキ雄・宇山・月彦・雪松・黙平・鳳雛・美菟・完車・  
素水・泰民・梅雄・眠外・竹東・二柳・桃后・竹夫・かつら・  
桃仙・謝徳・見外・乙彦・甘海・(羽州) 素山・江春・雪貢・  
雷山・金英・雪山・雲外・南叟・五鳳・玄子・(尾花澤) 雪堂・  
近成・雪里・松貨・一眼・月窓・美山・舞菴・觴山・等栽・  
藻鏡

79 79

※ 「庚午春」

77 歳旦 半裁 史郷 画者未詳 桜花・水辺遊魚図 ○ アイ 随助房

黙池・拾山・素屋・土前・梅裡・蓬宇・春湖・為山・木和・  
大蟲・等栽・(未足改) 甘海・(禾持改) 護道・移柳・樗三・桑古・  
良可・市猿・富海・一誠・左儀・雪朗・琴口・習静・玉鳴・  
清水・積翠・柳臯・南窓・華敬・三千代・琴丸・泉囊・桃李・  
蕉丘・柳塘・秋湖・史僊・嘯雨・蕭坡・竹塘・松涛・松年・  
無満・栗亭・竹陽・澄秋・八九・雪旦・亘静・可保・可静・

有雪・(伺柳改) 養臥・自厚・禾雲・知秋・香宇・(三列丸改)  
爽曉・稻佳・采可・禾雄・契史・史郷

64 75

※ 「庚午季春」

78 追善 半裁 ふみ女 是真 薄小菊結短冊図 ○ アイウ 旧瓦

新甫居士・為山・見外・春湖・乙彦・如白・華兄・甘茶・只青・  
林甫・素水・月彦・黙平・木和・酒雄・ミキ雄・泰民・研月・  
護外・弘美・存長・仙月・采芹・奥菟・沙山・蕉露・呂風・  
正价・是三・大瓦・石叟・梅姿・大蟲・甘海・等栽・杉裡・  
流翠・杜水・蓬宇・杜堂・黙池・良大・素屋・宇尺・朝逸・  
松隣・杜鴻・香芸・市猿・素山・壯山・春斎・袋蜘蛛・五渡・  
友昇・涼花・此木・完鷗・潮水・利一・きく雄・捨市・思樂・  
芳泉・ふみ女

65 67

※ 「庚午冬」／新甫居士七回忌追善

▼明治四年

79 歳旦 小 竹舎 東居 福寿草鉢置図 ○ アイ ×

素屋・九起・曇昇・竹舎・竹舎

※ 八裁



80 歲旦 小 潮水 × | | ×

梅裡・素屋・松隣・鶴歩・杜鴻・碧中・野堂・庵白・雛雄・  
宇尺・潮水 11 1 3

※ 十六裁／天金引料紙

81 歲旦 小 素屋 素屋 梅花春日閑居図 ○ アイ 素屋

為山・春湖・等栽・沙山・梅裡・黙池・潮水・菊也・宇尺・  
梅鼎・兎雪・朝逸・(秋田)一壽・枕嶺・梅笠・文秀・似蝶・  
草居・素梅・素屋 20 2 7

※ 六裁

82 歲旦 四裁 潮水 耕静 橙・種図 ○ イウエ ×

素屋・松隣・碧中・鶴歩・杜鴻・稻處・素梅・梅鼎・兎雪・  
几堂・庵白・朝逸・兄魚・几石・野童・田月・可静・草居・  
松泉・為一・宇尺・潮水 22 2 2

※ 「辛未春」／菊花空押料紙／百里溪之傳一部摺

83 歲旦 半裁 宇鵬 是真 正月膳図 ○ アイ 董齋

(東京) 為山・見外・等栽・春湖・鳳羽・雪松・研月・華兄・

思樂・黙平・素風・木和・沙山・弘美・□□・(横濱) 愛海・

友昇・古麦・嵐松・(相模) 子紹・(伊豆) 連水・(駿河) 露山・

太年・尋香・(遠江) 杜水・(三河) 蓬宇・杜堂・波文・(伊勢)

洗我・(尾張) 梅裡・(岩代) 春齋・壯山・(羽前) 鼎山・(羽後)

江春・(北越) 積翠・(信濃) 有俛・(上野) 乙瓢・狐登・(下野)

飄僊・(甲斐) 香芸・竹良・寿邨・一鷺・来々・梨軒・(西京)

芹舍・文海・(大坂) 潮水・松隣・宇尺・素屋・風虎・羅・獅震・  
不二門・桃兮・宇鵬・宇鵬 58 5 9

※ 「明治辛未春」

84 歲旦 半裁 芳泉 翠湖 梅花・遠山図 ○ アイ 旧瓦

梅裡・静處・はしめ・素溪・流翠・三楓・素屋・宇尺・潮水・  
香洲・蓬宇・杜水・嵐牛・舒堂・尋香・蝸堂・玉光・香芸・  
竹良・雷石・他山・旭齋・塵外・巢欣・泰眠・閑茶・友昇・  
月朶・壯山・漸風・兆左・交精・顕哉・安□・□秀・□□・  
□□・蟻道・里三・(在石□) 青亘・此木・五渡・完鷗・為山・  
等栽・春湖・乙彦・月彦・蕉露・有終・如白・弘美・存長・  
沙山・ミキ雄・甘海・見外・きく雄・半醒・思樂・黙平・華兄・  
仙月・千畝・得水・石叟・以葉・新聲・花絡・竹東・芦城・  
花第女・甘茶・山台・花笑・大瓦・美崑・林甫・一厚・只青・  
三笑・山操・梅姿・秀奇・逸外・未一・泰民・総亘・香城・  
龜得・是三・文昇・護外・素水・研月・(在東京) 契史・芳泉

※ 「辛未春」

96 9 6

85 慶賀 半裁 枕嶺 魚大 花童子図 ○ アイ ×

宇尺・梅鼎・菟雪・朝逸・雅古・草居・似蝶・野水・素梅・  
齋屋・露堂・浪雄・杜鴻・稻處・碧中・南齡・鶴歩・眉年・  
菊也・松隣・潮水・黙池・素屋・**順仙女・榮濟女・牧子**・  
田鶴女・泉後・我猿・其友・石惟・稻水・素真・如翠・其壽・  
素吟・蕙香・素水・竹楼・蛙井・素暁・芦村・笑猿・錦枝・  
芳村・梅邑・枕嶺  
和歌三首+44 4 9

※ 「辛未」／家督嗣承祝

▼文久元年

86 その他 半裁 新甫 圭岳 納涼図 ○ アイ 鷗波

公成・漁藻・黍丘・素屋・麦鳥・梅裡・完伍・蓬宇・杜水・  
月栖・権山・其渕・渭川・鸞友・龍湖・省晴・李朗・古棠・  
布山・盤斎・新多・精器・其骨・松圃・南江・糞三・三帛・  
石洗・悠月・雅風・峰秀・其翼・文窓・巢欣・椿山・由儀・  
柏翠・旭斎・友甫・其誠・涼屋・抱儀・好以・甘志・香芸・  
五雀・不染・尋香・許十・等栽・苳曆・水壺・祐之・世員・  
波鷗・白起・完鷗・篤之・野井・芳艸・草栖・草友・草甫・

九峰・留木・樹石・卜早・かつら・稔市・呂風・月夕・只青・  
五休・雪秀・然々・泰山・太年・花海・きく雄・為山・新甫

82 8 5

※ 「辛酉盛夏」／新甫転宅披露

87 秋興 四裁 鶯居 画者不明 雁図 ○ イエ ×

(エド) 為山・見外・花海・芳艸・野井・新甫・ミキ雄・泰山・  
露心・然々・其葉・山美・草甫・山台・永年・永機・雪年・  
菊也・春湖・葉娃・氷壺・卓郎・(ムサシ) 五渡・正价・天由・  
(オク) 多代女・一止・三喬・風止・清民・(デハ) 御風・素山・  
(箱館) 葱玉・(エチゴ) 鷺眠・(エツ中) 慶里・(カド) 大夢・悠平・  
(シナノ) 雪鷹・(下サ) 屯年・(上サ) 乙瓢・(ヒタチ) 筧谷・  
(スルガ) 青淇・(遠江) 嵐牛・牡水・(ミカハ) 寛伍・(ナゴヤ) 而后・  
一清・李曠・梅裡・(ミノ) 山士・(近江) 帆道・(京) 公成・有節・  
波同・黙池・淡節(天坂) 鼎左・松隣・素屋・(アハ) 麦鳥・羅村・  
半夢・其翠・(イヨ) 菊圃・鶯居  
65 6 5  
※ 文久頃

▼文久二年

88 秋興 四裁 烟外 圭岳 水辺図 ○ イエ 鷗波

(下サ) 嵐夕・松堂・羅海・雲外・ミキ守・月器・壺通・頼山・

沙磔・古柏・李明・圭芝・文芥・栄樹・凶南・花嬌・梅舎・  
清夢・應一・梢夕・麦翠・習竹・婦牛・元史・烟外 25 25

※ 「戊仲秋」

▼慶應元年

89 春興 半裁 桃止 画者不明 扁額図 ○ アイウエ 葦齋

(京) 公成・漁藻・淡節・(大坂) 鼎左・素屋・竹舎・知風・松隣・  
(ナゴヤ) 我竟・梅裡・(ミカハ) 蓬宇・春芙・(カヒ) 香芸・  
(サガミ) 其三・(上サ) 由儀・柏翠・塵白・(下サ) 毳年・月杵・  
旭齋・(ヒタチ) 谷雄・(アフミ) 九峰・(上毛) 乙瓢・(下毛) 其翼・  
栄欣・(ムツ) 清民・壯山・(チンプ) 此一・砧齋・(デハ) 吟風・  
江春・素山・(エチゴ) 契史・古棠・雅仏・市猿・(アハ) 半夢・  
宇春・(ムサシ) 三千竹・溪齋・(江戸) 為山・等栽・芳草・  
ミき雄・太年・弘湖・木和・きく雄・鳳雛・鼓汀・逸朝・稔市・  
ちゑ女・庭民・暉渡・貞郎・草友・甘茶・郎雅・起春・禾暁・  
有隣・花兄・(少年) いと女・小雲・龍枝・乙雄・清之・月茶・  
雪年・景三・五休・甫柳・梅言・草栖・岱々・可房・香陽・  
花外・曾涼・黙平・案暁・荷少・北露・卜早・留我・鼎也・  
五雀・思樂・乙五・弘美・尾正・其葉・洒雄・可鶯・成伍・  
尋香・春湖・氷壺・見外・卓郎・宇山・儀村・其三・文素・  
其山・秋耳・たつ女・清花女・龜遊女・清風女・(盲人) 桐葉・

秋蔦・歳雄・連止・鳥月・雨橋・幽止・桃止 119 119

※ 「乙丑春」／扁額図に句を入れる

90 春興 三裁 玉英 真一 春花三種図 ○ アイ 旧瓦

(京) 有節・公成・芹舎・祭魚・淡節・黙池・九起・文海・赤甫・  
鳥岳・自長・波同・拾山・(チニハ) 鼎左・素屋・潮水・挙一・  
麦舎・(ヲハリ) 而后・土前・(三河) 完伍・蓬宇・(遠江) 嵐牛・杜水・  
聴雨・(駿河) 自栖・漣山・(サガミ) 立宇・(江戸) 泰民・泰民・  
花兄・蓼々・即堂・為山・卓郎・見外・嗽石・玉英 38 38

※ 「乙丑春」

▼安政五年

91 春興 半裁 澄秋 精泉 春耕図 ○ アイ 夜泉

芹舎・淡節・素屋・梅裡・為山・木和・春湖・琴堂・朶古・  
移柳・樗三・良可・市猿・契史・積翠・尤儀・陽一・文芭・  
百鷗・山計・了々・北池・愛石・可省・青斧・雪潮・連綿・  
一葉・蕉丘・松涛・秋湖・花山・竹塘・芳室・雲潭・雲丈・  
桃屋・涛陰・桐芥・谷川・(溟海改) 横聲・梅里・司洌・筑水・  
知外・春城・雪西・雪溪・雲照・岱鵬・貫古・唵堂・竹陽・  
雪旦・松臈・龍溪・芳溪・八九・雲峯・城谷・春逸・(松翠改)

鶏子・止月・柳栽・乾檜・(柳花改)羽長・松旧・一里・桜橋・  
柳亭・逸交・史郷・雲涛・春涛・先頼・澄秋 76 76

※ 「午の孟春」

▼明治三年

92 その他 三裁 為梁 是真 桶 梅花図 ○ アイ 旧瓦

(西京) 黙池・良大・淡節・文海・卓志・九起・(大坂) 潮水・  
宇尺・浅弥・素屋・(尾張) 梅裡・錦水・(三河) 蓬宇・社堂・  
(遠江) 嵐牛・十湖・尾正・(駿河) 尋香・鳳洲・得之・まほ哉・  
雪柯・五拙・林隣・露山・太年・(伊豆) 連水・玉光・(相模)  
閑茶・可金・子紹・(武蔵) 雪郎・樟翠・三籟・桃郷・嵐松・  
(東京) 見外・等栽・奇泉・洒雄・大蟲・永機・宇山・月彦・  
弘美・松頂・如白・新聲・成伍・存長・かつら女・芳泉・乙雄・  
木和・芳草・蕉露・ミキ雄・甘海・春湖・為山・華兄・仙月・  
うめを・采芹・泰民・芝月・逸外・禾旭・美柚・吸露・其英・  
栄昌・青亘・黙平・護外・思楽・(信濃) 雪磨・かねる・(甲斐)  
松月・乙蟻・月彦・関彦・民丸・(上総) 清海・(武蔵) 皆如・  
錦露女・東甫・知音・守白・雪彦・思月・紫道・東郷・閑臥・  
易水・半醒・月朶・亜物・悟秋・乙彦・(磯吉更) 為梁

※ 「庚午晩春」／送別／69と同一

101 103

93 その他 半裁 宗暁 是真 芭蕉句碑・遠山図 ○ アイウ 旧瓦

とし雄・泰水・甫山・草巴・研月・甘茶・逸外・五清・山和・  
瓢仙・毘年・乙瓢・禾旭・桂條・為山・三水・是三・黙平・  
一厚・梅年・柏葉・尽村・契史・春湖・長湖・冬翠・青節・  
崔萍・井之・樗成・雪操・紫響・洒雄・半醒・悟秋・雪彦・  
花昔・月朶・乙彦・必貫・祖風・釣月・大蟲・茶逸・景里・  
山月・□□・うめを・澄雪・竹舎・宇山・道守・瑠頂・蓼々・  
園外・花朝女・ます彦・友昇・見外・護外・亨斎・得水・二柳・  
仙月・泰民・弘美・蘆城・存長・ミキ雄・木和・奇泉・  
かつら女・紫白・宣子女・龍守・随所・雪松・完車・変鶴・  
桃扨・不求・蘆月・勇賀・美喜・完鷗・笠下・静斎・竹東・  
華兄・藻鏡・等栽・芹舎・良大・文海・九岳・黙池・潮水・  
素屋・素山・江春・精知・鳧水・来々・乙那・南海・春氷・  
竹良・琴堂・真泰・藤磨・好々・魯石・布花・可三・吞海・  
泰眠・かき守・(雲水) 宗暁 116 117

※ 「庚午夏」／芭蕉句碑「ほととぎす啼や黒戸の濱ひざし」  
建立記念

94 歳旦 三裁 露心 × | | | ×

公成・九起・淡節・文海・鳥岳・素屋・梅圃・知風・潮水・  
梅裡・竹涯・静處・素溪・蓬宇・完伍・奥美・嵐牛・杜水・

清民・杜山・一止・御風・江春・静淵・文貞・古棠・李郎・  
 市猿・乙瓢・旭斎・可候・素心・麦露・崑山・蔦渚・一山坊・  
 仁三人・水心・為山・きく雄・花兄・等裁・鼓汀・五休・永機・  
 大虫・花外・宇山・葎露・北露・香陽・ミき雄・思楽・可尊・  
 得水・草友・鳳雛・存長・春湖・氷壺・太年・五粒・巖の本・  
 漣拳・三巴・只中・其得・里女・琴友女・楨子・紫一女・  
 桂京女・瞻翁・汶路・生垣・有楽・美のり・雪洲・如齡・雨蕉・  
 幽栖・千億・たか女・松蘿・精機・三ツ菫・竹丸・可松・其川・  
 砂光・(黙樞更) 定貫・新東・三遊・蘆粕・(紫嵐更) 紫郊・鶴影・  
 羽重女・雨丈・泉舎・百旨・千竹女・文園・柳糸・露艸・双露・  
 探路・是心・梅里・三和・竹叟・泰布・凉荷・山松・如洗・  
 汲古・二水・千代女・醉扇・なの四・一儀・霞晴・調雨・欣志・  
 白醉・糸川・田美・芳草・素訣・靖路・守郎・逸雨・蝶翁・  
 脇水・伍柚・貴邦・狐登・露心

137 139

※ 年代不明／花蝶二色刷料紙

▼明治四年

95 歳旦 半裁 晴雲 兒云 天狗萬歳図 ○ アイ 子来

春湖・見外・甘海・為山・梅裡・土前・芹舎・素屋・栞堂・  
 栞古・契史・史郷・尤儀・稻住・化雪・市猿・馬隠・雪涛・  
 雪潮・司茫・百鷗・家囊・良可・東雲・琴丸・桃李・三千代・

栞居・以逸・瓢々・流芳・友徳・芳雲・清寿・春翠・梅園・  
 柳臯・竹宇・為節・晴湖・静斎・稗香・敷成・木二・静池・  
 積翠・玉鳴・市曲・半橋・童池・一柳・江柳・崑柳・秋臯・  
 竹亭・漸至・古柳・涛雲・水涛・晴柳・静里・移柳・晴雲

※ 「明治辛未の春」

63 64

96 歳旦 半裁 乙彦 是真 桜・鮎図 ○ イエ 旧瓦

(京) 芹舎・文海・九岳・良大・淡節・(天坂) 潮水・宇尺・菊池・  
 (大谷) 紫道・浅弥・素戻・(アフミ) 乙也・(イセ) 洗我・果撫・  
 其悠・續雲・(ヲハリ) 梅裡・静處・錦水・馬曉・羽洲・(ミカハ)  
 蓬宇・杜堂・半桂・(遠江) 十湖・舒堂・筌露・(スルガ) 尋香・  
 太年・似水・得之・露山・斗大・為梁・(イツ) 速水・未證・  
 三友・梧桐・(カヒ) 香塵・不爭・九江・一陽・惺池・半雪・  
 幾秋・竹良・雷石・(サガミ) 艸巴・閑茶・魚眠・可都良・帰斎・  
 富升・乙児・以静・子紹・(濱) 愛海・友昇・嵐松・古麦・三籟・  
 月朶・(上総) 吞海・かき守・(下総) 画村・旭斎・勤外・(上毛)  
 琴堂・乙瓢・青我・玄喜・是了・栞古・半湖・(下毛) 茂精・  
 巢欣・思水・春峯・蘆外・(岩シロ) 壮山・春斎・浙風・(イハキ)  
 桃壺・□□・(羽陽) 素山・春生・吟風・江雨・江春・(陸前)  
 青宜・沙耕・(シナノ) 雪磨・庭雨・龍湖・かねる・樵瓢・樹葉・  
 (ムサシ) 完鷗・此木・等之・皆如・閑月・素郎・凉花・泰眠・

雪朗・五渡・(東京)見外・木和・宇鵬・龜得・林甫・翠峰・  
金羅・春湖・芳泉・竹東・泰民・吸露・采芹・ミキ雄・等栽・  
素外・悟秋・翠園・沙山・弘美・甫山・素風・朴屋・瑠頂・  
古むら・華兄・露心・永機・黙平・竹舎・千畝・芹水・乙雄・  
栄昌・思楽・新聲・春松・蕉露・宇山・秋江・かつら女・存長・  
香宇・石叟・素水・逸外・雲松・蔦峯・月彦・謝徳・研月・  
為山・絢堯齋・半醒・知昔・雪彦・守彦・錦露女・乙彦

※ 「辛未春日」

166 167

97

その他 半裁 春湖 是真 朝顔図 ○ イエ 菫齋

芹舎・有節・淡節・良大・祭魚・漁藻・卓志・文海・桧山・  
硯水・黙池・赤甫・乙也・潮水・宇尺・南齡・鼎石・菜也・  
素屋・閑美・其悠・積雲・果推・茲池・帰牛・桃雨・三外・  
桐林・洋々・介居・桐齋・菫水・犁春・曲川・土前・羽洲・  
静處・流翠・素溪・禾啓・土芳・醉雨・はしめ・立意・柿谷・  
華岳・素水・芝椿・三楓・梅裡・蓬宇・波文・雪湖・半桂・  
杜堂・嵐牛・木潤・舒堂・古心・守考・甘谷・水音・尺波・  
三美・松応・佳員・壺春・一試・幾苔・十湖・柳絮・塘雨・  
曉風・知帶・杜水・尋香・太年・清節・似水・雪香・九如・  
蝸堂・青洗・連水・未澄・九成・一称・他山・菁我・尽村・  
史雄・よね女・真砂雄・抱江・茂精・五渡・知史・素竹・露明・

文種・梅年・知泰・西山・琴松・松圃・友昇・古麦・嵐松・  
月朶・登海・蔦之・百尺・此木・為山・乙彦・研月・思楽・  
宇山・きく雄・永機・かつら女・弘美・弥山・等栽・見外・  
黙平・華兄・素水・千畝・得水・寿却・芳泉・甘海・二柳・  
如白・秀寿・椿齡・石叟・月彦・有終・ミキ雄・三田郎・赤三・  
宣子女・完鷗・芦城・泰眠・尾正・契史・是三・東枝・春湖・  
木和

※ 「辛未仲夏」／木和送別

152 154

98

追善 半裁 きく雄 是真 鯉・菖蒲図 ○ アイ 菫齋

甘志居士・小雲・寒香・釣月・いち女・精知・他山・琴堂・  
完鷗・尫年・椿山・弘湖・尋香・素屋・黙池・仙月・序流・  
新聲・来伍・宇山・香城・見外・花外・芦城・禾曉・弘美・  
為山・五休・黙平・木和・ちさ丸・魯雪・昌可・永年・介我・  
(甘志男) 把黄・沙山・思楽・きく雄

※ 「明治四歲次辛未仲夏第九日」／甘志追善

39 43

99

冬興 四裁 有海 是真 切花図 ○ アイエ 無別(是三)

芹舎・有節・黙池・良大・淡節・潮水・宇尺・野童・朝逸・  
鶴歩・素届・土前・醉雨・羽洲・流翠・梅裡・蓬宇・舒堂・  
杜水・為山・等栽・契史・東枝・黙平・華兄・是三・春湖・

雪袋・柏葉・有海・有海 31 3 2

※ 「辛未仲冬」

▼明治五年

100 歳旦 四裁 春湖 是真 扇面図 ○ アイウエ 無別(是三)

梅年・柏葉・田公・舒堂・契史・華兄・千畝・美菟・正价・  
ちさ丸・文昇・是三・黙平・東枝・可三・梅枝・ちほ女・董江・  
笠村・春湖 20 2 0

※ 「壬申春」

101 その他 四裁 春湖 是真 蝶・桜杖図 ○ アイエ 無別(是三)

契史・為山・如白・太年・芳泉・連梅・等裁・是三・文昇・  
千畝・黙平・ちさ丸・一鼎・梅林・東枝・華兄・春湖 17 2 1

※ 「壬申晚春」／契史送別

102 その他 半裁 文寿 陵岡 梅・椿・句帳図 ○ アイエ 董斎

文寿・小助・小万・乙彦・青豆・芹舎・黙池・九起・漁藻・  
良大・潮水・菊也・紫道・素屋・□□・梅裡・羽洲・土前・  
蓬宇・波文・杜堂・嵐牛・杜水・尋香・連水・月朶・三籟・

完鷗・塵外・春斎・壯山・漸風・素山・江春・小雲・董嶼・

青香・甫三・一鼎・春湖・有終・ミき雄・永機・弘美・尾正・  
沙山・如白・月彦・宇山・芳泉・永年・見外・甘海・等裁・  
きく雄・契史・黙平・東枝・是三・花祐・旧竹・思楽・新車・  
圓朝・二柳・蕉露・研月・華兄・竹東・為山 71 7 3

※ 「壬申春」／「如月」／青豆送別

103 春興 半裁 菟雪 耕沖 胡蝶図 ○ アイウエ ×

(鳥取) 一樹・(鳥取) 巴大・(松江) 緑竹・(松江) 石心・(松江)  
暁風・人召・(鳥取) 月雫・宇尺・枕嶺・杜鴻・雅六・薺屋・  
野水・素梅・眉年・南齡・碧中・鶴歩・稻處・史山・潮水・  
燕石・乙也・似蝶・卓志・草居・梅鼎・菊也・素屋・松隣・  
壽女・秀女・黙池・菟雪・菟雪 35 7 2

※ 明治四年／「辛未春」

104 慶賀 半裁 素屋 魚大 萬歳図 ○ アイ ×

為山・春湖・芹舎・乙也・潮水・稻處・松隣・宇尺・梅鼎・  
菟雪・順仙女・牧子・栄子・田鶴子・千穂子・枕嶺・花宿・  
我猿・其友・石雄・稻水・素真・如翠・其壽・蕙香・素水・  
蛙井・竹楼・素暁・笑猿・芳村・猿子・如猿・月澄・梅邑・  
重土・素屋・素吟 和歌三首十 35 4 5

※ 「壬申春」／家督嗣承祝

105 歳旦 四裁 素屋 小斎生 洋傘・下駄図 ○ イエ ×

宇長・宇尺・菟雪・桃兮・潮水・素屋・素屋・潮水・桃兮・  
菟雪・宇尺・宇長 12 2 6

※ 「壬申小正月」

106 その他 四裁 菟雪 可亭 樹下望丘図 ○ アイエ ×

宇長・黙池・潮水・露丸・草居・松隣・梅鼎・稻處・卓志・  
素屋・菟雪 11 1 4

※ 「壬申春」／剃髮記念

107 歳旦 小 竹舎 永濯 年玉図 ○ アイ 青洲

九起・良大・潮水・素屋・尋香・友昇・為山・等栽・ミキ雄・  
乙彦・沙山・かつら女・良海・香宇・露待・うめを・宇山・  
竹舎 18 2 0

※ 「申の春曆」／六裁

108 歳旦 小 竹東 翠湖 国旗図 ○ アイ 葦斎

為山・春湖・有終・ミキ雄・弘美・黙平・契史・華兄・東枝・

是三・(大坂)潮水・(大坂)素屋・(大坂)宇長・(エサシ)一鼎・  
青冑・花祐・介我・乙彦・見外・等栽・永年・旧竹・志洋・  
巨洋・竹東 25 2 5

※ 「壬申春」／六裁

109 その他 三裁 松隣 尚屋 芭蕉堂図 ○ 単(墨) ×

菟雪・松隣・素屋・梅鼎・潮水・稻處・草居・露丸・杜鴻・  
**流美**・為山・春湖・梅裡・蓬宇・芹舎・黙池・潮水・素屋・  
菟雪・露丸・兄魚・可兆・草居・吾柳・梅仙・松泉・杜鴻・  
稻處・松隣・松隣 連句十句+ 20 3 8

※ 芭蕉肖像讓渡記念

110 追善 四裁 菟雪 其翠 海棠図 ○ イエ ×

春湖・等栽・黙池・露丸・草居・燕石・松隣・素屋・菟雪・  
菟雪 10 2 7

※ 「壬申中夏」／菟雪父慶翁老大人追善

111 その他 四裁 草居 翠湖 菓子折図 ○ アイエ 小鷗

蓬宇・梅裡・稻處・潮水・芹舎・黙池・素屋・松隣・菟雪・  
春湖・等栽・竹東・黙平・永年・精知・沙山・為山・草居・

草居 19 2 3

※ 「壬申水無月」／草居東行祝

112 春興 四裁 乙瓢 是真 胡蝶・急須図 ○ アイエ 董斎

春湖・等栽・弘美・為山・乙瓢 5 6

※ 「壬申春」

▼明治六年

113 歲旦 四裁 春湖 是真 年玉・玩具図 ○ アイウエ 無別(是三)

士前・舒堂・契史・文昇・東枝・黙平・是三・鶯笠・華兄・  
梅年・竹堂・車雷・晚香・一厚・乳山・梅枝・田公・一芳・  
翠兄・雲外・蘆水・龜遊・梅思・登竹・竹二・春湖 26 2 7

※ 「明治六年初春」

114 歲旦 半裁 未貫 是真 御酒德利図 ○ アイ 松仙

芹舎・良大・黙池・淡節・潮水・素屋・士前・静處・羽洲・  
梅裡・蓬宇・舒堂・杜水・旭斎・他山・素山・江春・契史・  
雪潮・雪袋・柏葉・為山・見外・等栽・ミキ雄・有終・きく雄・  
黙平・華兄・是三・今山・沙山・春湖・野井・五渡・梅年・

友昇・竹二・翠兄・完鷗・半湖・笱言・栞古・明順・鳥州・  
霞洞・拾翠・一菴・帰山・一原・一居・西林・三水・一貫・  
見山・柳圃・綾花・此山・未貫 59 6 0

※ 「明治六年一月」

115 歲旦 三裁 露心 × | | ×

淡節・九起・文海・素屋・湖水・松隣・梅裡・素溪・静處・  
竹涯・蓬宇・見二・風志・文貞・江春・壯山・華雪・巾舎・  
一井・錦里・左由・一山・為山・等栽・花見・弘美・士朗・  
葎露・ミキ雄・素行・舒石・長亘・九曲・掬水・千竹女・梅里・  
露艸・三双・素信・孝月・池汀・霞晴・是心・龜緑・一表・  
塵一・眠兒・梅桂・ゆかり・曉窓・山松・伯露・閑山・千蝶・  
百旨・糸川・双露・松鶴・白醉・竹叟・欣志・調雨・山朶・  
狐登・貴邦・正露・蝶翁・伍柚・春訣・芳草・露心 71 7 2

※ 「西春」／蝶柄料紙

四篇

「坤之四篇」／萬色一睭／齋生園」



1 歳旦 半裁 為山 圭岳 木馬図 ○ アイ 仙覺

(京) 梅室・岱年・杜鷲・有節・月坡・文翠・梅通・禾明・芹舎・石外・淡節・(大坂) 素屋・松隣・白鷗・鼎左・(近江) 砺山・蘆□・月□・楓下・(大和) 可□・(イガ) 養爪・(イセ) 雀□・葱□・五□・(ヲハリ) 而〔后〕□□・應□・李□・不退・鳥津・松良・黄山・月底・(ミカハ) 蓬宇・三岳・(遠江) 鳥谷・杜水・嵐牛・(スルガ) 漣山・千鶴子・遲流・鳳棲・瓢鯰・松塘・東左・對栗・聰泉・弄化・等栽・素伯・荷少・桐古・鳥吟・魯心・霞兄・臥春・古峰・少太・樹石・きく雄・冬守・太喬・菟明・白斎・如石・如鶴・文賀・寿三丸・超明・勢稼・千可是・鼠笑・雪彩・鳥外・仙覺・百古・山方・可簫・波静・山子・為山

81 8 1

2 春興 半裁 為山 是真 鶯・子日松図 ○ アイ 榎亭

(肥前) 悠々・有岡・柳絮・(筑前) 雨貴・(日向) 駝岳・双鳥・(伊与) 菊圃・(土佐) 婦牛・古鳳・梅十・元史・(阿波) 凉枝・万像・思風・茶雷・夷岳・山がつ・樗風・宇均・桑葉・(淡路) 希鱗・半谷・(周防) 素兄・長□・柳□・椿□・(因播) □□・□□・(但馬) 起山・(備中) 耘籽・(播磨) 吟雪・(兵庫) 似菊・醒花・(雲水) 碩水・桃五・薰道・可庭・北松・茶瓢・野鶴・

石堂・岳陰・拾椎・桃支・波同・如息子・逸瀨・西馬・四端・梅思・瀨叟・百丈・菑繼・月村・苜友・松堂・曆外・曆明・太年・岱中・五雀・半明・月布留・千兮・帆風・梅露・古山・詠久・音好・漣々・山外・念々・卓節・杉峨・龍守・暮陽・山子・山方・可簫・波静・為山

81 8 1

3 歳旦 半裁 為山 雲将 鑞・床図 ○ アイ 大堂

(オク) 多代女・清民・一止・舍用・禾月・宗古・紅三・英泉・湖立・遊河・如雲・三泉・葎室・梅成・梅月・(アイツ) 布山・(ナンブ) 南江・(ツガル) 冬松・残春・素席・(マツマエ) 小鯢・一帆・(デハ) 御風・素山・唵風・□□・郎丈・西池・閑林・二丘・(エチゴ) 乙良・鷺眠・雄飛・友耕・茶山・孤舟・好静・古棠・ちから・其山・(サド) 梅真・三省・五風・樹三・(エツ中) 怒兮・慶里・(カヅ) 大夢・江波・柳壺・丹嶺・(エチゼン) 布珀・(ワカサ) 柏石・一具・烟々・好甫・祖郷・尋香・卜早・大鵬・菅丸・左山・草宇・梅笠・こむら・見外・米山・雪年・雪哉・鶯龍・然々・惟草・たけ女・ちさ女・萬古・大堂・波静・山子・山方・可簫・為山

80 8 0

4 歳旦 半裁 為山 山方 恵比寿暖簾図 ○ ウエ 竹窓

(常陸) 莪香・三友・友甫・一兆・(下総) 交水・鳩羽・菑年・その女・江月・以兄・得老・士明・(上総) 未成・柳塘・霞雪・

(安房) あや雄・(下毛) 嵐斎・一圭・布山・七堵得・其翼・竹雨・  
 (上毛) うめ雄・関市・相漁・栞堂・松月・亀松・石鳴・如松・  
 快雅・也谷・(甲斐) 為春・雪底・竹良・逸我・(相模) 立宇・  
 布丈・木雅・竹山・(武蔵) 天由・桃郷・五渡・淡斎・(在府)  
 黍丘・卓堂・鶯居・榎舎・文器・月山・閑那・由誓・得蕪・  
 松什・丁知・瓦村・波鷗・□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□  
 一□・祐之・僊月・世負・羽人・乙彦・卯月・泰山・楼翁・  
 秋香・抱儀・榎園・ゆきを・みもと・可簫・波静・山子・山方・  
 為山

※ 「子の春」  
 7 歳旦 小 素屋 松迭園 小松図 单(墨) イエ ×  
 (ナラ) 素鷗・(ナラ) 素鷗・(洛) 梅室・石堂・(浪花) 素屋  
 ※ 八裁  
 8 歳旦 小 素屋 霞彩 鼠柄祝袋図 ○ イエ ×

5 歳旦 四裁 素屋 誇大 高砂人形図 ○ アイ ×  
 梅室・鼎左・鶯宿・松隣・(柱本) 都春・(神戸) 竹翠・(南都)  
 素鷗・春蔭・五朗・枝鳩・亀年・梅邑・稻處・杜鴻・素屋

春洌・春洌・素屋  
 ※ 「子歳旦」／八裁  
 9 歳旦 小 愚佛 霞彩 梅・松葉図 ○ イエ ×  
 素屋・月坡・誠之・忠甫・愚佛

※ 「子春」

15 2 3

※ 花卉空押／八裁

5 1 0

6 歳旦 四裁 素屋 誇大 高砂人形図 ○ アイ ×

(江戸) 為山・(江戸) 西馬・(デハ) 御風・(エチゴ) 好静・(エチゴ)  
 孤舟・(エチゼン) 布珀・(イセ) 石水・(イガ) 養爪・(イハミ) 青池・  
 (アワヂ) 鷗池・(カハチ) 稻海・(セツ) 竹舎・其山・可兆・素屋

15 2 0

10 歳旦 小 松隣 × | | | ×

鼎左・鼎左・素屋・素屋・松隣・松隣・松隣  
 ※ 「壬子のとし」／八裁  
 7 7

11 歳旦 四裁 逸中 秋亭 靈芝図 ○ イ ×

嵐岱・雄岳・杉里・葛居・空歩・磐舟・梅室・鼎左・為山・  
松隣・素屋・閑那・空歩・磐舟・嵐岱・杉里・葛居・雄岳・  
逸中 19 2 5

※ 「壬子春」

12 歳旦 四裁 春陰 華堂 鼠・正月飾図 ○ アイエ ×

閑那・素屋・一峯・霞仙・逸中・起石・伯素・露堂・柯堂・  
秀旭・佳葉・了逸・春陰 13 1 6

※ 「子の春」

13 春興 四裁 光月 × | | | ×

(石見) 青池・菊操・月人・楓下・梅圃・文昇・杏花・風光・  
一澄・里柳・素屋・光林 12 1 2

※ 桜と鳳凰柄杓

14 歳旦 四裁 蟻兄 誇大 鼠・夜燭図 ○ アイ ×

素屋・佳葉・冬川・水哉・菊渕・樛堂・芦江・乙鷺・蟻兄

9 1 0

※ 「壬子春」

15 歳旦 四裁 鼎左 画者不明 群鼠図 ○ アウ ×

月人・楓可・花兄・其松・(ばなり) 杏領・(かふち) 月洲・  
(赤穂聴澤事) 鼎跡・(尼ヶ崎) 梅登・(高野山) 鼠仙・(高野山) 霞仙・  
(高野山) 悦々・(石見) 青池・素屋・鶯宿・松隣・鼎左 16 1 6

16 歳旦 四裁 鶯宿 了斎 群鼠図 ○ イウエ ×

素屋・春芳・(ナダ) 南景・梅花・其道・義礼・(ヨシノ) 芦笛・  
(ヨシノ) 鳩来・一艸・湖月・桜奥・鶯宿 12 1 4

17 歳旦 小 素屋 素屋 太刀図 ○ イエ ×

素屋・素屋・素屋・素屋・素屋 5 1 1

※ 「壬子春」／十二裁

18 春興 小 三季女 霞彩 姪人形図 ○ イエ ×

素屋・稻處・可南女・三季女 4 8

※ 「子の春」／十二裁

19 歳旦 小 素屋 春山 宝珠図 ○ イエ ×

茂郷・素屋

2 7

※ 二十四裁

20 歳旦 小 素屋 画者不明 月影図 単(銀) イ ×

鶯宿・五朗・龜年・杜鴻・素屋 5 1 4

※ 十六裁

21 慶賀 四裁 蟻兄 水虎 八重桜・靈芝図 ○ アイエ ×

百庵・柳美・五朗・民月・眉晴・可保・路松・一起・楓朔・  
菑遊・方竹・杜鴻・乙鵝・蟻兄 14 2 0

※ 百庵古稀祝賀

22 歳旦 三裁 魯心 × | | | 竹窓

(京)梅室・岱年・九起・(大坂)素屋・松隣・稻所・枝鳩・鼎左・  
(尾張)黄山・醉雨・(駿河)漣山・(奥)多代女・一止・(越後)  
乙良・立器・季山・稻彦・茶山・(加賀)柳壺・(日光)未足・  
鶯雅・(相模)立宇・榎堂・(甲府)所佑・芭雪・(武蔵)寄三・  
桃郷・竹堂・淇水・松月・竹扉・麦露・あらし・由誓・錦侍・  
翠松・松什・漣拳・魯仙・波鷗・桃月・紫一・逸洌・遅流・  
甘雨・柳雨・恵雨・楽哉・五雪・卓郎・山方・可簫・山子・

風光・素融・氷壺・祖郷・静寿・長□・其□・百杯・簗甲・

見外・南々・間旨・泉舎・左栗・鯉水・得蕪・四端・佳尾・  
芝丈・万籟・楨千・遊雀女・梅笠・菊雄・柳巷・萱洲・鶴歩・

松谷・里水・嵐明・念々・雄宜・呂椿・生宜・猛帛・三正・  
清雅・山紀・山黍・新月・欣志・楽水・三巴・肆山・盛残・

古山・一具・利秋・檜路・一甫・柳柴・蕪子・琴友女・松風・  
西馬・為山・玄明・千竹女・雖可・稀木・揮石・杜喬・素袂・  
洒山・萬古・孤登・狐堂・其則・魯心 122 1 2 3

※ 「壬子春」／蝶柄黄色刷毛目料紙

23 歳旦 半裁 見外 其融 翁面 小松図 ○ イ 流斎

(京)梅室・芹舎・有節・(ナニハ)其雨・鼎左・素屋・(アハ)  
鳳棲・思風・夷岳・茶雷・万像・(イヨ)鶯居・(ヒムカ)双鳥・  
(ミカハ)完伍・(キイ)閑那・(ヒタチ)一弄・(エド在越前)醉賀・  
(ヒダ)有美・(カミ)柳壺・鳩菑・文彦・如柳・(エツ中)茗号・  
(エチゴ)乙良・好静・(上ワケ)松月・(デハ)□□・素(山)・  
唸(風)・<sup>木</sup>□・<sup>漆</sup>□・(マツマ)一□・頼□・□□・□□・寫月・  
龜六・庭雨・きく雄・樵類・鳥霞・和春・朝鳥・(上毛)みつ雄・  
玉英・魯三・花然・嗽石・白池・五跡・(掬月更)如水・正路・  
梅辰・(下毛)夕和・和柳・寄月・鹿城・其翼・(上サ)一澄・  
若水・節守・(アハ)静里・(カヒ)雪底・斗一・(アヒツ)松圃・  
(下サ)その女・一具・由誓・逸洌・為山・西馬・松什・万古・

得蕪・卓郎・四端・紫端・為心・草居・春水・雅光・一洲・  
雅饗・不一・雅童・素交・暁笠・草笠・一雅・見外 89 8 9

※ 「嘉永壬子初春」

24 歳旦 三裁 撫泉 筠斎 牡丹図 ○ アイ 得斎

梅室・有節・梅通・芹舎・淡節・白鷗・鼎左・素屋・松隣・悠々・  
菊圃・蛎山・大夢・柳壺・黄山・応知・梅裡・李曠・乙良・  
立宇・溪斎・南々・寄三・多代女・清民・舍用・一具・松什・  
為山・西馬・萬古・等栽・祖郷・見外・波静・鳥吟・氷壺・  
尋香・みもと・遅流・逸洌・由誓・雪鮮・素山・霞山・素英・  
月撫・御風・露城・撫泉 50 5 0

※ 「嘉永五壬子の春」

25 春興 半裁 月岡 筠斎 紅椿図 ○ アイ ×

梅室・九起・素屋・有節・其山・龍守・而后・乙良・黄山・  
禾月・多代・悠々・鳥吟・□□・□□・松什・祖郷・為山・  
等栽・由誓・雪貢・雲岱・詠之・其仙・蟻道・其松・桃室・  
大古・酔月・北臥・鷄五・二葉・良和・素山・月想・御風・  
月岡 37 3 7

※ 「子のはる」

26 春興 三裁 宇均 真澄 急須・白梅図 ○ アイエ ×

岱年・有節・梅通・淡節・芹舎・鼎左・其山・松隣・素屋・  
林曹・黄山・逸洌・為山・祖郷・見外・山子・遅流・西馬・  
米室・其秀・鶯居・翠竹・悠々・鳳棲・葉菊・楚宮・木鳥・  
羽長・天馬・樗風・東阡・龜来・笋路・夷岳・茶雷・平蕪・  
山がつ・月古・権斎・宇均 40 4 0

※ 「壬子春」

27 歳旦 三裁 夷岳 真澄 手控本図 ○ アイエ ×

岱年・芹舎・淡節・有節・鼎左・素屋・松隣・悠々・逸洌・  
為山・見外・祖郷・西馬・茶雷・夷岳 15 1 5

※ 「壬子春」

28 夏興 小 素屋 其園 吊葱図 ○ アイウエ ×

文貫・友亭・眉白・無一・百六・祇桃・素屋 7 9

※ 八裁

29 その他 半裁 花屋庵 × | | | 華雨

五鈴・鼎左・素屋・秋亭・光林・其山・松隣・其実・夢松・  
其桃・梅宿・里川・鳥帰・子雀・井左・梅月・梅圃・五鈴・

素屋・松隣・光林・其山・井左・其桃・里川・夢松・鳥婦・  
梅宿・子雀・梅圃・鼎左・其実・梅月・秋亭・(サカイ)此市・  
呂泉・此松・梅室・淡節・石堂・秀何・有節・五鈴・五鈴・  
五鈴・花屋庵  
半歌仙十 28 6 2

※ 「嘉永五壬子初夏」／五鈴送別／青竹柄緑粹

30 追善 半裁 梅月 素真 山桜図 ○ アイ 松軒

台妙居士・狂哥庵居士・吾朝居士・千柳亭・百舌鳥屋・洋々亭・  
吳錦堂・隱□□□□・巖鷹子・梅室・有節・芹舎・鼎左・  
素屋・林曹・未足・素山・二丘・好静・乙良・由誓・卓郎・  
松什・西馬・祖郷・見外・等裁・幻外・丁知・抱儀・逸淵・  
一具・為山・禾月・一止・江三・遜阿・大費・山甫・適山・  
清民・多代女・謝葉・梅月 絶句一章十和歌九首十 35 6 6

※ 「壬子晚春」／梅月父祖追善

31 夏興 四裁 香取 三拙 山葵・茄子図 ○ アイ 仙鳧

芹舎・梅通・多代女・湖伯・茶山・素屋・鼎左・國彦・完車・  
政水・霞山・蝶斎・丁知・仙鳧・珪琳・叩月・帰一・松什・  
卓郎・氷壺・号外・得蕪・見外・抱儀・一具・由之・(在江)  
香取 27 2 7

※ 「壬子の夏」

32 秋興 四裁 鶯宿 可亭 舟中月見図 ○ アイエ ×

梅室・春芽・見齋・(京)淡節・(京)捨山・(京)石堂・英之・  
霞松・可丈・素屋・大年・鶯宿 12 1 6

33 追善 半裁 素屋 吞舟 菊花・香爐図 ○ アイ ×

枝鳩・鼎左・鶯宿・松隣・公祐・奥々・杜鴻・稻處・隆美・  
牧介・梅邑・秋祐・三季女・芹旭・雪甫・素屋・素屋 17 2 3

※ 「壬子初冬」／枝鳩追善

34 歳旦 四裁 井圃庵 長水 翁孫正月買物図 ○ アイエ ×

恒磨・哥聲・(吸川更)雀良・松吟・春智・荷遅・眉芳・眉岳・  
(梅茶更)眉鳳・素屋・可庭・史山・朝翠・井圃庵 14 1 7

35 歳旦 四裁 卷人 霞彩 紅梅牧牛図 ○ アイ ×

桃室・素屋・一三・宝来・春宥・一家・芦雀・竹人・一亀女・  
春水・三ツ丸・苔丸・梅宥・玉雅・寿花・豊人 16 2 2

▼嘉永六年

36 歳旦 四裁 鶯宿 椿下 正月飾図 ○ ウエ ×

素屋・大年・瓢六・(よしの一社) 子遊・(哥好更) 帛丸・(芦笛更)  
鳳梧・井美・竹栄・井龜・柳士・鶯宿 11 1 5

※ 「丑のはる」

37 春興 四裁 鼎左 秋亭 玉転図 ○ アイ ×

松塘・草居・其雪・清機・美崎・月人・(さかひ) 柳吾・(南紀)  
壽抱・(枚方) 一表・(素穗) 鼎跡・(南山) 水齋・(石見) 霞松・  
一池・素屋・鼎左 15 1 5

38 歳旦 四裁 素屋 竹雨 農具・春草図 ○ イ ×

士客・其蔭・田井女・魚金・左資・路春・素屋 7 1 3

39 歳旦 四裁 湧瀧 東甫 寿老人図 ○ イ ×

(ナニハ) 素屋・(ラシミ) 岳鳳・(サガ) 百和・(ヒカミ) 正翠・  
(ヒカミ) 浦涼・(ヒカミ) 一如・(ヒカミ) 飘逸・(ヒカミ) 旭山・  
(ヒカミ) 里仁・(シマダ) 玉扇・(生ノ) 生花・(イハサキ) 暁志・  
(ホヲニシ) 養泉・(モリ) 九價・瓢笛・耕雲・梅雪・馬耳風・(女)  
花の家・帛杖・光月・其玉・梅處・一掘・湧瀧 25 2 9

※ 「うしの春」

40 慶賀 半裁 古樵 公圭 寒梅・鉄図 ○ アイ ×

有節・鶯語・文海・百舌・(在京) 玄子・鼎左・松隣・杜鴻・  
素屋・林曹・太乙・青水・よね女・喜久里・糖人・旭亭・龜齡・  
春しく・古樵・曲阜・徐夕・春照・赤丸・吳遊・松人・孝月・  
梅外・桃雄・照阜・曲阜・古樵 両吟連句六句+ 29 6 3

※ 古樵入門祝賀／天緑引料紙

41 春興 小 葎左 三拙 かんろ梅・紅梅図 ○ イエ 竹窓

見外・思楽・素屋・杜鴻・花曉・葎左 6 8

※ 「癸丑の春」／六裁

42 歳旦 小 如檉 春翠 丑角形印図 ○ イエ ×

有節・梅通・月坡・素屋・蘭圃・花因・易水・如檉 8 8

※ 「丑春」／八裁

43 歳旦 小 青人 公圭 丑人形図 ○ イ ×

玄千・素屋・東龜・松隣・荷少・一東・此山女・柳井・柳守・  
太乙・よね女・曲阜・青人 13 1 6

※ 六裁

44 歳旦 小 素鶚 齋生(素屋) 丑人形図 ○ イ ×

素屋・素伯・素鶚

3 6

※ 十六裁

45 歳旦 小 竹舎 画者未詳 花籠福寿草図 ○ アイウエ ×

素屋・寒水・寒水・竹舎・竹舎

5 6

※ 「丑のはる」／十二裁

46 慶賀 小 素屋 松逸園 関所図 ○ アイ ×

素鶚・鶯宿・恒磨・杜鴻・素伯・竹晴・思月・素屋 8 1 3

※ 「丑弥生」／素鶚転居祝賀／八裁

47 歳旦 小 春渚 春翠 丑角形印図 ○ イエ ×

素屋・文里・春渚

3 8

※ 「丑のとし」／八裁

48 歳旦 四裁 一瓢 虫儼 松飾・美人図 ○ アイ 竹窓

(陸奥) 多代女・(京) 有節・(浪花) 素屋・(出羽) 御風・璪山・  
稻洲・如松・怒号・(加賀) 柳壺・如流・(上毛) 松月・竹磨・  
(越後) 月鴻・三笑・(岩城) 三泉・(武蔵) 亀成・(越前) 醉賀・  
素交・見外・一瓢 20 2 0

※ 「癸丑初春」

49 その他 四裁 思楽 画者未詳 酒宴図 ○ アイ 竹窓

素屋・杜鴻・素屋・杜鴻・見外・思楽 6 1 3

※ 「嘉永癸丑初春」／素屋・杜鴻帰郷留別

50 歳旦 半裁 遅流 山方 松葉・振々図 ○ アイ 梅寓

閑那・為山・遅流・遅流・閑那・為山・為山・遅流・閑那・悠々・

禾堂・淡節・砺山・可大・鼎左・素屋・雀叟・立宇・ゆきを・

五渡・嵐斎・よしか・一兆・乙良・大夢・丹嶺・御風・舍用・

多代女・逸渚・西馬・古山・四端・五雀・漣々・山外・雪年・

弄化・雪簫・荷少・号外・秋香・卜早・見外・叩月・抱儀・

惟草・得蕪・閑那・溪斎・萬古・波静・可簫・青柿・松堂・

太年・鳥吟・菊雄・百丈・暮陽・山方・山子・冬守・みもと・

芦友・為山・遅流 三ツ物三組十 57 7 1

※ 「癸丑の春」

51 歳旦 半裁 静外 是真 神木紅梅図 ○ アイ ×

鼎左・素屋・松隣・淡節・芹舎・木長・一具・逸瀧・為山・  
遅流・念々・等栽・見外・寄三・天由・五雀・里椿・白亥・

均外・由誓・西馬・多代女・清民・(ナンブ)李輔・(ナンブ)錦節・  
禾月・心阿・一止・雨竹・五雲・長洋・一叟・素帟・智幽・

宗古・(石ノマキ)南峰・石芝・五鼎・洞花・義獸・一長・一橋・  
桐葉・所葉・可凉・一洲・佳月・一旦・萍窓・如雲・舍用・

静外 52 52

※ 「嘉永六の春」

52 歳旦 半裁 素屋 珉堂 羽子板・達磨人形図 ○ アイ ×

梅通・閑那・為山・西馬・松隣・鼎左・嶺月・六監・鼠仙・快々・  
梅茶・山庵・雨猿・伯章・鑑古・(曦石更)閑谷・露仙・素屋

※ 「癸丑春」

53 慶賀 半裁 正井 × | | | ×

花屋庵・茶飯堂・終庵・芦竹庵・松蔭・落橙舎・八千坊・  
辰一庵・馬田江・九竹園・豊水・石叟・芦笛・選仙・山暁・  
利一・檀香女・井竹女・**保教**・**梅弄**・**露笠**・**芙蓉**・**笛丸**・正井

和歌五首十 19 50

※ 「嘉永癸丑春」／梅花印摺料紙

54 歳旦 三裁 魯心 × | | | ×

(京)淡節・砺山・(大坂)素屋・鼎左・松隣・(尾張)黄山・應知・  
(越後)乙良・素会・梅厓・季山・立器・(奥)多代女・一止・  
(駿河)漣山・(上毛)関市・(サガミ)孝哉・梅堂・(武蔵)九花・

(川越)竹扉・松月・雪鷲・暉一・麦露・(淇水更)魯丈・葵坂・  
甫月・花友・瓦玉・桃枝・不二丸・青葉・昕抱・宜稻・甘雨・

吞亀・吾山・一有・柳雨・百旨・泉舎・素融・簑甲・梧帟・  
惠雨・禾暁・南々・稀木・雖可・五雪・路友・閑雪・雪好・

顧曉・道栗・生宜・花明・樂哉・柳巷・□举・松出斎・一華・  
錦長女・柳枝・葉一女・錦恠・一恠女・枝雪・圭珂・琴友女・

芝丈・(萬羅更)何之・楨子・あやめ・遊雀女・許十・梨器・  
其得・長亘・翠松・奇山・魯夫・和行・杜喬・柯雪・里水・

蛙仙・光雄・鯉水・邦寿・光丈・金由・鶴歩・柳堂・新史・  
呂調・紫常・海老丸・山記・清雅・三光・泉酒・柳伯・鼠遊・

谷水・一甫・山恠・利秋・隣葉・豊川・蘇子・呼笛・欣志・  
發哉・石醒・釋石・千竹女・旦々・松付・為山・氷壺・由誓・

抱儀・山子・みもと・得蕪・惟草・瓦村・菊雄・三正・逸瀧・  
西馬・山方・有守・祖郷・念々・溪斎・鳥吟・梅笠・桃月・

香吟・音好・万古・不倦・狐登・狐堂・其則・魯心 148 148

※ 蝶柄料紙

55 歳旦 半裁 得蕪 是真 海苔図 ○ アイ 竹窓

(イセ) 五鈴・(京) 芹舎・有節・百古・秀何・嵯川・(日向) 双鳥・  
(ナニハ) 其山・松隣・素屋・鼎左・丁知・等裁・瓦村・(上サ)  
金波・一路・月思・草仙・青梧・琴舟・□□・松什・南枝・  
萬頃・樹石・素良・山子・(シナノ) 梅春・麗水・(サハラ) 得巨・  
羽雪・蘆明・盧恵・為山・山方・波鷗・斗甫・音好・(カヌマ)  
荒城・波静・可簫・等葉・範成・抱儀・遅流・白起・東洲・  
松舟・柳美・雪簫・(足利) 亀友・錦袋・西馬・逸洩・由誓・  
嵯来・拙誠・蓬交・荷少・多美古・月之・千之・閑那・一具・  
峽舎・竹賀・松鶴・抱斎・完鷗・龜遊・髯仙・宗玉・樂之・  
留木・得蕪 75 75

※ 「癸丑のとし」

56 春興 半裁 吳由 画者不明 桜花・萬菊丸軒之図 ○

アイウエ 竹窓  
一具・由誓・逸洩・為山・卓郎・得蕪・西馬・抱儀・祖郷・  
氷壺・未是・尋香・等裁・鳥吟・羽雪・不流・米山・萬古・  
芦月・かつら・卜早・一瓢・叩月・克禮・麗河・柳翠・東左・  
瓢鯨・(京) 有節・芹舎・淡節・梅通・(浪花) 素屋・鼎左・南洋・  
杜鴻・(伊丹) □□・(播磨) 可大・(備中) 溪亭・(出雲) 百年・  
(土佐) 梅十・(日向) 双鳩・(伊豫) 菊圃・(阿波) 鳳棲・夷岳・

思風・万像・(尾張) 而后・(三河) 完伍・(加賀) 柳壺・丹嶺・  
(能登) 晚籟・鳳号・(越中) 慶里・然号・(越后) 乙良・立器・  
(出羽) 御風・吟風・魯長・(陸奥) 一止・(駿河) 岱充・(甲斐)  
閑雅・(武蔵) 眠外・龜成・(浪花在江戸) 蘭操・(加賀在江戸) 柯丈・  
真澄・蓬交・担々・一雅・素交・見外・吳由 74 85

※ 「嘉永丑年三月」 / 「軒之図」については伝芭蕉筆

57 春興 半裁 騏郷 葭亭 吉野西行庵之図 ○ アイ ×

(京) 芹舎・淡節・有節・(大坂) 鼎左・松隣・素屋・蟻兄・(エド)  
逸洩・西馬・半湖・氷壺・為山・(ムツ) 舍用・如雲・(トサ)  
元史・(アハヂ) 鷗池・(ヒゼン) 悠々・(アハ) 應史・鳳棲・燕衣・  
里風・石居・大夢・羅邨・佳長・湖堂・左一・筭路・夷岳・  
桑陽・茶雷・騏郷・騏郷 33 34

※ 「癸丑春」

58 歳旦 半裁 江三 確斎 丑飾図 ○ アイ 雄節

有節・芹舎・九起・鼎左・素屋・其山・松隣・一具・西馬・  
尋香・見外・為山・茶山・乙良・御風・禾月・宗古・塘水・  
湖立・如雲・舍用・松華・三楫・雄節・如菊・李冠・多代女・  
丁酉・東里・英泉・謝葉・梅月・関玉・三保・守三・桑五・  
直樹・如流・豊泉・春鷺・松鳴・五秀・一朔・南景・宇明・

文窓・分字・西美・一英・桂舟・春童・大費・三友・三友・江三 55 55

59 追善 半裁 大年 蜻洲 朝顔・空蟬図 ○ アイ ×

龍淵仏・(江戸)見外・(江戸)南岱・(江戸)玉松女・(江戸)瀧三・(江戸)弘運・**瞻菴**・楓室・**花呂丸**・天来・松鳳・琴女・一本・

**秋琴**・**寫谷**・りう女・(素貨事) 双年・貞旭・大物・蕉圃・**國子**・**貞経**・素屋・辰斎・芦焮・芦汀・**青洞**・杜鴻・糸女・思楽・

大年 和歌四首十七言絶句一章十五言絶句二章+24 4 1

※ 龍淵追善／画中の短冊に龍淵の辞世の句あり

60 歳旦 半裁 河暁 筠斎 花売童子図 ○ アイ ×

梅通・有節・芹舎・淡節・鼎左・素屋・松隣・万像・茶雷・思風・五鈴・青松・李曠・而后・黄山・悠々・大夢・丹嶺・慶里・乙良・ちから・茶山・舍用・如雲・一止・宗古・多代女・

布丈・関市・溪斎・由誓・為山・見外・氷壺・祖郷・萬古・蓬交・山方・みもと・鳥吟・山子・等栽・西馬・逸淵・遅流・

一具・素山・露城・唼風・雲岱・可慎・林子・竹斎・怡々・撫泉・雪鮮・御風・河暁・河暁 59 59

61 夏興 半裁 唼風 筠斎 旭日・白鷺図 ○ アイ ×

梅通・芹舎・有節・淡節・公成・素屋・砺山・悠々・五鈴・茶雷・一清・而后・黄山・多代女・舍用・如雲・大夢・丹嶺・茶山・桃郷・溪斎・由誓・見外・祖郷・西馬・氷壺・等栽・瓦村・山子・鳥吟・逸淵・成五・桃暁・有交・如柳・仙芝・應泉・迎風・簾々・松陽・如春・清梧・素山・御風・唼風 54 54

62 秋興 半裁 樗風 葭亭 水辺落雁図 ○ アイエ ×

(京) 芹舎・梅通・碩水・公成・也然・向月・淡節・有節・(大坂) 鼎左・蟻兄・挙一・可庭・松室・藜々・松隣・素屋・(イセ) 雀叟・五鈴・(ヲハリ) 黄山・李曠・(エド) 逸淵・西馬・祖郷・

氷壺・故厓・半湖・山子・一琢・白亥・音好・尋香・為山・(ムサシ) 南々・(上毛) 米室・葉臺・(ヲク) 多代女・如雲・舍用・

(テハ) 御風・唼風・(シナノ) 葛古・(カミ) 大夢・(ヒゼン) 悠々・(イヨ) 菊圃女・(トサ) 元史・(アハ) 應吏・鳳棲・思風・文笠・

瑩儼・左一・葉陽・(七十齡) 木鳥・楚宮・天馬・石居・山賀都・蒼郎・青枝女・羅邨・逸松・雅郷・たゝ女・山たる・梅道・

雨蓼・月古・龜年・東阡・槿雨・順美・平蕪・筭路・夷岳・茶雷・冬桂・樗風 77 79

※ 「癸丑秋」

63 冬興 半裁 天馬 長興 落葉図 単(朱) イエ ×

逸瀨・為山・半湖・西馬・舍用・有節・淡節・芹舍・鼎左・  
素屋・松隣・鷗池・其秀・元史・鳳棲・思風・万像・葉陽・  
楚宮・夷岳・樛風・平蕪・蒼朗・山賀都・雨蓼・(瑩儻改)草尺・  
蘿邨・たゝ女・槿雨・順美・木鳥・東阡・石居・梅道・思村・  
山だる・騏郷・麦枝女・月古・龜年・筭路・冬柱・茶雷・逸松・  
天馬  
45 4 6

※ 「癸丑冬」

64

慶賀 半裁 晴霞 臥春 多代女辞世句碑図 ○ウエ 鷗波

梅通・祭魚・禾明・鼎左・素屋・松室・曲阜・悠々・万像・  
黄山・一具・為山・西馬・等裁・溪斎・尋香・みもと・白亥・  
芦明・関市・椿岱・士明・冬守・乙良・茶山・御風・唸風・  
国彦・撫泉・其仙・露城・璫山・二丘・如雲・禾月・遜阿・  
児川・丁酉・東里・英泉・清民・春齋・東明・一之・時考・  
忠之・雨石・貞儀・霞石・みつら・春路・千輅・野草・梅霞・  
霞柴・丁遊・呉成・(七十八)晴霞  
59 6 7

※ 「癸丑秋」／晴霞長寿祝賀

65

慶賀 半裁 慶里 圭岳 花月図 ○アイウ 尋香

尋香・為山・梅裡・白亥・均外・一止・我竟・等裁・西馬・  
李曠・二丘・悠々・一清・半湖・萬像・而后・逸瀨・松隣・

66

慶賀 半裁 慶里 圭岳 花月図 ○アエ 尋香

御風・綿峰・九華・萬古・氷壺・完鷗・蓬交・有節・塞馬・  
嵐牛・醉雨・交水・撫泉・英泉・大費・也明・江三・祭魚・  
佛孫・對月・菫年・其山・公成・茶山・南々・里水・竹山・  
麻三・少太・舍用・黄山・かつら・卜早  
51 8 4

※ 66と一対

67

慶賀 半裁 清民 臥春 雪中閑居図 ○アイ 竹窓

新甫・鳥津・玄堂・溪斎・鳥吟・芦月・臥春・雲崖・山子・

※ 65と一対

砺山・其翼・阜雄・好甫・未足・鶴栄・清水・分字・宗古・  
梅月・六槐・詩丸・松亘・徳隣・可簫・棕閣・璫山・寄三・  
松室・茂椿・菊圃・湖立・霞梢・北松・龜成・苜丸・杜陵・  
遜阿・東里・児川・素山・西池・卓堂・芽洲・布山・桃郷・  
立宇・應知・五鈴・少裁・鳥谷・雀叟・鼎左・鷗池・黙池・  
栖霞・湧瀧・禾月・芹舍・閑那・禾堂・朶峰・いさ吉・筭路・  
不流・泰山・岱充・遲流・鳳毛・菊也・抱儀・漣山・黄逸・  
岱中・梅通・太乙・以肅・龜年・乙良・清井・蔣池・雪簫・  
塘水・祖郷・静嘉・みもと・二葉・淡節・太年・関市・芦帆・  
如雲・友甫・茶雷・夷岳・四端・鷺眠・丁酉・慶里  
89 9 7

芦明・貞山・可久・潮月・ちから・其仙・吟風・露城・芳村・  
 松橋・杉芽・水竹・稻處・大夢・美交・素屋・〔七十二〕菊畦・  
 〔資昌〕・(七十八)多代女・静夫・雨石・一帟・斗涼・梅扇・清甫・  
 梅年・龜國・陽篤・芳谷・知年・(成童)清宇・清里・清芝・  
 清竹・清和・(十二童)清羅・清舎・守雄・米山・庚華・愛山・  
 文起・一宣・壯山・(男)春齋・(孫八方)清知・清民・清民

七言絶句二章十和歌一首十 54 8 1

※ 「嘉永癸丑臘月」／清民還曆祝賀

68 歳旦 小 素屋 東山 毬・羽根図 ○ イ ×

鼎左・芦汀・芦汀・素屋 4 1 1

※ 八裁

69 慶賀 小 素屋 竹溪 春草・靈芝図 ○ アイウエ ×

芦汀・杜鴻・春蔭・素屋 4 1 4

※ 十二裁／春蔭回復祝

▼安政元年

70 歳旦 三裁 魯心 × | | | 竹窓

(京)淡節・公成・芹舎・(大坂)素屋・松隣・(紀伊)閑那・(尾張)

黄山・而后・(奥)多代女・一止・(越后)乙良・茶山・(加賀)

大夢・(出羽)御風・吟風・(肥前)悠々・(駿河)漣山・(上毛)

布丈・(甲府)逸魚・(下総)菫年・十條・(武蔵)淡斎・竹扉・

撫泉・由誓・為山・得蕪・抱儀・未足・西馬・桃月・卓郎・

見外・水壺・尋香・瓦村・遅流・山子・山方・可簫・泰我・

春拳・躬幹・いさ吉・三正・肆山・樹石・鳥吟・祖郷・萬古・

吞龜・樂哉・甘雨・柳雨・恵雨・其川・宜稻・吾山・听抱・新・

簑甲・猛帟・雪好・顧暁・□□・木暁・生宣・百旨・乍栗・

泉其・菊雄・錦松・一菫女・一華・錦長女・柳止・圭珂・

琴友女・哥侍倭・慎子・あやめ・花明・三桜女・桜雨女・里水・

長亘・漣拳・晋路・梨黒・奇山・杜喬・柯雪・揮石・千醒・

發哉・柳巷・鯉水・鶴歩・染水・呼笛・古秋・友甫・紫水・

塵子・染竹・秀雀・芦水・芳川・了古・庭月・清雅・山記・

一甫・種丸・山松・檜路・利秋・欣志・二水・千竹女・旦々・

狐登・孤石堂・(在甲府)其則・魯心 125 1 2 7

※ 「寅の春」／蝶柄料紙

71 歳旦 三裁 青池 祭魚 嵐山暁盃図 ○ アイ ×

丁知・得蕪・逸瀾・西馬・見外・為山・荷少・尋香・鳥吟・  
 可簫・等栽・梅通・公成・芹舎・也然・文翠・硯水・淡節・  
 坡井・文海・桃五・有節・松隣・光林・可兆・鶯宿・素屋・

井竹女・玄子・立懸・麦雨・此松・不雄・花嘯・湧瀧・鼎跡・  
鼎処・素兄・悠々・双鳥・漣山・茶雷・多代女・舍用・一桃・  
祭魚・杜蓼・勝錦・梅日・一池・挙一・鼎左・青池・青池・  
青池 55 57

72 歳旦 四裁 素屋 了斎 簀龜蓬萊図 ○ アウエ ×

蛙歩・其遊・梅茶・白馬・静子・笠洲・里柳・鶯人・(ヨナコ)  
鶴棲・楓良・鶯宿・白鷗・光林・素屋 14 2 1

73 追善 四裁 為山 圭岳 古銅釣香爐図 ○ アイウ ×

為山 1 7

※ 「とらのとし」／為山母一周忌

74 春興 四裁 如渕 画者未詳 齒固図 ○ イ ×

(ナニハ)素屋・(ナニハ)可庭・(フシミ)岳鳳・菅六・里選・孤舟・  
杜遊・梧鳴・(那東)志道・如渕 10 1 4

※ 「寅のはる」



75 春興 四裁 鼎左 百襄 湯治場・紅梅図 ○ イエ ×

有節・素屋・松隣・光林・挙一・為山・閑那・(かふち)不二門・

(さかひ)此松・(赤穂)鼎跡・(い勢)五鈴・(なには)蘭操・  
(なには)草居・(なには)梅芽・(南山)蟻三・(南山)石雄・鼎左

76 歳旦 四裁 素屋 素屋 張子寅図 ○ イエ ×

鼎左・鶯宿・松隣・松隣・松隣・素屋・素屋・素屋 8 1 2

※ 「甲寅初春」

77 歳旦 四裁 鼎左 秋亭 花屋庵翁硯箱図 ○ イエ ×

李暁・楓可・文景・(さかひ)柳吾・(さかひ)緑池・(いはみ)一桃・  
(土佐)潮花・(秋田)其友・(松前)淇山・(いよ)棹舟・鶯宿・  
素屋・井資・可兆・不角・鼎左 16 1 6

78 歳旦 四裁 一三 画者未詳 子日松図 ○ イウエ ×

鼎左・松隣・素屋・芦笛・芦月・梅宥・苔丸・豊人・梅笑・  
菊溪・一三 11 1 3



79 春興 四裁 素屋 竹溪 春景図 ○ イエ ×

一三・竹舍・翁栖・梅邑・杜鴻・愚佛・素屋 7 1 1

80 歳旦 四裁 湧瀧 松嶺 白椿花立図 ○ アイ ×

(エド) 為山・(ミチノク) 北麟・(ナニノ) 素屋・(京) 淡節・

(タナベ) 宝翠・(タナベ) 鶴前・(タナベ) 蛇目・(タナベ) 明玉・

(ヒカミ) 浦月・(ヒカミ) 旭山・(サ、山) 世夢・(サ、山) 閑月

(ツチタ) 臥雲・(ホヅ) 龍眼・其玉・光月・柳枝・梅處・梅溪・

草楽・一蘿・湧瀧 22 2 3

81 歳旦 四裁 文海 霞彩 熨斗・水引図 ○ イエ ×

(ナニノ) 素屋・(近江) 其草・(近江) 青龍・其祥・桃嶺・鷺月・

清七七・愚楽・其楽・幸遊・鳥岳・文海 12 1 2

※ 「寅春」

82 春興 半裁 如檉 文麟 巫女豆撒図 ○ アイ ×

有節・梅通・素屋・芹舎・月坡・淡節・鳥呉・文海・公成・

菊圃・千聞・雪當・花因・野鳥・竹有・是誠・松堤・文石・

献水・雪之・鸞鳴・双石・易水・如檉 24 2 8

※ 「寅の春」

83 歳旦 半裁 柳花 有美 伊勢海老図 ○ アイ ×

梅通・禾明・公成・芹舎・芽英・月坡・淡節・丈翠・鼎左・  
其山・松隣・素屋・柳錦・山朝・柳裳・里扇・祭魚・文海・  
鳥岳・有節・夢跡・柳花 22 2 2

84 春興 小 竹舎 霞彩 姫人形図 ○ アイ ×

素屋・ぬか人・竹舎 3 7

※ 二十四裁

85 慶賀 小 石雄 × | | | ×

鼎左・石雄・素屋・光林・鶯宿・可兆・石雄

六吟歌仙十一 1 0

※ 栖霞庵の入門／十六裁

86 歳旦 小 稻處 画者未詳 二朱銀・紅梅図 ○ イエ ×

素屋・稻處 2 6

※ 十六裁



87 秋興 小 梧尾 画者未詳 葉上蝗図 ○ イ ×

(浪花) 松陰・梧庵・梧庵 3 6

※ 「寅の秋」／十六裁

88 春興 四裁 梅丘 圭岳 紅梅図 ○ イエ 鷗波

逸淵・公成・有節・芹舎・鼎左・素屋・多代・舍用・悠々・  
西馬・忍和・草支・紅枝・一布・樋瀧・南湖・竹翠・可俗・  
雨柳・梅丘 20 20

※ 「甲寅の春」

89 歳旦 半裁 山子 圭岳 正月玩具図 ○ アイ 鷗波

公成・淡節・野鶴・有節・可推・素屋・杜鴻・太乙・可大・  
醒花・茶雷・思風・嵐夕・菊圃女・双鳥・(七十九)悠々・砺山・  
五鈴・黄山・一清・玄花・李曠・蓬宇・杜水・立宇・布丈・  
ゆきを・あや雄・富日・晝年・交水・忝丘・義香・友甫・閑席・  
竹雨・(七十九)多代女・清民・梅月・舍用・□□・月光・御風・  
□□・□□・孤舟・怨兮・大夢・丹嶺・布珀・天由・五渡・  
溪斎・由誓・逸淵・西馬・祖郷・等栽・尋香・見外・卓郎・  
得蕪・抱儀・未足・氷壺・魯心・古山・美交・不染・瓦村・  
波鷗・祐宇・等紫・荷少・苜丸・北松・卜早・芳湖・好甫・  
里椿・いさ吉・鳥吟・萬古・四端・瓢鯰・(七十六)遅流・閑那・  
百丈・松塘・可簫・波静・山方・栗然・花海・泰我・太年・  
青柿・陳良・新甫・少太・山節・古峰・春拳・旂幹・為山・



山子  
※ 「寅春」

90 歳旦・慶賀 半裁 有交 臥春 杓・梅花図 ○ イ 鷗波

御風・唸風・素山・唸風・素山・御風・素山・御風・唸風・  
芹舎・有節・梅通・淡節・公成・素屋・茶雷・閑那・五鈴・  
慶里・丹嶺・清民・如雲・舍用・醉雨・黄山・多代・悠々・  
(行脚)少歳・由誓・西馬・祖郷・逸淵・氷壺・尋香・未足・  
いさ吉・萬古・等栽・山子・鳥吟・見外・溪斎・為山・助松・  
鳳尾・幸英・素道・茶暎・鶴洞・有壁・仙芝・如縁・草園・  
成五・東涛・如柳・得風・里桃・汀亀・清梧・御風・唸風・  
蒼風・素山・有交 三ツ物+ 56 6 5

※ 「寅年の春」／耳順の賀

91 歳旦 半裁 梅月 素真 餅花・毬図 ○ アイ 鷗波

梅月・均外・梅笠・公成・芹舎・鼎左・素屋・松室・閑那・  
竹良・抱儀・見外・遅流・四端・祖郷・萬古・鳥吟・里椿・  
五雀・尋香・臥春・半湖・白亥・南々・竹山・梅笠・舍用・  
五雲・遜阿・江三・如雲・一止・みゑ・文人・二丘・如松・  
鼠堂・左琴・朶峰・石齋・月山・大費・守三・西美・斗翫・  
山甫・洋々・其堂・六槐・清民・多代・謝紫・均外・逸淵・  
為山・西山・寛女・梅隣・梅月 三吟半歌仙+ 56 7 5

※ 「甲寅春」

92 歳旦 半裁 以肅臥春 紅梅・天狗・多福面図 ○ アイ 正斎

梅通・公成・芹舎・鼎左・素屋・湧瀧・月庭・蓬宇・鳥谷・  
岱充・茶雷・樗風・泰山・悠々・乙良・茂精・亀成・友甫・  
多代女・清民・布山・遜阿・江三・禾月・年山・如雲・舎用・  
二丘・緑峰・朶峰・唵風・素山・御風・由誓・卓郎・逸淵・  
為山・祖郷・西馬・見外・得蕪・等栽・氷壺・未足・抱儀・  
閑那・不染・香雲・遅流・萬古・瓦村・波鷗・山子・鳥吟・  
徳隣・美交・里椿・いさ吉・苜丸・才葉・梅明・伴夢・蓬宿・  
芦月・探闇・北松・茅洲・好甫・尋香・水車・左葎・梅雅・  
月晴・蝶雅・香風・東水・以肅 77 77

※ 「甲寅春」

93 歳旦 半裁 得蕪 是真 鏡壳図 ○ アイ 竹窓

(ヲハリ) 而后・一清・(洛) 芹舎・梅通・有節・公成・(ナニハ)  
鼎左・素屋・松隣・挙一・其山・(日向) 双鳥・(エチゴ) 水溪・  
(スハ) 銀岱・(ヲク) 多代女・逸淵・丁知・東洲・汎翠・完鷗・  
知登・松舟・文生・穂節・花晨女・和行・(イハツキ) 美石・  
(カメラリ) 抱竹・(サハラ) 得亘・柳毫・竹賀・峽舎・由誓・為山・  
芦魚・□□・里春・静讓・芽山・めうか・東精・みもと・苜丸・  
晴山・可簫・壽・真角・白起・祖郷・抱儀・卓郎・(上サ) 金波・

窓丸・一輅・楚雲・月思・(所ザハ) 一ふみ・(上アライ) 春月・  
草仙・鳩峰・素良・(カツサ) 由儀・宗玉・未足・南枝・西馬・  
梧井・拙真・瓦村・五休・麗水・亀遊・芝友・千之・樹石・  
樂之・有風・盤雨・月夕・峻路・菊丸・梅年・主拙・琴舟・  
七菟来・樂斎・留木・多美古・得蕪 89 89

※ 「甲寅の春」

94 歳旦 半裁 有交 餘斎 鮭・莖図 ○ アイ ×

芹舎・有節・黄山・素屋・大夢・等栽・見外・祖郷・西馬・  
為山・葵旋・龜山・柰笛・桃曉・岩苔・一蟻・御月・雨柳・  
有月・琴月・安之・歛来・幸英・其鷹・仙風・草園・正桃・  
其邑・茶暁・下間・季芳・一恵・梅旭・松汀・其暁・如仙・  
汀龜・仙兒・羽人・格雫・月江・雪友・素山・唵風・御風・  
葵風・有交 47 47

※ 「とらの春」

95 夏興 半裁 桐山 圭岳 盆栽図 ○ アイ 明末

芹舎・梅通・有節・淡節・公成・太乙・鼎左・素屋・松隣・  
黄山・鳥津・雀叟・蓬宇・立宇・茶雷・泰山・駝岳・悠々・  
霞雪・忝丘・花外・五渡・溪斎・乙良・茶村・茶山・大夢・  
茂精・関市・潤布・米室・多代女・清民・大費・布山・遜阿・

禾月・如雲・舍用・一止・璪山・二丘・朶峰・唵風・御風・  
 由誓・逸瀝・西馬・閑那・萬古・不染・香雲・瓦村・波鷗・  
 芑丸・遲流・山子・卜平・卓郎・得蕪・見外・未足・抱儀・  
 美交・鳥吟・北松・月杵・芳洲・好甫・以甫・冰壺・等栽・  
 祖郷・為山・尋香・いさえ・露菜・為春・伴夢・桐鳴 80 8 7

※ 「甲寅初夏」

96 夏興 半裁 草尺 黛山 団扇・行燈図 ○ アイ ×

(京) 有節・梅通・淡節・芹舎・(大坂) 鼎左・松隣・松室・素屋・  
 (ヲハリ) 黄山・李曠・(エド) 逸瀝・為山・祖郷・冰壺・見外・  
 萬古・鳥吟・月杵・いさ吉・遲流・西馬・(ムサシ) 溪齋・(デハ)  
 御風・唵風・(ヲク) 舍用・如雲・一止・(カミ) 柳壺・(イセ) 五  
 鈴・(上毛) 半湖・(エチゴ) 乙良・(ヒゼン) 悠々・(アハヂ) 其秀・  
 鷗池・(イヨ) 菊圃女・(トサ) 元史・梅十・習竹・古鳳・(アハ)  
 葉陽・北誕・夢堂・文笠・楚宮・木鳥・箏詠・月古・平蕪・  
 龜年・騏卿・大夢・思村・石居・蘿丈・順美・梅道・蘿谷・  
 たゝ女・濤邨・有隣・山賀津・逸松・青枝女・宇雀・權雨・  
 東阡・羅邨・(樗風改) 思遠・天馬・夷岳・茶雷・雨蓼・草尺

※ 「甲寅夏」

72 7 2

有節・蒼仙・公眠・素屋・石叟・松隣・蟻兄・其秀・墨雨・  
 塘雨・松丈・蘿彦・越二・史白・一史・野馬・てる雄・楓笠・  
 柳池・壙季・季邨・九江・思風・楚宮・紫山・羅邨・左一・  
 木鳥・龜年・夷岳・東阡・葉陽・茶雷・大夢 34 3 6

※ 「甲寅の秋」 / 「江眠」の「江」を朱筆で「公」と改める

98 秋興 四裁 梅處 来章 虫籠蟋蟀図 ○ アイ ×

(京) 梅通・(京) 芹舎・(京) 淡節・(京) 有節・(ナニハ) 素屋・  
 (ナニハ) 松隣・(ナニハ) 為山・(オハリ) 而后・(ヲシミ) 岳鳳・  
 (サガ) 文翠・月撫・湧瀧・梅處 13 1 4

99 夏興 四裁 為栖 微槻 藤花図 ○ アイ ×

閑那・鼎左・此方・素屋・快々・逸中・雨遊・泉蛙・梅茶・  
 水齋・鼠仙・為栖 12 1 2

※ 「寅の初夏」

100 秋興 四裁 鶯宿 了齋 蜻蛉図 ○ ウ ×

而后・梅通・鼎左・素屋・杜鴻・笠洲・桃翠・菊溪・舟左・  
 楓良・梅蒼・鶯宿 12 1 6

※ 「甲寅中秋」

97 秋興 半裁 大夢 南涯 薄図 ○ アイウエ ×

▼嘉永六年

101 秋興 四裁 鶯宿 秋亭 秋虫図 ○ アイエ ×

(西肥) 舟左・(ナダ) 南景・松涛・几章・霞松・豊水・石叟・  
杜鴻・梅圃・米老・素屋・鶯宿 12 1 8

※ 「癸丑秋」

▼安政元年

102 慶賀 半裁 龜成 圭岳 菊酒図 ○ イ 鷗波

公歳・有節・梅通・鼎左・素屋・禾月・多代女・遊阿・舍用・  
御風・茶山・清民・愛山・壯山・而后・葛古・由誓・逸渕・  
西馬・祖郷・為山・卓郎・抱儀・得蕪・等栽・氷壺・こむら・  
見外・萬古・則外・尋香・茶瓢・北松・山子・鳥吟・羽人・  
臥春・以肅・友甫・好甫・茗月・東雲・□□□□□□□□□□  
□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□  
梅旭・一杉・米雁・遊舟・三橋・梅霞・八百里・半草・竹堂・  
可楽・酒泉・志英・寛菴・青隣・一英・夢覚・尹草・夢中・  
房丸・梅枝・柳波・栄寿・福龜・光哉・遊里・風月・心月・  
生徳・春道・一心・竹醉・星磨・梅風・沢聲・うつら女・寿海・  
松山・桃子・つる女・山祐・松夫・南甫・菊丸・龜成 98 1 0 1

※ 「寅きく月」／菊丸古稀祝

103 追善 半裁 由誓 臥春 一具追善床間図 ○ アイ ×

(京) 有節・公成・梅通・芹舎・烏谷・(雲水) 玄子・波同・荷了・  
桐古・可大・(ナニハ) 素屋・松隣・鼎左・(ヒゼン) 悠々・(ヒウガ)  
駝岳・(□□) □□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□  
(ミカハ) 蓬宇・(スルガ) 岱充・碧山・(サガミ) 立宇・(ムサシ)  
護民・花外・溪斎・(デハ) 朶峰・水竹・鳳兮・朝可・一草・  
璫山・御風・(ムツ) 芦帆・梅月・壯山・布山・風聲・禾山・  
如雲・(マツ前) 和好・逸渕・松亘・雲崖・瓦村・卓郎・未足・  
抱儀・香芸・不染・遅流・見外・いさ吉・江戸住・探布・蓬交・  
梅岐・由誓 59 6 1

104 追善 半裁 臥春 圭岳 一具墓碑図 ○ ウエ 以肅

(イセ) 雀叟・(在ビンゴ) 素山・(シナノ) 龍湖・松郭・(上サ) 霞雪・  
(ヒタチ) 友甫・鶴巢・(エチゴ) ちから・大栗・五具・乙良・(カヅ)  
大夢・(デハ) 二丘・閑淋・緑拳・(ムツ) 多代女・清民・静夫・  
愛山・分字・大費・西美・遊阿・江三・(雲水) 良湖・(ムツ)  
樗影・禾月・(ムサシ) 五渡・龜成・為山・節之・在爾・祖郷・  
みつる・探誓・ト早・春召・吳溪・晋水・居山・梅明・以肅・  
好甫・桃支・山子・□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□  
美交・徳隣・氷壺・得蕪・芦月・尋香・夷則・北松・太眠・

臥春

61 6 2

桐齋・梅下・素屋

3 7

※ 「甲寅仲冬」／一具追善

※ 「卯のはる」／十六裁

105 冬興 半裁 騏卿 南涯 大根売馬曳図 ○ アイ ×

107 歳旦 小 素屋 画者不明 兔図 单(朱) アイウエ ×

(京) 有節・梅通・淡節・公成・文翠・月坡・霞川・硯水・黙池・

素屋・素屋 2 9

芹舎・(大坂) 鼎左・松隣・公眠・松室・素屋・(イセ) 五鈴・

※ 十六裁

(ヲハリ) 而后・一清・李曠・逸淵・西馬・祖郷・萬古・鳥吟・

※ 十六裁

梅笠・尋香・五休・肅當・見外・為山・(ムサシ) 溪斎・天由・

108 歳旦 小 素屋 × | | | ×

(上毛) 米室・関市・(ムツ) 多代女・如雲・清民・舍用・(テハ)

梅邑・梅邑・素屋 3 9

御風・唸風・(シナノ) 葛古・(エチゴ) 乙良・茶山・(カド) 大夢・

※ 「卯のはる」／二十四裁

柳壺・(イハミ) 青池・(ヒウガ) 駝岳・(ヒゼン) 悠々・(イヨ)

※ 十六裁

菊圃女・棹舟・(トサ) 習竹・古鳳・(アハヂ) 其秀・希鯨・(アハ)

109 春興 小 梅邑 竹溪 台上蛤・羽箒図 ○ イエ ×

葉陽・左一・松年・楚宮・夷岳・石居・龜年・月古・東阡・雨

素屋・梅邑 2 6

蓼・草尺・梅道・思村・有隣・青枝女・大夢・羅邨・たゝ女・

※ 十六裁

逸松・蘿丈・宇雀・完湖・蘿谷・順美・平蕪・北誕・筭路・

※ 十六裁

思遠・天馬・木鳥・茶雷・崎邨・騏卿 87 8 7

※ 十六裁

※ 「甲寅冬」

▼安政二年

110 春興 小 松画 夢斎 青楓図 ○ イエ ×

素屋・松画・松画 3 9

106 歳旦 小 素屋 霞彩 姫人形図 ○ イ ×

※ 十六裁

111 歳旦 四裁 如榿 東挙 白梅・烏帽子図 ○ イ ×

梅通・有節・月坡・淡節・烏谷・文海・素屋・鼎左・蘭圃・  
雪當・竹有・花因・野鳥・雪之・易水・如榿 16 1 8

※ 「卯の春」

112 春興 四裁 秋卿 文麟 蜩・独活図 ○ アイエ ×

梅通・素屋・白化・其石・鬼外・二麦・破水・篁居・卜水・  
秋卿 10 1 0

※ 「卯春」

113 歳旦 四裁 素屋 東山 恵方棚図 ○ アエ ×

芦汀・眉山・可兆・五韻・知風・月人・不角・眉年・黙池・  
月坡・素屋 11 1 1

※ 「卯の春」

114 歳旦 四裁 素屋 東山 恵方棚図 ○ アエ ×

鼎左・鶯宿・松隣・子友・一三・竹舎・杜鴻・梅邑・稻處・  
素屋 10 2 0

※ 「卯の春」

115 春興 四裁 石雄 奇山 子守女・仔狗図 ○ イエ ×

閑那・有節・鼎左・松隣・為山・杜鴻・此方・此恠・鼎跡・  
素屋・石雄 11 1 2

※ 「卯のはる」

116 歳旦 四裁 一三 東山 梅花・兔図 ○ アイ ×

鼎左・鶯宿・松隣・素屋・素屋・一三・一三 7 7

※ 「乙卯春」

117 歳旦 四裁 鼎左 秋亭 遠射図 ○ アイ ×

為山・崑長・梅栄・蘭月・松彦・草居・月人・艸洲・(京海)  
曲阜・(赤穂) 鼎跡・(赤穂) 百尺・(津山) 遊楽・(影山) 花嘯・  
素屋・鼎左 15 1 5

118 歳旦 四裁 眉山 秋亭 玉兔榊仙薬図 ○ アイエ ×

松蔭・一水庵・哥聲・兔園・弥専女・唇風・梅一・欽山・眉紫・  
眉翠・草弘・眉山 12 1 2

※ 「安政卯」

119 歳旦 四裁 鶯宿 此花小隠 萬歳図 ○ アイウエ ×

貞恒・楓年・公祐・杜鴻・舟左・笠洲・春工・乙祇・素屋・鶯室・梅雅・鶯宿 12 1 7

※ 「卯の春」

120 歳旦 四裁 都春 都春 梅・花模様図 単(緑)イ ×

素屋・黙池・蘿蔭・重方・元右・扇風・柳柯・周南・青山・表卯・笑化・藍香・青甫・木奴・呉山・春之・春樹・かの・都春 19 3 1

※ 「卯春」／朱囲み枠

121 歳旦 四裁 碩大 × | | | ×

素屋・杜鴻・不角・知風・眉年・黙池・月撫・梅通・(石苔更) 碩大 9 9

※ 「卯春」／金箔散らし裏白空押料紙

122 歳旦 四裁 不角 子好 釣魚紙図 ○ アイエ ×

鼎左・鶯宿・素屋・荷村・杜鴻・舟左・五韻・梅芽・乃瓜・浦雪・扇風・竹堂・瓜月・梅賀・青良・其隠・(東)花月・蝶雲・賀柳・笠洲・不角 21 2 8

123 歳旦 四裁 月人 保大 萬歳図 ○ ウエ ×

眉山・月人・鼎左・素屋・鶯宿・挙一・月人 7 1 2

※ 「乙卯春」／眉山五十賀を兼ねる

124 その他 四裁 月人 × | | | ×

鼎左・月人・素屋・挙一・公眠・可兆・鶯宿・松隣・月人・月人 10 1 4

※ 「乙卯春日」／脇宗匠祝／竹梅花松葉繁文様枠

125 歳旦 小 梅處 × | | | ×

(ナニハ)林曹・(ナニハ)素屋・(ナニハ)杜鴻・(ナニハ)鼎左・(京)淡節・(サガ)丈翠・湧瀧・梅溪・耕雲・風外・梅處・梅處 12 1 2

※ 六裁／朱囲み枠

126 歳旦 小 松隣 × | | | ×

松隣・素屋・松隣・素屋 4 6

※ 「卯の春」／六裁／布目地料紙

127 歳旦 小 閑那 東山 辛夷・蜂凶 ○ アイ ×

為山・素屋・閑那 3 6

※ 「乙卯春」／六裁

128 春興 四裁 鼎左 秋亭 桜花凶 ○ イエ ×

杜鴻・了然・蘭月・可蕉・素堂・梅圃・(秋田) 国彦・(江戸) 可簫・(池田) 可春・(姫路) 淡香・(荒間津) 桃古・(福山) 狐齡・素屋・此松・鼎左 15 1 5

129 春興 四裁 月人 画者未詳 松葉凶 ○ イエ ×

得蕪・有節・鶯宿・白鷗・素屋・可兆・公眠・拳一・鼎左・月人 10 2 0



130 歳旦 半裁 笑花 香園 扇・凧凶 ○ アイ ×

鼎左・素屋・公眠・貞巴・瓢六・岳鳳・祭魚・翠翁・杜泉・米朝・梅洞・梅翁・巴童・船月・春人・太富・三朝・成美・其順・春翠・呂調・巴水・梅隣・都山・玉翠・湖暁・石雌・秋人・笑花 29 3 7

※ 「安政卯のはる」

131 その他 四裁 尙笠 如集 桜樹花凶 ○ アイウ 竹窓

閑那・素屋・鼎左・杜鴻・梅通・淡節・有節・公成・芹舎・砺山・而后・醉雨・李曠・一清・蓬宇・由誓・完鷗・氷壺・抱儀・由也・聞蕉・叩月・宗羽・草仙・小艸・五休・菟年・泰我・山子・為山・未精・来遊・学斎・桂子・艸意・美交・三幹・徳隣・尙笠 39 一部二段 3 2

※ 「安政乙卯春」／金色囲み枠

132 歳旦 四裁 由儀 如集 松ヶ枝・靈芝凶 ○ アイエ 竹窓

拙侏・味舎・松鶴・畝月・柏翠・五英・守黒・芦窓・亀遊・五休・羽雪・不染・千之・留木・由誓・丁知・西馬・為山・芹舎・有節・素屋・鼎左・醉車・得蕪・由儀 25 2 5

※ 「卯の春」

133 歳旦 三裁 魯心 × | | | 竹窓

(京) 梅通・淡節・公成・(大坂) 素屋・松隣・(近江) 砺山・(ヒゼン) 悠々・(キイ) 閑那・(カヅ) 大夢・(エチゴ) 乙良・(デハ) 御風・吟風・(奥) 多代女・(スルガ) 漣山・(サガミ) 立宇・(下毛) 菟年・錦袋・十條・(ムサシ) 溪斎・竹扉・来序・魯丈・麦露・遅流・由誓・逸瀨・為山・西馬・抱儀・祖郷・得蕪・氷壺・

菊雄・鳥吟・みもと・可簫・山子・泰我・之啓・月杵・平路・  
桃月・盛洲・三正・物外・萬古・吞龜・東哉・甘雨・柳雨・  
窓雨・非栗・百旨・泉舎・字普・靖路・十鷺・袖丸・帛丸女・  
松花女・白鶴女・梅月女・龍子女・雀雪女・巫瓢女・千瓢女・  
照月女・梧帛・簑甲・糸川・有静・巴雪・宣秀・听抱・宜稻・  
生宜・漣拳・一花・錦長女・柳枝・紫一女・□賂・翠賂女・  
三柳女・一菴女・長宜・芝丈・圭珂・三夕・琴友女・柳糸女・  
白枝・柳止・遊雀女・あやめ・椿子・哥待和・梨黒・楫石・  
(水ツ) 里水・花明・燕子・柳巷・慶寿・竹宇・其川・顧曉・  
鯉水・里産・松露・素道・砂光・鶴歩・紫一・千代延・鳳来・  
貞鱗・里水・五株・萬久・欣志・竹夫・竹子・山秋・芦水・  
三光・檜路・利秋・山侘・山松・乙水・千竹女・奇山・旦々・  
芳艸・松登・孤堂・其則・魯心

139 139

※ 「乙卯春」／蝶柄料紙

134 歳旦 三裁 山子 圭岳 羽根図 ○ アイ 鷗波

公成・梅通・淡節・松隣・素屋・閑那・忝丘・茶雷・秦山・  
双鳥・(八十翁) 悠々・五鈴・而后・完伍・杜水・布丈・あや雄・  
菴年・和南・其翼・よし香・五渡・淇斎・乙良・□□・□□・  
怒兮・大夢・柳壺・緑峰・唼風・御風・南江・米花・舎用・  
如雲・禾月・樗影・風聲・梅月・清民・(八十才) 多代女・由誓・  
瓦村・波鷗・祖郷・尋香・卜早・氷壺・龜得・秋之・等裁・

菅丸・北松・魯心・漣々・月杵・西馬・宗羽・完鷗・得蕪・  
未精・美交・拙義・瓢鮎・(七十七翁) 遅流・萬古・鳥吟・きく雄・  
山方・青柿・松堂・淇青・雪年・可簫・栗熊・泰我・冬守・  
良湖・之啓・みもと・為山・山子

83 84

※ 「乙卯春」

135 歳旦 半裁 樗影 素雪 雉子・遠山来迎図 ○ イウ ×

(洛) 有節・梅通・公成・淡節・芹舎・(ナニハ) 林曹・素屋・  
鼎左・白鷗・(エド) 為山・祖郷・西馬・尋香・萬古・鳥吟・  
遅流・山子・山方・月杵・年木・八巢・(雲水) 均外・良湖・  
(アハ) 茶雷・(イセ) 五鈴・蕙雨・(ヲハリ) 而后・(ミカハ) 蓬宇・  
(下フサ) 菴年・(デハ) 御風・(エチゴ) 乙良・茶山・(カミ) 大夢・  
丹嶺・多代女・遜阿・江三・梅成・舎用・心阿・宗古・一止・  
杉芽・如雲・五雲・道子・三恵女・白水・素丈・玉哉・里松・  
一雄・知定・其山・柏葉・文居・布三・禾山・禾月・樗影

九六

※ 「卯のとし」

60 81

136 その他 半裁 松雲 素真 旅囊・筆・蒲公英図 ○ アイ 鷗波

西馬・松雲・逸瀨・ミキ雄・少哉・均外・(京) 公成・淡節・  
(大坂) 鼎左・素屋・(ヒウガ) 双鳥・(イヨ) 鶯居・(トサ) 嵐夕・

(アハ) 茶雷・(ヲハリ) 醉雨・(ミカハ) 蓬宇・(エチゴ) 茶山・  
(上毛) 心足・一朗・米室・(ムサシ) 寄三・天由・由誓・抱儀・  
見外・祖郷・萬古・為山・一夢・□□・五雀・呂兆・桃路・  
木鷲・汲古・鳥吟・慶專・鳳葉・月杵・梅笠・音好・洒雄・  
白亥・ミキ雄・均外・(ムツ) 舍用・一止・如雲・樗影・三惠女・  
大素・于喬・万女・梅月・清民・多代女・御風・桂風・桂儼・  
鶴樹・峰丸・朶峰・璫山・二丘・水竹・綠峯・鼠堂・梅芽・  
旭岑・其勇・如圓・春風・川澄・梅園・稻州・西馬・松雲

※ 「安政乙卯春」／澗水庵改名披露

77 83

137

歳旦 半裁 如雲 素真 梅花・文車図 ○ アイエ 鷗波  
芹舎・公成・文海・鼎左・素屋・悠々・双鳥・茶雷・婦牛・  
元史・完伍・蓬宇・茶山・乙良・心足・米室・心星・筧言・  
未洋・寄三・朗月・天由・為山・遅流・氷壺・見外・萬古・  
鳥吟・きく雄・祖郷・等栽・一夢・四端・晚成・呂兆・巴雪・  
月杵・五雀・星林・少哉・白亥・洒雄・ミキ雄・均外・逸淵・  
御風・唸風・遊阿・太素・梅月・多代女・禾月・東各・五雲・  
吳春・豊李・南成・三無・好々・蔦山・由己・醉夢・みゑ女・  
雨竹・西馬・舍用・如雲

67 67

※ 「卯ノ春」

138

歳旦 半裁 以肅 臥春 独活・木彫鳥型玩具図 ○ アイ×  
梅通・淡節・芹舎・鼎左・素屋・林曹・李曠・五鈴・蓬宇・  
閑那・茶雷・龜年・泰山・悠々・乙良・西疇・市猿・大夢・  
松郭・茂精・潤布・桐鳴・景三・友甫・鶴巢・多代女・登山・  
壯山・清民・布山・精器・兮字・遊阿・禾月・樗影・禾山・  
如雲・璫山・新甫・二丘・水竹・綠峰・朶峯・唸風・御風・  
龜成・完鷗・由誓・逸淵・為山・西馬・抱儀・見外・得蕪・  
好甫・芳洲・香告・不染・瓦村・拙誠・山子・月杵・美交・  
伴夢・露節・梅明・芦月・太珉・北松・鳥吟・遅流・萬古・  
等栽・祖郷・尋香・香風・左葎・水車・蝶雅・月晴・東水・  
梅雅・以肅

83 83

※ 「安政乙卯新正」

139

春興 半裁 一瓢 虫儼 茶釜図 ○ イ 竹窓  
(京) 有節・(三河) 完伍・(陸奥) 多代女・(能登) 花溪・(加賀)  
柳壺・(加賀) 一立・(出羽) 御風・(出羽) 唸風・(阿波) 茶雷・  
(灘) 一徳・(雲水) 孤南・(相模) 旭松・(武蔵) 勇賀・(武蔵) 五渡・  
(武蔵) 保内・(上サ) 一澄・(安房) 静里・(□) □□・(浪花) 素屋・  
鼎左・由誓・祖郷・卓郎・西馬・萬古・等栽・氷壺・不染・  
吳由・月杵・花朝女・楽鷲・一笑・雛守女・いろと・舜雅・  
ひさ守・一嘯・市心・鳥吟・抱儀・得蕪・為山・逸淵・見外・  
一瓢

46 47

※ 「安政乙卯初春」

140 歳旦 半裁 吏川 素真 兎書初凶 ○ イエ 鷗波

逸淵・由誓・為山・抱儀・祖郷・尋香・氷壺・(京)梅通・公成・  
有節・淡節・芹舎・(大坂)素屋・鼎左・松室・(ヒゼン)悠々・  
(イヨ)鶯居・(ヲハリ)而后・(ミカハ)蓬宇・(デハ)御風・(オク)  
多代・(オク)舍用・乙良・鷺眠・杉吏・阿水・茶山・文路・  
浅苞・竹坡・如息・梧青・一夢・柴山・貫雪・三甫・梅雄・井  
蛙・榴由・龜遊・泊鷗・好静・雪潮・帰一・□流・荳村・素明・  
之白・蘿斎・幡雄・松穹・梅村・眠斎・素恭・ちから・文節・  
春洲・花泉・此峯・尚樹・西馬・秋岳・吏川 63 69

※ 「乙卯春」

141 春興 半裁 其岳 鵬居 干魚 黒豆凶 ○ イウエ ×

芹舎・梅通・淡節・禾明・公成・霞川・有節・素屋・松隣・  
不角・松空・鼎左・曲阜・米女・閑那・砺山・月拳・しつを・  
養瓜・希康・守谷・万像・茶雷・涼呼・布國・悠々・雀叟・  
五鈴・雅琴・都岐雄・三岳・寒馬・蓬宇・嵐丈・碧山・漣山・  
丹嶺・大夢・悠平・茶山・乙良・為山・見外・魯心・丁知・  
等栽・山子・太年・尋香・西馬・潮月・茶曉・多代女・清民・  
春斎・舍用・英泉・如雲・遜阿・一止・清風・吟風・素山・  
而后・烏津・欣尚・一清・錦水・古通・五峯・芝舩・茶城・

桃水・竹圃・青鏡・象行・缺女・吾聲・系解女・醉雨・李曠・  
其岳 82 90

142 歳旦 半裁 芝舩 × | | | ×

有節・梅通・淡節・霞川・芹舎・鼎左・松隣・不角・素屋・  
白鷗・砺山・米友・希康・半谷・万像・茶雷・悠々・双鳥・  
雀叟・五雀・雅琴・蓬宇・完伍・嵐牛・丹嶺・悠平・茶山・  
乙良・為山・西馬・丁知・尋香・等栽・太年・山子・見外・  
由誓・潮月・多代女・春斎・清民・舍用・一止・如雲・英泉・  
清風・吟風・素山・而后・李曠・欣尚・梅裡・鵬屋・一清・  
免尺・何来・錦水・五峯・春松・玄知・其岳・龍水・醉雨・  
烏津・芝舩 65 66

※ 「乙卯春」／金箔散らし蝶柄空押料紙

143 歳旦 半裁 白鷗 画者未詳 白梅枝凶 ○ アイウエ ×

林曹・鼎左・素屋・肖年・閑遊・爐翠・淡水・仙夢・松彦・  
春芳・(イセ)雪当・如檉・**白鷗・梅笠** 14 十両吟歌仙 36



144 慶賀 半裁 龜年 黛山 橋上飛鶴群凶 ○ アイウエ ×

茶雷・(七十二翁)木鳥・夷岳・楚宮・石化・たゞ女・龜年・  
青枝女・芹舎・梅通・淡節・碩水・有節・鼎左・素屋・(八十翁)  
悠々・逸瀨・為山・月杵・平蕪・尋香・西馬・茶雷・龜年

※ 「安政二乙年晩春」／青枝女還曆祝賀

24 5 6

145 歲旦 半裁 泰山 平山 歌留多遊図 ○ アイ 林亭

梅通・芹舎・菫川・悠々・蒼雨・如玉・青池・松阜・素屋・  
林曹・瓢六・鼎左・舍用・禾月・□□・江三・分字・清民・  
多代女・遜阿・由誓・得蕪・祖郷・北松・白亥・瓦村・山子・  
臥春・蓬交・苜月・桐鳴・友甫・関市・龜成・護民・いさ吉・  
探闌・以肅・さく雄・萬古・春拳・尋香・等栽・西馬・為山・  
卜隣・扶桑・如水・猿々・雨川・芾棠・石翁・觀月・志斗・  
風外・露萩・自樂・泰山

58 5 8

※ 「乙卯春」

146 追善 半裁 禾月 素雪 春雨 散山桜図 ○ アイ ×

如雲居士・如雲居士・(京)有節・公成・梅通・(大坂)鼎左・  
松隣・素屋・(ヲハリ)而后・醉雨・(ムサシ)潮月・天由・(江戸)  
□□・為山・等栽・尋香・抱儀・逸瀨・由誓・祖郷・北松・  
臥春・(スカ川)多代女・清民・遜阿・也明・梅月・石阿・宗古・  
一止・東谷・雨竹・南成・吳春・豊李・五雲・文人・巾二・

彫蟲・吳綾・いつみ・甫山・城思・三無・好々・葛山・由巳・  
樗影・白水・禾山・萃葉・舍用・禾月

53 5 9

※ 「乙卯のはる」／如雲追善

▼安政三年

147 夏興 半裁 吳由其融 筍皮・蛙・桜実図 ○ アイ 葦仙

(京)黙池・梅通・淡節・公成・有節・(ナニハ)鼎左・素屋・  
(日向)双鳥・(備后)梅臣・(阿波)茶雷・(尾張)而后・醉雨・  
(イセ)都茂雄・(ミカハ)完伍・(遠江)杜水・(カヅ)柳壺・(カヅ)  
如流・(カヅ)鳩菫・(越后)乙良・鷺眠・(出羽)御風・唸風・  
撫泉・一止・□□・□□・(上サ)一澄・(安房)木二・(相模)  
旭松・(駿河)月栖・(上毛)玉英・嗽石・(下毛)巍映・(在上毛)  
真山・(ハコダテ)徐蓬・花朝女・蓼々・露丸・逸瀨・得蕪・為山・  
氷壺・西馬・祖郷・等栽・抱儀・卓郎・不染・完鷗・草宇・  
鳥吟・龜□・黃水・萬古・卜早・かつら・草笠・千代守・米山・  
思樂・一秀・即堂・菅丸・一瓢・如泉・芦城・竹叟・(在京)  
芦十・見外・吳由

70 7 0

※ 「丙辰の卯月」

▼安政二年

夏興 半裁 斗玉 × | | | 竹窓

由誓・卓郎・祖郷・魯心・不染・拙誠・きく雄・米山・月杵・孤南・五休・泰我・みもと・鳥吟・得蕪・西馬・為山・梅通・多代女・鼎左・逸裁・羅齋・茶山・大夢・素屋・有節・逸淵・等裁・見外・尋香・可簫・音好・芳所・茶□・艸儼・平路・宗羽・物外・波鷗・素行・冰壺・抱儀・曉湖・龍昇・和夕・古松・東和・嵐湖・七興・鶴洲・椿山・輕歲・梅丘・樵齋・陽齋・舜究・栞齋・孤玉・巨得・巨郎・萬古・斗玉 63 63

※ 「乙卯」／金囲み黄青白拔夏摺料紙

秋興 半裁 精器 三拙 朝顔活花図 ○ アイ 昴□路 (弘肅)

布□・立字・嵐牛・杜水・蓬宇・完伍・波文・而后・一清・醉雨・鳥律・李曠・雀叟・蘆雨・砺山・梅通・淡節・公成・有節・芹舎・鼎左・林曹・松隣・素屋・白鷗・松室・□□・桐鳴・分望・京三・乙良・西疇・半橘・清水・夕照・花儀・市猿・鷺眠・巴陵・清民・禾山・多代女・由誓・逸淵・卓郎・為山・鳥吟・月杵・泰我・杜誠・龍守・兼賀・山子・等裁・抱儀・完鷗・伴夢・得蕪・露節・以肅・梅雅・瓦村・冰壺・見外・西馬・萬古・遲流・尋香・祖郷・可庭・芝風・東海・峯女・梅苗・松露・嵐和・知芳・香谷・至年・古推・大潮・龍湖・寄竹・蘭免・可交・至伸・誰花・羅洲・素琴女・花真・直二・雲城・帰童・梅二・精器 95 96

※ 「乙卯初秋」

秋興 半裁 風聲 圭岳 秋海棠図 ○ アイ 尚友

悠々・双鳥・菊圃・公成・有節・柳壺・御風・而后・梅通・淡節・鼎左・素屋・林曹・茶雷・閑那・溪齋・抱儀・完鷗・萬古・鳥吟・自杵・等裁・尋香・遲流・祖郷・西馬・得蕪・山子・泰我・三幹・乙良・多代・舍用・禾自・杉芽・一止・宗古・交人・市曉・藤止・究溪・桑蝶・志方・梅仙・(雲水) 雨江・隱邨・松梅・一仙・青木・只好・翠遊・北久・波静・野案・吳綾・千賀女・其山・浦遊・一雄・我笑・曾丈・如扇・春林・和秀・甫山・彫蟲・五雲・為山・風聲 69 71

※ 「安政卯のとし」

夏興 三裁 有交 素真 团扇 合歡図 ○ アイ 鷗波

梅通・多代・清民・醉雨・一清・湧灌・茶山・桃郷・心足・以肅・魯心・尋香・冰壺・祖郷・逸淵・由誓・芹舎・□□・□□・□□・(公成)・淡節・柳所・鳥吟・見外・有節・素屋・舍用・如雲・大夢・柳壺・五鈴・菊雄・月杵・萬古・西馬・瓦村・完鷗・文海・慶里・山子・抱儀・為山・(行脚) 香文・里桃・如柳・素道・得風・葵風・一蟻・頭美・鶴友・松豊・素山・國彦・撫泉・雲岱・梅南・月想・唸風・御風・有交 62 65

※ 「卯の夏」

152 春興 半裁 茶雷 南涯 春漁図 ○ アイ ×

(京) 有節・芹舎・公成・淡節・霞川・也然・碩水・梅通・(大坂) 鼎左・松隣・素屋・(ヲハリ) 李曠・醉雨・(ミカハ) 蓬宇・(江戸) 逸淵・為山・祖郷・尋香・萬古・月杵・鳥吟・西馬・(ムサシ) 溪斎・(上毛) 半湖・(デハ) 御風・吟風・(ムツ) 多代女・如雲・舍用・(エチゴ) 乙良・(ヒウガ) 駝岳・(ヒゼン) 悠々・(アハ) 楚宮・夷岳・思遠・平蕪・龜年・石居・順美・東阡・青枝女・雨蓼・梧井・左郊・椎居・完湖・天馬・笋路・梅道・逸松・たゝ女・鯉勢・三徑・田花・野風・崎邨・有隣・蘿谷・宇雀・思村・松霞・應可・蘿丈・草尺・羅邨・月古・大夢・騏郷・茶雷・木鳥・北延 71 7 1

※ 「乙卯春」

153 秋興 半裁 茶雷 南涯 群雀図 ○ アウ ×

(京) 有節・梅通・黙池・淡節・公成・鳥谷・向月・文翠・霞川・碩水・月坡・芹舎・(ナニハ) 鼎左・松隣・公眠・月人・蓼々・松室・挙一・素屋・(イカ) 養爪・(イセ) 雀叟・五雀・(ヲハリ) 而后・李曠・醉雨・一清・梅裡・(ミカハ) 蓬宇・完伍・(トウツウミ) 杜水・(サガミ) 布丈・(エド) 逸淵・西馬・抱儀・祖郷・遅流・月杵・ミキ雄・菊雄・山子・萬古・音好・みもと・

鳥吟・貫乎・四端・等栽・五休・竹烟・尋香・見外・為山・

(ムサシ) 溪斎・天由・寄三・(上毛) 心足・分尾・米室・葉堂・半湖・(ヒタチ) 李郷女・(デハ) 御風・素山・唸風・河曉・撫泉・

(ムツ) 多代女・清民・一止・愛山・文起・舍用・(エチゴ) 乙良・茶山・(デハ) 璫山・(イハミ) 青池・(カヅ) 柳壺・大夢・(ヒゼン) 悠々・駝岳・双鳥・(アキ) 甘古・(ハリマ) 鼎跡・(イヨ) 菊圃女・默翁・(アハチ) 其秀・鷗池・(アハ) 葉陽・夷岳・大夢・龜年・騏郷・月古・羅邨・東阡・平蕪・蘿丈・思風・木鳥・楚宮・茶雷・思遠 103 1 0 3

※ 「乙卯秋」

154 夏興 半裁 花戒 清暉 滝図 ○ アイ ×

(エド) 為山・(ヲハリ) 而后・(アハヅ) 砺山・(ナニハ) 素屋・(京) 梅通・芹舎・鳥谷・禾明・蘿隱・玉碗・野雀・淡節・(今治) 春窓・半窓・橘甫・雅楽輔・蕪澄・坡堂・(銅山) 雲室・竹屏・梅操・杏雲・持香・松蘿・雲洞・糸遊・露横・笑好・昇雲・文郷・(西条) 旭堂・莞尔・青稿・雲岱・石圃・瓶岱・其松・芦渕・一江・克堂・現夏・巨松・器水・梅好・鳥丈・児笑・景笠・一笠・立竝・花戒 50 5 0

※ 「卯の夏」

155 春興 小 葎左 × | | | ×

此角・翠山・此松・素屋・杜鴻・思樂・此方・葎左 8 8

※ 「癸丑の春」／十二裁／緑紫二重囲み枠

156 春興 小 松齡 竹溪 春景図 ○ イエ ×

(洛) 月坡・梅巖・梅通・(大坂) 素屋・暁雨・松齡・松齡 7 9

※ 「卯春」／八裁

157 夏興 四裁 梅芽 秋亭 餅搗兔玩具図 ○ アイ ×

鶯宿・素屋・鶯室・月人・挙一・公眠・兎雪・其雪・梅圃・

秋亭・井竹女・秋唄・鼎左・梅芽・梅芽 15 1 8

158 歳旦 半裁 茶山 画者不明 卷子図 ○ アイウエ 龍溪山人

梅通・鼎左・素屋・多代女・みちよ・雪幸・梅子・右水・為山・

万古・西馬・乙良・鷺眠・晴楓・清水・市猿・君郷・夏洞・

令東・其城・梅路・孫保・応久・北溟・鶯聲・乙洋・泰安・

八代恵・三亭・良花・芦汀・司筍・撫路・司□・醉茶・石庭・

雪機・雪恵・霧湖・雪潮・静古・梧鳳・余遊・里蝶・支山・

瓠舟・可晁・司山・四芽・雲月・虚玄・柳涯・葉園・宜静・

淡水・北嶺・柳外・一斎・逸交・岱鵬・雲浪・珠水・花月・

鶯里・花暁・竹陽・澄秋・三光・鳳梧・筍志・貫古・春香・

久雄・雲涛・茶山 74 7 4

※ 「乙卯春」／「年のかさし」と題する卷子図に文字をいれる

159 秋興 四裁 公眠 文麟 白川女図 ○ アイ ×

(越前) 布珀・五韻・十圃・和来・石夫・桃里・仙露・亀柳・

餘亭・柳枝・梧岳・素屋・鼎左・公眠 14 1 5

160 秋興 四裁 鶯宿 秋亭 栗・色鳥図 ○ アイ ×

素屋・鶯室・興々(ナダ) 南景・白鷹・桃雅・桃翠・(金益社)

哥松(全) 其雀・乙祇・米老・鶯宿 12 1 3

※ 「卯の焔」

161 秋興 四裁 左郊 南涯 芙蓉図 ○ アイエ ×

有節・梅通・淡節・芹舎・鼎左・素屋・松隣・為山・西馬・

茶雷・北延・鯉勢・田花・桃志・三径・玉臺・大耳・完湖・

左郊 19 2 0

※ 「乙卯仲秋」

162 追善 四裁 鼎左 × | | | ×

鶯宿・素屋・松隣・井資・眉山・可兆・月人・挙一・蘭操・  
鶯居・秋幄・井竹女・秋亭・文賀・里柳・我江・梅子・如光・  
文昇・林亭・風光・鼎左 22 2 8

※ 「安政二乙卯菊月」／光林居士小祥忌／天に青引梅菊金摺  
模様

163 秋興 半裁 月人 吞舟 高雄紅葉図 ○ アイ ×

芹舎・月人・霞洋・悠呼・耕夫・素月・柴月・道雄・鼎左・  
丈翠・芹舎・月人 12 2 1

※ 「卯の秋」

164 秋興 半裁 其雪 秋亭 司召図 ○ アイ ×

伯應子・梅通・半各・寿抱・左栗・鶯宿・井左・瓢六・素屋・  
松隣・萬利・可兆・肖年・松朗・草洲・潮水・起雪・挙一・  
吏砢・黄雪・井竹女・秋亭・碧中・几昇・鉄撫・千百九・梅芽・  
蘭操・草居・兔雪・梅栄・清機・秋幄・月人・鼎左・其雪・  
其雪 37 4 2

※ 「安政二乙卯仲秋」

165 秋興 半裁 松隣 簀山 月薄図 ○ アイウエ ×

逸測・得蕪・祖郷・丁知・北松・故厓・荷少・完鷗・山子・  
きく雄・可簫・北洞・舍用・一止・禾月・江三・湖立・登山・  
雨竹・文起・宗古・遜阿・璪山・撫泉・唸風・素山・御風・  
茶山・乙良・文帯・為栖・茶雷・騏江・乙也・黙翁・湧瀧・  
蓬宇・一清・其岳・淡節・月坡・国彦・舟左・梅芽・其雪・  
(ナニハ) 草居・月人・可兆・曲阜・為山・尋香・等栽・月杵・  
鳥吟・いさえ・魯心・西馬・而后・醉雨・其岳・露牛・清民・  
閑那・羅邦・一枝・梅處・兔雪・秋幄・梅栄・蘭操・杜鴻・  
肖年・鶯宿・素屋・鼎左・松隣・松隣 78 8 4

166 春興 半裁 萬古 圭岳 主従花見帰路図 ○ アイ ×

為山・逸測・祖郷・月杵・江山・閑窓・有節・烏谷・淡節・  
碩水・芹舎・梅通・公成・春湖・丈翠・曲阜・閑那・卜早・  
龜得・夢遊・墨芳・未足・鼎左・林曹・月人・素屋・松隣・  
禾明・弥延・丹彦・枝女・ミもと・海了・北扇・顕雄・波青・  
溪斎・花外・天由・杉暁・桐鳴・一瓢・鳳丘・可簫・漣々・  
北因・草宇・由之・御風・吟風・素山・撫泉・立宇・榎堂・  
雨興・豊山・九花・千代丸・梅笠・草仙・祐之・柳壺・丹嶺・  
大夢・仙覺・肆山・故崖・得山・桃里・雲里・均外・山子・  
得蕪・萬古 76 7 6

167 夏興 半裁 十鷲 其融 水辺芦図 ○ アイウエ ×

冬興 半裁 羅村 南涯 松壳函 ○ アイ ×

由誓・遲流・卓郎・乙良・素明・茶山・積翠・清水・半橋・  
 西疇・市猿・季朗・文帶・斗玉・鷺眠・尋香・素行・波鷗・  
 芳所・岳鳳・五鈴・菊圃女・関市・栞堂・一朗・一春・桐光・  
 世貞・五風・蘭岱・桃郷・心足・龜成・布丈・其兆・麦露・  
 西馬・宗晋・圭顥・真武・禾哉・宜稻・汶路・岱水・悠々・  
 甘雨・百旨・柳雨・硯寿・而后・一清・月底・李曠・醉雨・  
 太年・物外・生宜・十條・秋美・永機・巴雪・香以・鳥吟・  
 峯旭・きく雄・美交・平路・十鷲

夏興 半裁 魯心 可庵 夏山函 ○ ウエ ×

多代女・清民・舍用・江三・梅月・樗影・一心・禾月・禾山・  
 東郭・氷壺・丁知・見外・貫乎・泰我・三為・護岳・五渡・  
 竹山・茶曉・湖月・曳二・葛路・等栽・不染・樹石・芦月・  
 一長・居山・花海・婦牛・崑年・旭齋・交水・薰岱・五休・  
 完鷗・可大・砺山・苜丸・四端・瓦村・拙誠・德隣・蓬宇・  
 漣山・新・宗羽・友松・荷少・榮雷・羅神・龜年・蘿丈・弦郷・  
 北誕・□□・鳳洲・三正・盛州・千古・欣志・不二丸・青葉・  
 竹童・一竹・袖丸・鯉水・千代延・真蛙・梧月・不醒・蓬仔・  
 白馬・竹夫・竹子・雲山・隋居・梅居・禾郷・花明・二水・  
 泰布・平礎・篋笠・哥詩和・千竹女・芳草・狐登・狐堂・其則・  
 貴邦・素訣・靖路・魯心

95 9 8

夏興 半裁 魯心 可庵 夏山函 ○ ウエ ×

芹舎・淡節・公成・有節・鼎左・松隣・素屋・五鈴・醉雨・  
 逸瀨・為山・祖郷・萬古・ミき雄・鳥吟・魯心・ミもと・尋香・  
 西馬・月杵・半湖・御風・多代女・清民・文起・愛山・舍用・  
 茶山・悠々・葉陽・(大夢更)半夢・騏郷・應可・宇雀・蘿丈・  
 魚村・平蕪・玉臺・苔庇・有隣・逸松・蘿谷・禱千・三徑・  
 崎邨・鯉勢・三崎・桃志・芝山・五榮・鶯里・月江・石居・  
 東阡・月古・笋路・木鳥・天馬・北誕・完湖・順美・草尺・  
 廉座・梧井・蒼風・たゝ女・嘉幸・素英・正孝・(松霞更)露丘・  
 一聲・田花・推居・野風・青枝女・梅道・嵐石・雨蓼・龜年・  
 魚遠・楚宮・夷岳・茶雷・梅雪・羅村

※ 「乙卯冬」

歲旦 小 竹舎 × | | | ×

素屋・寒水・竹舎・竹舎

※ 「卯の春」／二十四裁

秋興 小 月人 × | | | ×

鼎左・素屋・白鷗・月人・秋畦・鼎左・白鷗・素屋・秋畦・  
 鼎左・鶯宿・草居・(江戸)可簫・(京)有節・月人

※ 八裁／丹青天地刷毛引料紙

連句六句十 9 2 1

83 8 3

※ 八裁／丹青天地刷毛引料紙

連句六句十 9 2 1

172 秋興 小 素屋 永恭 帰雁図 ○ アイ ×

東耕・挙一・素鷗・楳下・楚城・桐斎・暉峯・堇舎・専風・  
松窓・素屋 10 1 2

※ 「乙卯秋」／六裁

▼安政三年

173 歳旦 小 素屋 画者未詳 天蓋図 ○ イ ×

稻處・稻處・素屋 3 7

※ 二十四裁



174 歳旦 小 素屋 画者不明 烏図 ○ ウ ×

梅邑・梅邑・素屋 3 7

※ 十六裁

175 歳旦 小 芝船 画者不明 文字絵 (春で天狗) 単 (金) ウエ ×

有節・梅通・芹舎・素屋・松堂・不角・五鈴・為山・ミもと・  
多代・麦山・清民・御風・一清・玄至・五峯・其岳・□山・

醉雨・芝船 20 2 0

※ 「丙辰春」／六裁

176 歳旦 三裁 魯心 林斎 萬歳図 ○ アイ 鷗波

漣挙・清音楼・抱儀・為山・巴雪・公成・十鷺・草雨・瓦村・  
祖郷・素屋・物外・淡節・山子・鳥吟・如水・長宜・柳止・  
乙良・波鷗・泰我・御風・見外・西馬・哥詩和・一竹・竹童・  
泉友・鼠眼・庄司・太年・柳塵・糸川・芳所・平路・松隣・  
醉雨・三止・吟風・欣志・利秋・猶路・二水・禾郷・北因・  
茶山・寇年・萬久・清子・竹夫・竹子・月杵・氷壺・琴友女・  
柳糸女・千竹女・万古・靖路・素訣・貴邦・芳草・狐登・孤堂・  
其則・魯心 64 6 4

※ 「丙辰の春」

177 歳旦 四裁 松隣 服哉 簑龜・靈芝図 ○ イエ ×

芹舎・茶雷・湧瀧・一徳・泰山・素屋・挙一・井竹女・杜鴻・  
月人・鼎左・松隣・松隣 13 1 5

※ 「丙辰初春」

178 歳旦 四裁 素屋 画者不明 松樹水楼図 ○ アイエ ×

鼎左・鶯宿・松隣・月人・公眠・眉山・可兆・(三更)素梅・  
五朗・杜鴻・竹舎・梅邑・稻處・素屋 14 1 9

179 歳旦 四裁 素屋 × | | | ×

松隣・松隣・松隣・素屋・素屋・素屋 6 6  
※ 梅空押・竹笹籠図入松葉囲み料紙

180 歳旦 四裁 月人 東山 画中昇龍図 ○ アイエ ×

月人・素屋・鼎左・月人・素屋・鼎左・素屋・月人

※ 「辰歳旦」 連句六句+3 1 0

181 歳旦 四裁 鶯宿 了斎 昇龍図 ○ アイウエ ×

楓年・梅弟・(イタミ)鳴々・杜鴻・卜隣・白鷹・一澄・素屋・  
月人・梅蒼・笠洲・鶯宿 12 1 3

※ 「丙辰春」

182 歳旦 四裁 鼎左 秋亭 梅花・提酒樽図 ○ イエ ×

梅鼎・梅栄・節一・其雪・仙麗・松荷・草居・(姫路)悟一・  
(河内)公然・(福山)春野・(あかほ)鼎跡・(京海)曲阜・素屋・

月人・鼎左 15 1 8

※ 「丙辰春」

183 歳旦 四裁 笠洲 春星 熨斗・小松図 ○ イウエ ×

素屋・其雀・黙池・哥松・一考・白鷹・梅蒼・蘆鳥・舟左・  
笠洲 15 1 6

※ 「丙辰春」

184 春興 四裁 可兆 秋亭 魚介寄居虫図 ○ イウエ ×

素屋・眉山・鶯室・井資・(天和)月喬・一千・松岳・芳亘・  
秋亭・桃里・花笠・路外・栖香女・可松・可兆 15 1 6

※ 「丙辰春」

185 春興 四裁 眉山 秋亭 蛤・蜃気楼図 ○ アイウエ ×

瓢六・荷村・素屋・三辰・梅水・梅方・荷橘・梅枝・亀園・  
芦荻・久丸・千里・素梅・眉翠・一澄・眉山 16 1 7

186 歳旦 四裁 公眠 寛斎 布袋・児図 ○ アイ ×

可丈・吾輩・大賀・可蕉・楓年・素月・野木・錦賀・照子・  
素屋・月人・潮水・鶯宿・石叟・公眠 15 1 5

※ 「丙辰春」

187 歳旦 四裁 素屋 東山 恵方棚・煙草盆図 ○ イウ ×

棋臣・東耕・雨香・挙一・素鷗・青菘・菘水・梅下・暉峰・  
松窓・葦舎・桐斎・鼎左・素屋 14 14

※ 「辰のはる」

188 夏興 四裁 鶯宿 春星 月・郭公図 ○ アイ ×

鼎左・素屋・(ラク) 鳥舟・(洛) 黙池・翠江・(イバラキ) 竹房・  
竹三・蟻洞・蘭窓・桃翠・舟左・梅蒼・笠洲・鶯宿 14 14

※ 「辰乃夏」

189 歳旦 半裁 兎雪 画者不明 能舞図 ○ アイウエ ×

鶯宿・素屋・挙一・松隣・可兆・眉年・眉山・井資・不角・  
鶯室・辰斎・草洲・(小倉) 梅年・(左海) ミとり・清好・

井竹女・清機・秋亭・鬼笑・梅友・花郷・紫光・一聲・卜隣・  
蘭操・其雪・(梅弟改) 梅鼎・梅栄・月人・秋岨・草居・鼎左・  
兎雪・兎雪・兎雪 35 39

※ 「丙辰初春」／画者名なし秋亭か

190 歳旦 半裁 梅鼎 秋亭 小林入道図 ○ アイ ×

花屋庵・花雨庵・鶯宿・素屋・松隣・可兆・挙一・眉年・不角・  
鶯室・辰斎・月人・草洲・鼎左・(清友社) 蘭操・草居・梅栄・  
兎雪・其雪・清機・秋岨・井竹女・秋亭・卜隣・(郡山) 花嘯・  
(赤穂) 鼎跡・(石見) 青池・(平白社) 梅季・器水・光人・錦賀・  
乙三・其松・竹窓・松月・文賀・梅実・竹弄・東笑・蕪山・  
芦舟・露道・松子・(梅弟改) 梅鼎・梅鼎 44 54

※ 「丙辰初春」

191 歳旦 三裁 其雪 蕪外 蓬萊簑龜図 ○ アイ ×

鶯宿・井左・素屋・松隣・井資・眉山・可兆・辰斎・肖年・  
草洲・湖水・挙一・吏珂・黄雪・鉄撫・其泊・柰樹・素洛・  
鉄撫・松風・季川・六花・李青・桂河・佳友女・几昇・蘭操・  
(梅弟改) 梅鼎・梅栄・兎雪・草居・清機・井竹女・秋亭・卜隣・  
秋岨・(少年) 壺雪・壺洲・月人・鼎左・其雪・其雪 42 46

※ 「丙辰初春」

192 歳旦 半裁 梅栄 秋亭 正月飾・遊具図 ○ アイ ×

鶯宿・白鷗・素屋・松隣・井資・眉山・可兆・眉年・不角・  
桃号・辰斎・青山・月人・草洲・松彦・淡水・仙夢・雨外・  
買山・井竹女・卜隣・梅圃・秋亭・蘭芽・芝雀・佳仙・香雪・

對文・曲阜・糠人・古撫・春湖・吳東・霞城・木公・松遊・  
梅窓・左筆女・草居・蘭操・(梅弟改)梅鼎・兔雪・秋岬・鼎左・  
梅栄・梅栄・梅栄  
48 5 3

193

歳旦 四裁 金英 一日菴 蛤図 ○ イ ×  
公成・有節・鼎左・素屋・為山・祖郷・西馬・(願懸連)素憐・  
梅繁・不二・春人・不曲・江流・梅軒・金紅・松花・菜再・  
江三・旭峰・中龍・金英  
21 2 8  
※ 「丙辰のとし」

194

春興 半裁 未暁 雲斎 弓・梅花図 ○ アイエ ×  
梅通・有節・公成・月坡・芹舎・蟻兄・素屋・奇哉・逸淵・  
祖郷・見外・西馬・為山・卓郎・抱儀・由誓・而后・黄山・  
真さ雄・魁園・桂子・雲斎・志水・友松・遊之・雨耕・其尤・  
美中・枕山・雪撫・松涛・岱月・仙翅・未暁  
34 3 4  
※ 「卯の春」

195

春興 半裁 未暁 併春 大黒図 単(金) アイ ×  
梅通・公成・月坡・芹舎・有節・鼎左・素屋・醉雨・而后・  
逸淵・抱儀・西馬・祖郷・萬古・見外・為山・卓郎・真さ雄・  
魁園・桂子・志水・友松・游之・呼風・而畊・水音・小蝶・

嘯山・其尤・美中・枕山・松涛・雪撫・岱月・仙翅・未暁

※ 「たつの走る」

196

春興 四裁 二鷗 千帟 萬歳図 ○ イ ×  
(ラク) 芹舎・(ラク) 有節・(ラク) 淡節・(ナニハ) 素屋・(ナニハ)  
照雄・(エド) 見外・(イガ) 養瓜・(イセ) 如權・(イセ) 雪当・擔  
水・鶴叟・静嘉・土前・英斎・一珪・芳淡・梅裡・錦水・坡東・  
二鷗  
28 2 8

※ 「丙辰春」

197

歳旦 四裁 一徳 如集 香合・印図 ○ イエ 竹窓  
梅通・有節・淡節・芹舎・鼎左・鶯宿・曲阜・草居・松隣・  
素屋・為山・西馬・見外・勇賀・幸女・等葉・荷少・等栽・  
仙叟・琴水・蘭室・草筑・一瓢・竹洞・蟻邑・仙溪・六守・  
洒雄・逸淵・一徳・一徳・一徳  
32 3 5

※ 「丙辰の春」

198

歳旦 半裁 古通 × | | | ×  
梅通・芹舎・淡節・拾山・有節・鼎左・松隣・不角・蓬陽・

素屋・閑那・米友・養瓜・雀叟・五鈴・吉波雄・布珀・晴江・蓬宇・完伍・為山・萬古・月杵・西馬・茶嘯・潮月・多代女・清民・二丘・一正・舍用・唸風・御風・而后・李曠・欣尚・一清・静嘉・櫓水・錦水・桃里・梅南・蒿渚・醉雨・梅裡・古通

46 4 6

※ 桜色囲み枠

199 春興 半裁 茶筵 画者未詳 桜花図 ○ ウエ ×

芹舎・有節・碩水・文海・月坡・烏谷・鼎左・素屋・挙一・松隣・曲阜・春湖・恵雨・而后・李曠・醉雨・芝船・其岳・梅裡・岩月・柏石・且来・丹嶺・都盤・東明・桑居・乙良・祖郷・為山・西馬・悠平・茶筵・茶筵

33 3 7



200 春興 半裁 北誕 南涯 貫古・画帖・挾板図 ○ アイエ ×

(ムツ) 舍用・清民・(江戸) 逸洌・西馬・月杵・鳥吟・萬古・為山・(イセ) 五鈴・(京) 芹舎・梅通・淡節・有節・(大坂) 鼎左・藜々・松隣・素屋・茶雷・左郊・完湖・苔庇・桃志・梅可・東翠・玉臺・葉夫・玉馨・三径・田花・夏月・大川・烏齋・素英・蒼風・梧泉・鯉勢・北誕

37 5 3

※ 「辰とし」

201 歳旦 半裁 宇雀 南涯 若葉壳図 ○ アイ ×

芹舎・有節・梅通・淡節・鼎左・松隣・素屋・松室・雀叟・五鈴・醉雨・蓬雨・逸洌・為山・西馬・尋香・幹雄・萬古・鳥吟・月杵・半湖・乙良・唸風・多代女・清民・舍用・其秀・悠々・葉陽・楚宮・夷岳・北誕・石居・龜年・思遠・東阡・草尺・思村・完湖・梅專・蘿丈・應可・月古・騏郷・羅村・木鳥・左郊・(大夢更) 半夢・茶雷・宇雀・宇雀

51 5 1

※ 「丙辰春」

202 歳旦 半裁 草尺 桃挙 凧揚図 ○ アイ ×

有節・公成・(月坡更) 赤甫・淡節・梅通・鼎左・松隣・藜々・松室・素屋・五鈴・梅裡・李曠・静嘉・醉雨・蓬宇・逸洌・為山・祖郷・見外・尋香・萬古・鳥吟・幹雄・西馬・天由・月杵・半湖・李郷女・御風・吟風・素山・多代女・一止・清民・舍用・乙良・茶山・青池・大夢・悠々・駝岳・双鳥・甘古・菊圃女・棹舟・元史・婦牛・其秀・鷗池・楚宮・北誕・夷岳・半夢・東阡・完湖・梧井・露丘・鯉勢・推居・宇雀・騏郷・蓬園・應可・蟻城・羅村・龜年・左郊・木鳥・茶雷・草尺

※ 「辰の春」

71 7 1

203

歳旦 半裁 汲古 素真 梅花・印籠図 ○ アイ 鷗波

(ヒゼン) 悠々・(サツマ) 桃戴・(イヨ) 鶯居・(サヌキ) 天菜・  
(トサ) 古鳳・涼掃・(アハ) 茶雷・(ナニハ) 素屋・松隣・(京)  
公成・(ヲハリ) 醉雨・一清・(ミカハ) 蓬宇・(遠州) 杜水・  
(サガミ) 薰岱・(□□) □□・(下サ) 月□・(ヒタチ) 季□・  
(デハ) 御風・(オク) 舍用・清民・(エチゴ) 茶山・鷺眠・  
乙良・(シナノ) 天随・(上毛) 心足・一朗・米室・筈言・  
(ムサシ) 寄三・天由・(エド) 一夢・四端・五雀・香以・草宇・  
鳥吟・晚成・乙雄・明水・花明・慶敷・得水・音好・白夷・  
均外・六守・浪兮・ミキ雄・逸渕・西馬・汲古 53 53

※ 「安政三丙辰春」

204

歳旦 半裁 春和 餘齋 兎・土筆図 ○ アイ ×

逸渕・見外・等栽・萬古・鳥吟・祖郷・西馬・氷壺・為山・  
梅通・芹舎・鼎左・松隣・素屋・悠々・茶雷・李曠・而后・  
多代女・(行脚) 江平・茗圃・雪鮮・唸風・秋峩・其谷・有雪・  
蟻道・落城・撫泉・雪貢・鶴園・有柳・淇奥・月岡・二葉・  
竹雄・玉翠・北臥・梅南・葎下・南好・詠之・無心・月想・  
大古・静極・冬秀・雪岱・素山・御風・(二江改) 春和 52 52

※ 「辰の春」

205

歳旦 半裁 桑居 画者未詳 神楽舞扇鈴図 ○ アイ 子成

由誓・抱儀・見外・西馬・為山・萬古・梅通・芹舎・鳥谷・  
文海・淡節・鼎左・白鷗・松隣・素屋・可大・砺山・駝岳・  
双鳥・鶯居・閑那・茶雷・而后・李曠・蓬宇・立宇・柳壺・  
悠平・遜阿・清民・舍用・禾月・御風・緑峰・吟風・多代女・  
鷺眠・茶山・未足・桃五・元・文溟・梅雪・角貞・岱月・雄飛・  
可村・采乃・半橋・乙良・桑居 51 51



※ 「安政三とせの春」

206

秋興 四裁 蕉林 秋亭 月光弁天図 ○ アイウ ×

素屋・鶯宿・翠江・鶴翠・蘭月・蕉林 6 8

※ 「辰の秋」

207

秋興 四裁 鶯宿 春星 月見休息図 ○ アイウエ ×

梅通・素屋・舟左・杜鴻・蕉林・世外・竹三・其雀・鶴翠・  
(イタミ) 椅陰・(イタミ) 龍女・鶯宿 11 17

※ 「辰秋」

208

秋興 半裁 素屋 箕山 月薄図 ○ アイ ×

雲庵・田竹女・能夫女・千栄女・受月女・勢井女・美知女・  
桃園・奈美女・子直・松子・智清・士甫・路春・里祥・魚全・  
重一・朗光・秋介・左資・素屋 21 3 0

※ 「丙辰中秋」

209 歲旦 四裁 素屋 東山 梅花・急須図 ○ イエ ×

芦秋・芦盛・芦醉・芦洲・甫月・一水・梅笑・菊溪・梅宥・  
(二三更) 素梅・素屋 11 1 8

210 歲旦 四裁 素屋 東山 梅花・急須図 ○ イエ ×

鼎左・鶯宿・松隣・(二三更) 素梅・素梅・素屋 7 1 9

211 春興 半裁 素山 餘齋 梅花・衣桁図 ○ アイ ×

梅通・公成・烏谷・芹舎・鼎左・素屋・忝隣・李曠・醉雨・  
一清・梅裡・而后・悠々・鷗池・茶雷・布国・禾月・舍用・  
清民・多代女・見外・祖郷・西馬・氷壺・鳥吟・魯心・みもと・  
□□・□□・萬古・為山・唸風・有柳・秋峩・春和・鶴園・  
有雪・路之・落城・其僊・河曉・洗耳・文好・梅南・雪鮮・  
雲岱・蟻道・忝塢・大古・静柳・素文・栗堂・良和・月岡・  
抱山・藤谷・茶暁・松陽・如春・(行脚) 江平・(行脚) 茗圃・  
(在江戸) 撫泉・(在坂) 国彦・御風・素山 64 6 4

※ 「丙辰の春」

212 春興 半裁 節之 洪水 鬪鷄図 ○ アイ ×

由誓・逸渌・見外・等栽・萬古・魯心・尋香・鳥吟・祖郷・  
西馬・氷壺・為山・梅通・烏谷・松隣・素屋・鼎左・柳壺・  
梅裡・李曠・完伍・李郷女・雀叟・五鈴・茶雷・羅村・清民・  
多代女・(行脚) 江平・(在江) 撫泉・(在坂) 国彦・可慎・其友・  
河曉・秋峩・茶暁・春和・文好・其山・翠雅・一峯・五扇・  
夏風・鶴遊・龜既・應山・有柳・麦谷・静柳・有雪・梅南・  
其仙・月岡・蟻道・冬秀・唸風・御風・素山・栗堂・素文・  
節之 61 6 1

※ 「辰の晩春」

213 夏興 半裁 守黒 是真 雀行水図 ○ アイ 抱節子

由誓・抱儀・五休・完鷗・不染・龜遊・峽舍・松鶴・平民・  
琴舟・為山・白起・卓郎・留木・雪朗・天由・圭圃・蒼布・  
東洲・逸渌・芹舎・有節・南枝・西馬・瓦村・萬古・等栽・  
見外・宗玉・樂之・帰風・千之・言山・多代女・清民・遜阿・  
一止・舍用・江三・禾月・菑来・(雲水) 芋臺・竹賀・素屋・  
举一・鼎左・五英・宜山・素悠・龍枝・豊川・晴里・東鳴・  
みふね・桃園・一蝶・梧岳・拔山・可瀬芳・鶯谷・江山・文雄・  
菊重・山兒・竹曆・五雄・山碩・舍章女・桑路・青松・菊貞・

團月・椿山・雨桐・翠巖・柏翠・丁知・由儀・得蕪・菊彦・  
佳悠・守黒 82 8 2

※ 「丙辰晩夏」

214 秋興 半裁 徳斎 素真 染刷毛図 ○ アイ 鷗波

梅裡・季曠・我竟・静嘉・茶雷・騏郷・草尺・應可・蓬圓・  
唵風・素山・禾月・茶山・完鷗・等栽・由誓・鼎左・素屋・  
清民・江三・撫泉・月杵・旭斎・完湖・柳處・至樂・京一・  
白亥・きく雄・魯心・抱儀・西馬・公成・有節・松隣・龜年・  
羅邨・蟻城・鯉勢・思遠・北誕・禾山・(雲水) 蘆城・香以・  
山子・草宇・万古・逸測・而后・一清・醉雨・御風・多代女・  
舍用・樗影・(雲水) 未足・半夢・見外・ミキ雄・泰我・柳絮・  
冰壺・由之・為山・鳥吟・徳斎 66 6 6

※ 「安政三辰の初秋」

215 秋興 半裁 芳艸 是真 雀送別図 ○ アイ 抱節子

由誓・瓦村・拙誠・白起・菊雄・波鷗・逸測・鼎左・林曹・  
松隣・白鷗・梅圃・月人・素屋・西馬・月杵・四端・祐之・  
龜得・曾玩・□□・多代女・清民・舍用・一止・禾月・禾山・  
東郊・樗影・茶雷・思遠・蘿丈・羅邦・柳壺・悠平・萬古・  
古友・斗玉・平路・宜稻・勇賀・等栽・為山・山子・ミもと・  
泰我・可簫・芳所・抱儀・梅通・淡節・有節・祭魚・文海・

公成・芹舎・而后・□□・李□・□□・□□・唵風・御風・  
見外・菅丸・不染・富艸・鳥吟・由之・卓郎・乙良・未足・  
市猿・契史・鷺眠・双鳥・悠々・祖郷・十鷺・田麓・曉鷄・  
榎堂・一朗・尋香・五渡・旭斎・清泉・報聲・平礎・如泉・  
花外・宗普・盛洲・苔礎・晴甫・泰布・靖路・魯心・芳艸

※ 「丙辰秋」

216 秋興 半裁 公眠 半山 行李紬絹図 ○ アイ ×

(エド) 逸測・(アウメ) 梅笠・(スルガ) 推陰・(ウラガ) 乙居・  
(センダイ) 米花・(モリオカ) 左月・(トヤマ) ト少・(ヒゴ) 隼也・  
(ベツ中) 羽賣・(ベツ中) 梅居・(ベツ中) 池旭・(ベツ中) 翠木・  
(ベツ中) 青牛・(ベゼン) 無為・(ベゼン) 鯉濤・(アハ) 草尺・  
(アカシ) とく女・(遊歴) 米水・(サカイ) 此松・(サカイ) 一器・  
(カウベ) 祇山・(キノベ) 木居・(ナラ) 洗我・(京) 梅通・素屋・  
不角・鶯室・瓢六・月人・珂雪・曉月・鶯泉・十圃・化実・  
眠外・金鳥・春門・賀柳・卜隣・可蕉・全九・春霞・一昇・  
一枝・忠甫・大賀・其雀・夜雪・丹柯・江宇・公眠 50 5 0

※ 「丙辰秋」

217 秋興 四裁 鼎左 秋亭 菊花・牡丹餅図 ○ アイエ ×

鶯宿・素屋・松隣・井資・眉山・可兆・不角・辰斎・舟左・

梅蒼・笠洲・草洲・方石・公眠・挙一・鼎左 16 1 6

218 秋興 四裁 方石 尉負 月下鹿鳴図 ○ アイ ×

鶯宿・舟左・笠洲・素屋・杜鴻・路松・五郎・一考・可調・

梅美・郎光・鶯水・寿月・其石・千位・方石 16 1 6

※ 「丙辰秋」

219 秋興 半裁 椅陰 秋亭 蛙 水辺秋草図 ○ アイウ ×

梅通・有節・淡節・奇泉・葦子・公成・赤甫・芹舎・(尾ハリ)

而后・梅裡・李曠・土前・(オク)多代女・(シナノ)長宇・(兵庫)

可大・醒花・其隣・寸松・鼎左・素屋・松隣・眉年・舟左・笠

洲・月人・草洲・鶯宿・林曹・蟻兄・祇白・梅栄・草居・五韻・

仙夢・知風・梅雄・井竹女・挙一・(イタミ)古撫・三木女・

(行脚) 芦十・龍女・椅陰・椅陰 44 4 4

※ 「丙辰晚秋」

220 その他 四裁 千之抱儀 菊花紅葉会积図 ○ アイウエ 竹窓

鼎左・素屋・挙一・芹舎・梅通・淡節・公成・有節・丁知・

逸瀨・西馬・見外・祖郷・等裁・卓郎・為山・抱儀・由誓・

不染・菫来・(龜遊更) 只青・樂斎・呂風・三光・未精・南雄女・

平民・五休・帰風・羽雪・萬古・由儀・守黒・柏翠・留木・

卯月・蘿斎・完鷗・瓦村・松鶴・宗玉・楽之・龍吟・琴舟・  
竹賀・南枝・疎舎・得蕪・千之 49 5 4

※ 「丙辰のとし」／得蕪送別／金囲み枠

221 冬興 四裁 處舟 × | | | ×

林曹・素屋・知風・芦十・挙一・祇白・梅通・淡節・祭魚・

升悉・(イヨ)半窓・拾山・奇泉・辰丸・野鶴・黍丘・處舟

※ 「丙辰の冬」／緑金囲み枠／印文「野鶴」とあり

17 1 8

222 冬興 半裁 鶯宿 秋亭 南山 遠山紅葉狩図 ○ アイウ ×

素屋・素屋・(洛)升悉・升悉・芝雪・芝雪・桃園・桃園・茶袋・

茶袋・蕉林・蕉林・翠江・翠江・雪溪・雪溪・芳可・芳可・

蘭月・蘭月・鶴翠・鶴翠・鶯宿・鶯宿 24 2 8

※ 「辰初冬」

223 追善 半裁 草守 其融 炭 白椿図 ○ アイ ×

惟草居士・(池草更)草守・見外・(日向)双鳥・(ヒゼン)悠々・

(長サキ)一化・(ヒゼン)布国・(イナバ)柏葉・(ナガト)涼□・

(サヌキ)木□・(アハ)茶雷・(ナニハ)素屋・挙一・鼎□・□□・

□□・□□・□□・□□・□□・□□・□□・□□・□□・□□・



## 編集後記

大阪府立図書館紀要 第 41 号をお届けします。

府立図書館 108 年の重みが原稿の重みと重なったようで、今回は 259 頁となりました。あらためて当館所蔵資料の凄さを感じました。

当館が行っているサービスについても 1 点掲載できました。

今後とも所蔵資料の研究や紹介の原稿を広く頂戴したいと思いますので、よろしくをお願いします。

また、次号に向け職員一同日々研鑽に励んでいきたいと存じますので、引き続きご愛読いただけますようお願い申し上げます。

なお、当紀要に登載された著作物に係る著作権は執筆者に属し、その著作の使用に関しては大阪府立図書館は著作権者の了解を得ています。

## 編集委員（◎は編集長）

中之島図書館 ◎岡部 朗 本多まつ 辻本智子 大北悦子 乾英一郎  
中央図書館 大西登貴子 仙田ひろ子 小杉裕枝

大阪府立図書館紀要 第 41 号

2012 年 3 月 31 日

編集・発行

大阪府立中之島図書館

〒530-0005 大阪市北区中之島 1-2-10

大阪府立中央図書館

〒577-0011 東大阪市荒本北 1-2-1

<http://www.library.pref.osaka.jp/> <無断転載を禁ずる>